

深海棲艦のゆるい日常

とある組織の生体兵器

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深海棲艦 それは全世界を手中に収めようとする謎の深海からの使者……。それに立ち向かう艦娘たち……。その艦娘を指揮し、勝利へと導く者……。それが提督である。荒れ狂う海で敵と生死を分けた手に汗握る熱いバトル。指揮すべく提督は被害を最小限に、思慮深くかつ大胆に作戦を練り、一度のミスも許されない緊迫した司令室で指揮をする。その指揮や作戦さえも狂わしに来る敵。それが深海棲艦……。五島をかけて、艦娘と深海棲艦の命をかけた戦いが今……。始まる……！

……と、世間は認知しているが、実際は……。

深海棲艦メインの、ほのぼのとした生活。提督や艦娘たちと戦いのない、シリアスなしのゆるい日常。時にほっこり、時にイライラ、普段の人間とは変わらず、変わっている日常をお届けします。

タグにめちやくちや困りますね……。

タイトルのリクエストがあったら歓迎します。

筆者の書いている、ほかの作品とは一切関係ありません。
挿絵製作中

その1（16話参照）

目次

| | | |
|------|--------------|-----|
| 壹話 | 猫ナノ! | 1 |
| 貳話 | オスソワケナノ! | 6 |
| 参話 | 買イ物ナノ! | 12 |
| 肆話 | 従姉妹ガ来ルノ! | 18 |
| 伍話 | ゴ飯作ルノ! | 29 |
| 陸話 | 振り回サレテルノ: | 37 |
| 漆話 | マツチヨ兄弟 | 46 |
| 捌話 | オカエリナノ! | 53 |
| 玖話 | フトルノ | 59 |
| 拾話 | 演習ヲ観ルノ? | 67 |
| 拾壹話 | 頑張り屋サンノ提督 | 79 |
| 拾貳話 | オネーチャン大好きナノ! | 87 |
| 拾参話 | 深海レンジャー | 93 |
| 拾肆話 | 南ノ島デキャンプナノ! | 103 |
| 拾伍話 | 未知トノ遭遇 | 114 |
| 拾陸話 | カビアレルギー許スマジ | 125 |
| 拾漆話 | 蟹食ベタイ | 133 |
| 拾捌話 | 七夕ナノ! | 141 |
| 拾玖話 | 氷ノ味ナノ | 161 |
| 貳拾話 | 海ノ家ナノ? | 170 |
| 貳拾壹話 | オ祭りナノ! 前編 | 184 |
| 貳拾貳話 | オ祭りナノ! 後編 | 194 |
| 貳拾参話 | 秋ノ戦: 始メテミルカ? | 200 |
| 貳拾肆話 | 親友ダカラナ | 214 |

| | | |
|------|----------|-----|
| 式拾伍話 | ハロウィンナノ | 233 |
| 式拾陸話 | 新シイ子 | 246 |
| 式拾漆話 | クリスマスナノ | 260 |
| 零・壹話 | 登場人物紹介1 | 276 |
| 式拾捌話 | 艦娘ノ悩ミ | 280 |
| 式拾玖話 | 大島出張所ナノ？ | 289 |
| 参拾話 | 大島出張所ナノ？ | 297 |
| | 後編 | |
| | 前編 | |

壺話 猫ナノ!

「ン……。」

まだ日の登らない朝。まだ鶏も鳴かない時間帯に起きる者がいた。「……。」

寝ぼけ顔で洗面所へ行き、顔を洗う。冷たい水によって目が完全に覚めた。

「……ウン。」

鏡で寝癖を直した後、納得したようにうなづく。そして、朝ごはんの支度をする。大体が完成して、味噌汁を温める。味噌の香りが食欲をそそる。すると……。

「オハヨウ……オネーチャン。」

全体的に白く、頭の左右に短い黒い角、白いワンピースにミトン状の手袋をしている幼い子が襖を開けて、眠そうな、赤っぽい橙色の目を擦りながら挨拶をする。

「オハヨウ ホッポ。」

そう、起きたばかりの子は寝ぼけた北方棲姫。DMMブラウザゲーム『艦隊これくしょん』の登場……人物?である。

「朝ゴ飯ハ モウスグ。」

そして、笑顔で対応しているのが港湾棲姫だ。額には大きな角、両手には大きな鉤爪を持っている。鉤爪で食器などを傷つけないように、おそるおそる味噌汁をお椀に入れて、北方棲姫に渡した。

「朝ゴ飯ナノ!」

北方棲姫は途端に眠気が吹っ飛び、嬉しそうにした。そんなこんなな平和な日常。

『深海棲艦 五島支部』の物語である。

「今日モ 戦イ……。イツニナツタラ 終ワルノカシラ。」

「オネーチャン、今日モ 行クノ?」

「ウン。ホッポハ オ留守番ネ。」

港湾棲姫が北方棲姫に言い、頭を優しく撫でる。

「夕飯マデニハ 帰ルカラネ。」

「気ヲツケルノ！」

「ウン。」

港湾棲姫が行く。

「来タ。」

港湾棲姫が艦娘を見つける。

「エーツト…ゴホン。…クルナ…ト…イッテイル…ノニ…。」

「毎回思うんですけど、事前に言う必要があります…？」

「アイデンティティヨ。」

「アイデ…。…何か変なこと言ってますみません…。えつと…。じゃあ、始めますね。」

「エエ。」

「アウ…。」

港湾棲姫が家で炬燵に入っている。

「オネーチャン？早カタタケド、勝ツタノ？」

「夜戦ニモ イカズニ ヤラレチャツタ…。」

頭に絆創膏があるあたり、やられてしまったのだろう。

「ヨク ヤルナ…。ウ…サムサム…。」

「レ級…。」

コートのような服を着ており、付属した黒いフードを頭にかぶっている。背中にはリュックサックのようなものを背負い、首にはアフガンストールのようなものを巻いていた。尻の辺りから白く、太い尻尾のようなものが伸びている。そんな小さな悪魔、レ級が廊下から来て、北方棲姫や港湾棲姫と共に炬燵に入る。

「アナタハ？」

「ドーン。」

レ級が答えにならないことを言う。だが想像がついた。イロハ級の中でも群を抜いて最強の戦艦。姫級に匹敵する。さらに言えば、戦艦なのに戦艦に問わず攻撃までしてくるため、誰からも恐れられてい

る彼女にとっては艦娘を大破させるのが日常茶飯事だ。

「ン〜…。アツ、明日モ 港湾ノ所ニ 来ルツテサ。」

「エ…。マタ…?」

「ナンカ、〃任務〃トカデ 忙シイ ラシイゾ。」

「ナンデ ソンナコト ワカルノ?」

「『吹雪』ト LINE 交換シタ。」

「ドウセナラ、直接コツチニ 送レバ良イノニ…。」

「ソモソモ、敵ト LINE 交換シテイルコトハ 良イノカ…。」

当たり前のように受け流す港湾棲姫に、レ級がツツコミを入れた。

「テカ、今日ハ 集積地棲姫ハ イナイノカ?」

「集積地棲姫ナラ 『大島出張所』ノ潜水棲姫ト 一緒ニ 南ノ島へ

バカンス中…。」

「アイツ 何シテンノ? テカ、泳ゲナイダロ。」

「毎回 燃ヤサレル ストレスヲ 発散スルミタイ。」

集積地棲姫は南の島でバカンスを楽しんでいるようだ。

「ソウ思ツテミレバ 今年ハ 『菱餅』 無カツタナ。」

「脅シタカラ カシラ?」

「…脅シタ?」

「ウン。『次ホツポヲ 執拗ニ 虐メタラ、マタ 鎮守府ヲ 半壊サセ

ルカラ。』ツテ。」

「半壊…。『艦娘』タチガ イタノニカ?」

「ウン。」

「ドウヤツタ?」

「鎮守府ニ 猫ヲ 百匹ホド 放シタ。」

「ヤベーナ。ガチギレ ジャネーカ。」

レ級は、猫が大量発生して阿鼻叫喚の鎮守府を連想した。

「沢山ノ 『菱餅』ヲ 貯メテタカラ 全部 奪ツタ。」

「マジカ…。沢山 虐メラレタラ ソラ怒ルナ。」

「アト、説教シタ。」

『アナタモ イイ歳シタ 大人ナンダカラ。ソレトモ 幼イ子供ヲ

虐メテ 楽シイノ?』

『すみません……。いえ……。楽しくないです……。はい……。すみません……。イベントで……。すみません……。』

「マア、ソウダナ……。艦娘ハ……。」

「艦娘タチモ 反省シテ ナカッタカラ 説教シタ。」

『アナタ達モ 平和ナ海ヲ 守ッテイルノニ 子供ヲ泣カシテ ドウスルノ?』

『すみません……。少しだけなら良いかなーっと……。はい……。すみません……。司令官からの命令で……。すみません……。』

「攻メルナ……。ト言ウヨリ、何提督ノセイニ シヨウトシテンダヨ……。」

レ級は瞬時に、鎮守府所属の者たちが港湾棲姫に説教されて正座させられている図が浮かんだ。

「ソシテ ドウナツタ?」

「ホッポヲ 虐メナイコトヲ 条件ニ、『菱餅』ヲ 返シタ。」

「猫ハ ソノママカヨ……。」

「ウン。」

レ級がてんやわんやの大騒ぎをしたままの鎮守府を思い浮かべた。すると……。

「オネーチャン 格好ヨカッタノ!」

北方棲姫が襖を開けてやってきた。

「ダカラ、コノ前玄関ニ 紙袋ガ沢山……。」

提督たちが謝罪として置いておいたのだ。

「テロダト思ッタヤツダナ。」

「テロツテ……。第一、狙ワレナイワヨ。ダツテ、近所付キ合イモ円滑ダシ、町内会ダツテヨク出席スルシ……。」

「町内会へ行ッテイタノカ……。」

どうやら、近所付き合いはかなり良好らしい。

「洗濯物ハ、アト1時間後ツテ トコロカシラ。」

港湾棲姫は炬燵に入りながら呟く。

「洗濯物……家事ヲ毎日ヤツテ、疲レナイノ?」

「離島棲姫ハ 今日 何シテタノ？」

「飛行場姫ト ショッピングモールへ。」

「良イワネ。ソレ。今度行コウカシラ。」

港湾棲姫は離島棲姫と炬燵に入りながら話していた。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

式話 オスソワケナノ!

朝

「ソ…。」

港湾棲姫の朝は早い。

「…。」

身体を起ここして、数秒間ぼーっとした後…。

「起キナクチャ…。」

布団から出て、朝食の支度…。

「デキナイ…。」

材料が無かった。

「ドウシテ…?」

買い置きしてあったものも含めて、無くなっていたのだ。

昨晚

「オネーチャンノ オ料理 美味シイノ!」

「嬉シイ。」

北方棲姫が正直に、とても美味しそうに言うものだから、港湾棲姫も照れる。

「モット 作ル?」

「作ル!」

港湾棲姫はよほど嬉しかったのか、大量に作ってしまった。

「モウ オ腹一杯…。」

「エ…。」

結果…。

右隣の家の玄関前

ピンポーン

インターホンを押す港湾棲姫。

「オネーチャン? ドキドキ シテルノ?」

「少シダケ…。」

二人が待っていると…。

『ハイ。』

インターホンから声が聞こえた。

「ア、アノ…。隣ノ 港湾棲姫ト…。」

「ホッポナノ！」

『ハイ。』

ガチャ

「コンニチハ。」

「コンニチハ。」

白髪に頭の両横から黒い角が伸びていて、衣装は潜水艦娘同様のセーラー上着の下に、おそらくはレオタード型の下着を着けている格好の者が来た。

「五島沖海底姫、オスソワケ。」

「アリガトウ。」

港湾棲姫が作り過ぎてしまったおかずを眠そうな五島沖海底姫に渡す。

「渡シタイケド 今 何モナクテ…。」

「イエ、作り過ぎタ ダケデスシ…。」

五島沖海底姫が申し訳なきさそうに言い、港湾棲姫が手を振りながら言う。

「五島沖 オ姉サン！」

「ポッポチャン ドウシタノ？」

「今度遊ブノ！」

北方棲姫が目をキラキラさせて言う。

「約束ナノ！」

「ウン。約束。」

二人はゆびきりげんまんをした。港湾棲姫はそんな二人を微笑ましく見ていた。

左隣の玄関の前

ピンポーン

今度は北方棲姫がインターホンを鳴らした。港湾棲姫に持ち上げられて。

『はい。』

「隣ノ 港湾ト…。」

「ホッポナノ！」

『あら、港湾ちゃんとはっぽちゃん。』

ガチャ

「こんばんは。」

「コンバンハ 山田サン。」

「コンバンハナノ！」

玄関から山田さん（おばちゃん）が出てきた。

「コレ オスソワケ。」

「あら良いのにく。」

「美味シイノ！」

山田さんは笑顔で貰う。

「あつ、そくだ。ちよつと待っててね。今ちようど…。」

「アツ、ハイ。」

「待ツノ！」

山田さんが家の奥へ行き、何か袋を持ってきてくれた。

「はい、うちもお裾分け。」

「ナノ？」

『『もなか』よ。うちの主人が好きでね。買いすぎちゃったの。貰ってくれると嬉しいわ。』

「アリガトウ ゴザイマス。」

「アリガタイノ！」

「いえいえ、わざわざありがとうね。気をつけて…て、言っても隣だけど、一応気をつけて帰ってね。」

「ハイ。」

「ワカッタノ！」

山田さんが玄関の明かりを付けたままにしてくれて、ドアを閉めた。

「…良イ人ナノ！」

「ウン。」

しかし、港湾たちの手にはまだ作り過ぎたおかずが…。

鎮守府

「オスソワケナノ！」

「わあく！ありがとうございます！」

「ココニ アゲルナンテ オカシイケド…。特別。」

なんと、鎮守府までお裾分けに来た。

「いや、ありがとうございます。うちも結構艦娘が多くて…。」

「知ツテルノ。」

イベントがあるたびに燃やされている北方棲姫はよく知っているだろう。知らない方がおかしいと言うものだ。

「あつ、港湾さんにほっぼちゃん。こんなところまでありがとうございます！
います！」

「司令官！」

提督直々に来て、頭を下げる。

「アレ？？港湾。何シテンダ？」

「アンタコソ 何シテンノ？レ級…。」

すると、片手に酒瓶を持っている隼鷹と肩を組みながらレ級が来た。二人ともベロンベロンに酔っ払っている。

「アア？マア！チョットナ！」

「ウツ、酒臭イ…。チョットツテ ナニヨ チョットツテ…。」

「まあ、飲もうじゃん？朝までずーつとさく。」

「隼鷹。お前もやめろ。」

レ級は港湾棲姫に、隼鷹は提督に注意される。

「…オ互イ、大変…。」

「そうですね…。」

港湾棲姫と提督はため息をついた。

「元氣ダスノ！」

「お、おう…。ありがとうございます…。」

「アリガトウ。ホッポ…。」

北方棲姫に元氣付けられた。

「ヤツパ、『シンカイ』ヲ 飲マナカツタカラ 怒ツテルノカ〜?」
「違ウ…。」

「ま、どうでも良いっしょ。ほらほら、提督もいっぱい飲んで、いっぱい飲もう!」

「あはははは (アハハハハ) !!」
「……。」

二人がくだらないことを言ったり、見当違いなことを酔っ払って言い、港湾棲姫と提督が黙ったままだ。

「はい。ほっぽちゃんは向こうで、お姉さんたちと一緒に遊びましようね〜。」

「?」

艦娘はこの後どうなるか分かり、北方棲姫を連れて行った。

「あつ、そうだ。少し待っていてください。こちらからも何かお裾分けを…。」

提督が急いで鎮守府に戻る。ちなみに、頭にタンコブのあるレ級は肩身の狭そうに港湾棲姫の隣にいる。その隣には正座させられている隼鷹も…。二人は既に酔いが覚めていた。

「これです。」

「のわー! 提督ー! それあたしの秘蔵のお酒ー!」

「アツ、コツチモ 渡スモノガ…。」

「ギャー! コレクシヨンノ 勲章ー!」

提督と港湾棲姫は叫ぶ二人を全く気にせず、交換した。

「それと、これです。」
「?」

「この前、うちで作った羊羹です。皆んなの料理教室で…。」

「アナタモ 大概ネ。」

港湾棲姫が羊羹を貰う。

「ソウ 思ツテ ミレバ ホッポハ…。」

「あつ、こちらです。」

艦娘が北方棲姫と手を繋いで来た。北方棲姫は眠そうに目を擦っている。

「眠イノ…。」

「ゴメンナサイネ…。ホッポ…。遅クナツチャツテ…。」

「ウウン…頑張レルノ…!」

北方棲姫が笑顔で言う。この笑顔でその場が全体的に和んだ。

「アツ、デモ…。」

港湾棲姫は片手にある、残っている作り過ぎたおかずを見る。

「…。仕方ナイカラ 近クノ 猫ニ…。」

「それはやめて!マジでやめて!それだったら俺が食う!」

提督が半ば引つたくるように貰ってくれた。

帰り道

「スー…スー…。」

「疲レタ ミタイネ。」

港湾棲姫は北方棲姫を背負いながら帰っている。もなかも羊羹も持っている。

「持ツカ?」

レ級が心配した。

「ウウン。大丈夫。」

「ソウ 固イコト 言ウナツテ。」

「ア…。」

レ級が袋を持ってくれた。

「デ、デモ…。」

「イイジヤネーカ。友達ジャン。」

レ級が笑顔で言う。

「…ウン。…アリガトウ…。」

「ドウイタシマシテツ!」

その日はとても明るく、温かな夜だった。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

参話 買い物ナノ!

「困ツタ…。」

昨晚のことを思い出した港湾棲姫。

「モナカ…。ウウン。健康ニ 良クナイ。」

港湾棲姫は乱雑にしまつてあるモナカと羊羹をどかして、色々探すが無い。

「買い物ネ…。」

「買い物ナノ!」

「イツノマニ…。」

北方棲姫が嬉しそうに言い、港湾棲姫が驚く。

「買い物 行クノ?」

「行ク。」

「ヤツタノ!」

「才菓子ハ 100円マデ。」

「ワカツタノ!」

北方棲姫が笑顔になり、港湾棲姫も自然と笑顔になった。

「サンポ!サンポ!」

「コラ。走ラナイ…。」

少し遠いスーパーまで二人が歩く。太陽の光がポカポカしていて春の陽気だ。

「…クシユン!クシユン!」

「オネーチャン 風邪ナノ?」

「ウウン。花粉症…。辛イ…。クシユン!」

北方棲姫が心配そうに聞いて、港湾棲姫がクシヤミをしながら言う。ポカポカ陽気で花粉が舞っている。

「オネーチャン、花粉、辛イ…。」

北方棲姫が頭の中で考えた結果…。

「…ツマリ、敵!アツチ行ケ!花粉!」

北方棲姫はぶんぶんしながら手を振ったりして、港湾棲姫に花粉を

寄せ付けないようにする。逆に花粉が舞ってしまっているが…。

「アリガトウ ホッポ…。オネーチャン 楽二 ナツタ…。」

「ホント!？」

「ウン。ダカラ モウ 大丈夫。」

港湾棲姫は北方棲姫の頭を撫でてあげる。北方棲姫は港湾棲姫を守ったと思い、少し誇らしい顔をした。すると…。

「あら？港湾ちゃんにほっぽちゃん？」

「隣ノ 山田サン。オハヨウゴザイマス。」

「オハヨウナノ！」

エコバッグを持った山田さん（隣人）に会った。

「おはよう。昨日はありがとね。とても美味しかったわ。」

「イエイエ、コチラモ 貰ッテクレテ 助カリマシタ。」

「モナカ！」

「あら、もなか食べたの？」

「マダナノ！」

「昨日ホッポハ 寝テシマツテ。」

「そうなの？あ、そうそう。大事なことを言い忘れちゃってね。」

「大事ナ コト?？」

「昨日間違つて、激辛のもなか混ぜしちゃってたかもしれないから、気をつけてね。」

「ワカッタノ！」

「ワカリマシタ。」

「本当にごめんなさいね。それじゃあ。」

「サヨウナラ。」

「サヨウナラナノ！」

港湾棲姫と北方棲姫は、山田さんにお辞儀をした。

「…気ヲツケナイト…。」

「辛イノ。」

二人は歩きながら呟いた。そのうちに、段々と車通りの多い道を歩く。

「車二 気ヲツケナイト。」

「壊シチャウノ…。」

「車ハ 高イカラ…。」

二人が手を繋いで歩く。例え事故が起きても、怪我をするのは車側だ。そのうちにスーパーに入った。ここはそこまで大きなスーパーではなく、4階までしか無いスーパーだ。

「エレベーターナノ！」

「スミマセン。」

「アリガトウ！」

エレベーターの扉が閉まりそうだったが、中にいた人が待つていてくれた。

チーン

「一階ハ 食品売り場。」

港湾棲姫らが降り、カートにカゴを入れて歩く。

「才野菜ガ 沢山…。」

「ピーマン 安イカラ 買ワナイト…。」

「ピーマン… 苦手ナノ…。」

「好キ嫌イ スルト 強ク ナレナイワヨ？」

「シー… 食ベルノ。」

「偉イ。」

北方棲姫が港湾棲姫の目を見た後に言い、港湾棲姫が褒めてあげる。

「ツノ 格好イイノ…。」

「？」

しかし、実際は港湾製姫の額にあるツノを見ていて、自分にも「おでこ」に生えて欲しかったからだ。自分には生えないことを知るのは何年も後のことだが、それはまた別の話に…。

「才菓子ナノ！」

「選ンデ。」

北方棲姫はお菓子コーナーで人間の子供と混じって見ている。

「ホント 馴染ンジャツテル…。」

港湾棲姫が仕方ないような顔をして呟いた。一応、深海棲艦は艦娘と休戦も和解もした覚えもないのだ。いつの間にか、北方棲姫は人間の子供と仲良く話して笑っている。

「…マア、ホツポガ 幸セナラ ソレデイイカシラ。」

港湾棲姫は笑顔の北方棲姫を見て微笑みながら呟いた。すると…。

「お菓子は本当に100円までだぞ…？お前たち多いんだから…。」

「分かってますって。司令官。」

「「あ（ア）…。」」

艦娘と提督と鉢合わせた。

「こ、こんにちは。」

「コ、コンニチハ…。」

「こんにちは。」

まさか、こんなところで会うとは思っても見なかったのだろう。3人ともしどろもどろだ。

「港湾さんはほっぽちやんと一緒に買い物ですか…？」

「エエ。」

提督と港湾棲姫が話す。

「やっぱり、お肉を買いにですか？」

「才肉…？ドウシテ？」

「今日は鶏のもも肉の特売日で…。結構安いですよ。あ、買ってないなら行ったほうが良いと思います。100g78円はお得ですよ。」

「へく。ソウナノ？買ワナクチャ…。」

「あつ、あと砂糖も1kg一人様100円なので、安いと思います。…まあ、流石に鎮守府全員で来るのは出禁を喰らいそうなので、5人で来ていますが。あつ、あと卵もです。」

「200人以上 イルモノネ…。知ツテタラ レ級モ 連レテ来テタワ。」

艦娘と港湾棲姫が世間的な話をする。

「あつ、ほっぽちやんがお菓子持って来ましたよっ。」

「ア、本当…。」

「無駄話で時間を潰えるのも何ですから、我々はこれで…。」

「アリガトウ。」

提督と艦娘は、無駄に話をして港湾棲姫がセール品を買えないと言
うオチを回避するため、まずは他の物を買いに立ち去った。

「提督ダツタノ？」

「ウン。ソレヨリ オ肉 買ワナクチャ…。」

「ワカッタノ！」

港湾棲姫と北方棲姫は急いでお肉コーナーに行った。幸いにもま
だ残っていて、全部無事に買えることが出来た。

帰り道

「今日 沢山買ツタノ！」

「ウン。」

港湾棲姫と北方棲姫の両手にはエコバッグがぶら下がっている。
色々買ったのだろう。

「オ腹 空イタノ！」

「イツノマニカ モウ 夕方…。」

港湾棲姫が空を見る。

グウウ…

すると、二人のお腹が鳴った。朝から何も食べていないのだから、
お腹も鳴るであろう。

「…今日ノ 夜ゴ飯ハ ナンナノ？」

「今日ハ オ鍋。」

「ヤツタ！」

「スグニ 作ルカラ。」

北方棲姫が喜び、笑顔で港湾棲姫が言う。そして、玄関を開けた。

「タダイマ。…。」

「ドウシタノ？オネー…。レ級…。…死ンデル…。」

「死ンデナイ。」

カー…カー…

レ級が倒れていて、片手に一口食べたモナカを持っていた。勝手に食べたバチが当たったのだろう。ダイニンググメツセージには『モナカハ キケン』と書いてあったそうだ。レ級 撃沈。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

肆話 従姉妹が来ルノ!

「フウ…。」

港湾棲姫が買い物をして帰っている。

(今日ハ 『ネギ』ガ 安カツタカラ 買ツテキチャツタ。)

港湾棲姫が袋の中のネギを見て微笑む。お手頃価格だったのだから。

「タダイマ…。」

港湾棲姫が家に入り、台所に荷物を置いて、手洗いうがい消毒をした。

「ホツポ?」

しかし返事も無く、来ないため心配になり、買った物を仕舞わず、一旦北方棲姫を探しに家の中を歩く。すると、ある部屋で声が聞こえてくる…。

「面白イノ…!」

「暇な時は人生ゲームに限るぴよん!」

「あ…株が大暴落…。」

「家を買うことが出来たわ。」

「結婚したのです。」

「ハラショー…。危険な匂いがするな…。」

奥の部屋で駆逐艦娘と北方棲姫が遊んでいた。

「何シテルノ…?アナタタチ…。」

港湾棲姫は遊んでいる駆逐艦娘たちに聞く。

「暇だったから来ちゃったぴよん!」

「暇ダカラツテ 来ナイデ…。クルナ…ト…:…イツテイル…:ノニ…。」

そうも言いながらも、人数分お菓子とジュースを出してくれるあたり、優しい世界なのが分かる。

「オネーチャンモ ヤロウ?」

「デモ、オネーチャン 家事ヲ シナクチャ…。」

「ソウナノ…。」

「…仕方ナイワネ…。」

北方棲姫がシユンとしたので、隣に座る。駆逐艦娘たちも港湾棲姫を歓迎していた。そして、ゲームを一通り楽しんでいると…。

「ココカラ 声ガ…。」

レ級が来た。

「ナツ!？」

レ級は駆逐艦娘を見て驚いた。

「アラ レ級?ドウシタノ?」

「ドウシタノ?ジャナイダロ…!ナニ 遊ンデンダ!?今日 来ルンダロ!？」

「…ア!」

港湾棲姫と北方棲姫が気づく。

「早く 帰ッテ!」

「スグ 逃ゲルノ!」

二人がすぐに立ち上がり、艦娘たちに言う。

「?いきなりどうしたのです?」

「?」

そんなことを艦娘たちが聞くと…。

ガララララ…

「!」

玄関の戸が開く音が響いた。

「時間ガ ナイ…!隠レテ!」

「隠レルノ!従姉妹ガ 来ルノ!」

取り敢えず、駆逐艦娘たちを押し入れに隠す。そして、港湾棲姫たちは急いで玄関へ行く。

「イ、イラッシャ…。…ナンダ…。」

レ級は誰が来たのか分かり、損した顔をした。

「こんにちは…。うちの暁たちと卯月を見ませんでしたでしょうか?」

提督がわざわざ迎えに来たのだ。

「イル。早く 連レテ 帰ッテ。」

「あ、はい…。お邪魔します…。」

提督が奥の部屋へ行き、押し入れを開けた。

「あつ、提督びょん！」

「全く、何してんだ。港湾さん達の家で…。行くなら行くと言ってくれないと、手土産渡してないだろう。」

提督が煎餅の入った袋を取り敢えずレ級に渡した。

「今日 忙シイカラ 早ク 帰ッテ。」

「忙しい?と言いますと?」

「…コイツノ 従姉妹ガ 来ルンダ…。『礼文島支部』ノ 二人ガ…。」

「従姉妹…?」

レ級が言い、提督が首を傾げる。

「北方海域ニ イル 二人組ダ…。」

「北方海域…。…え!?北方海域のあの2人組!」

「ソウダ…。」

「激戦地とも言われている北方海域のあの2人組…。こちらも、陸軍元帥と海軍元帥兄弟が挑んでも未だ倒せない強敵…。相当ヤバイ奴ら…。」

「ソウダ。」

「見つかったらどうなりますか…?我々…。」

「提督ハ 背骨 折ラレルカモナ…。艦娘ハ…。…マア、無事デハ

ナイカモナ…。」

「怖…。」

「嫌ナラ サツサト 帰レ。」

「あ、はい…。ほら、卯月たち。帰るよ。」

提督が廊下を歩いていると…。

『早スギタカ?』

『予定ヨリ 二時間 早イヨ 姉貴。』

外から声が聞こえて、玄関の戸に影が映る。卯月以外がサーツと血の気が失せるのを感じた。

「コレ アウトジャーネーカ…?」

「コノ 提督ヲ 見レルノモ 最後…。」

「嘘ですよね!？」

「イヤ ソレダケジヤナイ…。港湾棲姫モ 敵ヲ 家…支部ニ アガラセテ…。」

「…。トリアエズ コレ 被ツテ…。」

港湾棲姫が艦娘と提督に被り物を渡す。そこに…。

ガララララ

「来タゾ！」

「棲妹 落ち着ケ。」

北方棲妹と港湾水鬼が入って来た。

「…? 誰ダ?」

「エト…。イ級、イ級、イ級、イ級、イ級、口級。」

「?!?!」

艦娘たちはこれが深海棲艦の被り物だと今知った。

「…人間ノ 匂イ…。」

北方棲妹がクンクン匂いを嗅ぐ。

「ニ、人間ナンテ イナイ。ソレヨリ アガツテ…。」

「イ級 邪魔ダ。」

「…。」

港湾水鬼が居間へ招かれ、北方棲妹は口級（提督）をジッと見ていた。

コト

「才茶…。」

港湾棲姫が緑茶を置く。艦娘たちはボ口を出さないように隅で置物みたいにじっとしている。

「ソレニシテモ コツチノ イ級 特殊ダナ。」

「ト、特殊…?」

「一言モ 喋ラナイナ。」

港湾水鬼が言い、艦娘たちが少しビクツとする。いつも呻き声をあげているイ級が何も言わないのは流石に不審であろう。

（バレたら殺される…。）

一部の艦娘や提督はそう考えていた。が…。

「ワレ ウーイ級 ピョン。少シ 特殊 ピョン。」

「!オオ!喋ッタ!」

艦娘の一人が遊びだし、港湾棲姫は顔が真っ青になった。

「コツチノ イ級ハ 喋ルンダナ!」

港湾水鬼が興奮混じりに言い、バレてないとホツとする港湾棲姫や提督たち。

「ソレデ 他ニハ 何ガ 出来ルンダ?」

「ビーム 撃テル ピョン。」

「マジカ!撃ツテ 見セテクレ!」

「ウツソピョーン。」

「嘘カイ!」

港湾水鬼が笑っている。

ジー…

「……。」

「……。」

北方棲妹は口級（提督）をジツと見ている。

「ド、ドウシタ?北方棲妹。」

レ級が北方棲妹に聞く。

「…ナンデモナイ。」

「?」

北方棲妹は港湾水鬼に座る。北方棲姫は港湾棲姫に座っている。

「デ、今日ハ ドウシテ コツチニ…?」

「イヤ、遠イ 従姉妹ガ 苦戦シテイルツテ 聞イテナ…。」

「ク、苦戦…?」

「アア。ダカラ 鎮守府ノ 提督ヲ 潰シニ…。アツ、コノ 情報ハ

集積地棲姫カラダ。」

（集積地棲姫…。覚エテ オキナサイ…。）

口級（提督）はビクツとした。ターゲットが自分と分かったからだ。艦娘たちは内心ホツとしていたが…。

「……。」

港湾棲姫が考えて1分後…。

「ソレモイイワネ。」

「デ、デモ 提督ガ 変ワツタラ ヨリ凶悪ニ ナルカモ 知レマセ
ンヨー。」

「…ソレモソウネ。」

提督がカタカナで言い、港湾棲姫が考え直す。

「…デモ、ホッポガ 幸セナラ 態々潰ス必要モ ナイワ。」

「イマ シアワセナノ！」

港湾棲姫が北方棲姫の頭を撫でる。

「…ソウカ。…ナラ、行カナクテモ 良イカ。」

「姉貴ガ 幸セナラ。」

港湾水鬼と北方棲妹が自然と口元が緩んだ。

「ト言ウヨリ、北方海域ハ 大丈夫？」

「アア、アレカ。モウ トツクニ 潰シタナ…。」

「倒シタ。」

二人が当然のように言う。

「へ、へエ…。」

「……。」

艦娘たちはバレたらただじゃ済まないことを悟り、何も言わなくなる。

「今夜ハ 泊マルノ？」

北方棲姫が港湾水鬼に聞く。

「…ン…。…折角ダカラナ…。」

少し考えた後、泊まって行くことにした港湾水鬼。一方、レ級が艦娘たちを連れて、外へ行こうとしている。

「連レテケ…。」

北方棲妹が口級（提督）の尻尾を掴んで離さない。

「…海域ニ 行カナクチャイケナイ。マタ 今度ダ。」

「……。」

「…不貞腐レルナ。マタ 今度 必ズ 会エル。」

レ級が北方棲妹の頭を軽く撫でた。そして、艦娘たちを鎮守府へ引

き連れて行った。

「潰シタツテ カレー大会ナノネ…。」

「アア。町民ノ 公平ナ 審査デナ。」

結局、武力制圧などしないようだ。

「…コツチハ 春ノ 陽気ダナ…。」

「…ソウネ…。」

港湾水鬼が、縁側にとまっている小鳥を見て呟くように言う。

「…クシヨン！」

「…花粉ノ 季節…。」

港湾水鬼がくしゃみをして、新たな目薬と薬を渡す港湾棲姫。

「棲妹ハ 平気カ…?」

「ホッポハ 平気ダツタ。」

「ソウカ…。花粉症ダト 寝ル時 鼻ガ 詰マルナ…。」

「ウン。ワカル。」

二人がそんなことを話しながら、うららかな1日を過ごす。戦いもない、平和な日。

「ア、ソウダ。『菱餅』ガ 出ルラシイゾ。」

「エ…。」

「マタ ホッポノ 所ニ…。」

「ソレナラ 大丈夫。」

「?」

「前ノ マスガ 終ワツタ直後ニ 猫ヲ 投下サセルカラ…。」

「エゲツナイナ…。シカモ 前ノ マス…。」

どこかの提督にとてつもない嫌な予感と寒気が走った。

「忙シイノニ 海域ニ 来タ時モ ソウスル。ダカラ 事前ニ 連絡ガ 来ル。」

「手懐ケテルナ…。」

港湾棲姫の飴と鞭だ。

「今日ノ 夜ハ 何ニ シヨウカシラ…。」

「今日カ…。」

「何か 食べたいモノ アル？」

港湾棲姫がエプロン姿になった。

「何デモイイ。」

港湾水鬼もエプロン姿になった。

「ナラ ホッポ達ガ 喜ブ カレーライス。」

「オオ。」

『『深海棲艦風カレーライス』ヲ 作ルカラ、野菜 切レル？コツチハ

皮ヲ 剥クカラ…。」

「任セロ。」

トントントン…

港湾水鬼も港湾棲姫も手際良く進めて行く。

「…久シブリネ。」

「？」

「コウシテ、二人デ 料理ヲ 作ルノ。」

「…ソウダナ…。」

二人が並んで台所に立っている。エプロンも当時の色のままだ。

「トコロデ レ級以外ノ 仲間ノ 姿ガ ナイガ ドウシタ？」

「皆ンナ バイトヤ 遊ンデイテ…。夜マデニハ 帰ツテ来ルト 思

ウ。」

「ホウ。」

港湾棲姫が鍋で肉を炒めて、野菜を切って入れる港湾水鬼。

「バイトカ…。マア、オ金ガナイト 生活ガ デキナイカラナ…。」

「住マワセタリ、ゴ飯ヲ ウチデ 作ルカワリニ オ金ヲ 貰ウ。

ホッポガイルカラ 働ケナイカラ…。」

「確カニ 心配ダナ。」

「保育園モ 迷ツタンダケド…。」

「…保育園？戦ツテイルンジャ ナイノカ？」

「エ？アツ、ウン。戦ツテル。」

「…。マア、保育園モ 馴染メルカドウカ 心配ダシナ。」

「少シ 違ウカラ…。」

水を入れて、煮る港湾棲姫。そこで、一旦作業は終了だ。皆が集

まっつてからルーを入れればすぐに出来る。

「港湾水鬼ハ ホツポ達ト 遊ンデ？」

「ダガ、マダヤルコトガ アルダロ？」

「大丈夫。トイウヨリ、心配ダカラ…。」

「心配性ダナ。」

港湾水鬼は北方棲姫たちのところへ行く。

「センタク♪センタク♪」

港湾棲姫は洗濯物を取り込んでいると…。

「港湾棲姫、棲妹達ガ イナイゾ。」

「…。」

港湾棲姫が今のことを聞いて、固まる。

「？オーイ。」

「ホツポガ イナイ…。家カラ 子供ダケデ 行ツタ…。」

港湾棲姫の顔がだんだん青ざめて行く。

「子供達ダケデ 危ナイ…。探シニ 行ク…。」

「オーイオーイ、マテマテ。子供同士デ イル時間モ 大切ダ。」

「デモ…。」

「コレモ、コミュニケーションノ 一貫ダ。ソレヲ 潰シチャ ダ

メダ。」

「…ウン…。」

港湾棲姫は先程からテンションが一気に底辺まで行き、心配な顔をしたままだ。

「…マダ 三時ダ。」

ソワソワソワソワ…

「ウン…。」

家事が終わってからもずっとソワソワしている。

「…探シニ…。」

「行ク！」

可哀想になったのか、港湾水鬼が言う。その前に即答したが…。

「オーイ。ドコダー？」

「ホッポー!!!」

明らかに港湾棲姫だけ真剣すぎる。

「近クノ 公園、海ニモ イナイ…。事故ニ 卷キ込マレタンジャ…!? 誘拐…!?!」

「大袈裟ダゾ…。タカガ 二時間 見テナイダケデ…。」

港湾棲姫がオロオロして、港湾水鬼が心底心配性だと思った。

「コウナツタラ…。行ケー!」

港湾棲姫が数多の艦載機を飛ばした。空一面艦載機。鎮守府が大騒ぎなのは言うまでもない。

「流石ニ ヤリ過ギダ…。」

そして、しばらくして艦載機たちが帰ってきて、港湾棲姫に話す。

「イナイ…!?!」

驚愕な顔をした直後…。

「フウ…。」

パタリ…

「港湾棲姫ー!!」

港湾棲姫が倒れた。そして、港湾水鬼が抱えた。

「イツカハ…ワタシタチモ…カエレル…。」

「死ヌナー!! 港湾棲姫ー!!」

「アツハハハハ! デ、結局家ノ オ 押シ入レノ 中ニ イタンダ!」

羊のように太く曲がったツノが生た、長髪の防空棲姫が大笑いする。

「ホントニ 心臓ガ 止マリカケタ。」

「ゴメンナサイナノ…。」

「心配性ナノハ 昔カラダカラナ。」

レ級もやれやれとする。現在、集まって皆んなでカレーを食べている。

「集積地棲姫ハ マダバカンスカ…。」

「心配性 直シタホウガ イイワヨ。」

「北方棲姫ハ 今日 楽シカツタ?」

「楽シカツタノ！」

「明日ニハ 帰ツチャウノカ…。バイトデ アマリ 話セナカツタナ
…。」

「姉貴 明日モ 遊ボウナ。」

「ホッポ、カレーガ クチモトニ…。」

「今日モ 平和ネ。」

「ローソン経営モ 大変ヨ。」

深海棲艦たちが平和に、食べながら話す。賑やかな食卓だ。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

伍話 ゴ飯作ルノ!

「センタク♪センタク♪ドンナ 汚レモ…♪」

「センタク♪センタク♪オチチャウノ〜♪」

港湾棲姫が庭で洗濯物を干し、北方棲姫が手伝っている。空は青空、ポカポカして気持ちの良い日だ。

「フウ…。」

二人が干し終わり、腕で額をこする。汗はかいていない。

「洗濯 終ワツタノ!」

「アリガトウ。ホツポ…。」

港湾棲姫が北方棲姫の頭を優しく撫でる。北方棲姫は笑顔になり、港湾棲姫も笑顔になった。

「今日 オ出カケナノ?」

「ウン。海域ニ 行カナクチャ 任務ガ 出来ナイミタイ…。多分、夕飯マデニハ 帰ツテクルカラ…。アツ、オヤツハ コタツノ上ニ アルカラ。ソレト 食べ過ギチャダメ…。アト…。」

「ガンバルノ!」

「ウン。」

港湾棲姫は自信のあるように言い、玄関へ向かう。そして、艀装を持った。

「行ツテキマス。」

「行ツテラツシヤイナノ!」

港湾棲姫は軽い足取りで行った。

「暇ナノ…。」

北方棲姫は家の縁側で寝転がる。温かな日が当たっている。

「ブーンナノ…。」

北方棲姫は自分の艀装である、たこ焼き型艀載機を手にとって飛ばすように遊ぶ。

「…。」

しかし数分後には飽きて、大の字になっている。微動だにしない。完璧なまでに暇なのだ。ちなみに、艀装は勝手にどこか飛んで行った。

「…ゼロ…ホシイノ…。」

本音が出た。

「レ級 イルノ？」

北方棲姫はふと思い、立ち上がってまだ見ぬ秘境、『2階』へ行くため、階段の前に立ち止まる。

「……。」

『ホッポ 2階ハ 危ナイカラ 一人デ 行ツチャダメ…。』

港湾棲姫に言われた言葉を思い出す。

「…ヤメテオクノ…。」

姉の言いつけを守る偉い子。居間へ向かおうと歩き始めたが、しかし…。

ヒュー…

「！」

北方棲姫の艦載機が2階へ行ってしまった。

ガシャーン！カランカラン…。

「……。」

それだけではなく、何かにぶつかったような音と、落ちた音がした。

「…行キタイケド 守ルノ…。オネーチャントノ 約束ナノ…。」

北方棲姫はとても悩んで、階段に座って考え込んでいると…。

ガララララ

「マイツタ マイツタ…。イキナリ 海域ニ 来ルナンテ…。LIN

E シ忘レトカ 卑怯ダ…。」

レ級がぶつぶつ文句を言いながら帰ってきた。

「？何シテンダ？」

「レ級！」

北方棲姫がレ級に駆け寄り、手を振ったり、飛んだりして事情を説明した。

「ツマリ カワイイカ！」

「違ウノ！」

レ級の心の声が漏れた。

「2階ノ 艤装ヲ 取ルノカ？」

「ソウナノ！」

「自分デ 行ケナイノカ？」

「オネーチャンニ 一人ジャ ダメツテ 言ワレテイルノ…。」

「ナラ 行クカ？」

「行クノ！」

レ級が北方棲姫をおんぶしてあげる。

「ココガ 二階ダ。」

この家の2階…。それは、少し長い廊下を挟んで、それぞれ部屋がある場所だ。

「オー…。」

北方棲姫は少し残念そうな顔だ。

「?ドウシタ？」

「想像ト チガウノ。」

「？」

北方棲姫が想像していたものは読者の想像に任せよう。

「アツタノ！」

北方棲姫はネジの山にある艦載機を手取る。

「……。」

そして、数秒ネジを見た後…。

「コレ ホシイノ！」

「?ネジ?本当ハ 鎮守府ノ 任務ノ 報酬ナンダガ…。一個クライ

イイカ！」

今この瞬間、どこかの提督に嫌な予感がした。

「見ツケタカラ スグニ 降リルノ！」

「エ…。今 来タバカリジャンナーカ…。」

レ級はせっかくおんぶして運んだのに、すぐ降りられてしまうのが名残惜しいみたいだ。

「デモ、ヤルコトナイノ…。」

「シー…。」

レ級が悩んでいると…。

『レ級ノ部屋』ナノ？」

「！」

北方棲姫がレ級の部屋の前にいた。

「オトト…。ココカラハ 立ち入り禁止ダ。」

レ級が持ち上げて、ドアノブに触れさせないようにする。

「気ニナルノ。」

「気ニナルカモ シレナイガ…。ソウダ、集積地棲姫ノ 部屋ナラ

イイゾ。」

レ級が今はバカンス中の集積地棲姫の部屋を差し出した。

「…勝手ニ 入ッテ イイノ？」

「平気 平気。」

レ級は勝手に開けて、ズカズカ侵入する。北方棲姫はドアからちよこんと覗くだけになっている。

「人形 沢山ナノ…。」

集積地棲姫の部屋はフィギュアだらけだ。

「大キナ 機械…。」

パソコン用の機械だ。

「メガネ 沢山ナノ…。」

部屋の端にはメガネの保管所のように、たくさん置いてある。

「暗イナ。窓開ケヨウ。」

レ級がカーテンを開けて、光を入れた。

「…「シヤアーツ！」」

「…！」

その瞬間、集積地棲姫が仕掛けていたのか、番犬代わりの砲台小鬼が起きて、撃とうと構えてきた。

「攻撃…壊レル…外…出シタラ…家…壊レル…。」

北方棲姫が考える。

「ツマリ！」

ボタン!!ガチャリ!

「エ!？」

北方棲姫が外に出さないように扉を閉めて、鍵までかけた。

『チヨ!待テ!マダ 中ニ イル!開ケテ!』

「ン!…」

レ級が中にいて開けようとするが、北方棲姫が外で押さえて開かない。

『本当ニ!ヤバイ!ヤバイ!』

『『シヤアーツ!』』

『ギャーーーー!』

ドガーーーーン!ドガーーーーン!

集積地棲姫の部屋で色々壊れる音や爆発音がした。しばらくして、音が止み、北方棲姫がドアから手を離す。

ガチャ…

「ハア…ハア…。」

レ級が鎮圧したみたいだ。レ級の片手には気絶している砲台小鬼たちがいた。ちなみに、集積地棲姫の機械やフィギュアはめっちゃくちゃである。帰ってきたら何て言われるか…。

「無事ダツタノ!良カツタノ!」

「…」。アア…ナントカナ…。」

レ級 中破。

「ヤツパリ、下デ 遊ブノ。」

「ソウダナ。」

二人は一階の居間にいる。深海棲艦の怪我は自然経過で治るようで、もう完全に治っているレ級。

「何シテ 遊ブ?」

「ン…。」

レ級が悩む。…いや、悩んでそうで、実際は何も考えていない。北方棲姫の上で飛んでいる艦載機がずっと気になってしまっているのだ。

「オヤツ食ベルノ？」

「イイノカ？アリガトウ。」

北方棲姫がこたつの上のお菓子をレ級に勧めてあげる。本当は自分のものだが…。

「イタダキマ…。」

シユパツ！

「！」

レ級の尻尾がお菓子をこぼしてしまつた。

「アツ、コラー！返セ！」

「♪」

レ級は自分の尻尾を追いかける。

「カワイイノ…。」

そんな姿を北方棲姫が見て、心が和む。

「本当ニ 欲シイナラ オ尻カラ タドルノ。」

「シ、尻カラ…。」

「ドウシタノ？」

「イヤ…。ソレハ チョットナ…。」

「？」

「マ、マダ ホツポニハ 早イ！」

「？」

レ級が恥ずかしそうにして、北方棲姫に疑問だけが残つた。

「オネーチャンノ為ニ ゴ飯 作ルノ！疲レテルト 思ウノ！」

「偉イナ…。本当ニ…。」

北方棲姫の100%の善意に心が洗われそうになつたレ級。

「デ、ナニ 作ルンダ？」

「オムライスナノ！」

「食ベタイダケジャ ナイノカ？」

「チガウノ!!」

「オ、オウ…。ゴメン…。」

北方棲姫に怒られ、謝るレ級。

「実際ニ…。」

「作ツテミタノ！」

二人がキッチンでエプロン姿になる。北方棲姫はちゃんと土台に乗っている。

「ホッポハ 危ナイカラ 包丁ハ ダメダゾ。」

「ワカッタノ。」

…。
北方棲姫がお肉を冷蔵庫から出したり、玉ねぎの皮を剥いていると

「ク…。」

「！」

レ級が玉ねぎを切って泣いている。

「…タマネギ…切ル…泣ク…ツライ…。」

北方棲姫が考える。

「ツマリ、テキ！」

「？」

「テキ リヨウリ シチャウノ！」

北方棲姫が意気込んでいるが、レ級は全く分かっていなかった。

ジュー…ジュー…

「…。」

「ドウシタ？」

北方棲姫が玉ねぎから目を離さない。

「フッフッフ… オイシクシテ タベチャウノ…。 ヤッツケルノ…。」

「??？」

北方棲姫が悪い顔をして、レ級が心底困惑するのだった。

ガララララ…

「タダイマ…。」

港湾棲姫が疲れた声を出して帰ってきた。

「オカエリナノ！」

「オウ、帰ツテ 来タカ。」

二人が出迎えてくれる。

「コノ 匂イ…。」

「オ料理シタノ！」

「ホッポ、頑張ツテタ。港湾棲姫ノ為ダツテ。」

「ソウナノ…？」

港湾棲姫が二人を見た。二人はいい笑顔だ。

「アリガトウ。」

「マア、最初ハ 二人ダツタケドナ…。」

「？」

港湾棲姫が台所へ行く。

「アラ、アナタタチ…。」

「オカエリナサイ。港湾棲姫。」

「アツハハハ！オ帰り！」

戦艦棲姫や防空棲姫たちが人数分オムライスを作っていた。

「早く 帰レタカラ 手伝ツテイルノヨ。」

「北方棲姫ノ 気持チニ 胸ヲ 打タレタカラ…。」

どうやら寄り道せず、早く帰ってきたみたいだ。そして、北方棲姫が作っているのを見かけて、手伝ってくれていたのだ。

「アリガトウ…。本当ニ…。疲レテイルノニ…。」

「ナニ、疲レテイルノハ オ互イサマダ。」

「コンナ 遅クマデネ。」

「ソレニ、沢山イタホウガ 早く終ワルシ。」

深海双子棲姫と深海鶴棲姫が口元を緩めて言う。

「ウン…！アリガトウ！」

そして、港湾棲姫も手伝い、早く終わった。

それを皆んなで一緒に食べたオムライスは、今まで無いほど美味しかったそうだ。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

陸話 振り回サレテルノ…

「お願いしますー！」

「……………」

提督が深海棲姫たちの家で、港湾棲姫を含めた者達に土下座でお願いする。

「フザケンナ。」

「何デ ソンナコト…。」

「…ヨク 聞コエナカッタワ…。次ハ 命失ウ覚悟デ 言ツテ。」

「ソレハ 良クナイト 思ウノ…。」

深海棲姫たちからの猛反発。

「第一ナンデ ワタシタチガ ソンナ 八百長ミタイナコト シナク
チャイケナイノ…。」

港湾棲姫が提督の前に出て聞く。

「実は…。」

「また深海棲艦の家に行くの?」

「…はい!」

「いい返事なんかして…。少し待ってて。遊びに行くんだから、お菓子とか持たせないと…。けど、現在鎮守府の戦績がいまいち良くないから、帰ったら演習とかして練度上げね?」

「…はい!」

提督が茶菓子を取りに、椅子から立ち上がった直後…。

ピロン

「?」

メールが一件届いた。

「大本営からだ。何なに…。…えー、前回の全鎮守府の戦績の結果、こちらが最下位となりましたので、次の日曜日に…元…帥…が…視…察しに来ます!?!」

「…!?!」

提督が青ざめ、艦娘達も青ざめる。

「…港湾さん達との関係…見られたらアカンやつだよね…？下手したらクビ…。いや、仲間だと思われて処刑…。」

提督は真つ青になった。

「…何とか、港湾さん達に訳を話して、八百長してもらって帰ってもらえない…。」

「提督、健全な提督なら絶対に言っちゃいけないセリフですよ？」

「と言うわけでして…。」

「……。」

提督は土下座したまま言い、港湾棲姫たちが反応に困った顔をする。

「…自業自得ヨ。サボツタ ツケガ マワツタト 思イナサイ。」

「アンタガ 死ンデモ ドウデモイイシ…。」

「正々堂々来ルナラ トモカク…。ワザト 負ケテクレ ナンテ…。」

「ムシガ ヨスギル。」

港湾棲姫たちは土下座など通用しない。

「…ホツポハ どうシタイ？」

ずっと黙っていた港湾棲姫が北方棲姫に聞く。

「ウソハ ヨクナイケド…。マタ、遊ビタイノ…。クビ？ニ ナツタ

ラ 遊ベナイノ…。ソレハ 嫌ナノ…。」

「…ソウ…。」

北方棲姫が困った顔で言った。

「ホツポガ ソウイッテルケド、アナタたちハ どう？」

「……。」

北方棲姫が…幼い子がそう言っていて、反対するような大人はいないだろう…。

「…ハア…。…分カツタヨ。ホツポノ 頼ミダモンナ。コレデ 満足カ？」

レ級がやれやれとした顔で諦めたように言う。

「マア、レ級ガ オ世話ニ ナツタリスルシ…。ホツポモ ソウ言ツテルシ…。」

「今回ダケヨ。」

「皆ンナ 優シイネエ。アハハハハハ！」

他の深海棲姫たちもちらほら納得してきた。

「あ、ありがとうございます！」

提督は感謝以外何の感情もない。

「次ノ 日曜日?...テ、明日ダケド...。」

「はい！」

「モウ...。ナラ、艀装ノ 手入レヲ シナイト。」

「ホツポモ 手伝ウノ！」

「アリガトウ。」

「サア、手入レ手入レ...。」

「アナタ モウ邪魔ヨ。早く 帰ツテ 支度シナサイ。」

港湾棲姫達がわざわざ艀装の手入れをしに、裏の物入れへ行つた。提督はすぐに準備をしに鎮守府へ帰つた。

「フウ...。ヤット 出シオワツタ...。」

「サビ 臭イノ！」

「随分、使ツテ ナカッタカラナ...。」

イベント艀の艀装は凄く錆びた塊になっていた。

「出スノモ 一苦労ネ...。」

そんなことを呟いて、錆び取りを探していると...

プルルルルル...

「？」

家電話が鳴つた。港湾棲姫は急いで家に入って、受話器を手にする。

「モシモシ、『深海棲艀 五島支部』デス。」

『あ、も、もしもし...。港湾さん...ですか...?』

「...何カ用？」

『その...大変言いにくいのですが...。元帥殿が体調を崩して...来れないそうです...。』

「...ソレデ?ツマリ、来ナイノネ？」

港湾棲姫は少しムツとしたが、対応を続ける。

『はい…。本当にすみません…。』

「ハア…。皆ソナニ ソレヲ言ウ 身ニモナツテホシイ…。」

『すみません…。』

「トニカク、来ナイノネ。」

『はい。』

「次来ルトキハ 高価ナ 手土産ネ。」

『はい。それでは…。』

そうして、電話を切った。

「ハア!? 来ナイ!?!」

「ソウ…。」

深海棲姫たちは怒った顔をする。それもそうだろう。使っていないかった艦装を態々出して、半分鏝を取ったところでこれだ。

「ツタク…。コレヲ シマウノモ 楽ジャナイノニ…。」

レ級が出した艦装を見る。庭の半分以上埋まってしまっている。

「マア、上司ニ 振り回サレル 気持チモ 分カルデシヨウ?」

「二ウ…。」

バイトしている深海棲姫らはその気持ちが痛いほどわかる。命令されていないことをやったかどうか確認してきたり、言うことがポンポン変わることもある。

「…アイツモ 大変ナンダナ…。」

「…今回ハ シカタナイカ…。」

深海棲姫らは不機嫌になりながらも許してあげる。レ級たちはブツブツ言いながらも艦装をしまった。そこに…。

ピンポーン

家のチャイムが鳴った。

「はーい。」

港湾棲姫は大忙しだ。

「……………」

「い、いや…。あの…。ははは…。」

提督が立っていた。手には高価な茶菓子と思われる袋が……。そして、凄く気まずい顔をしている。

「…ナニ？」

「……。」

提督は何も言わない。

「……。」

ガララララ…

「わー！待ってくださいー！」

港湾棲姫が無言で追い出して戸を閉めようとした。

「…ナニ？」

「えと…その…。…お願いしますー！」

その後、提督は元帥の腹痛が治ったから来ることを説明した。

「……。」

港湾棲姫と北方棲姫以外の深海棲姫たちやレ級の顔がとても怖い。

「……。」

提督は土下座して、畳にめり込むほど頭を下げている。

「…ツマリ？戦カツテ ホシイノ？」

「はい……。」

「……。」

「…マア…。今回ガ…最後ヨ…。」

「振り回サレテルノ…。」

港湾棲姫、仏の顔も三度までだ。次はないだろう。提督は帰って行った。

「……。」

皆、無言で艀装の手入れをする。全ての鯖が取れた。

「フウ…。マア、綺麗ニ ナツタナ。」

「ソウネ…。」

「モウ 夕方カ…。」

皆も、一生懸命やっているうちに怒りが薄れた。

「今日ハ 食ベニ 行キマシヨウ？皆ンナ 頑張ツタシ。」

「ヨツシャー！」

「久々ニ 外食！」

「ヤツタノ！」

皆が活力を得て、笑顔になって騒いでいる。機嫌は完全に良くなった。

プルルルル…

そこに、また電話が鳴った。港湾棲姫が気づき、受話器を手に取る…。

『も、もしもし…港湾さん…ですか…？』

「……。」

提督だ…。

『…す、すみま…。』

ガチャリ…

港湾棲姫は無言で電話を切った。今頃提督は完全に青ざめているだろう。港湾棲姫は皆に伝えなかった。現地で直々に謝れとの合図なのだろう。

「い、いや〜！本当に！花見はいいですよね！ね！」

「ハ、ハラシヨー…。」

「お、お鍋もあつたまっていますよ！提督！」

「……。」

艦娘たちが鎮守府の松の木のしたで、花も無いのに花見の支度をしている。港湾棲姫以外の顔は険悪だ。

「…マズ、一ツ…花見モ 何モ、花スラ 咲イテナイ…。二ツ…元帥ハ

？三ツ…連絡モ無シニ イイ度胸ダ…。」

北方棲姫以外がキレかけていた。ピカピカの艦装を提督に向かって構えていたが…。

「花見…楽シソウナノ！」

「…え（エ）？」

「全ク！連絡クライシロ！」

「ピョントヒョ（ホントヨ）！」

「態々艤装ヲ 出スノモ 楽ジャナイカラ！」

結局、皆で移動して桜の木の下で花見だ。鎮守府艦娘全員集まって、深海棲姫たちも一緒にいて美味しいものを食べている。

「ホント、コウイウノハ 今回ダケニシテ…。」

「すみません…。」

「ホツポガ イナカツタラ 戦争ヨ。」

「はい…。」

港湾棲姫と提督が話す。北方棲姫が花見に賛成したからこそ、こうして仲良く出来ているのだ。

「マア、ヨクコンナ 所ニ サクラガ アツタワネ。」

「丁度潮風が当たらなくて、桜にとって丁度良い気候みたいで。」

大きな桜の木が集まっている場所だ。そこに…。

「眠イ…。」

「ここかしら…。」

五島沖海底姫と山田さんや町内会の人たちが来た。

「あれ…？どうしてここが…？」

「呼ンダ。」

港湾棲姫が一言言った後、町内会の皆さんの場所へ行く。北方棲姫も行った。

「ここ、本当に使っているの？」

「大丈夫ナノ！」

「サクラガ 一杯ネ…。」

「花見ニハ 丁度イイ。」

それぞれ話して、シートを敷いて席に座る面々。

「「かんぱーい！」」

「はあ…はあ…。足が速いですね…。」

「当たり前だ。もうすぐ例の鎮守府だ。わざわざ嘘をついてまで監視に来たのだからな。」

「そういう所、似合いませんよ。『元帥殿』。」

元帥が視察しに来たのだ。

「…あれ？門が閉まってる…。」

「…つまり、普段はサボっているのか…。」

鎮守府の門の前で元帥と艦娘が言い、不審がついていると…。

「あれ？向こうから声が…。」

「たしかに…。」

森の中を進む元帥殿。そして…。

「アツハハハハ！ナニソレ！」

「月が出た出た〜♪」

「あらよつと！」

「オイシイノ！」

「花見なんて久しぶりだな！」

艦娘や深海棲艦たちが仲良く騒いでいるのを見かける。

「…元帥殿…。」

艦娘が心配した。なんて言っただって、敵と花見をしているのだ。

「…なるほどな。」

しかし、元帥は晴れた顔だ。

「敵と戦わずに和解…か。それこそが、我々が望む勝利であるのではないか？」

「…そうですね。」

元帥が問題ないと判断して帰ろうとした矢先に…。

「アレ〜？才前達ハ 飲マナイノカ？」

「!?!」

酔ったレ級が元帥と艦娘を呼び止める。艦娘が艤装を構えようとしたが…。

「…そうだな。少し飲んでくか。」

「ええ!?!」

「ソレガイイ！オーイ！」

レ級が元帥たちを連れて行き、仲間に入れてあげた。艦娘は若干強引に連れて行った。

「…かんぱ〜い!!!」

皆んなが杯を持って、ジュースや酒や麦茶を持って乾杯する。提

督、元帥、近所や町内会の皆様、艦娘や深海棲姫たちが、大きな桜の木の下で花見をする。笑い合い、楽しみ合い、馬鹿をやっている。そこに憎しみや悲しみや怒りなど微塵もない、敵や味方など関係のなくお花見をしている。この日は楽しすぎて忘れられないお花見となったようだ。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

漆話 マツチヨ兄弟

「フウ…。」

太陽が照りつけるが、まだまだ寒い。港湾棲姫が洗濯物を干す。

「姉貴、手伝ウ？」

「イヤ、大丈夫ダ。棲妹。」

…ではなく、港湾水鬼だ。

「最近、アノ二人ガ 来ナイナ。」

「クビ？」

「ソレダト イインダガナ。ダガ、アイツラハ ソウ簡単ニ…。」

港湾水鬼と北方棲妹が話していると…。

「我ら兄弟がクビになったかだど？どうだ兄者。」

「否！我等兄弟がそう易々とここを明け渡すはずがないだろう。弟者よ…。」

「クビニ ナラナイナ…。」

高い木の上でムキムキの筋骨隆々で、服が弾けそうなくらいの筋肉を見せつけるポーズをしながら二人が言う。

「とうっ！」

シュタツ！

二人が高い木から港湾水鬼の家の庭に降りて、ポーズを決める。筋肉を見せつけながら。

「海軍元帥！弟者！」

ムキツ！

「陸軍元帥！兄者！」

ムキツ！

「連合艦隊旗艦！長門！」

ムキツ！

「大和型戦艦！武蔵！」

ムキツ！

「「爆☆誕!!」」

ドギヤアアアアン!!!

「庭ア 爆発サセルナ!!」

「洗濯物ガ!!」

戦隊ヒーローのように決めポーズをした後思いつきり爆発して、干していた洗濯物が煤だらけに…。港湾水鬼と北方棲妹がブーイング。

「トイウヨリ、イツノ間ニ キタ…。」

「気ヅカナカッタ…。マツチヨ兄弟ニ 気ヲ トラレテタ…。」

二人は艦娘を見ながら聞く。

「転がって来たぞ。」

「決めポーズは大事だ。」

二人の艦娘は当然のような顔だ。

「今回こそ、貴様らの好きにはさせん!」

「この兄者と…。」

「弟者が…。」

「成敗してくれる!」

二人は筋肉を（ry

「…この弟者は知っているぞ…。夜中、こつそりコンビニへ行ってることを!」

「イイジヤナイ。別ニ。」

「問題はそこではない…。そこで買ったのはマヨネーズとカレードリア!しかも真夜中にだ!カロリー計算も何もかもオーバーだ!」

「ソコマデ知ツテルノハ モハヤ ストーカー!!」

港湾水鬼が驚愕するが、艦娘二人は心に染みるように頷いている。狂っていた。

「弟者よ…。そこまでは流石にストーカーと言われても反論できんぞ。」

「そうか兄者…。ならば、次は気をつけよう。」

二人は筋肉（ry

「さてと、雑談もそろそろこの辺で、勝負だ。深海棲艦!」

兄者が指をさしながら、宣戦布告。

「…イヤ。」

「…なんだと?」

「洗濯物モ 一カラ ヤリ直シダ…。ソレニ、マダ ヤルコトガアル。」

「手伝ウ…。」

二人は艦娘を含めた4人を放つて、煤だらけで地面に落ちている洗濯物を拾い、家の中に入って行った。

「…提督、流石に爆発はやりすぎたか…。」

「…そうだな。」

「こうなつてしまえば、償いをせねばならんな。」

「その通りか…。」

4人が話す。

「弟者よ。やるべきことは一つだ。」

「ああ。兄者もな。」

「手伝う!」

陸海元帥含めた艦娘4人が家へ強行突入。そして、色々家事を手伝ってあげて、やっと終わった。

「デ、今日ハ ナンノ 勝負?」

「そうだな…。派手な勝負はまた洗濯物をやり直さなければならなくなる…。ならば、絵で勝負だ。」

「『絵』?」

「そうとも…。絵で勝負だ。」

「汚レナイナラ ヤツテヤロウ。」

「ふっふっふ…。」

「ヤル。」

「棲妹?」

「ヤラセテ。」

「…分カツタ。」

弟者と兄者が笑みを浮かべる。そして、北方棲妹が描き始める。元帥側は弟者が描くようだ。そして、数分で両者とも完成する。

「う、うまい…。」

「弟者の絵のうまさはコンクールで連続優勝するほどだ！今回は終わりだ！深海棲艦！」

兄者と弟者が勝ち誇った笑みを浮かべる。
「出来タ。」

北方棲妹が絵を見せた。何やらぐちゃぐちゃな絵だ。

「ふ…ふ…ふはははは！今回は我等の勝ちのようだな！弟者よ…弟者？」

弟者はその絵をじっと見つめている。

「…負けた…。」

「なにいいいい!？」

兄者は筋肉を見せつけながら、大袈裟なポーズで驚愕した。

「これは…今の人類では到底理解できないような、味もあり、深みもあり、そして何より大胆さであり、クレヨンの技術を無駄なく使っている…。兄者よ…。これは完敗だ…。」

「なん…だと…。」

兄者と弟者が膝をつく。艦娘達も後ろで膝をついていた。

「オー！」

「マイ！」

「ゴット!!」

二人は (ry

「イチイチ 筋肉ガ ウザッタラシイナ!!」

「トテモ ムカツク！」

港湾水鬼と北方棲妹が痺れを切らして言った。

「次こそは必ず…！行くぞ！弟者よ！長門武蔵！」

「次は勝つ！」

艦娘を含めた4人は嵐のように過ぎ去って行った。

「ヤッパリ、ツツコミモ 大変ダナ…。」

「姉貴、才疲レ…。」

夜ご飯を二人で作っている間に港湾水鬼が呟いた。

「…デモ、意外ト 悪イ人ジャ ナイナ。」

港湾水鬼が家のリビングを見る。ピカピカに磨かれていた。

「トコロデ、棲妹。イツカラ アンナ『絵』ヲ？」

「アレ、適當。」

「適當…。」

「芸術ナンテ 分カンナイ。適當ニ グチャグチャニスレバ 意外ト

深読ミスル。」

「ヘエ〜。」

二人はそんな会話をしている間にご飯が出来た。

「…ソウ思ツテミレバ、港湾棲姫ハ 大丈夫カナ…？」

「姉貴…。」

二人が、テーブルの上に食事を準備して座り、ふと思う。そこに…。

「今日ノ 夕食ハ 魚ノ 照り焼き？」

「軽巡棲姫？」

軽巡棲姫がやって来た。

「…浮カナイ顔ネ。ドウシタノヨ？」

「…港湾棲姫ガ スコシ 心配デ…。」

「姉貴モ…。」

軽巡棲姫が椅子に座って、話を聞く。

「モシカシタラ、アツチデモ 同ジヨウナ 提督カモ シレナイ…ト、

考エルト…。」

「ココガ 特別ナダケヨ。アンナノガ ドコニデモイタラ、人類滅亡

ヨ？コツチガ 逃ゲダスワ…。」

軽巡棲姫がやれやれとする。

「ソレニ、妹モ イルカラ、何カアレバ 直グニ連絡ガ 来ルワヨ。」

「ソウ…。軽巡棲姫ノ 妹モ…。」

『五島支部』ニ。軽巡棲鬼…元気ニ シテイルカシラ？」

軽巡棲姫は、五島支部にいる軽巡棲鬼のことを心配する。

「マア、アノ様子ジャ 元気。アソコ、戦イ斯拉 シテナイ…。」

「エ？」

「ミンナ 同ジデ バイト…。アト、バカンス…。」

「…和解？」

「正式ニハ シテナイケド、イツノ間ニカ アンナ関係ラシイ。」
「……。」

軽巡棲姫がそれを聞いて、リアクションに困った顔をした。

「ソロソロ 食ベヨウ。」

「…ソウネ…。」

「イタダキマス！」

三人が食…。

ピンポーン

「ハイ？」

港湾水鬼が玄関へ行くと…。

「海軍元帥！弟…。」

「モウ聞イター！…ハア…。…ナンノヨウ？」

元帥兄弟がいた。

「これだ。」

「？」

兄者が袋を前に出す。

「作りすぎた。貰ってくれ。」

「一応敵ナンダケド…。」

「きつと、栄養のバランスが偏っていると思うからな！」

「エエソウデスカ。」

「それに、プロテインを5kgほど…。」

「ソレハ 持ッテ帰ッテ。」

「バナナ味は駄目だったか…。」

「ソウイウ 問題ジャナイ！」

港湾水鬼が元帥兄弟に言う。そこに…。

グウ…。

「……。」

「…才腹 空イテルノカ…。」

元帥兄弟のお腹が鳴った。

「…夜ハ？」

「まだまだ。暖かいうちにお裾分けを…いや、敵に毒見をしてもらった

ほうが良いからな。」

「ハイハイ。……。…毒見ツイデニ 食ベテクカ？」

「…いいのか？」

「イツモ 棲妹ト 遊ンデクレテルシ。オ裾分ケヲ 持ツテキテ クレタカラ。」

港湾水鬼が家の中にあげる。まあ、実際は家事を手伝ってくれたお礼なのだが。

「アラ？」

「二人 追加ダ。」

「元帥！」

軽巡棲姫が椅子ごと少し移動して、スペースを作ってあげる。

「今日ハ、魚ノ 照リ焼き。残シタラ 許サナイ。」

「どれ…。おお、美味い！」

「美味いぞ！港湾水鬼！」

「ソレハ 良カツタナ。」

モリモリと美味しそうに食べる元帥兄弟に、港湾水鬼はやれやれとした目で見守ってあげ、軽巡棲姫も食べ始めた。北方棲妹はガツガツ食べる二人を見て、行儀が悪いと思いつつ、少しニヤけていた。

その後、元帥兄弟は感謝の気持ちとしてプロテイン（いちご味）とメロンを届けてくれたそうだ。

『深海棲艦 礼文島支部』は今日も平和です。

捌話 オカエリナノ!

「ウ〜ン…。」

「キモチイイ…。」

「アタタカイノ…。」

レ級、港湾棲姫、北方棲姫がいつものようにコタツに入って、ごろんとしている。

「レキユウ、バイトハ〜?」

「キョウモ ヤスミ。」

「オカネカセグノ。」

「サイテイゲンノ シュウニユウハ ミタシテル。」

レ級たちが話す。この家で暮らす以上、食事代などの最低限のお金は払わなければならない。他の深海棲姫たちがバイトに励んでいるのは、欲しいものがあるからだ。

「…ソウオモツテミレバ シュウセキチセイキハ イツカエルノカシラ…。」

「ズイブンタツノ。」

「アツ、ソウダ。テガミガ キテタゾ。」

レ級が手紙をコタツの上に置く。港湾棲姫と北方棲姫がその手紙を見た。

「…キョウ カエツテクル…。」

「カエツテクルノ。」

「キョウカ。」

三人はそれを知っても、コタツに入ったままだ。

「シュウセキチセイキ…キット メズラシイ オミヤゲヲ モツテクルノ!」

「メズラシイ オミヤゲカ…。」

そこに…。

ガラララララ…

家の引き戸が開く音がした。

「ヨオ、タダイマ。」

集積地棲姫が帰ってきた。

「コツチ サムイナ…。」

集積地棲姫は流れるようにコタツの中に入る。

「オカエリナノ！」

「オカエリナサイ。」

「オカエリ。」

北方棲姫たちがごろんとなりながら、やる気のなさそうに言った。

「ナンカ ツメタイゾ…。」

「キノセイ。コツチハ イソガシイノニ ミナミノシマへ バカンス
ヘイツテ、タノシンデキタンデシヨウ？ ハナシヲ キカセテ？」

「ウ…。ワルカツタヨ…。ウラヤマシカツタンダナ…。」

集積地棲姫がある荷物をコタツの横に置く。

「ソレハナンナノ？」

「コレカ？ コレハ オミヤゲ。」

「オミヤゲナノ！」

北方棲姫が嬉しそうにワクワクする。

「ドーン！ドウダ！」

「……。」

北方棲姫は出されたソレを見て、一気にテンションが底辺へ落ちた。

「PS5ダ！」

「オマエ ドコニ イツテタンダヨ!？」

聞いていたらしく、レ級が北方棲姫を撫でながら、キレ気味に言う。
北方棲姫はレ級に抱きついて離れない。

「ホッポハ メズラシイモノガ ホシカツタンダ。」

「ソ、ソウナノカ…？」

レ級に言われて、集積地棲姫が少し困った顔をしていた。

「マ、マア ホカニモ アル！」

集積地棲姫が袋をガサゴソ漁り、出した。

「…コレハ…？」

「ア、マチガエタ。コレハ メガネ。」

集積地棲姫が、焼けて壊れて割れている眼鏡をしまう。

「ドウシタノ？」

「モヤサレタ。」

「バカンスニ イツテマデ モヤサレタノカ…。」

「タイヘンナノ…。」

集積地棲姫の目が死んでいて、港湾棲姫らは憐れんだ目で見ていた…。

「デ、ホカノ オミヤゲハ…。」

コトリ

「…。」

集積地棲姫はいつか分からない頭蓋k…。

「チガッタ。」

「チヨ、マテー！イマノ ナンダ!?オイ！」

ナチュラルに袋に戻す集積地棲姫にレ級が叫ぶ。北方棲姫と港湾棲姫は一瞬見て、真っ白に固まってしまっている。

「アツタ アツタ。コレダ。…ドウシタ？」

「イマノ ショックデ ハンノウ デキネーヨ…。」

集積地棲姫がヤシの実や貝殻を出す、北方棲姫と港湾棲姫は無反応だ。しばらくして…。

「…ハツ!?ナニヲ シテイタノカシラ…?」

「オモイダセナイノ…。」

二人は…本能が今の記憶を完全に消し去った。

「アラ、シユウセキチセイキ オカエリナサイ。」

「オカエリナノ！」

「オ、オウ…。」

「ヨホド ショックダツタンダナ…。」

記憶が消し去るところか飛んでいた。無かったことになっていた。

「コレ オミヤゲナノ！」

「ソウダ。スキナノヲ エラベ。」

北方棲姫はどれも欲しいように選んでいて、港湾棲姫がそんな北方

棲姫を見て微笑む。

「コレハ…?」

「ヤシノミダ。アトデ ミンナデ ノンダリ タベタリスル。」

「ノンダリ…タベタリ…。」

北方棲姫が想像した図は読者に任せる。

「スゴイノ…。」

「スゴイヨナ。」

「ホントウニ スゴイノ…。」

「?」

「オオキナ カイナノ。」

北方棲姫が一際大きな貝殻を手を持つ。そして…。

「オネーチャン カワイイノ!」

「ソ、ソウ…?」

北方棲姫が港湾棲姫の髪につけてあげる。港湾棲姫は少し恥じらっていた。

「…コレニ スルワ。ホツポガ エランデクレタカラ。」

港湾棲姫はそれを大切に、壊さないように気をつけて触れる。そこに…。

ガララララ

「フフ…。ハヤアガリハ イイワネ…。」

「アラ、オカエリナサイ。」

防空棲姫が帰ってきた。バイトの早上がりだろう。

「フフ…キタンダア。シユウセキチセイキ。」

「タダイマ。ボウクウセイキ。」

二人が口元を緩ませて言う。

「オミヤゲガ アル。エランデクレ。」

「ヘーエ、オミヤゲ?」

防空棲姫が適当に巻貝を手にとって、耳に当てる。

「コウヤツテ、ムカシノヒトハ ウミノコエヲ キイテイタミタイ…。」

「へ〜。」

防空棲姫が巻貝を耳に当てて目を閉じる。

カサカサ…

「…カサカサ?」

何か異変を感じて、防空棲姫が耳から巻貝を離して、中を見た。

「……。」

コンニチハ

ヤドカリだった。

「…ヒユウ…。」

ドサ…

「ボウクウセイキ!?ボウクウセイキー!」

真つ白に倒れた防空棲姫にレ級が抱える。

「マザッテイタノカ…。アシタ、カエシニ イク。」

「イノチハ タイセツナノ!」

そんな騒いでいる二人を放って、集積地棲姫がヤドカリを水の入っていない水槽に入れた。

「ナンダカ ツカレチャツタ…。フフフ…ヘヤニ モドルカラ…。」

防空棲姫がフラフラして二階へ登る。

「オミヤゲハ オイテオク。ヘヤニ モドツテ、デイリーヲ ヤツテクル。」

集積地棲姫は立ち上がり、部屋を出る。

「ワタシモ センタクモノ ヤラナクチャ…。」

港湾棲姫も庭に干してある洗濯物を取りに行った。

「…ホッポ。」

「?」

三人が行ったあと、気づいたかのようにレ級が北方棲姫に聞いてきた。

「シユウセキチセイキノ ヘヤツテ…。」

「……。」

集積地棲姫が階段を登る音が聞こえる。

「…ニゲルノ。」

「ソウシヨウ。」

二人は一目散に近くの公園へ遊びに行った。外に出た途端、集積地
棲姫の悲鳴が聞こえたが、気にせず走って行った。集積地棲姫 撃
沈。

ちなみに、帰ってきた後（主にレ級が）怒られた。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

玖話 フトルノ

「……。ハラヘツタ。」

集積地棲姫がパソコンをいじっている最中、カロリーメイトの空箱を見てそんなことを呟く。レ級が壊した機材やフィギュアは、断りも無しに番犬代わりに砲台小鬼を設置した集積地棲姫にも責任があると判断され、半々で決着がついたのだ。

(ナニカ タベヨウ。)

そんなことを思い、ドアを開けて1階へ降りる。すると…。

「オネーチャンハ ヤスムノ！」

「デモ…。」

北方棲姫が家事をやり、港湾棲姫に手伝わさないようにしている。

「サラアライカ…。」

皿を洗っている北方棲姫。港湾棲姫の姿は見えない。機材などが壊れた原因は自分にもあると、北方棲姫が言い出し、バイトのできない北方棲姫の代わりに1割ほど港湾棲姫が払ってくれた。だからこそ、北方棲姫はその1割分家事をして、港湾棲姫を休ませようと張り切っているのだ。

「ホッポ、オマエマデ ハラワナクテモ イインダガ…。」

「レキュウト イツシヨニ イタノ。トジコメチャツタノ…。」

北方棲姫はシュンとする。

「キニスナ。ソノキモチダケデモ ウレシイカラ。」

集積地棲姫が北方棲姫の頭を優しく撫でる。

「ソウ…。オネーチャンガ ヤルカラ…。」

港湾棲姫がコタツで言う。

「!？」

「アラ シュウセキチセイキ。ゴハン？」

集積地棲姫は港湾棲姫の体を見て、少し驚いた。そして、凸レンズになっているのではないかと眼鏡を確認して、異常がないと判断…。

「…コウワンセイキ。」

「？」

「スコシ イイニクイガ…。」

「ナニ？」

「…フトツタカ？」

「……。」

集積地棲姫に…いつもパソコンばかりいじって、部屋から出てこない集積地棲姫に言われて、微笑んだまま固まっていた。

「ソソナワケ…。」

「タイジユウケイナラ ダツイジヨダ。」

「……。」

港湾棲姫が急いで脱衣所へ行き、ドキドキしながらも体重計の上に乗ろうとする。

「…ダイジヨウブカ…？」

「ヘーキヨ。ソソナニ カワツテナイシ。」

港湾棲姫が余裕そうに体重計に乗る。

グングングングン…

「ソソナニ…カワツテ…ナイ…シ…。」

「……。」

「オネーチャン！ハヤク イクノ！」

「ホッポ…マツテ…。」

北方棲姫が河原の土手の上を走り、港湾棲姫が後を追う。

（ソソナニ…タイリヨク…ナカツタツケ…？）

数分走っただけで息切れハアハアな港湾棲姫。

「オソイゾ。サキニ イク。」

「!？」

いつも引きこもっている集積地棲姫に抜かされて、驚愕する港湾棲姫。そして、負けじとスピードを上げた。

「……。」

集積地棲姫に追いつかない。だが一つ、そんな中で集積地棲姫たちに勝るものがあった。

ユツサユツサ

「……。」

「ハア…ハア…。」

たわわに実った大きな胸だ。走れば走るほど、振動で大きく揺れる。集積地棲姫は恨んだような、羨ましさたつぷりの目でそれを見ていた。

「ひい…ひい…。」

「しっかりとしてください、司令官。まだ十分しか走ってませんよ。」
道の先からこちらへ走ってくる人影が…。

「テイトクナノ？」

「あつ、その声はほっぽちゃん。」

「ぜえ…ぜえ…。」

走っていたのは艦娘と提督だ。提督がもうぜえぜえ息を切らして、艦娘がその背中を撫でてあげる。

「長良…速すぎ…。」

「普段机に座ってばかりいて運動しないから…。」

提督と長良が話していると…。

「ハア…ハア…テイトク…？」

「あつ、その声は港湾s…。」

提督は港湾棲姫を見て、少し戸惑った顔をした。

「…なんか、全体的に丸くなりました？」

「アナタモ…。」

提督も全体的に丸くなっていた。

「コタツニ ハイッテ、カジヲ ヤツテナカツタカラナ。」

「こつちの提督はベッドの上でご飯食べては寝てを繰り返していたから…。」

「春は太りやすい季節なのだな…。」

「ポカポカシテ キモチガイイカラ…。」

「フトルノ！」

それぞれが悩みです。

「あつ！司令官！休んじやダメです！」

「コウワンセイキモ ヤスムナ。」

二人が気がついたかのように、ベンチに座っている二人に言う。
「では、休ませないためにそろそろ行きますね！頑張ってください。
ほら、行きますよ司令官。」

「ひい。」

「ソツチモ ガンバレヨ。」

艦娘と提督が走って行った。

「コウワンセイキ。」

「…ワカッタ…。」

港湾棲姫も走った。しかし…。

「へッテナイ！」

「ウンドウガ タリナイノカ…？」

体重が減ってない。

「モウ オテアゲネ…。」

港湾棲姫がガツカリしたところに…。

「ハジケロ キンニク！トビチレ アセ！コレゾ ザ・ニクタイハ
センカンセイキヨ。」

「…センカンセイキ！…。」

ムツキムキの艦装を背後に引き連れて、戦艦棲姫がやってきた。

「アナタガ ヤセタイト キイタカラ、レクチャーヲ シニキタノ
ヨ。」

「センカンセイキ…。」

港湾棲姫は戦艦棲姫を崇める目で見た。

「コノ ギソウガ オシエルワ。」

戦艦棲姫は自身の艦装である筋肉ムキムキマンにバトンタッチす
る。

「…。ナルホドネ。マズハ ショクジセイゲン ミタイネ。」

「…アナタニ オシエテ、ソレヲ イウノネ…。」

艦装が戦艦棲姫に耳打ちして、戦艦棲姫がレクチャーする。

「…。ツギ…。」

「チョットマテ。」

「？」

「ソノ ギソウガ チヨクセツ ハナセバ イインジヤナイカ？」

集積地棲姫が言うところ。。。

「アア、コノコ ウチキデ。。。」

「ウチキ!? ソノ タイケイデ!？」

ムキムキ艷装は恥ずかしがり屋の内気らしい。艷装は後ろ頭をかいていた。

「ダカラ、ハナサナクテ。ソツチノ ギソウモ ハナサナイデシヨウ？」

「…ハナセルコト ジタイ イマ シツタゾ…。テ、コトハ ギソウハ ハズカシガリヤ ナノカ。。。」

「カイガイノ シブノ ギソウハ ハナスミタイ。」

「サスガニ ブンカガ チガウノカ…。アツ、ソウオモツテミレバコウワンナツキニ アツタナ。」

「イトコノ オネエサンニ!？」

集積地棲姫が港湾夏姫に会ったと言い、港湾棲姫が驚く。

「メチャクチャ ヤサシカッタ…。イトコヲ オネガイツテ。。。」

「オネエサン。。。」

港湾棲姫が港湾夏姫の顔を思い浮かべる。微笑んだ顔だ。

「…ソウ オモツテミレバ、ナツニ ショウタイ サレテイタツケ…。
…コノタイケイデ イケナイ…。ガンバル！」

港湾棲姫が痩せる気になり、必死に努力した。そして…。

「…ネエ、コウワンセイキ。。。」

「…ナニ。。。」

「…ソウ、キラ オトスナ。。。」

「ウルサイ。。。」

「オネーチャン。。。」

港湾棲姫が部屋の隅で拗ねている。結局、体重は減らなかつたのだ。

ピンポーン

「アツ、ダレカ キタミタイ…。」

「…ホツポガ デルノ。」

拗ねた港湾棲姫の代わりに北方棲姫が玄関へ行く。

ガララララ

「ダレナノ?」

「ホツポチャン ヒサシブリ。」

「ゴトウオキ オネエサン!」

隣に住む五島沖海底姫が訪ねてきたのだ。

「コウワンセイキハ?」

「スネテルノ…。」

「スネテル?」

北方棲姫が家にながらせて、五島沖海底姫がついてくる。

「アツ、ゴトウオキカイテイキサン。コンニチハ。」

「コンニチハ。」

「コンニチハ。センカンセイキ、シュウセキチセイキ。」

五島沖海底姫が港湾棲姫の隣に来る。

「ドウシタノ?」

「…。」

港湾棲姫が耳打ちする。

「エ?フトツタ?ソレダケ?」

「…ウン…。」

「ヤセナイ?ドレダケ ウンドウシテモ?」

「ウン…。」

「ソウ…。コツチキテ。」

「?」

五島沖海底姫が港湾棲姫を連れて行く。そして、10分もしないうち…。

「タダイマ ホツポ。」

「ヤセテル!」

「ドウヤツテ…。」

港湾棲姫が痩せている。

「ドウヤツテ…。」

戦艦棲姫が聞くと…。

「ドウヤツテ デシヨウ。フフフ。」

五島沖海底姫は悪戯な笑みを浮かべて返した。

(マア、コノ ホウホウハ コウワンセイキニシカ イミナイト オモウシ。)

五島沖海底姫が心の中で思う。そこに…。

「タダイマー…。ツカレタ…。」

「アツ、レキユウナノ！」

レ級の帰還だ。

「ドウシタ？コンナニ アツマツテ。」

「カクカクシカジカ…。」

レ級に戦艦棲姫が話す。

「ヤセル？ソナン カンタンジャネーカ。」

「エ？」

「ホツポニ カツコワルイトコロヲ ミセテモイイノカ？ツテ、イエ

バ…。シヌキデ ヤセルゾ。」

「アア…。」

「ホツポノコト ダイスキダカラ。」

集積地棲姫と戦艦棲姫が納得した。五島沖海底姫は分かっていたのだ。

「キョウハ チンジュフヘ アソビニ イクノ！」

「ホツポ、ハシルト アブナイ。」

港湾棲姫と北方棲姫が鎮守府への道のりを歩く。すると…。

「ほ、本当にこんな方法で痩せるのですか…!？」

「やってくれ！香取！遠慮はいらん！何をしても、体重がへらなかつた！ネットによると、これも効果があるらしい！」

「で、では…。」

「？」

鎮守府から声が聞こえて、門から港湾棲姫が覗く。

「悲鳴をあげなさい！豚のような！」

「ぶひひひひひ！」

「……。」

港湾棲姫は驚愕した顔をした。そして、北方棲姫の方を向き直る。

「…ホッポ。」

「ドウシタノ？」

「テイトク、イソガシイミタイダカラ マタコンド イキマシヨウ。」

港湾棲姫は満面の笑みで言った。

「デモ、ヒメイガ…。」

「マタコンド、イキマシヨウ。」

笑みを崩さずに言う。

「ワ、ワカツタノ…。」

（ナンカ コワイノ…。）

北方棲姫はそれに従い、港湾棲姫たちは帰って行った。

ちなみに、提督の体重が減らない理由は筋肉だったと知るのは後日であり、港湾棲姫らから半径5 m以内に来ることを禁止されたのだった。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

拾話 演習ヲ観ルノ？

「フ、フギヤアアアア!!」

「!!?!」

ここは、『深海棲艦 五島支部』と言う家…ゴホン、支部。その支部に悲鳴がこえました。

「ダ、大丈夫!?!」

「悲鳴ガ 聞コエタノ!」

「集積地棲姫、大丈夫カ?」

たまたま家にいた港湾棲姫、北方棲姫、レ級が心配してとんできた。集積地棲姫が階段の下で膝を押さえて悶絶していた。

「大丈夫…?」

港湾棲姫が覗き込むように、心配して聞く。

「…カ、階段ノ 手スリ…アルダロ…?」

「ウ、ウン。」

「急イデ 下ニ 降りヨウトシタラ…端デ…ブツケタ…!」

「アア…。」

港湾棲姫の顔はなんと、心配して損した顔になった。

「コレハ、嫌ナ日ノ 前兆…!」

「イヤイヤ、不注意ダロ…。」

「イヤ、コンナ日ハ 前ニモ アツタ!アレハ、少シ 前ノコトダ…。」

「アツ、コレ 回想アルノカ…。」

「イヤ、大体ハ 省ク。」

「省クンカーイ。」

「コンナ日ハ 大抵燃ヤサレル日ダ…。」

「イツモダロ。」

平然と返すレ級。

「5年前ノ 冬モ…(ギヤアアアア!!熱イイイイ!!)、4年前ノ 夏モ…(ギヤアアア!!集メタ 物資ガ…!)、3年前ノ 秋モ…(ギヤアアア!燃エルウウ!!)、一昨年ノ 冬モ…(ギヤア!燃エテシマウ…!)、去年ノ 夏モ…(ギヤア…!)」

「イツモジヤネーカ！ソレニ、ソレヲ イチイチ 覚エテイル 才前 怖イゾ…。」

集積地棲姫がトラウマを思い出して、レ級たちがなんとも言えない顔をした。

「トニカク！断言スル！今日ハ 嫌ナ日ダ！」

「痛イノ 痛イノ、才空ニ 飛ンデクノ！」

「アア、癒サレル…。」

「胸キュン 不可避…。」

「聞ケ!!」

北方棲姫が集積地棲姫の膝を撫でて飛んでゆくようにして、港湾棲姫とレ級が胸キュンする。集積地棲姫は北方棲姫にそうしてもらえて内心とても嬉しいが(ぎゅーってしたいくらい)、聞かない二人に怒鳴った。そこに…。

ピンポーン

「ハイ？」

チャイムが鳴って、港湾棲姫が玄関へ行く。

ガララララ

「こんにちは！」

「アラ、コンニチハ。」

艦娘がいた。

「今日ハ どうシタノ？」

「本日は、司令官からの頼み事を…。」

「何故、アナタガ？」

「司令官は今とても忙しくて…。あつ、その忙しさと関係するお話です。」

「？」

港湾棲姫はとりあえず、その艦娘を居間へあがらせてお茶を用意する。

「忙シイツテ、何ガ？」

「えと…。実は、今週の日曜日に公開演習があるみたいで…。」

「公開演習？テ、日曜日ハ 明後日…。」

「はい…。国のお偉いさん方や一般の優しい方々が視察しに来るんです。」

「へえ。」

港湾棲姫は興味深そうに聞く。

「そこで、折り入って相談が…。」

「…マサカ、八百長ヲ…。」

「いえいえ！違います！第一、演習ですので敵はいません。」

「ソウ…。ナラ、相談ツテ？」

「その…受け付けや中の屋台をやってくれませんか…？」

「…受け付け…？屋台…？」

「はい…。司令官が演習のことを忘れていて、他の子たちに休みを与えてしまつて、鎮守府に最低限の艦娘しかいなくて…。」

「休ミヲ 貰ツタカラツテ、何処ニモ 行クトコロ ナクナイ？此処

田舎ダシ…。」

「あつ、皆んなで旅行です。」

「旅行…。…エ？デモ、アナタハ…。」

「お留守番ですが何か？」

「イ、イエ…。」

港湾棲姫が改めて艦娘の顔を見ると、その笑顔に闇を感じた。

「鎮守府に最低限の艦娘しかいなくて…。演習に参加する私たちもまたまで…。あつ、それと監視カメラも壊れてしまったので、その警備も…。それと、案内役も…。マスコットキャラクターの中の人も…。」

「側カラ 見タラ 乗ツ取ラレテイルト 勘違イサレルワヨ…。」

艦娘の話に半ば呆れながらも聞く。

「司令官は今急いでプログラムや説明の紙をなるべく手抜きとバレないように書いています。それと、私たちも今急いで練習をしています。」

「大変ネ…。ハア…仕方ナイ…。手伝ツテアゲル。」

「ありがとうございます！これでもっと頑張れます！」

「何時カラ？」

「えつと…朝の10時ごろに始まるので、9時にはもう…。それと、ほっぼちゃんにはキツイと思いますので、お留守番という形で…。」
「ワカッタ。ソレト、コレハ 貸シニ シテアゲルカラ、今度必ず 返シテネ。」

「はい！」

「気ヲツケテ 帰ツテ。」

艦娘は喜んで鎮守府に戻って行った。

「…ヤツパリ 嫌ナ日ダ…。」

ちなみに日曜日、集積地棲姫はバイトの休みである。

「あつ、おはようございますー！」

「オハヨウ。」

港湾棲姫らが鎮守府に到着する。

「ほっぼちゃんに事情は…。」

「ホツポハ 寝テイタカラ、書キ置キヲ 残シテ 来タ。」

「良かったです。ところで、何故集積地棲姫さんだけ普通の格好なんですか？皆さんは普通の人のように変装しているのに…。」

「ワカラン…。伝エラレテイナイ…。トイウカ、帰りタイ…。」

「デモ、手伝ツテモラワナイト…。」

「イヤイヤ、顔合ワセラレナイ、一人ガ イイ、話スノ 苦手ダ。何モ

出来ナイ。」

集積地棲姫が当然のように言うのが不味かった…。

「ソウ言ウト 思ツテイタカラ 大丈夫。」

「？」

スポン

「!?!」

「集積地棲姫ハ、中ノ人ヲ ヤツテモラウ。」

問答無用でその衣装に着替えさせられる集積地棲姫。

『アツツ!!燃エル!』

「燃エナイ。」

着ぐるみを被った集積地棲姫がたまらずに声を上げる。例え気温

が春でも、中は暑い。

『イヤ、普通二暑イ…。』

「顔合ワサナクテモ イイシ、一人ニ ナレルシ、話サナクテモ イイ。」

『…ソウダガ…。…アツ、モシカシテ 変装ノコト 伝エナカッタノモ…。』

「ナンノコトカシラ。」

港湾棲姫がしれっとした。集積地棲姫がブツブツ言うが、気にもしない。

「レ級ハ、案内役ヲ 頼ムワ。」

「任セロ。」

「防空棲姫ハ 屋台ヲ 才願イ。」

「フフ、任セナサイ。…港湾棲姫ハ？」

「艦載機ヲ 使ツテ、警備。」

港湾棲姫が艦載機を出す。

『メチャクチャ 暑イ…。死ヌ…。』

「皆ンナ、後ハ 頑張ツテ。」

「ン…。」

北方棲姫が丁度その頃起床した。

「今日ハ 晴レテルノ…。」

北方棲姫が朝の日課である、ガラス戸を開けて背伸びをしようとしたら…。

ビュウウウウ

「ウツ…。」

ガラス戸を開けた途端に突風が入り、目にゴミが入ってしまった北方棲姫。

「ウ…。ゴミ テキ！」

北方棲姫がゴミを取り除き、空を見た。

「…。紙ガ 飛ンデルノ…。」

空に紙が飛んでいる。それは港湾棲姫の書き置きだった…。突風

で飛ばされ、目を擦っている間に飛んで行ってしまったのだろうか…。
「オネーチャン?」

そして、港湾棲姫を探しに家中（2階を除く）を搜索した。

ピンポーン

『ハイ。』

五島沖海底姫の家のインターホンが鳴る。

「グスツ…。」

『…。』

ガチャ

「ドウシタノ? ホツポチャン…。」

「オネーチャンガ イナイノ…。 出テ行ツチャツタノ…。」

「出テ行ツタ!」

「キット、ホツポガ 我儘ヲ 言ウカラ…。」

「ソナコトナイワ。ホツポチャン、イイ子ダモノ。オネーチャン、幸セノハズヨ。」

「ソウナノ…?」

「ウン。キット、近クニ イルワヨ。探シニ 行コウ?」

「ウン!」

北方棲姫と五島沖海底姫が手を繋いで、歩いて行く。

「鎮守府ノ イベントナノ?」

鎮守府で公開演習を目の当たりにする二人。

「ココニ イルカモ シレナイワネ。」

五島沖海底姫と北方棲姫が人混みに紛れながら入る。

「ハグレナイヨウニ シナイト…。…アレ?」

手を繋ごうとしたら、北方棲姫がいなかった。

「ホツポチャン…?」

サー…

五島沖海底姫の顔から血の気が失せた。

「大元帥様、こちらで(ぎ)います。」

「うむ。」

大元帥到着。そして、門へ行く。

「オ、オハヨウゴザイマス…。コチラハ 案内役ダ。地図ハ コレダ。」

「う、うむ。」

案内役の変装したレ級に気づかない大元帥。

（丁寧にお辞儀、少し恥ずかしいのか、戸惑っているけど挨拶をしつかりしている…。自身の役割をまず最初に伝えて、地図を渡してくれるのも良いな。）

大元帥はそんなことを思いながら、中に入った。

「人ガ 沢山イルノ…。」

人混みを縫うように進んで行く北方棲姫。そこに…。

ドンツ！

「ワプ…。」

「おや、大丈夫かい？」

「ゴメンナサイナノ…。」

おじさんに当たり、謝る北方棲姫。

「…見たところ保護者がいないようだけど…。君一人で来たの？」

「ウン…。」

「二人は危ないよ。…後で鎮守府の者に話を話すか…。でも、多分演習を観に来たのだよな…。一般に公開されることも滅多にない…。」

親は何かしらの事情で来れなかったと見るべきか…。」

おじさんが呟いた後…。

「演習を観てから、鎮守府の人に話を話そうか。」

「？」

（演習ヲ 観ルノ…？デモ、他ニ 人イナイノ…。）

北方棲姫も考え…。

「ウン。」

北方棲姫はおじさんに連れられて、何やら大層な観客席に行く。

「大元帥様、こちらでございませす。」

「うむ。あと、子供用の椅子も頼む。」
「御意。」

(大元帥：？階級分カラナイノ。。。)
北方棲姫が子供用の椅子に座った。

「屋台疲レター。。。」

「案内役モ 意外ト 疲レタワ。。。」

「フウ。。。」

お昼の休憩。深海棲姫たちが鎮守府の裏で休む。

『。。。』

「アラ、集積地積姫。休憩ダカラ、脱イデモ イイワヨ。」

「ヤツテラレルカ!!!」

秒速で脱ぎ捨てる集積地棲姫。

「暑イワ!!燃エルワ!!死ヌワ!!」

汗がものすごい出ていた。

「水。」

「。。。」

ぐくぐく

集積地棲姫がペットボトルのスポーツドリンクをすぐに飲み干す。

「プハー!」

「ソノ調子デ 午後モ。。。」

「鬼カ!」

「違ウ。姫。。。」

「ソウイウ意味ジヤナイ!」

集積地棲姫がギャーギャー騒ぐが、有無を言わさないつもりだ。そこへ。。。

「アッ!イター!」

「五島沖海底姫サン?」

五島沖海底姫が慌てて来る。

「ホッポチャンガ イナクテ。。。」

「...エ?」

五島沖海底姫が訳を話す。

「ドウシテ 連レテ来タノ!？」

「アナタガ イナイツテ 泣イテ来タカラヨ！」

「デモ、書キ置キガ…。」

そこに…。

ピトリ

「？」

港湾棲姫の目に紙が当たった。

「……。」

書き置き紙の紙だった。そして、風で飛ばされたことを理解した。

「トニカク、ポツポツ 探サナイト…。」

港湾棲姫たちが変装しながらも、集積地棲姫は変装するものが無い
ため、着ぐるみを積極的に被って探しに行く。

「いい？今日は司令官の上官である大元帥が来ています。こんな辺境
の地まで態々足を運んでもらいましたので、絶対に失敗は許されませ
ん！気を引き締めて行きましょう！」

艦娘たちが控え室で気合を入れる。

『次に、艦娘からの公開演習をはじめます。』

提督からの放送が入り、艦娘たちが海に出撃する。

『まずは…。』

このように、プログラムは淡々と問題なく進行。かと思ったが…。

(大元帥も観ている…。 え!? ほっぽちゃん!?)

大元帥の観客席を見た途端、北方棲姫の姿があるではないか。しか
も、隣に座っている。

(なんで…? どういう…。)

『…撃て!!』

「あ、はいー！」

北方棲姫を見つけた艦娘が遅れて発砲、しかも的に命中せず。
ざわざわ…

『…次は…。』

失敗してもプログラムは進行。その艦娘は顔が青ざめていた。

「失敗は誰にでもあるクマー！次頑張るクマー！」

「そうにや。次があるにや。」

「ちよつと緊張しすぎだったんじやない？」

しかし、仲間からすぐに声援を送られた。もちろん、放送されている。

「ありがとうございます……！」

艦娘が感謝の言葉を述べる。これはただの元気付けではない。仲間同士で支え合っているというアピールにも繋がるのだ。そんな感じで淡々と演習は進行。そして終わる。

「大元帥殿、あの時外した者は……。」

「……その瞬間、何かに驚いて集中が途切れた。これは練度不足ではない。」

「はっ！」

(難シイ 話ヲシテイルノ……)

原因が自身だと知らない北方棲姫。そんなことを言っていると演習が終わった。

「演習が終わったね。なら、鎮守府の人のところに行こうか。」

「ウン。」

おじさんが北方棲姫を案内所へ連れて行く。

「おや……？いないようだな……。」

「？」

案内所には誰もいない。レ級は今必死に北方棲姫を搜索中だ。

「仕方ない……。鎮守府の提督の所に行くか。」

「ナノ？」

次は、提督室へ直々に行く。

コンコン

『今忙しいので少しお待ちください。』

「待てん。」

ガチャ

「うおっ!? 問答無用で入ってきた! て、大元帥殿!」
提督が慌てて敬礼をする。

「いい。それより、案内所に誰もいないんだが…。」

「え、誰も…。て、ほっぽ…あ…。」

「ほっぽ?」

「い、いえ! なんでもありません!」

「まさか、北方棲姫…。敵ならば…。」

大元帥の顔の雲行きが怪しくなっていた時に…。

バアン!

「ココニ イタ! 心配シタゾ!!」

ぎゅー

「苦シイノ…。」

「無事デ 良カッタ…。」

レ級が心配した分だけ抱きついた。

「…君は案内所の…。」

「ア…。」

レ級の正体がバレた。

「ふむ…。」

大元帥は今のを見て、少し考えた。

「…案内役はレ級だったのか…。」

「…レ、レキュウ…? ワカラナイナ…。」

「変装がもう出来てないから、今更無理だよ…。」

レ級がとぼけようとしたが、ダメだった。

「ふむ…。案内役が君なら、問題はないか。」

「…え(エ)?」

「いや、深海棲艦が侵入して民間人に危害を加えるのだと思ってな。案内役であつたレ級を見る限り、そんな気はない。なら、態々追い出す必要も、倒す必要もない訳だ。」

大元帥の顔は少しスッキリしていた。

「…我々が目指すのは深海棲艦との和解…。こうして仲良く出来ているのなら、問題はないだろう。」

「大元帥殿……！」

「オオ……」

大元帥がカツコよく言い、提督と北方棲姫が反応した。そこに……

「ホッポ！」

「ホッポチャン！」

「ホッポ！」

港湾棲姫たちがなだれ込むように入ってきた。

「おーおー……。まさか、こんななにしたとは予想外……」

「……ですよね……」

提督と大元帥は北方棲姫に抱きついていている港湾棲姫たちを見て、少し微妙な顔をした。しかし北方棲姫を見つけた反応は、子供を見つけた母親と同じで、とても和み、口元が緩んだ。

「では、失礼する。」

「はい。またいらしてください。」

「それでは。」

夕方、大元帥は用意された車に乗って空港へ行く。

「……」

大元帥は途中、木々の中で手を振る北方棲姫を見つけた。隣には港湾棲姫もいる。大元帥は可愛いものを見るような顔をして、車の窓を開けて手を振りかえした。

ちなみに、提督は後で高額なバイト代を請求されたのはまた別の機会に……

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

拾壹話 頑張り屋サンノ提督

「スー…スー…。」

浜辺のパラソルからすこやかな寝息が聞こえる。デツキチエアでくつろぎながら、寝ている者がいた。パラソルの影で肌の焼ける心配もない。

「コンナ所デ 寝テイタラ、マタ 西日デ 痛い思イヲ シマスヨ。」
「ん…。」

起こしたのは、淡いピンク色のツインテールに片目隠れ、そして黒いビキニ姿というなかなかセクシーな出で立ちで扇情的な肉体を誇る南方棲戦姫だ。鉤爪のような手の艷装をしていないため、素手で揺さぶつてきた。

「オハヨウ…。」
「オハヨウジャ アリマセン…。」

寝ぼけた優しそうな顔をしているのは港湾夏姫。港湾棲姫の従兄弟に該当する存在で、港湾棲姫にお姉さんと言われている。巨大な花が乗った白い大きな麦わら帽子を被っており、服は胸元が露出した白いワンピースを着ている。青色の瞳に、白い肌に白く長い髪を持っており、左目は髪がかかって隠れていて、体つきは豊満な美しい女性である。その微笑み顔は見るものを癒してしまいそうだ。

「集積地棲姫サンガ 帰ッテカラ、ズツト 気怠ソウヨ。」
「ソウカシラー…？」
「マダ 寝ボケテル…。」

港湾夏姫が眠そうに欠伸をして、涙を指で軽く拭う。

「あら、また寝てるの？寝坊助さん。」

「提督サン…。」
「やつ。元気にしとるか？」

すると、女提督が砂浜を歩いて来た。隣には艦娘もいる。

「今日は戦いには来てないわ。出撃組が疲労しているから、暇潰しにゲームを持って来たのよ。」

「…？」

港湾夏姫が眠そうな顔をして、そのゲームを見る。

『『人生ゲーム』って言うボードゲーム?を。』

「ここらじや品揃えはアレやったから、自作やけど。」

艦娘がそれを見せる。

「やらない?」

「ンー…。眠イカラ…。」

港湾夏姫は欠伸をして言う。

「またまた、そんなことを言つて…。前はすごく気性が荒かったじゃない。」

「安眠ヲ妨害スルカラヨ…。」

「まあ、そんな時はしつこくして悪かったなあ…。酔っ払つてた隼鷹は、提督から雷落ちたから許してなく?」

「…。」

港湾夏姫が身体を起こす。

「じゃ、早速やろうか。」

「ヤルツテ 言ツテナイケド…。」

「始めるでく。」

提督たちは有無を言わずにやる。

「提督からや。」

「わかった。」

「ン…。」

「ナニヲ シテイルノ?」

その後、南方棲戦姫も混ざった。

「3…。夜戦ノシスギデ 眠イ…。一回休ミ…。」

「あなた、ここでも寝るのね…。」

港湾夏姫がほぼ全て、眠り系の一回休みだ。

「それに比べて私は…。…4…。男を逃して嫁き遅れ…一回休み…うっさいわ!!!」

提督がカードを床に叩きつけた。先ほどからずっと、こんな感じのほぼ男関係のマスだ。しかも、不幸系なものばかり…。

「えーつと？2は…。ズイズイを踊る？なんやこれ…。こうか？」
「…急二歌ウ…？加賀岬…？」

もうカオスに近くなってきた…。

「あとは提督と港湾夏姫だけやで〜。」

「早く。」

「うっさいわね！今不幸マスで運気が下がっているんだから…。」

「4…。死ヌホド 寝カセテ〜。…一回休ミ。」

先程から、女提督には不幸系や、日常の婚活系の災難に（現実でも）悩んでいて、港湾夏姫は寝てばかりだ。そして…。

「よし！上がり！結婚は出来なかつたけど…！」

その提督の顔は嬉しそうだが、どこか…。…………。

「最下位はゴールしても、なんもお金もらえんよ。」

「今まで休んでばかりだったから、お金も貯まってないし…。」

二人が港湾夏姫の所持金を見て言う。

「…株チャレンジ？」

すると、初めて普通のマスに止まった港湾夏姫。

「ルーレットをすれば、株券とお金を交換出来るってやつ。艦娘、ルーレット回してあげて。」

「ほい。」

艦娘がルーレットを回したら…。

「…オール10や…。」

「え!?!」

信じられない顔をした艦娘。

「…うちの所持金とほぼ同じになつとるで…。」

「てか！保険も全部使つてない！寝てばかりいたから…！」

結果、すぐにゴール出来た港湾夏姫。所持金はおかしいほどあつた。

「コツコツ貯めたのに…。所持金はあるけど…。男に逃げられて…。」

「て、提督!?!暗く考えたらアウトやで！ポジティブシンキングや！」

泣きそうな女提督に、すかさずフォローする艦娘。

「ソウヨ。私タチハ 結婚シタケド、ソノ分 人生ヲ 満喫デキルホド 才金ガ 貯マツテイマス…。」

「愛がない！愛はお金で買えない！」

女提督はより深く傷ついた。

「第一、こんな辺境の地で男を探すなんて無理だし…。まだ私だつて若いもん…。頑張れるもん…。日本人の文化じゃないから、モテないだけだもん…。本気を出せば結婚できるもん…。」

女提督は少し離れたところで、座りながら呟いている。三十路まであと2年…。南方棲戦姫は憐れんだ目をして見ていた。

「ああ…。スイツチ入つてしもうた…。提督はああなると、しばらく立ち直れないんや…。」

艦娘が走つて行き、女提督を必死にフォローする。

「提督もまだ若いって！全然余裕や！日本に帰れば、声かけられること間違いないって！収入もいいし！男が放つておくはずがないって！」

「ほんと…？」

「…：…：…：ほんとや！」

「なんか間があつた！どうせ、貧相な身体つきですよ…：私は…。」

「アツ、モット イジケタ。」

「ナカシチャ ダメデスヨ。」

「泣かす気はなかつたんや！」

女提督がいじけて、港湾夏姫らに艦娘が責められた。

「貧相な体つきって言ったって、うちほどじゃない。提督も、きつと需要があるはずやで？」

艦娘が提督の隣で慰める。

「ソウデスヨ。隣ヲ 見ナサイ。提督ヨリ ヒドイノガ イマス。」

「うっさいわ！」

南方棲戦姫が言い、艦娘が怒鳴る。

「てか、この中じゃうちが一番貧相やし…。子供っぽいのもうちやし…。うち、軽空母なんやで…。なのになんなん…。」

「アツ、コツチモ スイツチガ…。」

艦娘までいじけた。

「モウ…。仕方ナイワネ。」

港湾夏姫が二人の近くに行き、同じ目線にしゃがむ。

「提督。」

「なに：：？」

「大丈夫。」

「なにが：：？」

「嫁グ努力ヲ シテイル 頑張り屋サンノ 提督ハ、キット結婚デキルワ。陰ナガラ 努力ヲ シテイル 提督ノ 良サガ 分カル人ハ 絶対ニ イル。モシ、ソレニ 氣ヅカナイナラ、男ガ 見ル目ノナイダケ。本当ノ 姿ヲ 見レナイ 男ナンカト、長ガ続キシナイワヨ。最低ナ男ト 一緒ニイテ 楽シイワケガ ナイワ。」

「そう：：？」

「ウン。提督ハ 頑張ッテイテ 可愛イカラ。」

「うん…。ありがとう。」

女提督が元気になる。

「アナタモ、体型ガ 氣ニナルノハ 仕方ナイワ。デモ、悩ンデモワラナイ。ダツタラ、違ウ所ノ 良サヲ 活カシマシヨウ。第一、胸ガ ナンナノヨ。大キイト 良イツテ、誰ガ 決メタノ？ソナナサナ問題ヲ 氣ニセス 自分ラシク 生キル子ガ モテルノヨ。」

「…せやけど…説得力がないって言うか…。」

艦娘が港湾夏姫の胸を見る。豊満だ。艦娘は変なところにダメー

ジが入った。

「ソコマデ 辛イナラ、戦艦新棲姫ノ 胸ヲ 思イ出シテ。同情スル

クライ 残念ダワ。」

「ホウウ…。何方 残念ナノ：：？」

「ア…来テタノ：：？」

振り向けば戦艦新棲姫。カニが赤く、茹で蟹のようになっていた。

「エエ。デ、何方 残念ナノ？」

「……。」

港湾夏姫はいつもの顔に似合わず、微笑んだまま冷や汗を流してい

た。

「ナルホドネ……。言エナイヨウナ コトナノネ……」

「イ、イイエ……。ソナナ……。ネ……」

「ソナナ……。ナニ？」

戦艦新棲姫の顔が怖い。港湾夏姫は、こういうタイプは苦手のようにだ。

「え、えつと……。強くて残念なくらい羨ましいってこと……」

女提督が見ていられなかったのか、肩を持つてくれる。

「……ソウナノ？」

「エ？エ、エエ……」

「せやでせやで。」

艦娘も頷く。ここで暴れられても困るからだ。

「イヤ、強イナンテ……。ソコマデ 強ク ナイワ。」

戦艦新棲姫はコロっと騙されて、照れる。

「つ、強いよ……うん！」

「せ、せや！深海棲艦の中で一番や！」

「ヨッ！世界一！」

「イヤイヤ……」

戦艦新棲姫の機嫌が良くなり、内心ホツとする面々だったが……。

「港湾夏姫サン。」

「アラ、南方棲戦姫。」

「胸ヲ 大キクスル方法ハ アルソウデス。近クノ ウィーフィス

ポットデ 確認シテ 来マシタ。」

南方棲戦姫が余計なことを言った。その後、どうなったかは知る由もない。

「イイ、嘘ヲ付クト 碌ナコトガ ナイワ。」

「知つとるで……」

「痛い……」

頭にタンコブがある三人は、仲良く正座させられている。

「ツタク、体型ガ ナニヨ。人ハ 心ヨ。」

「せやけど…。気になるつちゅーか…。」

「生マレモツタ 体型ハ 変ワラナイワ。ソレ以外デ 何ヲスルカニ 意味ガアルノヨ。」

戦艦新棲姫が言う。

「…戦艦新棲姫ハ 男ガ 出来タコト…。」

「アン…?」

「イ、イイエ。ナンデモ ナイワ…。」

港湾夏姫が聞いたところ、怖い顔をした。

「ト言ウヨリ、コンナ 辺境ノ 地デ マトモナ 男ハ イナイワ。 提督ハ 有給ヲ 使ツテ 本土ニ 帰リナサイ。コノママ ズツト

ココニ 配属ダト、本當ニ 結婚出来ナイワ。」

「ソウヨ。ココラノ 海域ハ 任せテ、行ツテキナサイ。」

「ソウデス。貴方ノ 幸セモ 考エナイト。」

「なんか深海棲艦がいい人にしか見えない…。てか、本當にいい人だし…。…本當にいいの?」

「もちろんや!うちらも、港湾夏姫らと仲ええしな。提督も、はよええ人探さんと、本當にうちも心配や。」

「そう?」

「二ウン(ええ)。」

「そうかな…。じゃあ、溜まっていた有給使おうかな。一週間くらい、留守にすると思うけど…。」

「十分羽伸バシナサイ。」

「せやせや。休息も大事や。」

「イツテラツシヤイ。」

「う、うん!ありがとう!」

提督は早速、有給の電話を本部に入れに帰った。

「…提督はあんなにかわええのにな。」

「本當、可愛イワ。」

「ドウシテ モテナイノカ 分カリマセン…。」

「…モシ、提督ガ 結婚シタラ、ドウスル?」

「結婚かあ。そこまでは考えとらんかったなあ。ここで暮らすん

「ちやう？」

「ソウカモ シレナイワネ。」

「ダト イイデスネ。」

そんなこんな話をして、ゆるく過ぐす深海棲艦と艦娘。提督は休暇を使つて日本へ帰港するようだ。

深海棲艦も艦娘も、提督の無事や成功を祈つて、仲良く送り出し、鎮守府でどうするか話をして盛り上がったそうだ。

『深海棲艦 ユーマン島支部』は今日も平和です。

拾弍話 オネーチャン大好キナノ!

「皆ンナ…イルワネ…?」

「オウ…」

「ナノ…」

ここは『深海棲艦 五島支部』。様々な深海棲艦が集まって、港湾棲姫の言葉を待っている。

「ツイニ…本部カラノ 命令ガ…」

「二ゴクリ…」

港湾棲姫の緊迫した声音に、皆がドキドキして待つ。

「前々カラ コノ命令ガ 来ルト 思ツテタケド…」

「ツイニ ソウナツタカ…」

「鎮守府トノ 前ノヨウナ 関係ハ 終ワリネ…」

皆が覚悟をしていた顔になる。そもそも、鎮守府と戦っていないことすらおかしい。ついに、鎮守府との戦争が…。

「深海棲艦トシテノ 労働基準ニ 反シテルツテ…」

「ヤハリカ…」

「今 鎮守府ハ イベントニ 備エテ 練度上ゲヲ 続ケテイルカラ …」

起こるはずがない。これはゆるい日常だ。

「コウナツタラ、猫ノ 軍団ヲ 捕マエテ 鎮守府ニ…」

今どこかの提督にゾツとした寒気がした。

「ダカラ、皆ンナ 当分ハ 海域 行ツチャダメ。」

「ワカツタ。」

「オ休ミナノ!」

そして、皆それぞれバイトやら自室に向かったり、遊びに行った。

「暇ネ…。フフ…。」

防空棲姫が部屋でゴロゴロしている最中に眩き、下に降りる。バイトは休みだ。

「ンア? 防空棲姫。」

「集積地棲姫。」

集積地棲姫と鉢合わせた。

「昼 食ウノカ？」

「ソウシヨウカシラ…。ウッフッフ…。」

防空棲姫らは薄ら笑いをしながらキッチンへ行く。誰もいない。

「流石ニ 少シ 早イカ。」

「ミタイネ〜。」

集積地棲姫は冷蔵庫の中を漁るが、自分で作れそうなものがない。

『卵カケゴ飯』ナラ デキルカ。」

集積地棲姫が卵を手にとったが…。

「アソコニ 『シリアル』ガ アルワ。アツハハハハ。」

防空棲姫が棚の上部にある箱を指さす。

「牛乳：アツタカ？…アツタ！」

集積地棲姫は冷蔵庫から牛乳を取り出して、防空棲姫がシリアルの箱をテーブルの上に準備した。皿もスプーンも準備してある。そこに…。

「シユン…。」

シユンとした北方棲姫がトボトボ歩いて来た。

「ホツポ？ドウシタ？」

「ドウシタノ？フフ…。」

集積地棲姫らが声をかける。

「少シ オネーチャンニ 無理ヲ 言ツチャツタノ…。困ラセチャツタノ…。」

「ソウカ…。」

「…。」

北方棲姫を椅子に座らせて、おやつ感覚にシリアルだけを皿に乗せた物を北方棲姫に出す。すぐ近くに、牛乳も置いておいた。

「オトート、欲シイノ…。」

「ブフツ!？」

「ゴホツゴホツ…。」

北方棲姫の呟きで、むせる二人。

「ド、ドウシテ、欲シインダ？」

「ソウネ。」

「オネーチャンニ ナリタイノ…。」

「ナルホドナ。」

北方棲姫から理由を聞きだし、大まか想像ついた。

「ホッポ、オネーチャンツテ 大変ダゾ。イツモ 見テイルダロウ…。」

「ノ…。」

「ソレニ、オネーチャンガ 寂シク ナルワヨ？」

「ナルノ…？」

「…。…ホッポ、オネーチャンハ 好キカ？」

「大好きナノ！」

北方棲姫が自信を持って、当たり前のように言った。

「…ソツカ。ナラ、オネーチャンモ 幸セ者ダナ。ソレト 同ジクライ、オネーチャンモ ホッポノコトガ 好キダ。ダカラ、オトートト 一緒ダト 寂シクナツチャウンダ。」

「ソウヨ。オネーチャンモ ホッポガ 好キダカラネ。アツハハハハ。」

「…本当ナノ？」

「…本当。」

すると、北方棲姫の顔が明るくなった。

「明日、謝ルノ！」

「オウ、ソレガイイ。今ハ食工。」

集積地棲姫と防空棲姫は北方棲姫の頭を撫でながら言った。

少し前

「ナノ〜♪ノン〜♪ナンノノ〜♪」

北方棲姫が鼻歌を、ご機嫌に歌いながら、家の縁側に座って足をぶらぶらする。

「ホッポ、ドウシタノ？」

そこにいたのは洗濯物を干している港湾棲姫。

「オネーチャン。」

「ナーニツ？」

港湾棲姫が手を止めて、北方棲姫の隣に来る。

「オトートガ ホシイノ！」

「……。」

頭どころか、身体全体が真っ白になる港湾棲姫。元々白い身体がさらに真っ白だ。

「ラデオデ 聞イタノ。オトートハ スゴイノ！オネーサンニ ナリタイノ！」

「……。」

状況が全く掴めず、微笑みのまま固まっている港湾棲姫。

「エート……。ソレハ 生き物……？」

「生きテルノ！」

「ホッポ……。」

港湾棲姫がなんとか冷静になり、ゆっくり話す。

「ホッポ……。オトートハ 『コウノトリ』ガ 運ンデ 来ルノ。好キナ人……者同士ガ 一緒ニ 暮ラスト 来テクレルノ。」

港湾棲姫が見本のような答えを言う。が。

「デモ ホッポ、『コウノトリ』ニ 運バレテナイノ……。」

「……。」

北方棲姫の言う通り、深海から彼女たちは来た。コウノトリなどに運ばれるわけがない。

「ン〜♪ツテ、ヨウ。港湾……港湾棲姫？ドウシタ？ソナ顔シテ……。」

レ級が通りかかり、港湾棲姫に声をかけるが……。……なんとも……文章では書けないような、なんとも形容し難い表情をしていた。

「フムフム……。ナルホド……。」

レ級が話を聞く。

「ナラ、任せロ。」

レ級が北方棲姫の隣に座る。

「ホッポ。」

「ノ？」

「オトートハ…。嘘ダ！」

「ノ!!」

「オトートハ 存在シテナイ。」

「ソウダツタノ…。ラヂオノハ 嘘ナノ…。」

「残念ダ…。」

「人間…嘘ツキナノ…。怖イノ…。」

「コラ！レ級！」

北方棲姫が危うく人間不信になりかけた。レ級の頭にタンコブが…。

「ホッポ、オトートハ 存在スルケド…。…今ハ 我慢シテ…？ネ…？」

「ン…。ワカッタノ…。」

「！」

北方棲姫がシュンとしてしまい、リビングへ行ってしまった…。

「…。」

その夜

「才願イ…。」

「いやいやいやいやいや…。ちょっと待ってくださいよ…。昼間、なぜか大量発生した猫と戦って疲れているんですよ…。そんなこと言われてどうしろと…。」

港湾棲姫は北方棲姫の願いを叶えるべく、鎮守府にいた。

「すみません…。それは断ります…。ほっぼちゃんの為にも…！とても惜しいですが…！断ります…！！とても惜しいですが…！！」

「…。」

「…。」

提督は我慢した顔をして言う。あとで艦娘にしばかれても何も言えないだろう…。

翌朝

「ホッポ……。オトートガ 欲シイミタイダケド……。ゴメンナサイ……！」

港湾棲姫が北方棲姫に謝る。

「オトート？」

「エ……？」

「オトート……オトート……。…オトート！思イ出シタノ！」

「思イ……。」

「アレハ モウイイノ。ホッポニハ オネーチャンガ イルノ！大好キナノ！」

「ホッポ……。」

港湾棲姫が嬉しくて涙目になる。

「ソレニ アノ後 オネーチャンガ 元気ナクテ 心配シタノ！悩マセテ ゴメンナサイナノ……。」

北方棲姫が港湾棲姫にちゃんと謝った。

「ホッポ！」

ぎゅ

港湾棲姫は嬉しくて思わず抱きしめた。

北方棲姫にとつて、それは温かく、優しく包み込んでくれるような幸せなハグだった。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

拾参話 深海レンジャー

「フア〜…。」

大きな欠伸をする港湾棲姫。

(イザ、海域ニ 行カナイトナルト、暇ネ…。職業病カシラ…?)

そんなことを思いながら煎餅を食べている。お昼の暇な時間の主婦そのものだ。

「オネーチャン、何ヲ 食ベテルノ？」

「ホッポ。煎餅？ダツケ？前提督カラ 貰ツタヤツ。」

「オネーチャン…。最中モ 食ベナイト…。」

「ソウネ。」

最中を取り出しに行く港湾棲姫。そこに…。

プルルル…

「？ハイ、コチラ 『深海棲艦 五島支部』。」

電話が鳴り出して、港湾棲姫が出る。

「…本部…。…ハイ…。…居マス。…ハイ…。…エ…今…？…ハイ…。…分カツタワ。…ハイ。デハ…。」

港湾棲姫が電話を切った。

「…ハア…。急ガナイト…。」

その後、急いで何かを準備しに行った。

「才留守番、頼ンダワヨ。」

「少シ 行ツテクル。」

港湾棲姫とレ級が玄関にいる。

「少シ、家ヲ 空ケルケド…。…大丈夫？」

港湾棲姫は今残っている集積地棲姫、防空棲姫、北方棲姫を心配する。

「ホッポノコトハ 任せロ。」

「フフ…。オ土産 ヨロシクネ。」

「……。」

「…ホッポ…」

北方棲姫は黙ったままだ。最近、港湾棲姫と一緒に過ごす機会が少なくて、少し拗ねているのだ。

「……。」

「アツ…。」

そして、北方棲姫はリビングへ行ってしまった。

「…帰ッたら、遊ンデヤレヨ。」

「フフ…。ソウネ…。」

二人は言った後、リビングへ慰めに行く。港湾棲姫はテンションだだ下がり、お先真つ暗な顔で行こうとしたが…。

「アツ、行く前ニ トイレ行ッテクル。」

「……。」

レ級がトイレに行き、港湾棲姫は先に行った。

「……。」

港湾棲姫が無表情で海上を走っていると…。

「悪い。待タセタ。」

レ級が追いついた。背中のリュックが不自然に膨らんでいるのは気のせいだろうか…？

「所デ、何デ 行クンダ？」

「…本部カラノ 命令ヨ…。アル日、突然組織ヲ 抜ケ出シタ 深海棲艦ノ 居場所ガ 分カツテ、コノ支部ガ 一番近イカラ 見ニ行ケツテ…。」

「ナルホドナ。」

「…トコロデ、ソノ膨ランダ リュック…。」

港湾棲姫がレ級の背中にある、普段から特に意味のないリュックに触れようとしたら…。

「ブハッ！来チャツタノ！」

「ホッポ!？」

北方棲姫がレ級の背中のリュックから頭を出した。

「レ級！」

「シ、仕方ナカッタンダ…。トイレカラ 出タ途端ニ 泣キツカレテ…。」

「ナ、何ト…！」

港湾棲姫が驚いた。

「ホッポ、ダメジヤナイ！」

「ゴメンナサイナノ…。」

港湾棲姫が姉として…支部のリーダーとして、北方棲姫を叱る。

（マア、ソウダロウナ…。危険ナコトカモ 知レナイノニ ツイテキチャツテ…。ホッポダケジヤナイ…。勝手ニ 連レテキテ…。…反省シナイトナ…。）

レ級が自身を責めた。

「レ級ニ 泣キツクナンテ！」

「ソツチカイ！」

どうやら、怒っているのは自分を差し置いて、レ級に泣きついたことについてらしい。レ級は今の反省を返せと思った。

「…モウ 引キ返セナイシ…。一緒ニ 連レテ行クシカナイナ。」

「オネーチャント レ級ト 旅行ナノ！」

「何嬉シソウニ シテンダヨ。」

レ級は器用に、背中の北方棲姫の頭を撫でる。一方、港湾棲姫はヤキモチを焼いていたが…。

「ココガ 例ノ島ダガ…。」

「イナイワネ。」

「イナイノ…。」

島に到着したが、見る限りだと誰もいない。北方棲姫はレ級のリュックから出ている。

「コウナツタラ、イナイ連絡ダケシテ 本当ニ 旅行ニスルカ。」

レ級はのんびりと島に上陸してリュックから、明らかに物理法則を無視して、デッキチエアを出した。

「ソノリュックノ 中ヲ 見タイワネ…。」

「中ハ 意外ト 広イノ。艦載機ヤ 甲標的ガアルノ。」

デツキチエアとパラソルを人数分展開しているレ級を見て、二人が話した。

「…海…。」

北方棲姫は海の中の砂浜に、足が軽く埋まっているのを見て呟いた。

「…遊ビマシヨウ。ホッポ。」

「ウンー！」

港湾棲姫と北方棲姫は海で遊び、全て設置したレ級はパラソルの中、デツキチエアでくつろぎ、サングラスをかけていた。完全にオフモードだ。

ガサガサ

「……。」

そんな中、森の中でその様子を覗く人影が三人…。

「…！」

「…？」

港湾棲姫がいち早く察して、森をじつと見る。

「…ドウシ…?!」

「ノ…。」

レ級と北方棲姫が森を見て、なんとも言えない顔をした。

……クジラネ…。

……クジラダナ…。

……クジラナノ…。

港湾棲姫たちが隠れきれしていない鯨に注目する。

「ヒヤッヒヤヒヤ…バレタノカナア？」

「ソレハナイワヨオ。」

「アア。バレル訳ガナイ。」

こつちの方を見たままの港湾棲姫たちを見て、話す三人。

……アンモナイトネ…。

……生キタ化石…。

港湾棲姫が思い、レ級が間違った知識の感想を述べる。

「アレ？ホッポ…?!?!」

「♪」

北方棲姫はクジラによじ登っていた。クジラ型の艀装は落ちないかどうか心配していて、少し嫌がっているように見えた。港湾棲姫たちが北方棲姫に、降りるようにジェスチャーをする。

「慌テテルヨウニ 見エルケド…。」

「ヒヤヒヤヒヤ。クジラガ 大キスギルンジャナイ？」

「馬鹿ナ。完璧ニ カモフラージュサレテイル。」

三人は何が起こっているのか分からずに流暢に話している。

ズルツ

「ン！」

北方棲姫が足を踏み外して、落ちそうになった。クジラも港湾棲姫たちもハラハラドキドキで慌てている。

「ヒヤツヒヤヒヤ！変ナ 踊リシテイル！」

「馬鹿ミタイダナ…。」

「ヤツパリ、慌テテナイ？」

そして…。

パツ

「ノー…！」

北方棲姫が落ちて…。

ガツン!!

「ツ?!?!」

クジラの艀装を持った本体の頭にヒット。

「痛クナイノ。アリガトウナノ！」

しかし、北方棲姫にダメージがない。クジラが本体を犠牲にして、北方棲姫をキャッチしたのだ。ちなみに、クジラがキャッチする時、生えている手が本体の頭にクリーンヒットしたのだ。

「オオ…！」

頭を押さえてうずくまる本体。

「ヒヤ!?バレター！」

「沢山人ガ イルノ…。」

北方棲姫が、頭を抱えている者、丸い巨大タコ焼き、アンモナイト

の艤装をした者を見る。

(ホッポ、挨拶ハ 大事ヨ。)

「挨拶ナノ…。」

港湾棲姫にいつも言われていることを思い出す。

「コンニチハ！ホッポナノ！」

「エ？ア、ウン。コンニチハ…。」

「コンニチハ…。」

北方棲姫の挨拶に、戸惑う二人。一方、まだ頭を抱えている。

「ホッポ！大丈夫!？」

港湾登場。

「クジラサンガ 助ケテクレタノ！」

「ソウナノ？アリガトウ。クジラサン。」

港湾棲姫がクジラを傷つけないように撫でる。

「トコロデ、貴方達ガ 例ノ…。」

「ゲ！本部ノ 差金カ!？」

「裏切り者ハ 殺サレル…。」

怯える二人に、北方棲姫が首を傾げる。

「エ…。オネーチャン…。殺シチャウノ…?？」

「マジカヨ…。ソノタメニ 呼ンダノカヨ…。最低ダナ…。ホッポヲ

置イテキタノモ…。」

「オネーチャン 嫌い！」

北方棲姫たちが港湾棲姫にプイツとそっぽを向いてしまう。

「違ウ！違ウワ！ダカラ、嫌イニ ナラナイデ！ホッポ！レ級！誤解

ヨ！話ヲ 聞イテエエ!!」

港湾棲姫がすぎるように二人に叫び、何に対してわからない許しを懇願した。その様子を見ていた2人にとっての、港湾棲姫の威厳は完全になくなった。

「本部ガ 心配シテタノ?？」

「エエ。イキナリ 抜ケ出シタカラ…。脅サレテ イルンジャナイ カツテ。」

「ソウダツタンダア！」

「アンツイオ沖棲姫ガ 殺サレルナンテ 言ウカラ…。」

「ヒヤヒヤ。バタバア沖棲姫ガ アンナ映画 見セルカラ…。」

港湾棲姫が事情を全て話して、丸く収まる。

「コレデ ワカツタデシヨ？ネ？ホッポ…。」

「…。」

北方棲姫のまだ疑いの目。

「私ハ モウ 破滅ネ…。」

「大袈裟大袈裟。」

レ級が落ち込んだ港湾棲姫の背中をさすってあげる。

「本当ニ 痛カツタ…。」

「アツ、ヤット来タ…。」

本体が立ち上がる。そして、持っていた艦装の棒でペシペシとクジラを叩いた後だ。クジラにダメージは0だ。

「トコロデ、コノ者たちハ…？」

ジー

「ナ、ナンドヨ？」

北方棲姫が本体を見る。

「コンニチハ！ホッポナノ！」

「オ…オウ…。」

北方棲姫が小さな手を出して、本体がそれを優しく握る。

「オオ…。」

北方棲姫が握ってくれて嬉しそうに笑顔になった。そして、本体がそれを見て、何かがときめいた。

「…オ名前…。」

「ハッ！ウ、ウン！ワタシハ…。」

「太平洋深海棲姫ダヨオ！ヒヤハハハハハ！」

太平洋深海棲姫がアンツイオ沖棲姫を見る。そして、北方棲姫と比べて…。

「…コツチガイイ。」

「ヒャー！裏切ラレタ！」

アンツイオ沖棲姫がなんともなさそうに、愉快そうに言う。

「ヒヤヒヤ、ソレヨリ 遊ボウ？ 太平洋深海棲姫。」

「イヤ、今少シ 頭ガ 痛イカラ…。休ム。」

「チエーツー！」

「……。」

太平洋深海棲姫が少しムツとした。しかし…。

「太平洋才姉サン？」

「オ、オオ…。才姉サン…。」

太平洋深海棲姫が戸惑う。そんなこと、アンツイオ沖棲姫に言われたことがなかったからだ。

「才姉サン、遊ブノ！」

「イイゾ！」

「即答!？」

「アツ、デモ、頭ガ 痛イハズナノ…。無理ヲ 言ツテ ゴメンナサイ ナノ…。」

「イヤ！今治ツタ！遊ボウ！」

「扱イガ 違ウ!!」

すつかり、北方棲姫のトリコになった太平洋深海棲姫。しかし…。

バシヤア！

「ブクブク…。」

「太平洋深海棲姫ー！！」

「太平洋才姉サン！」

太平洋深海棲姫は海に入った途端に倒れ、二人に救助された。頭を打った後、危ないから水ものに入らないようにしよう。北方棲姫との約束なの。

「トコロデ、何デ 抜ケ出シタノ？」

港湾棲姫が聞く。

「…実ハ、ワタシタチ…。コノママデ イイノカナツテ 考エテ…。」

「ソウ…。」

「ナルホドナ…。」

港湾棲姫とレ級が、バタバア沖棲姫の話を真剣に聞く。

「モウ少シ、ワタシタチ 自身ニシカ 出来ナイコトガ アルンジャ
ナイカツテ…。」

「ウン…。」

「マア…ナ。」

「ダカラ、思イ切ツテ 正義ノヒーロー『深海レンジャー』ヲ 結成シ
テミタノ！」

「思イ切リスギ！」

「転職ニモ 程ガ アルワ！」

バタバア沖棲姫が言い出し、先ほどまでの真面目な雰囲気ぐち壊
れた。

「一応悪役ダロ！コンナダケド！」

「ヒーローガ 悪役ニ 転職ハ 聞イタコトアルケド、逆ハ 聞イタ
コトガナイ！」

レ級と港湾棲姫がギャーギャー言う中…。

「決メポーズハ 考エテアルワ！」

「チヨ、話聞イテルノカ!？」

「決メポーズガ ドウコウデハナクテ…。」

「アンツイオ沖棲姫！太平洋深海棲姫！ヤルワ！」

「ヒヤハハ！ヨシキタ！」

「…。」

三人が一点に集まり…。

「モオオ…シワケ…アリマセンガア…ワタシタチガア…オアイテ…
スルノオ…カカツテ…キナサイナア…バタバア沖棲姫！」

「名前ノ 前ノ セリフガ 長イ!!」

「…キヤガツタ…カア…ツ。オシオキ…シナイトネエ…シズンジャエ
バア…!?!ブルー！」

「セリフガ 完全ニ 悪役!!」

「シカモ、名前モ 統一シテナイ！」

「カエレッツ！太平…ゴフウツ!!」

「頭打ツテ 激シイ 動キハ ヤメナサイ！死ヌワヨ！」

「太平洋才姉サン 頑張ルノ！」

カッ!!

「カエレッツ！太平洋深海棲姫！ワタシノ…スベテデ…カンゲイ…シヨウ！」

「オ前ノ 全テハ ロリコンカ!?!」

「アンナニ 激シク 動イテ…。」

「三人揃ッテ『深海レンジャー』!!参・上!!!」

ドガーン!

「モウ無茶苦茶ネ…。」

「モウ ツツコミガ 追イツカナイ…。」

「カツコイイノ!」

新規結成した深海レンジャー。悪の存在を探し、平和な日々を取り戻す旅は…まだまだ続く!

「エ?コレ 続クノ…?」

『深海レンジャー』は今日も平和です。

拾肆話 南ノ島デキャンプナノ!

「ナノ♪ナノ♪」

北方棲姫は磯の岩場に腰を下ろして、足をブラブラさせて鼻歌を歌っている。

「深海レンジャーガ 出来テイタナンテ…。」

隣には疲れた顔をした港湾棲姫。突然どこかの支部の深海棲艦たちが抜けたと思つたら、『深海レンジャー』が結成されていたのだ。

「カツコイイノ! 深海レンジャーナノ!」

北方棲姫はそんな感想だ。

「ドウシタンダ?」

太平洋深海棲姫が北方棲姫の隣に座った。

「色々アツテ、疲レタノヨ…。アンナ風ニ…。」

「アア…。」

港湾棲姫がある方向を向き、太平洋深海棲姫が納得した、苦笑いをした。

「ヒヤツヒヤヒヤヒヤ! モット遊ベ!」

「マジデ 勘弁シテクレ! モウ3時間経ツテル!」

アンツイオ沖棲姫に追いかけられ、逃げるレ級。それ自体で楽しんでいるアンツイオ沖棲姫。レ級はずつと遊ばされている。

「アナタモ 苦勞シテイルノネ…。」

「イツモ、アイツノ 御守リダ。アレデモ、一応仲間ダカラナ。」

太平洋深海棲姫は困つたように笑う。

「デモ、アナタト アンツイオ沖棲姫、イイコンビヨオ?」

「何ガ イイコンビダ。」

バタビア沖棲姫がその間に入り、座った。

「…イツモ フザケテイルジヤナイ。」

「フザケテルツテ…。アイツガ 無理矢理…。」

「デモ、拒絶スルコトハ 全然無イワヨネ。」

バタビア沖棲姫がしれつと言い、太平洋深海棲姫が微妙な顔をする。いつの間にか、レ級とアンツイオ沖棲姫が隣に座っている。

「トコロデ、他ノ 2人ハ ドウシテ『深海レンジャー』ニ ナツタノ？」

港湾棲姫が聞く。

「ヒヤヒヤ！カツコイイカラ！」

巨大タコ焼きのアンツイオ沖棲姫は変わらずに答える。

「コノワタシハ、退屈ダツタカラヨ。」

「退屈?」

太平洋深海棲姫が言い、皆が首を傾げる。

「イツモイツモ、戦ツテバカリジヤ 退屈ヨ。」

「マアナ。」

「ウン。」

「ダカラ ソンナ ッシガラミ」カラ外レテ、単純ニ 世界ヲ 旅シタ
カッタカラ。」

「ヘエ。」

太平洋深海棲姫に、バタバア沖棲姫が興味深そうに相槌をうつ。

「マア、想像トハ 違ツタガナ…。」

「ヒヤヒヤア！」

太平洋深海棲姫がアンツイオ沖棲姫を見て、微妙な顔をした。アン
ツイオ沖棲姫は楽しそうに驚く。

「マア、悪クナイノハ 確カダ。」

太平洋深海棲姫が呟いた。だが、それは全員聞き逃さなかった。

「デレタワネ。」

「デレタノ。」

「デレタナ。」

「デレタワ。」

「デレデレ。」

「ウ、ウルサイ！」

皆が茶々を入れて、笑う。

「ソ。問題ハ 無サソウネ。」

港湾棲姫が言い、レ級がリュックサックにデッキチエアやらパラソ
ルをしまう。

「エ…。モウ行ツチャウノ？」

「エ？エエ。モウ イル必要ハ ナイシ…。組織ヲ 抜ケタ理由モ 分カツタシ…。」

「ヒヤヒヤヒヤ！モット 遊ボウ！」

「モウ：行ツテシマウノカ…。」

深海レンジャー諸君は名残惜しそうに見ている。

「…オネーチャン…。」

「…港湾棲姫、ドウスル？」

北方棲姫が寂しそうな顔をして、レ級がやれやれとした目で見てくる。

「…仕方ナイワネ。」

「ヤツタノ！」

「マア、一応泊マルカモトハ 伝エテオイタシナ。」

北方棲姫が喜び、レ級が付け加える。そして、レ級はキャンプ道具をリュックサックから出す。もはや○次元ポケットだ。

「ナラ、時間ハ タップリアルワネ。」

港湾棲姫は水着でデツキチエアに横になる。隣にレ級も水着でデツキチエアに横になる。横から見ると…うん。

「…カワイソウニ…。」

「オイ、誰ノコトダ？オン？誰ガ 可哀想ダト？」

ある一点を見て、憐れんだ目をしたバタバア沖棲姫がうっかり吹き、レ級が問い詰めていた。

「アツチハ 忙シソウダナ。」

「忙シソウナノ。」

「ヒヤヒヤヒヤ！ソウダナ！」

太平洋深海棲姫がそんな2人を見て言い、北方棲姫とアンツイオ沖棲姫が頷く。

「ナラ、釣リデモスルカ？」

「釣リ？」

「ヒヤヒヤ！魚ヲ トルンダヨ！」

「才魚…。ヤツテミルノ！」

三人は適当な棒に糸を巻き付け、その糸に針をつけて魚肉ソーセージ（レ級のリュックサックに入っていた、賞味期限切れ）の餌をつけて、海に放り込む。

「釣レルト イイノ。」

「釣レルト イイナ。」

北方棲姫とアンツイオ沖棲姫が隣同士に座り、そんなことを呟いて話す。

（フッフッフ…。コノワタシ…目的ノタメナラ手段ヲ選バナイワ…。）

太平洋深海棲姫が悪い顔で企む。

（アノ2人ヲ 楽シマセルタメニ、艤装ニ 直接命令シタカラ…。 3時間前ニ。）

悪いことを考えるが、しよぼい…。というより、優しさ故の悪だ。困り顔をしたクジラ型艤装が目には浮かぶ…。3時間も待たされている。

「釣レタノ！」

ザバア！

「オオ！釣レタ…カ…。」

北方棲姫が釣ったのはオウムガイ型の艤装。バタビア沖棲姫の艤装だ。海から上げられてピチピチしている。

「……。」

太平洋深海棲姫はそれを拾い…。

「フンツ！」

投げた。

ガツン！

「グヘエ！」

そして、本人に直で当たった。

「アレ？サツキ釣ツタモノガ ナイノ…。逃ゲラレチャツタノ…。」

「大丈夫。次ハキツト、サツキヨリ大物ガ 釣レル。」

「ホントナノ？」

「本当ダ。」

シユンとした北方棲姫に、太平洋深海棲姫が言い、元気を出す北方

棲姫。

「ヒヤヒヤヒヤ！釣レタ！」

「才前ジャナイ！…テ！マタ 才前カ！」

もう一つのオウムガイ型の艀装だ。

「逃ゲラレナイヨウニ ボツクスニ 入レヨウ！晩ゴ飯ダ！」

巨大タコ焼きのアンツイオ沖棲姫が、ピチピチしている艀装を自分の中にそれを入れた。

「イ、イヤ、待テ。ソレハ…。」

太平洋深海棲姫はバタバア沖棲姫の艀装だとすぐに気づいたが、アンツイオ沖棲姫は誰の艀装など見ていないため、分からないのだ。太平洋深海棲姫が止めようとしたが…。

「夜ゴ飯ナノ！」

「イ、イヤ。アレハ…。」

「キット美味シイノ！楽シミナノ！」

「ウ…アア…。浄化…サレ…ル…。」

「太平洋オネーサン！」

「…オウフ…？」

「楽シミナノ！」

「…ソウダナ。」

北方棲姫の太陽のように眩しい笑顔に負けた。そんなこんなしている…。

「ノ…？ノノノ!?」

北方棲姫の竿に大物が掛かる。

「ン〜！大物…ナノ…！」

「ヒヤヒヤア！大丈夫!?!」

北方棲姫の竿に大物が掛かり、アンツイオ沖棲姫も手伝う。

（ヨシ！掛カッタ！ヨク間違エナカッタ！ヨクヤツタ艀装！ヨクヤツタワタシ！）

計画が進み、喜ぶ太平洋深海棲姫。

「オーイ、大物ガ 釣レタラシイカラ、手伝ツテクレ！」

「…？」

太平洋深海棲姫はニヤニヤして港湾棲姫たちを呼んで手伝わせる。

「「オーエス！オーエス！」」

6人は一生懸命竿を引っ張り…。

ザバア！

「釣レタノー！」

大物が釣れた。そして、その大物は勢い余って草むらに突っ込んだ。

(良クヤッタ！艤装！上手イ具合ニ 釣レテクレタ！)

北方棲姫達が、大物を見に行き、太平洋深海棲姫が朗らかな顔で思っているが…。

「何するでち!?提督指定の水着が台無しでち!…て、あれ…。」

「「!?」」

潜水艦が釣れました。釣り針に引っかかっていたのは艦娘の水着だ。突然のことで双方固まる。

「あゝ、いたいた。ゴージャ。」

「早く行くわよ。…て、大破しているじゃない！」

続々と潜水艦隊が海の上に顔を出す。

「…もしかして、『五島支部』の…。」

「…モシカシテ、貴方達…。」

例の提督の艦隊だ。すると…。

「あつ、提督?大破したから帰還でちか…。」

そんな言葉が艦娘から聞こえる。通信機を持っていた。

パシッ。

「あ…。」

「モシモシ?アナタ、何ノツモリ?ココマデ 潜水艦ヲ 送ルナンテ

…。 憲兵ニ通報スルワヨ?」

『え?港湾さん?あれ?おかしいな。攻略情報にはここに港湾さんはいないはず…。』

「デ?ココマデ 来サセテ覗キ見?」

『いやそこイベント海域ですよ!?!ソロモンの…。』

「ソナナ戯言聞キタクナイワ！」

『そんな理不尽な…。』

「今スグ 撤退サセナサイ。サモナイト、憲兵ヲ 呼ンデ 猫ヲ 放ツワヨ?」

『でち公!その他大勢!帰還だ!即帰還だ!40秒で支度しな!』

提督が即刻言い、即帰還した潜水艦隊。

「フウ…。招カレザル客トハ 今ノコトネ。」

「酷イナオイ。」

清々しい顔で言う港湾棲姫に、太平洋深海棲姫が言う。

「ソナコソナデ モウ夜ダシ…。」

港湾棲姫が空を見上げる。夕方で夕焼けだ。

「ソロソロ 夜ゴ飯ノ 準備シナイト…。」

港湾棲姫が言ったら…。

「今日魚釣レタ!」

「ホッポモ 釣ツタケド、逃ゲラレチャツタノ…。」

アンツイオ沖棲姫と北方棲姫が言う。そして、港湾棲姫とレ級に励まされた。そして、太平洋深海棲姫とレ級が釣ったものを調理しに離れた。

「今回ハ 美味シイオウムガイ料理ヲ 作ルワ。」

「オー。オウムガイツテ、食ベタコトナイカラ 楽シミダ。」

レ級はオウムガイ型艦装の触手をもったり、ツンツン触る。

「ワタシモ 知ラナイワ。ダカラ、ココデ登場スルノガ レシピノ先生、グーグル先生ヨ。」

『どのようなご用件でしょうか?』

「グーグル調べカヨ!」

検索する2人。

「テ、生キテナイカ?コレ…。」

「面倒臭イカラ、バーベキューニシヨウ。」

「サツキノ 調べ!」

太平洋深海棲姫が炭火コンロとオウムガイを持って皆の前へ出た。

「完成ダ。」

「手抜き!?!」

「ワタシノ 艤装！」

例え焼かれても、フワフワと宙を泳ぐ艤装。

「美味シソウナノ…。」

「イカノ 味ラシイ…。」

「ダメ!!!」

ヨダレを垂らす2人に危機を感じて、バタビア沖棲姫がキツク言った。

「晩飯ガ 無クナツタデハナイカ。」

「ワタシノセイ!?!」

「イヤ? 非常食ノ 食べ物ガアル。」

レ級がリュックサックを漁る。

「レモンハチミツダ。アト、水。」

レ級がレモンの蜂蜜漬けの瓶を出して、ペットボトルの水を出す。

「オカズニ ナラナイダロ…。」

「モット 食ベタイノ…。」

「腹減ルゾ。」

「スマン…。魚肉ソーセージガ 入ッテイタハズダツタガ…。」

「……。」

文句を言った者たちはそれを聞いて、何も言えなくなった。

「仕方ナイワネ…。」

「食ベルノカ?」

「違ウワヨ!! アゲナイ… コツチヨ。」

バタビア沖棲姫が出したのは干し魚だ。

「前沢山トレタカラ、保存用ニシテオイタノヨ。」

「オオ。」

「枯レ木モ山ノ賑ワイツテ、ヤツダナ。」

「違ウノ…。」

干し魚を炙る港湾棲姫たち。すると、いい匂いがしてくる。

「ホッポ、フーフーシテ 食ベルノヨ?」

「分カツタノ! フー、フー…。」

「アツヒヤヒヤヒヤ…。」

「笑ウカ 食ベルカ ドツチカニシナサイ。」
「美味シイワネ。」

皆、焚き火を囲んで食事だ。そして、食べ終わり、レ級の大型テントの中に皆入る。

「今日ハ 楽シカッタノ…。」

「齒磨キハ…。明日帰ツテカラ、シマシヨウ。」

「今日ハ 楽シカッタナ。」

「ヒヤヒヤヒヤ。夜ニナルノガ 早イナ。」

「ソウネエ…。」

皆、テントの中の寝袋に入りながら言う。

「フッフッフ。マダマダ仕掛ケガアルゾ。」

「…?」

レ級が大型テントの壁のチャックを開いた。すると…。

「…ワ〜。」

「南ノ島デ キャンプナノ！」

空が見えるのだ。

「一応、虫ガ 入ラナイヨウニ ビニールガ 貼ツテアル。」

レ級は自慢するように言う。

「イクラシタノヨ…。」

「チツチツチ…。無料ダ。」

「無料!?!」

「店長ノ オ古ヲ 貰ツタンダ。ヨク働クカラツテ。」

「太ツ腹ネ…。」

そんなこんな話しているうちに…。

「スー…スー…。」

「ヒャー…ヒャー…。」

北方棲姫とアンツイオ沖棲姫から寝息が聞こえる。アンツイオ沖棲姫は、タコ焼きの中だと息苦しいのか、タコ焼きモードを解除している。

「イッパイ、色ンナコトガ アツタカラナ。」

「私タチモ 寝マシヨウ? 明日朝早イシ…。」

「ソウダナ…。」

「寂シクナルワネ…。」

「マアナ。」

『深海レンジャー』の2人は空を見て満足した後、目を閉じながら名残惜しそうに言う。

「：ナラ、『五島支部』ニ遊ビニ来ナサイ。歓迎スルワヨ。」

「ソウダ…。ホツポモ喜ブシナ。」

港湾棲姫も、レ級も目を閉じながら言う。

「ナラ、タマニ遊ビニ行クワ。必ず。」

バタビア沖棲姫が微笑みながら言っていることが分かり、それ以降誰も言わず、寝息のみが聞こえてきた。

翌朝

「忘レモノナイ?」

「ナイ。」

「ナイノ。」

『五島支部』の三人が確認する。

「ソレジャ…。マタ会イマシヨウ。」

「ジャーナ。マタ会ウゾ。」

「ヒヤヒヤヒヤ! マタ遊ボウ!」

「エエ。次ハ『五島支部』デ。」

「必ず来イヨ。」

「マタ来ルノ!」

六人は手を振り、それぞれ約束をして港湾棲姫たちは自分の支部へ戻って行った。

「：フウ、必ず会オウナ。」

太平洋深海棲姫が、港湾棲姫たちが地平線へ見えなくなるのを確認して、フツとして言う。

ポンポン

「?」

そんな中、肩を叩くものがいた。太平洋深海棲姫が振り向くとそこ

には…。

「……。」

「……。」

一日中海の中でスタンバっていたクジラ型艦装がいた。太平洋深海棲姫はすっかり忘れていて、なんと言えば分からなかった。

「…ソ、ソウダ。朝飯食ベルカ？ホッポタチガ 食ベタ後ダカラ、残り物ニナルガ…。ア、アハハハハハ…。」

その後、太平洋深海棲姫は自分のクジラ型艦装に、尻尾ではたかれた。

場所は変わって昨日の『深海棲艦 五島支部』。

「ハッ!？」

ある深海棲姫が起きる。港湾棲姫が行った後昼寝をしていたみただ。

「フッフ…ドウシタノオ?」

防空棲姫が、起きた集積地棲姫に声をかける。

「イベント…。」

「?」

「マタ、燃ヤサレル夢ヲ 見タ…。」

「ソウ思ツテミレバ、ソロソロ イベントネ〜。」

「キット、今回モ 燃ヤサレル。ソナナ気ガスル…。」

「気ニシ過ギジャナイ?」

「ダト 良イケド…。」

その後、集積地棲姫の予感的中し、なんらかの干渉を受けて蒸発した。

ちなみに、帰って来てそれぞれ土産話をしてとても楽しそうに、笑いの絶えないお茶の間となったそうだ。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

拾伍話 未知トノ遭遇

「ノンノ〜…。」

北方棲姫が窓の外を見ながら、畳の居間で鼻歌を歌っている。

「ドウシタンダ？ 悲シイ顔シテ…。」

レ級が通りがかり、声をかけてあげる。

「雨…。」

「ア…。」 梅雨ダカラナ。

2人は雨の降っている外を見た。

「遊ビニ 行ケナイノ…。」

「雨ダカラナア…。」

「暇ナノ…。」

「暇ダナア。」

そんな時…。

「フツフツフ…。」 ナラ、コノ引キコモリノ 代名詞ニ 任セロ！」

「ソレソソナニ 生き生キトシテ 言ウ言葉ジャナイカラナ！」

集積地棲姫が言い、レ級がツツコミを入れる。

「全ク…。 港湾棲姫ガ イナイカラツテ…。」

「オネーチャン、朝カラ イナイノ…。」

「アア、ナンカ会議ガ ドウトカツテナ。」

「支部長ハ 大変ナンダ。」

北方棲姫に2人が説明してあげる。

「他ノ皆ソソナハ、バイトトカナ。コンナ雨ナノニ、精ガ出ルナ。」

「働イタラ 負ケダ。」

「才前ハ モット働ケ。」

「レ級ヨリハ 働イテイル。」

集積地棲姫が言う。レ級と港湾棲姫は、港湾棲姫自身に何かあった場合の、北方棲姫を安心して預けられる仲だ。だからこそ、こういう日もあるためあまり働かない。

「マア、少シイライラスルノモ 雨ノセイカモナ…。」

「…ソウダナ。」

「ソウナノ…。」

三人は窓の外の雨を見て、嫌な顔をする。そこに…。

ガララララ…

『タダイマ…。酷イ雨…。』

バツ！

「オネーチャン！」

北方棲姫はうだうだしていた体を瞬時に起こして、玄関へ走って行く。

「遅カッタナ。…テ、誰ダ？」

レ級たちがタオルを持って玄関へ行くと、見知らぬ深海棲姫がずぶ濡れで立っていた。

「……………」

しかも、ブツブツ死んだ目で呟いている。レ級たちは少し距離を置いて、港湾棲姫にコソコソ話す。

「オイ、誰ダ…？アイツ…。絶対ニ ヤバイ奴ダロ…。色々な意味で…。」

「鎮守府カラシタラ、一番ヤバイノハ レ級ダケド…。今回ノ 招集ニ 関係ガアツテ…。」

会議

「ハ、ハイ『五島支部』カラノ、『深海レンジャー』ヘノ報告ハ 以上デス…。」

真つ暗で真面目な雰囲気の中、港湾棲姫が緊張しながら話す。

『『深海レンジャー』…。…イイワネ。』

「脅サレタ 訳ジャナクテ 安心シタ。」

「ナラ、イツカマタ 会エルツテ コトネエ。楽シミ。土産話 聞カセテモラオウツト。」

お偉いさん方が納得して、場が和む。

「トコロデ、アト頼ミガ アルンダガ…。」

「ハ、ハイ。」

「ウチノトコロノ 駆逐棲姫ガ 梅雨デ 鬱状態ニナツテイル…。ユ

ルルルフワフワナ 『五島支部』ニ 一時預ケサセテ モラエナイカ
？」

「エツ。デモ…。」

ピンポンパンポーン

『市民文化センターからお知らせします。深海棲艦様の借りている
『第三会議室』のお時間がそろそろです。』

ポンポンパンポーン

放送が入った。

「ヤバイ！ソロソロ オ開キニシナクチャ！」

「延滞料金ヲ 取ラレル。」

「ジャア！各自解散！」

「チヨ、アノ…。」

蜘蛛の子を散らすように解散した。

「テ、コトガ アツタノヨ。」

「ソノ会議ドコデヤツテンダヨ…。ソレニ、延滞料払イタクナイカラ
終ワル会議ツテ…。…コノ組織 本当ニ大丈夫カヨ…。」

敵も、市民文化センターの一室を借りれるゆるい世界。

「マア、ソレハ置イテオイテ…。」

レ級が駆逐棲姫を見る。

「ブツブツ…ブツブツ…。」

(ヤツパリ、近寄り難イ…。)

レ級が微妙な顔をして思っていると…。

「コンニチハ！駆逐オネーサン！ホッポナノ！」

そんな鬱を吹き飛ばすように、北方棲姫が挨拶をする。

ピカー…！

「ウツ！眩シイ…！」

サラサラ…

「集積地棲姫ガ!!」

港湾棲姫とレ級は北方棲姫から放つ光で周りが見え、思わず手で
ガードしながら目を逸らす。集積地棲姫はモロにくらい、真っ白な灰

となって消えた。しかし…!

「ブツブツ…ブツブツ…。」

「オオ、今ノ光ヲ モノトモシナイトハ…。コイツ…デキルツ…!」

駆逐棲姫の暗いオーラには届かない。miss.

「…ホッポチャンハ、雨好き…?」

「ガハッ! 語りカケダケデ、コノ暗イオーラガ…!」

シュウウウウ…

「ン? 一体何が…?」

「集積地棲姫ガ 現レタ!」

駆逐棲姫の語り掛けで、汚い集積地棲姫が復活した。

「雨ハ 好キジヤナイノ…。」

「フフフ…。」

「デモ! 集積地オネーチャンガ、雨デモ楽シク遊ベルツテ 言ツテタ

ノ! ホッポハ 信シルノ!」

「グハア!!」

駆逐棲姫にカウンターのダメージ。Critical hit

!!

「大ダメージダ…! 駆逐棲姫ニ、クリティカルヒットダ。」

「オウフ…。」

「ギャー! 港湾棲姫! 血ヲ吐クナー! 尊死スルナー!」

サラサラ…

「正気ヲ保テ集積地棲姫!!」

北方棲姫の言葉により、外野たちが瀕死に…。

「負ケ…タ…。月ガ…綺麗…。」

「月出テナイ! 勝手ニ 死ヌナ!」

まさかのワンパン撃沈。

「ハア…何カ 疲レタ…。」

港湾棲姫がグダーつとする。

「雨ナノニ、体力ヲ 使ウカラダ。血モ吐イタシナ。」

レ級に言われる港湾棲姫。

「オネーチャン、コノ袋ハ？」

北方棲姫は、玄関にあった袋を持ってくる。駆逐棲姫は椅子に座つて、顔色を悪くしていた。まだ眩いている。

「アア、ソレネ…。ホッポニ プレゼント。開ケテミテ…。」

ガサガサ：

「ノ!？」

「長靴ダナ。」

北方棲姫は開けて驚く。可愛い感じの長靴だった。

「ソレヲ履ケバ、雨デモ 足ガ濡レナクナル。」

「オオー！」

北方棲姫は長靴を見て、目を輝かせる。

「ムー！」

そして、窓の外を見た。

バツ！

「雨サンモ、怖クナイノ！」

北方棲姫は玄関へ行き、長靴を履いた。そして、勢いよく飛び出そうとしたが…。

ヒョイツ

「1人デハ ダメダゾ。」

「ノー！」

レ級に簡単に持ち上げられた。

「雨ノ日ハ、事故モ 多クナルカラナ。」

「ノー！ノー！ノー！」

「チヨ、コラ。暴レルナツテ。港湾棲姫ニ 聞クカラ。」

「……。」

「急ニ 大人シクナツタ。」

レ級は持ち上げたまま、港湾棲姫の所に行く。

「ナア、港湾棲姫。ホッポト一緒ニ 散歩行ツテクル。」

「シー。」

「ジャ。」

レ級は、だらけたままの港湾棲姫に聞いて、北方棲姫と一緒に外へ行く。

「…エ!?」

港湾棲姫が気づいたのは、しばらくしてからだった…。

「ノノノノノノノノノノ」

北方棲姫は新しい長靴を履いて、傘をさしてご機嫌に歩く。

「ドウシテ…。」

「ホツポガ 一緒ガイイツテ 言ツタンダ。」

「駆逐オネーサンモ 一緒ニ行クノ!」

レ級の隣には駆逐棲姫がいる。無理矢理連れてこられた。

「ツイテナイ…。」

駆逐棲姫が呟いた。すると…。

『あらあらく。』

「! 何カ 聞コエタノ!」

北方棲姫が反応する。

「何カ 聞コエタカ?」

「サア…。」

2人は首を傾げるばかりだ。

「コツチナノ!」

「アツ! コラ走ルナツテ!」

北方棲姫は走って行き、草むらの中を分けて探す。しばらくして…。

「イタノ!」

「?」

北方棲姫が何やら手を大きく振ったりしている。

「カタツムリ? ナノ!」

「アー…。カタツムリネ。」

レ級と駆逐棲姫はカタツムリを思う。巻貝のような殻を持った、軟体動物。触覚がありウネウネ動くのだ。

「…最恐ト呼バレテイルケド、少シ苦手ダナ…。」

「苦手ナノカ…。」

レ級が少し苦笑いをして、駆逐棲姫が初めて知る事実。

「オツキイノ！」

「大キイノハ 勘弁ダナ…。」

「大キイノハ 少シ…。」

そんなことを話し、北方棲姫が手を大きく振ったり、ぴよんぴよん跳ねているのを見て和んでいると…。

ガサガサ…

「あらあら〜。」

「オツキイノ！」

「イヤイヤイヤ！デカイツテ！デカスギルツテ!!シカモ、カタツムリ…？ナノカ…？艦装ガアル…。」

「1メートルアルゾ！」

草むらから未確認生物が出てきて、困惑する面々。一応、レ級たちは興味津々の北方棲姫を抑えながら、少し離れている。

「…カタツムリ…？ナノカ…？新種…？誰カニ 似テルナ…。」

「何故ココニ…？」

「オツキイノ！オツキイノ！」

ゆっくり動く未確認生物に、レ級たちが少し興味を持つ。すると北方棲姫がレ級の手を振り解き、近づいて…。

「ノンノン？ノン。」

「あらあら〜。あら〜。」

「ノン〜。ノンノン〜？」

「あら〜？あらあら〜…。」

「ノン！ノンノンノン！」

「あら〜。」

「…？」

意思疎通。レ級と駆逐棲姫は、対等に話している北方棲姫を見て困惑。そして、北方棲姫が戻ってきた。

「迷子ナノ…。柱島ニ 行キタイミタイナノ…。ドコカ分カルノ…？」

「エ？ハ、柱島…？テカ、ドウシテ言葉ガ…？…マアイイヤ。柱島カ…。ウン…。何処ダツタカ…。」

レ級が悩んでいると…。

「知ツテル。」

「!?!」

駆逐棲姫が言う。

「柱島ノ場所ハ知ツテル。」

「本当カ？」

「ウン。」

駆逐棲姫が頷いた。

「…コノ向キカラ、東ヘ行クト柱島ダ。」

駆逐棲姫が、ある方向を向いて言う。

「ドウシテ、直グニ分カツタンダ？」

「…言イ忘レタ。『深海棲艦 怒和島出張所』所属、駆逐棲姫ダ。柱島

ハ、隣ノ島ダ。」

駆逐棲姫が、所属するカードを持って言う。

「早く言エ。」

ポカリ

レ級が殴る。

「アリガトウナノ！」

北方棲姫は輝かしい、嬉しそうな笑顔で駆逐棲姫に言った後、未確認生物のところへ行く。駆逐棲姫は自然と、とても嬉しように微笑んでいた。

「ノン！ノンノン！ノン！」

「あらく。あらく。」

「ノン。ノン。」

「あらく。あらく。」

そして、未確認生物が頭を下げ、触覚？の部分で北方棲姫に向ける。

「ナノ。」

北方棲姫はミトンの手で、その先を触れた。

ピカー！

「ドツカデ 見タコトアルゾ…。」

「著作権！」

某映画の有名なシーンだ。

「あらく。」

「ナノ！」

未確認生物はそれを果たした後、どこか海の方へ向かった。北方棲姫は手を振っている。

「…未知トノ遭遇ツテ、今ノコトナノカ…？」

「…多分…。」

2人は、今起こった一連の流れを全く理解できていなかった。

ガララララ

「タダイマ。」

「タダイマナノ！」

「タダイマ。」

三人が支部に戻る。

「エ、ア、ウン。オカエリナサイ…。」

部屋に戻ると、外へ行く支度をしていた港湾棲姫。

「…ホッポ、マダ少シ散歩スルカ。」

「ノ？」

「イ、イイノヨ！気ヲ遣ワナクテ！」

港湾棲姫は支度していた手を止めて言う。

「今日カタツムリ？ト オ話シタノ！」

「エ？ア。エエ。ソウナノネ。楽シカッタ？」

「ウン！」

「良カッタワネく。カタツムリサン、何テ言ツテタノ？」

「迷子ダツタカラ、話ヲ聞イタノ！ホッポモ、ワカンナカッタケド、駆逐オネーチャンニ 助ケテモラッタノ！」

「！」

北方棲姫の言葉に、2人は少し何かを感じた。

「…ソウ。良カツタワネ。キット、カタツムリサンモ、喜ンデイルワ。」
港灣棲姫は膝の上の北方棲姫の頭を優しく撫でて、北方棲姫が柔らかな、思わずぎゅーっとハグしたくなるような笑顔になった。レ級はニヤニヤしながら駆逐棲姫を膝でつついている。しばらくしたら、北方棲姫は寝てしまった。

「…駆逐棲姫。」

「？」

「…貴女、氣ツイタ？」

「何ニ？」

「氣ツイテナイカ。」

2人に言われて、不思議がる駆逐棲姫。

「ホッポ、最後ニ貴女ノコト、何テ呼ンダカ 覚エテル？」

「…『駆逐オネーチャン』？」

「最初、ナンテ言ツタカ 覚エテルカ？」

「…『駆逐オネーサン』！」

「分カツタジヤナイ。」

港灣棲姫とレ級が笑う。

「ホッポニトツテ『オネーサン』ハ、年上ノ他人ト 認識シテイルワ。逆ニ『オネーチャン』ハ、年上ノ家族ノヨウナ、親密ナ関係ニ ナツタ者ニ言ウノヨ。」

港灣棲姫は微笑みながら言った。

「ソレト同時ニ、ホッポハ心ヲ 癒スカガアル。信頼シテイル人ホド、癒ヤシテクレルンダ。…駆逐棲姫、鬱ハドウナツタ？」

レ級はニヤニヤしながら聞いてきた。

「…アツ。」

駆逐棲姫は気がついた。鬱が完全に治っていることに。

「…スゴイナ。」

駆逐棲姫はスースーと、可愛く寝息を立てている北方棲姫を見て呟いた。

「…サテト、今夜ハ 梅雨ノ期間ノミノ 駆逐棲姫ノ歓迎会ヲ 開クワ。」

港湾棲姫は、北方棲姫を起こさないように、座布団を枕がわりにさせ、もう一つを北方棲姫の体の上に乗せて布団にしてあげた。

「美味シイ料理ヲ 作ルカラ楽シミニシテイテ。」

「…分カツタ！」

港湾棲姫が優しい笑顔で言い、駆逐棲姫が元気に頷いた。レ級は同年代の友人が出来たような感覚であり、ニヤニヤしていた。そのあと、皆バイトから帰ってきて駆逐棲姫の歓迎会は盛大に行われたようだ。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

拾陸話 カビアレルギー許スマジ

ギラギラ…

「フウ…暑イ…。」

ここは『深海棲艦 五島支部』。現在構成されているメンバーは多い方で、10人程度だ。その支部長である港湾棲姫が洗濯物やコタツ布団や布団を干している。

「何デ コンナニ 暑イノカシラ…。」

港湾棲姫は太陽を見て眩く。

「キット、地球温暖化ネ…。コレナラ 早く乾キソウ…。」

干している洗濯物を見ながらえんがわに座る港湾棲姫。

(意外ト、梅雨ガ 遅イワネ。)

そんなことをのんびり思っていると…。

「ギャー…！」

「！」

レ級の悲鳴が聞こえた。

「ド、ドウシタノ!?!」

港湾棲姫がすぐに来た。レ級の叫びなど珍しいからだ。

「…アソコノ…柵ノ奥…。」

「柵?」

レ級が指を差し、港湾棲姫がお菓子などが置いてある柵を漁る。

「…キヤー…！」

港湾棲姫も思わず叫んだ。

「ド、ドウシタノ…?」

「ナンドナンド?」

一緒に遊んでいた北方棲姫と駆逐棲姫もやってきた。

「ウォー…。」

「真ッ黒ナノ!!」

柵の奥が真っ黒になっていた。

「最近…湿気テイタカラ…。」

カビが繁殖して大変なことになっていたのだ。

「…モナカト、羊羹…。」

レ級が袋を出す。そう、これは貰い物で、奥にしまっておいたまま忘れてしまっていたのだ。

「…掃除…シナイト…。」

港湾棲姫がマスクをして、ゴム手袋をする。雑巾持って、バケツを持って…。

「へっしっ！」

「ホッポ！」

「ナンカ、クシヤミシチャッタノ…。目モ、カユイノ…。」

北方棲姫が少し涙目になっている。

「カビアレルギー…許スマジ…。」

港湾棲姫が怒りのオーラを纏っていた。

「カビ〇ラー！」

シュツシュツシュツシュツシュツシュツ…

「ココデスルナ！シカモ、ヤリ過ギダー！」

木製の柵にカビ〇ラーが直撃。

「…平気ナノカ…？」

シュワシュワ…

「…ダメダナ。」

レ級は仕方なく風呂場へ持って行く。防空棲姫も手伝っている。

「集積地棲姫、雑巾デ拭イテ。」

「エ…。何デ…。分カツタ、ヤルヨ。ヤリマスヨ。」

滅多に怒り顔をしない港湾棲姫の顔の雲行きが怪しくなったため、雑巾でゴシゴシカビを拭き取る集積地棲姫。

「フウ…。」

幸い、木製柵以外ツルツルした素材で出来ていたため、すぐにカビが取れた。港湾棲姫はカビの生えた食べ物や物を袋に詰めて燃えるゴミに入れた。

「ナントカ、ナツタワネ。」

「ソウダナ。」

2人が言っていると…。

「ギャー！ー！」

「キヤー！ー！」

2人の悲鳴が聞こえた。

「ド、ドウシ…。」

港湾棲姫が固まった。洗濯機の裏に黒カビがびっしり…。集積地棲姫はいつの間にかいなかった。

「梅雨ノ前ニコレジャ、家ガモタナイ…。」

「「フウ…。」」

カビを消滅させて、一息つく港湾棲姫たち。

「集積地棲姫メ…。逃ゲタナ…。」

「フフ…ソウネエ…。」

そんなことを港湾棲姫と防空棲姫が呟く。一方…。

「真ツ黒…。ナンナノ？」

「ン？『カビ』ノコトカ？」

北方棲姫がレ級に聞く。

「『カビ』…。カビナノ！」

すると、北方棲姫が何かに気づき、虫取り網を持ってきた。

「捕マエルノ！」

「イヤイヤ…。」

「駆逐オネーチャンカラ 聞イタノ！マツクロスケナノ！沢山イルノ！」

「ナンダ…マツクロスケツテ…。」

（危ナイトコロヲ 突クナア…。）

レ級は駆逐棲姫を見るが、駆逐棲姫は北方棲姫に『おねーちゃん』と言われて満更でもなさそうにニヤけていた。全く聞いていない。集積地棲姫は押し入れの隙間から、そんなことを思う。北方棲姫はテール掛の下をめぐってみたい、タンスの隙間を調べていて場が和みすぎた。

「イナイノ…。」

「…マアナ…。」

現実を知り、ガツカリする北方棲姫。港湾棲姫がなんとかしようとして、台所で何か材料を取り出ししていた。

「元氣ダセ。」

レ級が北方棲姫の頭を優しく撫でる。港湾棲姫は嫉妬の目をして見ていた。

「トコロデ、ソレハ ドンナ形ナンダ？」

レ級が聞く。これ以上触れてはいけない気がするが…。

「…手足ガ生エテテ…。」

「ウン。」

（ソウダナ…。）

集積地棲姫は押し入れの中で2人の会話をこっそり聞いて思う。部屋にパソコンがあるから、見てはいないが知識はあるのだ。

「空ヲ 飛ブノ。」

「空ヲ？」

（マア、飛ンダナ。）

「イツパイルノ。」

「沢山イルノカ？PT小鬼群ミタイナモノカ。」

（イタナ。）

「沢山ノ色ガアルノ！」

「色ガ？」

（…：…：ウン？）

「カビカビ話スノ！」

「…：分カラナイナ…。」

「ドツチニシロ 危ナイ！コレ以上ハダメダ！イロイロト！」

聞いていられなかったのか、集積地棲姫が押し入れから出てきた。ナイスだ集積地棲姫。

「駆逐棲姫！変ナコト 教エルナ！苦情ガ殺到スル！」

「悪カッタ。」

しかしながら、集積地棲姫が押し入れから出て来たから港湾棲姫と防空棲姫に見つかり、叱られたのだった。

「雨ナノ…。」

北方棲姫はカレンダーと外の天気を照らし合わせている。

「明日ピクニックナノ…。」

「晴レルカ？」

北方棲姫のところに駆逐棲姫がやってくる。

「明日晴レルカ…？」

「分カラナイノ…。」

「天気予報ヲ見レバ…。…ブラウン管TV…。」

あるのは映らないブラウン管テレビのみ。

「集積地棲姫ニ聞ケバイイノ。」

「アア、アレカ。」

押し入れから出てきた集積地棲姫を思い出す。罰として皿洗いしていた集積地棲姫を。

「集積地オネーチャン！開ケテホシイノ！」

北方棲姫がドアの前で言う…。

ガチャ

「ドウシタ〜？」

だらけた感じで出てきた。

「明日ノ 天気ヲ知りタイノ。」

「明日？明日ハ…雨ダ。」

「ノ…。」

北方棲姫がそれを聞いて、ガーンとショックを受けた。

「明日…ア、ピクニックカ。外ハ、アンマリ好キジヤナイカラ 良カッタナ。」

「ノ…。」

北方棲姫がまたショックを受けた。

「ウ〜…。」

北方棲姫はトボトボ階段へ向かう。

「…モシカシテ…。」

「…楽シミニシテイタンダ。北方棲姫ハ、皆ンナト 行クノガ 楽シ

ミダツタンダ。」

「……。」

階段に座り込んでいる北方棲姫を見る。だが、天気は変えられない。

「…降りルカ？」

「…ナノ…。」

駆逐棲姫と北方棲姫は気をつけて下へ降りて行った。

「……。」

「ヨイシヨ…ヨイシヨ…頑張ルノ。」

「頑張レ頑張レ。」

北方棲姫と駆逐棲姫がコタツがあつた、机の上で何かを作っている。

「何シテンダ？」

「ドウシタノ？」

レ級と港湾棲姫が来る。

「アラ…。」

「テルテル坊主カ？」

2人が一生懸命作っていたのはてるてる坊主。

「出来タノ！」

「コツチモ。」

2人が掲げるのは自身によく似たてるてる坊主。北方棲姫の作つたてるてる坊主は、短いツノが取り付けてあり、駆逐棲姫のは帽子が取り付けられて下のヒラヒラが短めだ。二つとも顔もそっくりである。

「…楽シソウダナ。」

「ソウネ。」

レ級も作り出し、港湾棲姫も作る。

「フフフツ楽シソウネエ。」

「ソウネ。」

防空棲姫も来て、戦艦棲姫も来た。さらにまだ来て、それぞれので

るてる坊主が窓に吊るされてゆく。集積地棲姫を除いて。その内に夜になったが…。

「ザー…！…！」

「ナノ!?」

雨が強まった。

「ノー…。」

「明日ハ、ピクニツクナノニ…。」

「コレジャ、無理カモナ…。」

北方棲姫は外を見て、心配そうに声を出す。明日は確実に雨になりそうだからだ。

「テルテル坊主サン、頑張ルノ！」

北方棲姫はてるてる坊主を応援していた。

翌朝

チュンチュン…

「ノ…?」

小鳥のさえずり声が聞こえて、戸から光が漏れている。

「…。」

ガララララ…

「!」

1人起きて、戸を開けると…。

「ノ…。」

朝日が差し込む。天気は雲ひとつない晴れ。

「良カッタワネ。」

いつの間にか隣にいた港湾棲姫が言う。

「良カッタノ！」

北方棲姫が笑顔で元気よく言った。

(本当、結局ハ良イ奴ナンドカラ…)。

港湾棲姫が、自分たちのてるてる坊主を見る。そこには、集積地棲姫の形をしたものが混ざってあった。港湾棲姫はそれを見て微笑む。きつと、昨晚丁寧に作って、誰もいない間にしれっと混ざらせたのだ。

ろう。

そして、この日はみんな楽しくピクニックをしたのだった。
『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

拾漆話 蟹食ベタイ

ここは礼文島。北海道の宗谷岬から東へ少し行った、二つある島の細長い方。その島には深海棲艦と、筋肉ムキムキマツチヨメエンの陸軍海軍元帥兄弟が戦っている。その鎮守府で…。

「アーアアアアア アーアー。」

「アアアアアアア アー。」

「ンンンンンンン ンンンン。」

「ンンン ンンン ンンン。」

「ラララ…。」

ガチャ!

「サツキカラ、人ン家ノ 玄関ノ前デ 何歌ツテンダ!？」

いや、鎮守府ではなかった。『深海棲艦 礼文島支部』の玄関前だ。

「ん? 知らんのか? これは『北の国から』と言う代表的な…。」

「いや、兄者よ。おそらく説明してもわかるまい。」

「イヤイヤ、知ツテル! 馬鹿ニスルナ!」

元帥兄弟と港湾水鬼が朝早く、玄関で言い合う。

「毎朝の日課でな。そうしないと落ち着かないのだ…。」

「毎朝ヤツテタノ! 毎朝何処カデ 何カ聞コエルト 思ツタラ、全部

才前タチカ! フザケンナ! 毎朝五月蠅イ!」

「まあ、俺たち兄弟は反省している。許してやれ。」

「上カラ目線ヤメロ!」

そこに…。

「あら、提督? 何を?」

艦娘がやってきた。

「うっ…。赤城…。」

「提督…? 毎日毎日…迷惑かけてはいけないと何度もおつしやりましたよね…? すみません。港湾水鬼さん。私たちの提督が…。」

「アツ、イヤ別ニ ナントモ…。 : イヤ、ナントモアル。毎朝来テイルラシイ。ハツキリト言ウト、近所デモ噂ニ…。」

「…そうなんですわね。…わかりましたね？て・い・と・く…。」
艦娘が微笑んだままだ。声に何かを感じる。

「あ、兄者…助けてくれ…。怒ると本当に怖いんだ…。」
「行きますよ？さあ。」

「あ、兄者！兄者ー！ー！」

艦娘にズルズル引き摺られて行く弟者。

「逃げたらまたここに集合だ。」

「才前モ帰レ!!集合スルナ！」

当たり前のように言う兄者だったが…。

「隊長？何をしているのでありますか…？」

「……。」

後ろから何者かの声がして、振り向かない兄者。

「…御免！」

「家ニ逃ゲルナ！」

兄者が慌てて港湾水鬼の家に押し入った。

「…仲間でありますか？」

「イエエ。サツサト捕マエテクレタ方ガ 助カル。アツ、デモ家具ヲ

壊サナイヨウニ。」

「承知！」

何者かが瞬時に家に入り…。

「さあ、行くでありますよ。」

「…どうしてそんなにも早く捕まえられるのか…。」

「謎あります。」

ズルズルと引きずって行かれる兄者。

「…コレデ、今日ハ平和カ。」

港湾水鬼は朝食の支度をするために家に入って行った。

「今日ハ 焼き鮭ネ。」

「昨日安ク手ニ入ツタカラナ。」

港湾水鬼の作った朝食を囲んで、楽しく食事する北方棲妹と軽巡棲
姫と港湾水鬼。朝食は焼き鮭と味噌汁、たくあんと白米だ。

「…アツ、ソウダ。手紙ガ 来テタゾ。」

「!」

北方棲妹と軽巡棲姫に渡す。

「軽巡棲鬼カラ…。」

「姉貴カラダ。」

2人がそれぞれ見る。

「…フフ。平和ソウネ。」

軽巡棲姫はふうつと息を吐いて口元が緩んでいる。

「向コウデハ、ピクニツクヲ シタラシイワ。」

軽巡棲姫が写真を見せる。集積地棲姫が嫌がっている顔をしている。気づいたレ級にからかわれて。

「…イイナ。」

「ピクニツクネ〜。」

2人は羨ましそうに見ていると…。

「姉貴…。」

「?」

北方棲妹に届いている手紙を見る。北方棲姫からで、梅雨のことや港湾棲姫たちのこと、近所の人たちのことだ。

「…梅雨…羨マシイナ…。」

北方棲妹が呟く。こちらでは北海道のため、梅雨がないのだ。

「梅雨…我々の産まれた関東地方が懐かしき…。」

「兄者よ、今度艦娘たちを連れてって行くのはどうだ？」

「…元帥兄弟…!?!」

いつの間にか家にあがり、お茶を飲んでいる元帥兄弟。

「帰レ!」

「まあ、そう固いことを言うでない。」

「勝手ニ上がり込メバ、ソウ言ツテ当然ダ!艦娘ー!ドコダー!元帥
ココニイルゾー!」

「いいお茶ですね。」

「とても美味しいであります。」

「…イルノカ…。」

艦娘たちまで上がり込んでいた。

「あつ、これを。いつもお世話になっておりますから…。」

「こっちもであります。」

「エ？ア、ウン？」

港湾水鬼は艦娘から品物をもらう。

「私が渡したのは、朝潜水艦の子たちがとってきてくれたズワイガニ（大）を沢山です。」

「自分は、…なんとかって言う牛肉であります。」

「…コレ、最近話題ノ スゴク高イ肉…。ソレモ、高級部位…。」

2人に渡されたものはとんでもないものだ。北方棲妹と軽巡棲姫はそれらを見ていた。

「…デモ、コレヲ貰ウワケニハ…。才返シモ ナイシ…。」

「…エー…。」

返す港湾水鬼に、北方棲妹たちからブーイング。しかし、艦娘2人に返す。

「…ほらな？」

「…そうですね。」

元帥が言い、艦娘がうなづく。

「一応貰ってください。もう鎮守府ではたくさん食べましたし。」

「そうであります。自分、あげたものを返されるのは良い気がしないであります。」

2人に再度手渡された。

「デモ…。…今晚、ココデ食ベルカ？」

「えっ？いいんですか？」

「沢山貰ツタシ。棲妹ヤ、軽巡棲姫ガ良イト言エバ。」

港湾水鬼が2人を見る。2人は頷いていた。

「なら、何か手伝いますよ。」

「イヤ、持ツテキテクレタ。ソレダケデ 十分ダ。」

港湾水鬼は夕食の下準備に取り掛かる。エプロンと三角巾を被つて、完璧な主婦姿だ。北方棲妹は艦娘たちと向こうで遊んでいる。

「…良い嫁になりそうだな。」

「弟者よ、艦娘の目が怖いぞ。まあ、言葉を直せば尚よしと見るが。」
「…姉貴ノ身ガ危険…。」

「大丈夫です。あとでオホーツク海に流しますから。」
艦娘は北方棲妹に笑顔で言った。

「実際、港湾水鬼や軽巡棲姫にこの島の者からいろいろ言われないのか?」

「ソウネ…。」

頭にコブのある兄者が聞き、軽巡棲姫が考える。

「毎日ポストノ中ニ、手紙ヲ 敷キ詰メラレル嫌ガラセヲ 受ケテイ
ルワ。」

「新車のイジメだろうか…。て、多分それはラブレターでは?」

「コレガ、証拠。」

「ふむ…。」

軽巡棲姫に渡されて、内容を読む兄者。

『こーわんすいきさんたちへ

この前たすけてくれてありがとうございます。もう二とど下りられないくらい木の上のぼりません。きつくんも、くろまじゅつのやり方をおしえてくれてありがとうございます。こまった時にたすけてくれて、ほんとうにありがとうございました。

小学生1年生一同(担任)』

「……。」

「ホラ。」

兄者は何を見せられているのか、普段港湾水鬼が何をしているのか、黒魔術とはなんのことなのか色々ツツコミどころが満載で困った顔をしていた。

「マダアル。」

「…感謝状ばかりだな…。」

次々と町内会、学校関連、果てまでは警察の感謝状であった。

「…弟者よ…。ひよつとしたら、我々兄弟より人々の助けになっているのではないか?」

「兄者よ…。それは言つてはいけないだろう…。」

元帥兄弟はそれらを見て、そんなことを呟く。

「他二モ、脅迫状ガ…。」

「それはいかんな。」

2人が見る。

『港湾水鬼様

一 眼見た時から貴女のことを愛おしく感じて夜眠れ…』

「読む気が失せてしまった。」

「同じく。」

元帥兄弟はそれを軽巡棲姫に返す。

「他二モ、コンナ手紙ガ何通モ…。」

「大丈夫だ。玄関の鍵さえ閉めておけば、問題ない。もし、誰か入ってきたら遠慮なく吹っ飛ばしてやれ。」

「兄者の言う通り、襲われそうになったら殺さない程度に吹っ飛ばしてやれ。」

一 応武装なしでも港湾水鬼たちは深海棲艦の上位種。襲われても事故に遭つても危険なのは相手側だ。

「…アツ、ソウソウ。港湾水鬼。」

「？」

「今度ノ日曜日、夕食ハ要ラナイワ。」

「エ？何故ダ？」

「魚屋サンノ息子ノ…名前ガ思イ出セナイワ…。」

「エーツト…：ウーン…：アツ！佐々木サンノ息子ダ！」

「ソウソウ。ソノ人カラ、夕食ヲ誘ワレテイテ…。」

「名前すら忘れた者と夕食を食べに行くのか…。」

「食事代ハ、相手モチダカラ…。」

「兄者よ…。恐らく誘つた側の気持ちは微塵も考えていないぞ…。」

「わかっている…。」

「失礼ナ…：ワカルワヨ。」

「へえー。」

「才金ガ有リ余ツテイルカラ、貧相ナ生活ヲシテイル私タチニ 恵ン

デアゲヨウトカイウ 上カラ目線ノ誘イヨ。」

「全くわかつていないぞー！」

元帥兄弟は軽巡棲姫のセリフを聞いて、相手が不遇に思えて仕方がない。そんな、この支部の立ち位置について詳しく聞いていると…。

「姉貴、才腹空イター。」

「私も少し…。」

艦娘と北方棲妹が来た。

「アト少シ。」

「今日ノ夜ハ？」

「蟹ノフルコースダ。蟹ノ味噌汁、シャブシャブ、天プラ、蟹焼き、刺身、鍋…。アト、肉…。」

「豪勢だな…。」

「楽しみで仕方がない…。」

「蟹食ベタイ…。」

元帥兄弟たちもそれを聞いてお腹を空かせる。そして、我慢できなくなった艦娘や軽巡棲姫たちが手伝い、すぐに終わった。

「港湾水鬼。」

「？」

港湾水鬼1人、椅子を準備しようとして廊下へ出たら兄者が話しかけてきた。軽巡棲姫たちや弟者たちは料理を運んで廊下にいない。

「…これからもよろしく頼む。良き強敵（ライバル）として。」

「……。」

港湾水鬼は差し出された手を握らず、見るだけだ。兄者が困った顔をすると、理由を言った。

「何言ツテンダ。コレカラモヨロシク？今更言ウ言葉ジヤナイ。…

『当然』ダロ。」

港湾水鬼はその差し出された手から顔を上げて、兄者の目を見る。兄者は初めてその瞳を見た気がして、少し変な気持ちになった。

「サ、ソナナコトヨリタ食ダ。セイマイガ腹ヲ空カセテイル。早ク行クゾ。」

港湾水鬼がやれやれとした顔をして、椅子を運ぶ。

『姉貴、少し遅カッタガ平気？』

『ナンデモナイ。』

港湾水鬼たちが食卓で話す。

「…顔は本当に怖いがな…。」

兄者はそう呟き、食卓へ戻った。その料理を艦娘も、深海棲姫も、海軍元帥も、陸軍元帥も笑い合いながら、馴れ合いながら食べる。その料理の味は一級品に劣らないとても美味しいものだったようだ。

…後日、その言葉が港湾水鬼に強敵（ライバル）としての心の闘志を滾らせて、演習を申し込まれて今まで一度もなかったD敗北したことを後悔するのはまだ誰も知らない。

『深海棲艦 礼文島支部』は今日も平和です。

拾捌話 七夕ナノ!

「気マツマツニツ♪」

「オサツン♪ポツ♪」

雨上がり。北方棲姫、港湾棲姫が手を繋いで歌を歌いながら歩いている。買い物へ行くのだ。

「アツ。」

「?」

しかし、すぐに港湾棲姫が立ち止まり、北方棲姫が見る。

「山田サンノ 草ガハミ出テル。」

「ホントナノ!」

山田さん(隣のおばちゃん)の家から葉っぱが玄関先まで出ている。

ピンポーン

『はーい。』

「コ、コンニチハ。隣ノ港湾ト…。」

「ホツポナノ!」

『はーい。』

ガチャリ

「コンニチハ。」

「コンニチハ!」

「はい、こんにちは。」

北方棲姫たちの挨拶に、山田さんが笑顔で応える。

「アノ、コノ草ガ玄関外マデ…。」

「あく、笹の葉がね。知らせてくれてどうもありがとう。」

山田さんは玄関外まで出ている笹の葉の位置をずらした。

「今日は七夕だからね。」

「七夕?」

「タナバタ?」

「え?あつ、そうだ、港湾さんたちは知らないんだったわね。七夕って言うのは、おりひめさまとひこぼしさまが天の川を渡って、1年に1度だけ出会える日のことよ。」

「オリヒメ?」

「ニボシ?」

2人は首を傾げるばかりだ。そこに…。

「ナンダ、マダ出発シテ…コンニチハ。」

「レ級ちゃん、こんにちは。」

レ級が家から出ていた。

「レ級ナノ! 今日ハ、才姫様トニボシガ年ニ一度ダケ会エル日ミタイ
ナノ!」

「ニボシ? 才姫様?」

レ級も聞いて首を傾げた。

「七夕…。」

「アア、七夕カ。」

「知ツテルノ!」

「七夕ハ昔カラノ伝統デ、織姫ト彦星ガ 天ノ川ヲ渡ツテ 会エル日
ダロ?」

「あら、レ級ちゃん知ってるのね。」

レ級がナチュラルに話し、驚く2人。

「今日港湾棲姫ガ、丸ヲツケタ セール品ノ広告ニ 『七夕』ト書イテ
アルゾ…。」

「アツ、本当…。」

港湾棲姫が丸がついてある広告の紙を見て納得した。

「ソレト、ソロソロ山田サンノ 迷惑ダ。買イ物行クゾ。」

「あらく。迷惑だなんて…。」

「サツキカラ、洗濯機ガピーピー言ツテルカラ。」

「あら、なら先に失礼するわね。また話しましょう。」

「サヨナラナノ!」

「さようなら。」

山田さんは最後まで、ドアを閉める直前まで手を振ってくれていた。

「…レ級来ルノ?」

「マタ寄り道シナイヨウニナ。」

「一緒ナノ！」

北方棲姫が嬉しそうに、港湾棲姫とレ級を見る。

「買い物…。」

「！」

家の扉から覗いている何者かが…。

「駆逐棲姫モ来ルカ？」

「…良イノカ？」

「断ルワケナイダロ…。」

駆逐棲姫が港湾棲姫たちに混ざる。

「駆逐オネーチャンモナノ！」

北方棲姫が嬉しそうにぴよんぴよん跳ねる。

「ソロソロ本気デ行クゾ。マタ誰カ来タラ、ホツポガ飛ブカモシレナイ。」

「ソレハナイト思ウケド…。結構時間ガ カカツチャツタカラ行ク。」
港湾棲姫たちはお馴染みのスーパーまで歩いて行く。北方棲姫は港湾棲姫と駆逐棲姫の手を繋いで、レ級は港湾棲姫の隣を歩いている。

「アツ、テコトハ、バイト先モ笹ノ葉飾ツテンノカ…。」

「ソウ思ツテミレバ、レ級ノバイト先ツテ ドコヨ。」

「ン…。内緒。」

「駆逐オネーチャンノ手、柔ラカイノ！」

「…。」

それぞれ話しながら、赤くなりながら歩く。段差もあったが、北方棲姫は2人の手を繋いでいたため、夢だった大きなジャンプが出来た。駆逐棲姫はフワフワ浮いているため、転ぶこともない。そのうちに商店街に入った。

「コノ先ガ スーパー。」

「品揃エハ ココデモ良イガナ。」

「沢山才店アルノ！」

「…。」

4人が歩いていると…。

「おっ！港灣ちゃん！寄ってかないか！いい品入ったんだぜ。」

「いい品…？」

「オット、早速引き寄せラレテルナ…。」

港灣棲姫が肉屋のおっちゃんに呼ばれて、吸い寄せられるように行く。

「どう？少し高級な鳥も肉20%オフ。七夕だし。」

「少シ高イ…。」

「おおっと、ならなら大特価！30%オフなんてどうよ？」

「ウーン…。」

港灣棲姫が悩んでいると、ふと何かを感じたレ級。

「…悪い顔シテルノ…。」

「ホントダ…。」

北方棲姫と駆逐棲姫がレ級の顔を見て眩く。

「港灣棲姫、早く行コウ。セール品買エナクナルゾ。」

「アツ、ソウネ…。」

港灣棲姫が行こうとしたが…。

「おっと、待ちな。七夕なんで景気も良くなきや、出血大サービスだ。

40%オフにしても良いぞ！」

「40%…。」

「イヤ港灣棲姫、少シ品質ハ劣ルガ スーパーノ10%オフノガ全然安イ。」

「頑固だねそっちのお方…。財布の紐が硬いねえ…。仕方ない！ご、

ご…。」

「ゴ？」

「50%オフ！」

「半額!？」

「オー…！テ、怪シ過ギルダロ…。訳有リダナ…。」

レ級は下げさせたにも関わらず、そんな感想を述べる。

「…港灣さんたち、実はこれ前から出しているんだけど全く売れなくて…。カミさんに怒られちゃってなく。さっさと値段下げて売れ！ってさ。買ってくれなきや実質利益は大赤字だし…。」

「…消費期限大丈夫ナノ…？」

「…なあに、あと一週間は持つさ。要冷蔵だけど。…頼む！港灣さん！今度きた時何か割引するから！港灣さん以外に買ってくれそうなお客さんいないんだ！」

「マア半額ト言エド、600g2500円ハ高イカラナ…。」

レ級も難しい顔して悩んでいると。

「買イマス。」

港灣棲姫が出してくれた。

「港灣…イイノカ…？」

「港灣ちゃん、本当に大丈夫なのかい…？」

「エエ。」

「すまんなあ…。」

肉屋のおっちゃんが申し訳なさそうにして、港灣棲姫は笑顔で買ってあげた。北方棲姫がそれを見ていて、微笑んでいる。北方棲姫が港灣棲姫を他の者より慕っているのは、そういうところなのだろうと駆逐棲姫は実感した。

「ヨク来テイルノカ？」

「エエ。一週間ニ4回以上。」

「才得意様ツテ、訳カ。ソレニ目立ツシナ。」

港灣棲姫とレ級が話しながら歩く。人々が笑顔で挨拶してくれたり、名前覚えてくれていたり、場所を少し嬉しく思う港灣棲姫と北方棲姫。そのうちに、スーパーのセール品より安くしてもらえたり、話し合ったりして買うはずだったものをここで買って行く。

「結局、スーパーじゃ ナクナツタナ。」

「ウン。」

港灣棲姫は本当にスーパーへ行く必要が無いくらい買い物をした。もちろん、北方棲姫のお菓子も含めて。

「帰ルノ？」

「ウン。」

「帰ルノ！」

そう言って、歩いていると…。

「ワッ…。」

「大キイノ！」

大きな笹の葉が目に入る。短冊が沢山吊るしてあった。

「誰でも自由にどうぞ。」

笹の葉近くにいた、管理しているような人が北方棲姫にペンと短冊を渡す。

「ノ？」

「これに願い事を書いて、笹の葉に吊るすんですよ。あつ、お名前も書いてね。」

「ノノ？」

北方棲姫は管理している人に教えられて、用意されていた折りたたま式机で書いている。

「出来タノ！」

北方棲姫がそれを掲げる。

『皆シナト、ズーット一緒ニ仲良ク ナリマスヨウニナノ！ ホツポ』
書いてある文字を見て、管理している人まで微笑んだ。しかし、その短冊に『ゼロ オイテケ』の絵が書いてあるあたり、どっちが願いなのか…。

「なら、その願いが必ず叶うように、なるべく高いところに吊るしましょう。」

「ホツポ。」

「オネーチャン！」

北方棲姫は港湾棲姫に持ち上げられて、高いところの笹を手に取りる。

「…大丈夫？」

「大丈夫ナノ！」

吊るし終わる北方棲姫。

「ありがとうございます！」

「コチラコソ。」

そうして、港湾棲姫たちはその場から去った。管理している人が笑顔で軽く手を振ってくれていた。

「七夕…。」

「？」

家に帰ってから早々、港湾棲姫が呟く。

「七夕…。」

「ヤリタイノカ？」

「ソ、ソクナワケナイ…。」

「本当カ？」

「…ヤリタイ。」

港湾棲姫が笹のことを考えている。

「…オネーチャン、七夕ヤリタイミタイナノ…。」

「ソウダナ…。」

襖からちよこんと、港湾棲姫のため息と呟きを聞く2人。

「困ツタ時ノ猫サンナノ。」

北方棲姫は鎮守府に電話をかけようとしたが…。

「…。」

『ホッポ、電話ハ詐欺トカ危ナイカラ、使ツチャダメ。』

北方棲姫は電話機を見たまま動かない。姉の約束を守っている。

「…ドウシタ？」

「鷲トカ危ナイカラ、使エナイノ…。」

「鷲？出テクルノカ？」

「…分カラナイノ…。」

そんなことを話していたら…。

ピンポーン

『ハイ。』

「バレチャウノ！行クノ！」

「オ、オオ。」

北方棲姫と駆逐棲姫は電話機から離れた。港湾棲姫が玄関へ行き、扉を開けると…。

「こんにちは。港湾さん。」

「提督？」

鎮守府の提督がいた。後ろに大人の艦娘もおり、大きな笹を持っていた。

「何ノ用…?」

「いや、七夕にちなんで鎮守府で笹を飾って願い事をしようと思ったんですが…。夕張と明石がスペースをめちやくちやにしちやつて…。」

「ドウヤツテ?」

「いやなに、七夕を夏祭りとお勘違いしていたらしく、花火を作っていたらしいんですよ。」

「ウン。」

「それが引火して大爆発。工廠の屋根が吹っ飛んで、その他諸々破片などが飛んで、スペースと一緒に資材や装備がもうめちやくちや。皆んな無傷の無事でしたけどね!はっはっは!笑うしかありませんよ!」
「笑ツテル場合ジャナイ…。」

鎮守府では大惨事が起きたらしい。

「そこで、そんな鎮守府だと縁起が悪いので、ここでやらせてもらおうかと…。」

「クルナ…ト…イツテイル…ノニ…。」

「こんな時だけそのセリフ言わないでください…。あつ、もちろん、港湾さん達も参加して良いですよ。と言うより、招待する予定でしたし。」

「……。」

港湾棲姫が考える。

「…デモ、ホツポヤ他ノ皆ンナガ…。」

港湾棲姫が自分の気持ちを我慢しながら言ったが…。

「七夕ナノ!ヤルノ!」

「ヤル。」

「即答カヨ!他ノ皆ンナドウシタ!」

北方棲姫が望んだ途端に港湾棲姫が即答した。レ級はそんな支部長にツツコミを入れる。

「あつ、そうだ。色々持ってきたものもありまして…。」

艦娘たちと北方棲姫らが庭に笹を立てる中、提督が持ってきた大きな袋をガサガサ探して港湾棲姫に渡す。

「ソウメン…?」

「七夕には縁起が良いらしくて。あつ、あと皆んなにはあとで渡そうと思うので内緒ですが…。」

「…ゼリー、団子…コンペイトウ?」

「はい。ちなんでいるとか。」

「栄養が偏ツテル…。ソナモノ、夕食トシテ逆ニ体ニ悪イ気ガ…。」「いいんですよ。今日くらい。そういう日であり、縁起ものです。それが七夕です。」

「…ン。」

港湾棲姫がそう言われて、そうめんを艦娘たちの分も茹でる。とんでもない量だ。

「…ソレニシテモ、鎮守府全員ニシタラ、嫌ニ人数少ナイケド…。」

「だから言ったじゃないですか。屋根が吹っ飛んで破片がばら撒かれたと。皆んな片付けですよ。はっはっは。」

「…。。：マア、ソレハソウト手伝ワナクテ良イノ?」

「交代交代で来る予定です。」

「…場所ヲ変エル?」

「いえいえ、変えるって言ったって…何処へですか?」

「鎮守府…。流石ニ家ガ狭イ…。」

港湾棲姫の言った通り、少数だとしても艦娘の数はいかにせん多い。五島支部も人が多くて溢れ返りそうだ。

「でも、流石に鎮守府では…。片付けを手伝ってもらうのも悪いですし…。」

「笹ト短冊ト団子ト金平糖ト素麺ヲ ホツポタチノ分マデ持ツテ来テクレタカラ。」

「港湾さん…。」

そんなこんな話して、鎮守府へ行く支度をしていると…。

ピンポーン

「マタ誰カ…。」

ガララララ：

インターホンが鳴り、港湾棲姫が玄関を開けた。

「姉貴！」

「セイマイ、大キナ声ヲ 出スナ。」

「我々兄弟が、港湾水鬼の従兄弟とやらを見に来たぞ。」

「兄者、もしやこの清楚な感じの者ではないのか？」

「あれ〜？ 元帥兄弟もここに？」

「アラ〜、港湾水鬼モイルノ〜？」

「コンニチハ。」

「……。」

港湾棲姫は困った顔をする以外ない。扉を開けた途端、北の国の従姉妹と、南の国の姉がいるのだ。しかも、それぞれ戦っている提督付き……。

「港湾さん、なんか騒がしいけど何か…姉ちゃん!？」

「や。会いにきたよ。かわいい弟に。」

「何してんの!?! 南の方はどうしたの!?! てか男いないの!?!」

「ははは…。」

女提督はナチュラルに提督の頬をつまみ…。

「最後のは余計だったかな。うん〜。」

「いたたたた!! 千切えうって!」

「良いぞ。女提督。大した余興だ。」

「兄者よ、男のいない女提督には逆効果だと思うぞ。」

「あん…?」

女提督は提督の頬を離した。

「コツチハ、七夕ガ良ク見レルラシイカラナ。」

「七夕ダ！」

「女提督サンノ、男探シ…ジヤナカツタ、観光デネ〜。」

「ツイ、憐レニ…。」

港湾棲姫に従姉妹や付き添いたちが言う。しあし港湾棲姫は、後ろで女提督にボコボコにされている筋肉モリモリマツチヨ元帥兄弟に気を取られて耳に入っていない。

「エツト…。ツマリ、七夕ヲシニ来タノ？」

「ウン。」

港湾棲姫はその答えに少し戸惑ったが、それぞれが一応艀装を持っていることに気がつく。

「…シタイナラ、色々準備ガ必要。」

「…？」

「コレヲ片付ケル？」

「ソレダケデ、七夕出来ルノカ？」

「ウン。」

「仕方ナイワネ。艦載機ヲ使ウケド、イイカシラ？」

「コチラモ、少シ危険ナ 手ノ艀装ヲ使ツテモ良イデスカ？」

「ウン。」

「我々兄弟も、この大きな瓦礫を一箇所に集めればよいのだな？」

「兄者よ、すぐに終わらせるぞ。」

「ウン。」

「私たちは、小さな破片とかを運んだり、箒で掃けば良いのかな？」

「ウン。」

それぞれが仕事をして、港湾棲姫が領く。自身たちもレ級たちを引き連れて手伝っている。

「港湾さんも、元帥兄弟さんも、港湾さんの従姉妹さんも、姉さんも、お姉ちゃんも…色々すみません…。」

「…ありがとうございます!!!」

提督は港湾棲姫たちに頭が上がらない。

「今度、港湾さんの家が台風で潰れたら、全力支援しますね！」

「縁起デモナイコト言ワナイ！」

「そんなことを話していると…。」

「眠イ…。」

「五島沖海底姫サンハ イイノニ…。」

五島沖海底姫まで手伝っている。

「ホツポチャンガ、一緒ニ来テツテ…。」

「二緒二七夕ナノ！」

五島沖海底姫は連れ出されたようだ。しかし、北方棲姫が無理矢理頼んだり我儘を言ったわけではない。五島沖海底姫の善意だ。

「ホッポハ、七夕二何ヲ才願イスルノ？」

港湾棲姫が聞く。2回目だが、気にしない。

「前ハ、仲良クナルヨウ才願イシタノ。今度ハ…。」

北方棲姫が悩んでいる。そして、答えはすぐに出た。

「友達ガ沢山欲シイノ！」

「…。」

北方棲姫のお願いに港湾棲姫が心底困ったが、その表情を顔に出さないように抑える。港湾棲姫はそれは叶わぬ願いだと分かっている。港湾棲姫自身、北方棲姫に同年代の友達ができて欲しいと考えているが…。叶うとしても、とても難しいのだ。一方、北方棲姫は同年代の友達が皆無に等しい状態で、憧れている。絶対に叶えたい夢でもあるのだ。そのうちに、北方棲姫は他の艦娘たちに呼ばれて、そちら側を手伝う。

「…ヨク耐エタ。」

「少シ…悲シイナ…。」

「ソウネ…。」

レ級、港湾水鬼、港湾夏姫が港湾棲姫に言う。

「叶エサセテアゲタイ…。」

「気持チハ アルンダガナ…。」

「ドウシテモ 心配ヨネ…。」

「…ウン…。」

そんなことを呟くレ級と支部長たち。そんなことを悩んでいる間に片付けが終わった。

「では、皆さんお待ちかねの七夕に入りましたよう。」

提督が言い、艦娘たちや提督たち、深海棲艦まで喜ぶ。

「短冊に願い事を書く…前に、そうめんが伸びてしまいそうなので、そちらからいただきますしよう。港湾さんが作ってくれたそうめんを。」

提督が言い、艦娘や深海棲艦、提督たちに割り箸とつゆの入った紙

碗を渡された。近くのテーブルには薬味などが置いてある。セルフサービスのようで、中心に麺が置いてある感じだ。

「美味シイノ！」

「ツユモ作ツタカラ。」

「栄養価ハ、アマリ良クナサソウ…。」

「マアナ。」

港湾棲姫たちがそうめんをすすする。

「…アツ！ソウ思ツテミレバ駆逐棲姫、明日帰ルンデシヨウ？荷物ノ支度ハ出来タノ？」

「…。」

港湾棲姫が聞き、駆逐棲姫の手が止まる。

「ノ!？」

「…オイ、初耳ダゾ。」

突然知らされた北方棲姫とレ級。

「エ…言ツテナカッタノ…?」

「…ウン…。」

駆逐棲姫は別れが悲しくなると踏んで、わざと言わなかったのだ。

「ソレニシタツテ、ソノママ黙ツテ行クノハ 酷イダロ…。」

「別レ会スルノ！」

レ級と北方棲姫に言われるが、首を振る駆逐棲姫。そして、思い出しながら呟く…。

「レ級…今マデ、梅雨ノ間ダツタガ 楽シカッタゾ…。」

『カビダー！』

『カビ祭りナノ！』

『カビ…。』

「ソナナ時モアツタナ…。」

「カビナノ…。」

「ホッポチャン…。「オネーチャン」トシテ、慕ツテクレテ本当ニ嬉シカッタ…。」

『オツキイノ！』

『デカイツテ！デカスギルツテ！』

『あらあら〜。』

「アノ時ハ驚イタナ〜。」

「カタツムリサン〜。」

「港湾棲姫ニハ、ピクニックデ色々助けテモラッタ〜。」

『ホラ、ココツイテイルワ。』

『手ガ脂デ汚レタラ、ビニール袋デ拭クノガ 良イノヨ。』

『ホッポ〜。』

「ソナ時モアツタナ〜。豆知識ダナ〜。」

「アツタノ〜。」

「アト、支部デ枕投ゲ大会シタコトモ〜。」

「アー、ソナ時モ〜イヤ！ネーヨ！」

「捏造ナノ！」

「ソレカラ、海デ溺レカケタコトモ〜。」

『ギャー〜！』

『オニギリガ波ニ乗ツテル〜！』

『リヴアイアサnder〜！』

「〜アア、スマン。最後ノハ違ツタ。」

（（最後ノ回想ハ一体〜。））

「トニカク、本当ニアリガトウ〜。」

「駆逐棲姫は丁寧にお辞儀をした。」

「オイ、ソレデイイノカヨ〜。」

「しかし、レ級は認めないようだ。」

「〜元々、ソウイウ約束ダツタ〜。」

「ソウ〜。レ級、ワガママヲ言ワナイデ〜。」

「駆逐棲姫が悲しそうな顔をして、港湾棲姫がレ級を宥める。」

「レ級〜。」

「北方棲姫もレ級を見た。」

「〜少シ熱クナツタ。スマン。ソウダツタナ〜突然デ、少シ驚イタダケダ。駆逐棲姫ノ、感謝ノ気持チハ本当ダシナ。」

「レ級が冷静になった。そこに〜。」

「おや？港湾さんたち、何してるんですか？」

「何ツテ、ソウメンヲ…。」

「もう短冊書いていますけど…。」

「早く言いなさい。ト言ウヨリ、残ツタソウメン…。」

「ああ、大丈夫です。冷蔵しておくつもりですし。すっかり食べますよ。港湾さんたちは戦時中のことを知っていますからね。無駄にはしません。」

「ソウ…。良カッタ。」

提督が深海棲艦たちに短冊を渡す。

「願い事を書いて、あそこにある筐に吊るしてください。」

「大キイ…。」

「結構デカいですよね。後輩の提督から届いたんです。」

「へえ。」

結構大きい。商店街のものより二回りほど大きい。

「書ケタノ。」

「書ケタ。」

北方棲姫と駆逐棲姫が短冊を持ってきた。

「なら、それぞれ高いところに吊るしてくださいね。」

2人がなるべく高いところに吊るす。

「…私ガ去ツテモ、ドウカココノ支部ガ元氣デイルヨウニ…。」

「駆逐棲姫さん、声に出ていますよ…。と言うより、とても良い願い事です。ほっぼちゃんは…。」

「見セラレナイノ！」

「お、おう。分かった。見ないよ。」

北方棲姫の願い事を見ようとしたが、拒否された。それから、深海棲艦ほぼ全員から見られるのを拒否された。

「我々は強くなることだ。」

「流石兄者。俺もだ。」

「男に出会うこと…。」

「港湾さんたちと、こんな関係がずっと続きますように…。」

提督たちが筐に短冊を吊るして行く。艦娘たちも全て短冊を吊るしたようだ。

「さ、吊るし終わった人からこれを受け取って。」

「こ、これは…！ぜりー？と金平糖と団子！」

「美味しそう！」

提督たちに群がる艦娘たち。港湾棲姫たちは事前に渡されているため、座る場所を探すだけだが。

「ココニシマシヨウ。」

「ノ！」

港湾棲姫たちが鎮守府の外階段の場所に座り、天の川を見る。

「七夕ニ何ヲ才願イシタノ？」

港湾棲姫が聞く。

「百戦錬磨ニナルコトダ。」

「レ級ハ、モウ叶ツテイルワネ…。」

「皆シナ、健康デイルコト。」

「戦艦棲姫ハ、大人ネ。」

「新作ゲーム一式…。」

「集積地棲姫ハ、夢ガナイワネ…。」

「痛クナイ、楽シイコトガ続キマスヨウニ。」

「防空棲姫モ、良イ願イネ。」

「従姉妹ト姉ト、ズツトコンナ関係ガ続クヨウニ。」

「姉貴トモツト遊ビタイ。」

「港湾水鬼ト棲妹チャンノ願イ、叶ウトイイワネ。ウウン、叶ウ。キツト。」

「提督サンガ、早く結婚デキマスヨウニ…。」

「流石ニ可哀想デスシ…。コチラハ、緩イ関係ガ 人間タチト続クヨウニ…。」

「姉サンタチモ、スゴイワネ。」

港湾棲姫が一人一人の願いを聞いて、そんな感想を述べる。天の川を見ながらそんなことを言っている…。

「流れ星ナノ！」

「本当ネ。」

大きな流れ星が通過した。

「いえ、あれは彗星ですね。珍しい…。」
「提督?！」

いつの間にか、提督が後ろから天の川を眺めていた。

「今来たばかりですけどね。天の川に彗星って、すごいですね…。」
そんなことを言っていると…。

「…イヤ、アレ落ちテキテナイ?」
「エ?！」

段々と近づいてくる。

「イヤ! 来テルツテ!」
「大災害!」

そんなことを言っているうちに、ものすごく近づき…。

ガサガサ!
「七夕ニ!」

笹の葉に衝突した。

「あ、あれは…。…。ね、願いを叶える特別な彗星ね!」
女提督が言う。しどろもどろだが…。

「つまり、願いを叶えるのか?」
「兄者よ、口を挟まない方が…。」

元帥兄弟は少し遠くにいた。
「……………」

「つまり、短冊の願いが叶うんですよ。」
「断言…。」

港湾棲姫はなんとなく気づいたが、レ級たちはてんやわんやしている。

「さ、ほっぽちゃんの願いは?」

「ドンナオ願イデモ、叶ウノ?」
「叶う。」

「ホツポハ…。」
少し考えた後。

「駆逐オネーチャント、一緒ニイタイ!」
「!」

北方棲姫が大声でお願いした。駆逐棲姫はその言葉を聞いて、嬉しそうな顔をして、少し泣いていた。北方棲姫は、自身の友達が欲しいという最大の願いを捨てて、駆逐棲姫をとったのだ。それほど、駆逐棲姫が大切な存在であるということなのだ。すると…。

「アツ、怒和島出張所カラ メール…。」

港湾棲姫に送られた一通のメール。

「エーット、駆逐棲姫宛ネ。」

「？」

「…言ツテイイノカ悪イノカ…。」

「？」

「言ウワネ…。『駆逐棲姫ガ、居ナクテモ コツチハ人員ガ回リソウ。梅雨時期ハ軽イ鬱ニナルカラ、逆二面倒カモシレナイ。ダカラ、ソツチニ移籍サセタイ。』ダツテ。」

それを聞いて、会場が静まる。駆逐棲姫、まさかのいらぬ子宣言。
「……。」

駆逐棲姫は形容し難い顔になった。

「「良カツタネ（ノ）！」」

「ソレハソレデ悲シイ！」

レ級、北方棲姫を含めた深海棲艦全員が言うが、駆逐棲姫は納得できなさそうな顔。

「叶ツタノ！叶ツタノ！」

「ほらね。叶ったでしょ？」

提督が優しい笑顔で言う。しかし、港湾棲姫は分かっていた。

「…何モ嘘ハ、ツイテイナイノネ。」

「？」

すると…。

「北方棲姫ちゃん。」

「ノ？」

艦娘が北方棲姫に話しかける。

「お願いが叶って良かったのです！」

「良かったじゃない！」

「ウン！」

「ハラシヨ。」

「ハラシヨーナノ！」

「友達より家族をとるなんて、立派なレディーよ。」

「アリガトウナノ！」

北方棲姫と、幼い艦娘たちが仲良さそうに話す。

「…ツイデニ、港湾棲姫ノ才願イマデ叶ツテイルナ。」

「ウン。」

それらを見て、レ級が言い港湾棲姫が頷く。港湾棲姫の願いは、北方棲姫に友達が出来ることだ。

「さ！皆んなで団子とか食べましょう！まだまだ沢山ありますから！港湾さんも手伝ってくれましたし！」

「ウン。」

「美味シイノ！」

「美味だな。弟者よ。」

「こんな風に、男も見つけられたらなあ…。」

「喉ヲ詰マラセナイデクダサイネ。」

「上手イ！」

「美味しいのです！」

皆が美味しそうに食べている。そんな中…。

「…隼鷹、良くやった。」

「提督も、怒和島の提督が後輩なんてね。態々電話してお願いしてたの知ってるよ〜？」

「見られていたか。でも、隼鷹の『彗星』もあんなに発光させて、上手く笹に当たってくれて助かった。」

「良いつて別にさ。…でも、そこまでお礼をしたいなら…。」

「分かってる。明日休みだから、今日は呑みまくれ。」

「うひょー！」

提督と艦娘が話していた。その言葉は港湾棲姫のみに聞こえていて、港湾棲姫は心底、提督を良い人だと思っていた。

その日の天の川は、毎年見るものより、より一層幻想的で綺麗だっ

た。提督も深海棲艦も艦娘も、その天の川を忘れることはないだろう。願いの叶った奇跡を。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

拾玖話 氷ノ味ナノ

ガーーーーー……！！

「ノー！」

ここは『深海棲艦 五島支部』。北方棲姫がキッチンで、目の前の機械を物珍しそうに、ワクワクして動いているところを見ている。

「オ？買ったノカ？」

「ウウン。商店街ノ福引デ。」

レ級もその機械を見て聞き、港湾棲姫が嬉しそうに答える。

「今年ノ夏ハ、暑クナリソウダカラナ……。」

「……一等ノ、エアコンガ欲シカッタケド……。」

ここ、五島支部ではエアコンどころか扇風機すらない。あるのはうちわと扇子だ。

「アレハ何等ダ？」

「……六等。」

「マアマアツテ トコロカ。」

「当タルダケ良イ……。」

「……欲深ジャナイトコロガ、港湾棲姫ラシイナ……。ダガ、エアコンガ良カッタナ……。」

「ウン……。」

「ホッポモ、子供ナノニ エアコンノ無イ部屋ダトナ……。出来ルダケ我慢サセタクナイシ……。」

「……本部ノ経費削減……。」

「ナンダカ、毎年削減サレテルナ……。コノママイクト、ドウナルノカ……。ホッポクライハ、負担シテホシイナ……。」

港湾棲姫とレ級が難しい話をしている。そこに……。

「レ級！オネーチャン！出来タノ！」

北方棲姫がお皿に入っているものを持ってきた。

「……シヤリシヤリシテ、冷タイノ。」

「美味シイ？！」

「ウン……。」

港湾棲姫の問いに、北方棲姫が困った顔をする。

「マア、氷ヲ削ツタダケダカラナ…。」

「氷ノ味ナノ…。」

「ウーン…。何カ足りナカッタノカシラ…?」

港湾棲姫が説明書を読む。が、そんなことは一言も書かれていない。当然と言えば当然だが…。

「…！閃イタノ！」

「…?」

北方棲姫が何か閃いた。

「ペットボトルノ、飲ミ物ノ中ニ 入レルノ！」

「アー、ナルホド。氷ガ大キクテ入ラナイカラナ。」

「手デモ碎ケルケド、飛ビ散ルカラ…。」

三人が納得してしまう。そこに…。

「アレ?カキ氷機?」

「駆逐オネーチャン！」

駆逐棲姫が2階から降りてくる。

「ドウ?部屋…。少シ狭クテゴメンナサイネ…。」

「エ?ウウン。ソナ事ナイ。トツテモ嬉シイ。」

あの七夕の日以来、こちらに所属になった元『怒和島出張所』の駆逐棲姫。

「コレデ、ペットボトルノ氷ハ何トカナルノ！」

「ペットボトル…?」

「ホッポガ天才的ニ考エタンダ。」

「エ?何ヲ…?」

駆逐棲姫は3人から事情を聞く。

「…多分、シロップヲ カケテナイカラ…。」

「…シロップ?」

三人が首を傾げる。駆逐棲姫は丁寧に説明してあげた。

「時々、テレビトカデ…。ブラウン管ダツタ…。」

駆逐棲姫がブラウン管TVをみる。地デジ放送などに繋いでない、アナログしか映らないもの…。テレビをつけて、映るのは砂嵐だ。

「ソウ思ツテ見レバ、エアコンハ？」

「才金ガ無クテ…。」

「……。」

駆逐棲姫がその言葉を聞いて、真面目な顔をした。

「組織ノ給付金…。」

「削減デナ…。」

「削減…。」

駆逐棲姫が少し悲しそうな顔をした。そして、帽子の中をゴソゴソ探して…。

「コレ、少ナイケド。」

「エ…？」

駆逐棲姫から渡されたのは、2万円。駆逐棲姫のへそくりだろう。

港湾棲姫は手を伸ばし…。

「…ウウン。受け取レナイ。」

その駆逐棲姫の持っていたお金に手を添えて、首を横に振る。

「エ？ドウシテ…？」

「ダツテ、駆逐棲姫ノモノ。貴女ガ貯メタンダカラ、貴女ノ好きニ使ツテ。ソノタメニ、貯メタンデシヨウ？」

「……。」

港湾棲姫が笑顔で言い、駆逐棲姫が驚いたような顔をしていた。

「ソレニ気持チハ嬉シイケド、ソコマデ落ちブレテナイ。」

「ソウダ。港湾棲姫ハ、コウ見エテ立派ナ支部長ダ。ドンナ時モ、ドンナ切羽詰マツタ状況デモ乗り越エテ来テンダ。」

「オネーチャンハ スゴイノ！」

レ級と北方棲姫も港湾棲姫を信頼しているのが分かる。

「ネ？」

「…ウウン。」

駆逐棲姫はへそくりをまた帽子の中に入れた。

「シロップ…。」

「……。」

北方棲姫が呟くのを見て、駆逐棲姫は何やら台所へ行く。

「…砂糖ト水、アト鍋使ツテイイ？」

「イケド…。何スルノ？」

「内緒。」

駆逐棲姫は砂糖と水を混ぜて、鍋で煮る。

「出来タ。」

駆逐棲姫がその煮た液体を別容器に入れて、しばらく待つ。

「何シテルノ？」

「シロップ。」

北方棲姫に答えて、かき氷の上にかける。

「食ベテミテ。」

「？」

シヤリシヤリ…

「！」

北方棲姫が一口食べて、目を輝かせた。

「美味シイノ！」

「良カツタ。」

喜ぶ北方棲姫を見て、駆逐棲姫が笑顔になる。

「……………」

「結果ハ良イナラ、万々歳ダロ…。怖イゾ…。ソレニ家ガ傷ツク！」

レ級が、その様子を見ていた港湾棲姫に言う。無意識に手の力が強

まり、鉤爪が柱に食い込んでいた。

「アツ、港湾オ姉サン、食べ…アツ！」

「オネ…！」

駆逐棲姫が無意識に港湾棲姫をお姉さんと言ってしまった。

「べ、別ニ深い意味ハナイ。ソレヨリ、失礼ナコトヲ…。前ノ支部ノク

セデ…。」

「ウウン！イイ！オ姉サンデイイ！」

「ノ!?オネーチャン！」

駆逐棲姫の言葉にすごい反応をした港湾棲姫。先程の顔が嘘のよう
うに輝いている。北方棲姫は取り乱している港湾棲姫を止めようと
しているが…。

「…賑ヤカダナ。」

レ級はそんな三人を遠くからほのぼの眺めている。平和の証拠である。

「ト、トニカク食ベルカ!？」

「顔ヲ赤クシテ可愛イ…。」

「可愛イノ！」

「〜！」

港湾棲姫と北方棲姫が言つて顔を隠す駆逐棲姫。

「食ベルワ。」

「食ベルノ。」

「アツ、頼ム。」

「ワ、ワカツタ…。」

沢山の氷を使つて、駆逐棲姫が港湾棲姫とレ級の2人の分を作つた。そして…。

「「オイシ〜！」」

4人で仲良く縁側に座つて食べる。

「オツ、カキ氷。」

そこに、集積地棲姫がやってきた。

「ドレドレ…。…氷ガナイ…。」

集積地棲姫がシユンとする。しかし…。

「集積地棲姫ナノ。」

「ン…? ホツポカ。美味イカ〜? ソレ。」

「トツテモ美味シイノ！」

「ソツカ。」

北方棲姫に笑顔で返している。北方棲姫に罪悪感を持たせたくないのだから。

「…ハア…。仕方ナイワネ。」

港湾棲姫が立ち上がり、冷凍庫の中をガサガサ探した。

「コレ。」

「コレ？」

港湾棲姫が、冷凍庫から箱を渡す。

「従姉妹ガ送ツテキタ、純氷。向コウデハ、冬ニ作ツテ夏ニ売ツタリシテ資金ヲ稼イデイルカラ。…トテモ美味シイカラ、大事ニ使ツテ…。」
「オ、オウ…。」

集積地棲姫は慎重に氷を削り取った。

「コレクライデイヤ…。」

純氷を削り取ったが、僅かしか作らなかつた。

「ソ〜。ウマイ。」

集積地棲姫はシロップをかけて、美味しそうな、涼しそうな顔をした。

今年の夏は暑くなりそうです。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

おまけ 1

「カビ…。」

北方棲姫がカビのことを考えている。現在、集積地棲姫が絶賛皿洗い中だ。

「ホッポ…。」

港湾棲姫がその様子を見ている。

「ヨソ見シナガラダト、失敗スルゾ。」

「アラ、ゴメンナサイ。」

レ級に言われて、キッチンで作業を開始する。港湾棲姫は毎度お馴染みの赤いチエツク柄のエプロンを着て、レ級は黒い迷彩柄のエプロンを着ている。

「コレハスピード勝負ダカラナ。」

「ウン。」

2人並んでキッチンに立っている。…正確には、隣に皿洗いしている集積地棲姫もいるが。

「…水ガ飛ンデルカラ、モウ少シ勢イヲ 下ゲテクレ。」

「…………。」

返事はしないが、従う。

「…後デオヤツニスルカラ、我慢シロ。」

「…ワカツタ。」

レ級が言い、集積地棲姫が素直に頷いた。

「…随分素直ネ。ドウシタノ？」

「…言ウコトヲ聞ケバ、早く美味シク作レンダロ？」

「…マア…。」

「ホッポガ ガツカリシテイル…。ナントカシテアゲタイ。」

集積地棲姫が言った。

「…貴方モ、素ツ気ナイフリシテ、心配シテイルノネ。」

「…マアナ…。」

港湾棲姫が少し笑顔で言い、集積地棲姫が小声で答えた。

「ソナナコンナデ、下準備ハ出来タゾ。」

「アリガトウ。」

港湾棲姫は出来たものをオーブンで焼く。

「コレデ、後ハ待ツダケ。」

港湾棲姫がそう言つて五分後…。

ジー…

「ドウシタノ？集積地棲姫。」

出来上がるにはまだ早すぎる時間。

「…………。」

「ウン？」

ブツブツ集積地棲姫が呟いていることに気づき、耳を傾けてしまった。

「熱イ…。燃エル…。ギヤアアア…。燃エル…。熱イ…。集メタノニ

…。膨ラム…。」

「…………。」

中に入っているものの気持ちになつてブツブツ呟いていたのだ。港湾棲姫は集積地棲姫の抱えている闇の一部を見てしまった気分になり、すぐさまどこかへ行つた。

「ホッポ。」

「ノ…？」

港湾棲姫が北方棲姫を笑顔で呼ぶ。

「オヤツノ時間。」

「…ノン…。」

北方棲姫がテーブルの椅子に座り、シユンとしていたが…。

「ハイッ。ホッポノ大好きナ『クッキー』。」

「！」

目の前に焼き上がりのクッキーが。北方棲姫の大好物であり、零戦の形（勝手に北方棲姫がそう思い込んでいるだけ）をしているものが沢山あった。

「食ベテイイノ…?」

「ウン。ソノタメニ焼イタノ。」

「イタダキマス！」

北方棲姫はなるべくほんのり温かいクッキーを手に取り、食べる。

「美味シイノ…!美味シイノ…!」

目を輝かせて一口噛み、目を閉じて美味しそうに頬張っている。

「幸せソウ。」

「食ベテイイカ？」

「モチロン。集積地棲姫モ、食ベテイイノヨ。」

「ナ、ナラ…。」

サクサク…

港湾棲姫たちがクッキーを食べる。

「…本当ニ美味シイ…ナンデダ…?」

「タダノクツキート違ウ…。甘イ…。」

レ級と集積地棲姫が食べて、いつもより甘く、美味しく感じる。

「ソレハ、ホッポノタメニ色々シテクレタカラヨ。」

「…ナンカ入レタカ？」

「イイエ。何モ。ホッポノタメニシテクレタカラ、友情デ美味シク感じルダケ。」

「ソウナノカ…?」

「ウン。」

「…友情…カ。」

集積地棲姫とレ級が移動して考えていると、北方棲姫が嬉しそうに2人に話しかけていた。まあ、レ級も集積地棲姫も幸せならそれで良いかと思っていたのだった。

「…砂糖ヲ 多メニ入レテ、水ヲ少ナクシタ？」
「シー。」

しかし、戦艦棲姫に1発で見抜かれた。港湾棲姫は内緒にするように、口に人差し指を当てて悪戯な笑みをこぼした。

『深海棲艦 五島支部』はいつも平和です。

式拾話 海ノ家ナノ？

ミーンミンミンミンミー……！

「暑イノ……」

蝉の鳴き声が響く真夏。五島支部の畳の部屋で、ぐでんとなつてい
る北方棲姫が呟く。ふと、空を見れば大きな入道雲があつた。今回は
てるてる坊主ではなく、風鈴が吊るしてある。

「今日ハ特ニ暑イナ……。ホッポ、大丈夫カ？」

レ級が隣で言い、持っていた団扇で北方棲姫をあおぐ。

「涼シイノ……」

「ダナ。港湾棲姫モ居ナイシナ。本部ニ『ストライキ』シニ行ツタカラ
ナ。」

そんなことを二人で話す。港湾棲姫は駆逐棲姫の件もあつて、本州
にいるらしい。しかも、経費削減のストライキを他の支部長とともに
起こしている真つ最中だ。

「……海ニ行クカ？」

「海……」

北方棲姫が考える。

「……デモ、危ナイノ……」

「港湾棲姫ニハ許可ヲ取ツタ。……許可ダケデ、ドレホド大変ダツタカ
……」

『海？行ツテモイイワ。』

『オー。』

『デモ、決シテ目ヲ離サナイデ。面倒ヲ見テ。言動ニハ、イチイチ注意
シテ。アマリ沖デ泳ガサナイデ。人ノイルトコロニシテ。怪シイ人
ニハ近ヅカセナイデ。声ヲカケラレテモ、反応シナイデ。熱中症ニ気
ヲツケテ。波ニ攫ワレナイヨウニ気ヲツケテ。岩ガ多イ所ニ行カナ
イデ。転バナイヨウニシツカリ手ヲ繋イデ。迷子ニナラナイヨウニ
……。』

『オ、オウ。分カツタ。分カツタカラ……。』

「ソナ感じデ本当ニ大変ダツタ…。」

「オネーチャン…。」

レ級がその後2時間ほどずっと港湾棲姫の話を聞かされていたことを思い出し、嫌な顔をしていた。

「戦艦棲姫モ、防空棲姫モ誘ウシ。」

「集積地オネーチャンガイルノ！」

「…嫌ガルゾ？」

「一緒ジャナイト、ツマラナイノ！」

そうして、レ級たちは今いる支部の仲間を呼び、海へ行つた。集積地棲姫は本気で嫌がったが、レ級に引き摺られて行つた。

「ノ…？」

海に行くと、かつてないほどの人がわらわらいた。若者だらけだ。

「沢山人ガイルワネ。」

「避暑地ダカラナ。」

「秘書地ナノ！秘書ダラケナノ！」

「アツハハ。違ウワヨ。」

バカンスモードのレ級たち。一応、敵とはいえ美少女なため、人の注目を浴びる。しかし、それは必ずしも良いとは言えない。

『うわつ、深海棲艦いんじゃない…。このビーチ大丈夫なのかよ…。』

『あとで暴れたりなんて…。こわい…。』

『敵がいるし…。』

「ノ…。」

地元じゃない人たちにジロジロ見られた後、そんなことを言われるのだから北方棲姫のテンションは駄々下がりだ。港湾棲姫がこの様子を見たらどんな奇行に走ることやら…。そこに。

「レ級ちゃんたちも来たの？」

山田さんが声をかけてきてくれた。

「ドウシテココニ？」

「海の家当番でね…。暑いけど、地元の観光のためだから…。」

「海ノ家ナノ？」

「鎮守府デハ、浜茶屋ダツタナ。」

今頃鎮守府では浜茶屋をやり、提督から金をふんだ…ゴホン、提督にささやかな安らぎを提供しているだろう。

「初めて見る人たちは、多分あなたたちのことを怖がっているんだと思うわ…。貴女達はとつても良い人達なのに…。無知つてやーね。」

「デモ、仕方ガナイノ…。」

「マア、世間ジャ敵認識ダカラ、当たり前ツチャ当たり前ダケドナ。」
水着姿のレ級たちはなんとなく納得する。

「おつ？港灣ちゃんと一緒に暮らしてる子たちじゃねーか！こつちこつち！」

「アツ、前ノオ肉屋サンノ…。」

海の家の中で、肉屋のおつちゃんがいた。その他、商店街やそこに並ぶ店の人たちがいる。海の家がいつの間にか近所さんたちの溜まり場である。

「おう！少し海の家で休んでいてよー、あんまりにも心地が良くて、居座つちまつたんだ。」

「オ店ハ？」

「今日は海に行くから休むって、店に張り紙した。この島で唯一の肉屋がな！」

「オイ、肉屋！」

「アハハツ。アナタ面白イワネ。」

昼間からお酒を飲んでいるみたいで、笑い声が響く。

「待たせたな。酒じゃあ！」

そこに、若い酒屋の息子がビールを持ってきた。

「おう！にーちゃんあんがとな！」

「いいってことよ。うちも儲かるからな。…あん？」

酒屋の息子がレ級たちを見る。

「あ、あ、あ、あんたら…！人類の敵…！化けm…。」

ゴツン！

「失礼なことを言ってるじゃねえ！」

「あつたあ！」

酒屋の息子が何か言いかけたところで、酒屋のおっさんが拳骨をくらわせた。

「港湾さんたちの連れだよな？すまん。うちのバカ息子が…。本州にいて、勉強して帰ってきたばっかなんだ…。ほら！お前も謝れ！」
「す、すみません…。」

酒屋のおっさんが頭を下げる。息子の頭を掴み、無理やり下げさせていた。

「なんで親父は…。」

「馬鹿野郎！同じ町民に向かって化け物とはなんだ！それに、あちらのお方はうちの常連だぞ！」

「え、ええ…？」

レ級は苦笑いだけしている。

「あ、あなた…歳は…？」

「オイオイ、初対面ノ女性ニ歳聞クカ…？普通…。マアイケド。○

○歳ダヨ。」

「詳しく聞こえないな…。」

「ダカラ、○○歳ダツテ！」

「いや、なんか…。よくわからないプロテクトがかかっているようだ。

○○しか聞こえない…。」

「勝手ニシロ。」

レ級が冷たくあしらう。

（なんだコイツ…。生意気な…。そして、この胸の奥から湧き上がるこの怒り…。）

「お、おい…。お前…。」

「ア？ナンダ？」

酒屋の息子がフツと、良い顔をする。

「もつと罵つてください！」

「ナンダコイツ！今マデニ会ツタ奴ノ中デ一番怖い！」

「ああく！その罵倒！素晴らしい！もつとおなじやす！」

「キモツ！来ルナ！アツチ行ケ！」

「ああく！」

「……。」

レ級はドン引きした顔で心底怖くなった。もちろん、酒屋のおっさんもドン引きしている。

「……まー……。こんな息子だ……。これからどうぞよろしく頼む。」

「頼マレタクナイ！」

「おおく！愛おしの我が女神様！もつと……！もつとお言葉を……！」

「ヤメロ来ルナ！気持チ悪イ！ホツポ！向コウヲ向ケ！目ニ毒ダ！」

「レ級……。変態ナノ……？」

「違ウ！断ジテ違ウ！オイ！集積地……」

カシヤ！カシヤ！

「オイ！何撮ツテンダ！」

抱きつかれそうになり、逃げているレ級は集積地棲姫に助けを求めようとしたが、面白がつて携帯でその様子を写真で撮られていた。

「イイ加減ニシロ……！」

「おつ、やべえ！レ級ちゃんが酔った時みたいに暴れっぞ！」

「おい！ボードだせ！俺あ、次こそあ戦艦ちゃんが止めると賭けるぜ！」

「バカ言え前回の決着がまだだ！」

ワーワー！

「賭ケテルシ……。」

肉屋のおっちゃんがボードを出すように指示して、酒屋のおっさんが賭け金やら倍率を計算する。まさに地元ならではの賭けである。戦艦棲姫がその様子を見て、この人たちには心底敵わないと少し笑顔で実感した。

「おや？戦艦ちゃんは止めないの？」

「エー……。ダツテ……。」

「おいおいおい、戦艦ちゃんがやってくんなきや俺あ賭けに負けちまうだよー。」

ブーブー

「ブーイング!?」

魚屋のおじさんが言い、地元の……主にいい歳したおじさんたちが

ブーイングする。

「戦艦ちゃんは強いんだから、やってくんなきや！」

「じゃないと、賭けにもならないぜ。」

「ソウダソウダ。」

「集積地棲姫！アナタハ コツチ側デシヨウ!?」

「エー…。デモ、モウ戦艦棲姫ニ賭ケチャツタシ…。」

「イツノ間ニ!?」

集積地棲姫は戦艦棲姫に賭けていたらしい。

「おっと、ほっぽちゃんはダメだぜ。まだ早いぜよ。」

「ほっぽちゃんにやあ、ちと早いかねー。」

「そうだべく。」

「ガーン…：ナノ…。」

「ホッポ、ダメヨ…。」

北方棲姫は流石に年齢もあつて止められた。

「3分以内に終われば倍率は3倍に跳ね上がるぞ！」

「艤装なしだと2倍だべー！」

「モウ賭ケテルシ！」

「俺はやっぱり、大穴の港湾ちゃんに…。」

戦艦棲姫がこのままだと更に大変なことになると知り、急いで暴れているレ級を止める。

「レ、レ級！ヤメナサイ！」

「ダツテコイツハ危険ダ！」

「ああく！この踏まれ心地…！最高だ…！」

「…ホラナ？」

「…。。ト、トニカク！」

戦艦棲姫はなんとか、レ級と酒屋の息子を引き離す。レ級は離れていても蹴りを入れようと空を切り、酒屋の息子は蹴られようと追ってくる。防空棲姫はそれを見て大笑いしているだけだ。

「ほら！終わったぞ！」

「いいや！まだだ！決着は終わつとらんぜよ！」

「どちらかが気絶するまでだろう？蹴られすぎて気絶するうちの息子

か、蹴り疲れて気絶するレ級ちゃんかの。」

「ヤレヤレー！」

「アナタ達モ手伝イナサイ！」

外野が盛り上がっていた。もはや海の家はおろか、酔った者たちの酒場だ。そこに…。

バアアアアン！

いきなりドアが蹴破られる。

「アノ仁王立チシタ姿…！港湾…」

「あんたら…！真つ昼間から酒飲んで…店ほったらかしてなんのつもりだい…？」

「アツ、違ツタ…。奥サンタチネ…。」

酒屋のおっさんの奥さん、肉屋のおっちゃんの奥さん、山田さん（おばちゃん）が仁王立ちしていた。

「え、えつと…。ほら！あれだ！親睦会？みたいなの…。」

「そ、そうだぜよ。」

「イヤ、単純ニ酒飲ンデ賭ケゴトシテ楽シンデタゾ。」

「集積地ちゃん!?裏切っちゃった!?!」

「ほーう…。お前さんがた…。どうなるかわかってるわよね…？」

「ひえええええ！」

そして、おっさんたちはその場で奥様方に正座させられ、ガミガミ説教をされていた。この日から、酒屋の息子の性癖がおかしくなったのは言うまでもない。

ザザー…ザザー…

波打つ浜辺。

キョーキョーキョー…

カメモが鳴いている。

ミヤーミヤーミヤー…

ウミネコが鳴いている。

「ノーノーノー。」

北方棲姫が鳴いて…。

「ホツポ？ドウシタ？」

「オ話シテイルノ！」

「へく。話セルノカ？」

「ウン！」

「本当？」

「ウン！」

「ナルホド…。ナラ、アノ『カモメ』ハ 何ヲ話シテイルンダ？」

レ級が北方棲姫になんとなく聞いた。

「アレハ…。難シイ話ナノ…。」

「ドンナ？」

「現代日本ノ経済デ、物価ガ値上がりシテ、インフレーションガ起キテ、人間ノ才金ガナクナツテ、ゴ飯ガ貰エナイノ…。」

「??？」

遊び半分だと思っていたレ級はなんの話だかさっぱり訳がわからないよ…。

「…アノ『ウミネコ』ハ…。」

「…アレモ難シイノ…。」

「……。」

「地球温暖化ニヨル、温水化ヤ海面上昇ニヨツテ引き起こサレル、ゴ飯ヲ食ベラレルカドウカノ問題ト、住ム場所ガ減少シテ 数ガ少ナクナツテ、生態系ガ崩レルカドウカ 心配シテイルノ。」

「??？」

レ級は全くわからない。

「…マア、トニカク…。」

レ級は北方棲姫の頭を優しく撫でる。北方棲姫は嬉しそうに、幸せそうに目を閉じて撫でられている。

「ゴ飯ノ問題ツテコトカ…。」

「ノ？」

レ級はどれだけ考えても、その答えしか出て来なかった…。

「…レ級？何ヲ話シテイルノ？」

「ウツフフ…。楽シソウネ。」

戦艦棲姫と防空棲姫がやって来た。

「ゴ飯ノ話ダ。」

「ゴ飯ノ話？」

『カモメ』達ガ話シテルツテ、ホツポガ言ツテテナ。」

「?。：ア、ナルホド。ホツポチャンハ、動物トオ話出来ルノネ。」

戦艦棲姫も遊びだと思っている。

「鳥ノ頭ナンテ、ソシモノヨ。」

「ダヨナ。」

レ級…。

「トコロデ、ナンカ飛ンデルナ。」

「イタノカ…。飛ンデル？」

気配を完全に消していた集積地棲姫が、空を見上げて呟く。

「ア、アレ艦載機ダロ。鎮守府デハ演習モ盛ンダナ。」

「艦載機カ…。嫌ナ思イ出シカナイナ…。」

「…シヨツチュウ燃ヤサレテイルカラナ。」

そんな呑気なことを、向かって来る艦載機の連隊を見ながら呟く。

「…トコロデ、ソロソロマタ『イベント』ダガ、呼バレテナイノカ？」

「…ドウダツタカ…。」

「郵便受ケトカ、確認シタハウガ良イゾ。」

「今度確認シテオク。」

「今度ツテ…。イツダヨ。」

「今度。」

集積地棲姫はうるさいなど、嫌な顔をしていた。

「…。」

呑気にサングラスをかけてパラソルに寝転がっている集積地棲姫。

ふと、レ級が艦載機を見た。そして、集積地棲姫がバカンスモードだ

ということに気がついた。

「…集積地棲姫。」

「ナンダ？」

「…。イヤ、ナンデモナイ。少シ、ホツポト一緒ニ泳イデ来ル。」

「ノ？」

「アー、ソウカ。頑張レ。」

集積地棲姫は一瞥もせず、手を振るだけだ。レ級と北方棲姫は少し離れた場所に行った。

「……。ワタシタチハ、トイレ行ツテ来ルワネ。」

「……。」

「アー、ソウカ。頑張レ。」

戦艦棲姫たちも避難……じゃない、少し離れたトイレへ行った。その後、爆音が聞こえたのはいうまでもない。

「オー。綺麗ニ焼ケタナ。日焼ケカ？」

「……白々シイコト言ウナ……。」

レ級が帰って来たのは音がしなくなった後だ。辺りはヒツチャカメツチャカである。

「……知ツテタダロ。」

「イヤ、ナンノコトダカ。艦載機方来ルナンテナ。ハハハ。」

「誤魔化スナラ、目ヲ泳ガスナ！モット上手ク誤魔化セ！」

集積地棲姫がレ級に色々言っているとそこに……。

「やっぱり、集積地さんに……。大丈夫。ちゃんと謝れば、きっと許してくれるわ。」

「は、はい……！」

二人の艦娘が走ってくる。

「ご、ごめんなさい……！」

着いた早々艦娘の一人が謝ってきた。

「……デ、今回ハ？」

「地中海の集積地棲姫IIをやっつけに行こうとしたんだけど……。」

「シタンダケド？」

「わ、私が間違えてしまつて……。」

「少し、怖がつて慌てちゃつたみたいで……。」

一人の艦娘が頭を下げて、もう一人の艦娘がやれやれと、一人前のレディーらしくないと言う。

「オウオウオウ、テメー。新入りカ？随分トヤツテクレタジャアネエ

カ。」

『アメリカ』ノ軽空母…新入りカ？」

「ご、ごめんなさい！」

ポヨンっ

艦娘が謝り、たわわな胸部装甲が揺れる。集積地棲姫はその胸部装甲が嫌でも目に入る。

「…新入り、名ハ？」

「は、はい！」

ポヨンっ

頭を上げた時も揺れる。

「My name is Gambier Bay…。」

自身の胸に手を当てて、自己紹介をする艦娘。

「集積地棲姫、ステイステイ。ヤメロヤメロ。」

「オンドレア！ソノタワワ実ツチュル胸部装甲デナンデモ許シテモラエント思ツタラ大間違イヤ！イテコマスゾゴラア!？」

「ひ、ひいいい！」

「集積地棲姫、何言ツテイルノカ意味ガ不明ダ。冷静ニナレ。」

集積地棲姫から別の私怨が見える。艦娘は訳がわからずに恐れているままだ。

「ドウシタノ？」

「集積地棲姫ガ…。」

やってきた戦艦棲姫に、レ級が説明した。

「ヤツテシマッタコトハ、仕方ナイワ。今度ハ気ヲツケテネ。」

「は、はい！」

「ほら、深海棲艦は優しい人たちだから。」

「うん！」

「優シイッテ…。アリガトウ。」

戦艦棲姫が笑顔で言う。集積地棲姫は後ろでブツブツ言っているが…。

「あ、あの…。」

「…ンダヨ。」

「集積地棲姫さん本人にも、謝らなくちやって…。」

「…ソウカ。」

「ごめんなさい!」

艦娘が名一杯頭を下げた。

「…結構痛カツタゾ。シカモ、『パラソル』ハ台無シダシナ。…デモ、マア…。…イイ攻撃ダツタ。」

「ほ、本当!」

「ソウダ。何度モ言ワセルナツテ…。」

「やったあ!」

ポヨンっ

「……。」

艦娘が嬉しさのあまりジャンプして、そのたわわな胸が大きく揺れてしまった。

「…ヤッパソノ胸許セネエ!」

「ベイ!」

「集積地棲姫、ステイステイ。」

レ級が集積地棲姫を止める。北方棲姫はもう一人の艦娘と話していた。カモメやウミネコの話だろう。やはり、艦娘もよくわかっていなかったが…。

「あつ、そう思ってみれば、今度鎮守府でお祭りがあるんだけど…。」

「オ祭りナノ?」

「祭り?」

「うん。流石に、五島の人を招待するのは今の時期アレだけど、深海棲艦の人たちなら別に大丈夫かなって。」

「大丈夫ナノカ…。一応敵ナンダガ…。」

「オ祭りナノ…。」

「今度お祭りするから、来ない?つて話よ。」

「ウーン…。ソウイウ話ハ、支部長テアル港湾ガ決メルカラナ…。今ハソノ話ヲ承諾出来ナイナ…。」

「そう…。でも、一応待ってるわ。どっちでも、一応司令官に連絡してね?」

「アア。伝エテオク。」

「じゃあ、待ってるわよ！」

「さ、さようなら！」

「ジャアナ。」

「サヨナラナノ！」

二人の艦娘は鎮守府へ戻って行った。

「ナンテ、コトガアツタンダ。」

「ソウ…。留守ニシテイテ、ゴメンナサイネ。」

「イヤ、別ニ気ニシテナイ。」

夜、帰ってきたレ級と港湾棲姫が、コタツ台で話す。

「ソレヨリ、『ストライキ』ドウダツタンダ？」

「完全勝利。」

「ソウカ！」

「給付金ガ大幅ニ上ガツタワ。」

「オオ！コレデ、ホッポニモ楽サセテアゲラレルナ。」

「辛イ思イモシナクテイイヨウニ。」

二人とも、幸せそうな笑顔で話す。

「鎮守府デノ祭り、ドウスル？」

「ソウネ…。ホッポヤ、他ノ皆ンナガ行キタイナラ、行クワ。」

「マ、イツモ通りカ。」

「エエ。」

「キット、行キタイツテ言ウゾ。」

「多分ネ。」

二人して、北方棲姫のことを思い出して、ふふっと笑う。

「サテト、今日ハモウ寝マシヨウ。モウ遅イシ。」

「ソウダナ。」

「歯磨イタ？」

「アア。…オヤスミ、港湾棲姫。」

「オヤスミナサイ。レ級。」

そうして、港湾棲姫のいない一日の夜が終わるのだった。

港湾棲姫は支部の日記をつけて、北方棲姫の隣で眠り、レ級は祭りについて考えながら、いつの間にか寝てしまった。五島支部の夢はきつと良い夢を見れるのだろう。安心して眠れるのだから。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

式拾壹話 才祭りナノ！ 前編

ドンドン！

ピーピー！

「オー！」

鎮守府の外まで聞こえる賑やかどんちゃん騒ぎ。お祭りだ。最近の流行り病のせいで、五島の地元民による神社のお祭りがなくなってしまったから、鎮守府の艦娘と深海棲艦だけなのだ。

「あの一……。提督なんすけど……。ちよ、閉め出すのヤメテ……。ねえ、聞いている？」

そう、だけなのだ。

「えー。だって、提督さん男っぽい。ここは、女の子だけでやるお祭りっぽい。」

「男っぽいんじやなくて、男なの。でも、心は乙女よ。」

「気持ち悪いっぽい……」

「どうすりゃいいんだ……」

提督が閉め出されている所を、港湾棲姫たちが見て、なんとも形容しがたい顔をしている。

「オネーチャン、ナンカ可哀想ナノ……」

「ソウダナ……。捨テラレタ犬ミタイダ……」

「惨メスギル……」

本来なら敵である、深海棲艦たちに同情される。

「ホッポ、ドウシタイ？」

「仲良クシタイノ。」

「ウン。分カツタ。」

北方棲姫が答え、港湾棲姫が艦娘と話をする。

「なら、提督さん一名、特別に入れてあげるっぽーい！」

「ありがとうございます……。港湾さん……」

「才礼ハホッポニ。：トイウヨリ、イツモコンナナノ……？革命起キテナイ……？」

「いえいえ、そんな風にからかいあえるほど、仲が良いんですよ。上司と部下では無く、あくまでも友人的な扱いです。」

提督が苦笑いして、港湾棲姫たちが疑う顔をした。

「屋台…才祭り…。」

「屋台カ。別名、ボツタクリノ店。」

「集積地棲姫ハ、ドウシテソクナニ心ガ荒ンデルノ…?」

艦娘が屋台をやっている。まあ、値段は少々張っているので少し高い。北方棲姫はワクワクして、レ級も少し楽しめたような顔だ。集積地棲姫はいかにも面倒そうな顔をしている。無理矢理連れてこられたのだ。

「光ツテルノ…！イイ匂イガスルノ…！」

北方棲姫はお祭りで目を輝かせている。まあ、屋台も客も艦娘だけだが…。

「先月浜茶屋で金を取られたのに、また取られるのか…。」

「絞り取ル気ネ…。」

提督は財布の中身を見る。

「…この先3日間飲まず食わずで…。…行けるか…!？」

「…ソコマデ落ちブレテルノ…!？」

港湾棲姫は、提督の発言に驚愕した。

「オネーチャン！タコ焼き！タコ焼き！」

「オ、落ち着キナサイ。ホッポ。」

港湾棲姫の手をぐいぐい引っ張る北方棲姫。

「いらつしゃーい。て、ほっぽちゃんやんけ。」

「タコ焼き！タコ焼き！」

「アツ、ホッポ、払ウカラ…。ニツ。…イヤ、ウーン…。」

港湾棲姫が連れてきた人数を見る。

「…五ツ。」

「五つね。」

いつの間にかいない戦艦棲姫と防空棲姫を除いた、集積地棲姫、駆逐棲姫、レ級、北方棲姫、そして自分の分を購入した。

「ほな、熱いうちに食べて〜な。」

「アリガトウ。」

艦娘に熱いたこ焼きを渡されて、配る港湾棲姫。

「あつ！司令はん、うちで食つてく？」

「いや、もう金がない…。黒潮、奢って？」

「儲けがへるやん。」

「辛辣う…。」

「じゃあない。ちよつと待つとつて。」

そうは言いながらも、くれるのだから根は信頼しているのだろう。

「ホッポ、火傷シナイヨウニネ。フーフーシテ。」

「フー！フー！」

「燃エル！燃エテシマウ！」

「チャント冷マサナイカラ…。」

「出来立テハ美味イナ。」

「たこがない…。」

港湾棲姫は北方棲姫に注意をして食べさせ、集積地棲姫は口の中が火傷している。駆逐棲姫はそれを心配して、レ級はたこ焼きの感想を言っている。提督は、どうやらハズレを引いたらしい。

「ところで夕立。ずっと後ろをついてきて、たこ焼き勝手に食べてるけど出店してたんじゃないの…？」

「夕立のお店はこつちつぽい。港湾棲姫さんたちも、来るつぽい。」

艦娘が港湾棲姫たちを案内する。

「あつ、いらつしやい。提督と…港湾棲姫さんたちだね。」

「時雨、店番ありがとうつぽい。」

艦娘がもう一人の店番をしていた艦娘の隣に座る。

「エツト…金魚スクイ…？」

「ヤリタイノ！」

ビニールプールに水が貼ってあり、茶碗と何かをすくうようなポイがある。

「金魚…？それにしても、何もいないけど…。」

「ちつちつち…。夕立は、そんな金魚なんてマンネリ化したもの出さないつぽい。」

「エ？ナラコレハ…。」

「カブトガニすくいだよ。あつ、もちろん国産は天然記念物で絶滅危惧種に指定されているから、外国のだけど…。」

「密猟…。」

水槽で泳いでいるのはカブトガニだ。

※しつかりと正規ルートで購入しています。

「一回百円っぼい。」

「中々高いな…。どれ、やってみよう。」

提督が艦娘にポイを渡される。

「こう見えて、俺は昔金魚すくい得意だったんだ。」

「ダツタ…ネ。」

「ノ…。」

「ここだっ！」

提督が一番小さなカブトガニをすくう。しかし…。

「破ケチャツタノ…。」

「…流石、昔カラ『網破リ』ト言ワレテイルダケハ アルワネ。」

「…もう一回だ。」

「百円っぼい。」

またポイを渡される提督。

「俺は昔、金魚すくい得意だったんだ。」

「モウ聞イタノ…。」

しかし、何度挑戦しても一匹もすくえない。

「…やめよう。これ以上は本当にまずい。」

「やめるっぼい？」

「ああ。それに、気づいてしまったな…。」

「ぼい？」

「そんなに沢山いるのは良いが、飼えるのか？」

「…ぼい？」

『カブトガニ』ハ成長シキルト、70cmクライニナルミタイダシ…。」

「ソモソモ、飼育スルニモ大変ダシナ。」

「沢山ノ餌が必要…。」

「…。」

それを聞いて、艦娘が黙る。もう一人の店番していた艦娘の顔は世話を押し付けられるのではないかと真っ青だ。

「…提督さんにやった分あげるっぽい。6回やったから…12匹っぽい。」

「やめい！そんなにいらぬし、飼えない！しかも、一回2匹計算だし…。世話できる数は精々3匹だ！」

艦娘に押し付けられそうになるが、回避する提督。艦娘は焦った顔でこちらを見る。

「ヤリタイノ！スクイタイノ！」

「ホ、ホッポ、コレハ…。」

「ダメ…ナノ…？」

「ウツ…。」

北方棲姫に潤んだ瞳で見つめられる。しかし、港湾棲姫は五島支部の支部長。飼うことにより、レ級たちにも世話を頼むことになってしまっただろう。しかもこれの世話となれば、お金もかかる。それに、そもそも生き物自体飼ってはいけない。上層部になんと説明すれば良いのか…。そして、港湾棲姫は決断した。

「…一回…才願イ…。」

「港湾棲姫!？」

「ヤッタノ！」

レ級は港湾棲姫に驚き、北方棲姫は喜ぶ。港湾棲姫は北方棲姫の瞳に完敗した。艦娘たちは少しでも減ることに安堵していたが…。

「スクウノ！」

「頑張るっぽい！絶対にとるっぽい！やれるっぽい！」

「うん！いけるよ！頑張つて！うん！」

北方棲姫はポイを持って張り切っている。艦娘たちは少しでも減らすためにバンバン応援している。後ろで、港湾棲姫はレ級に叱られていたが…。

「ノンッ！」

掛け声と共に、カブトガニをすくう北方棲姫。

「初めて一匹救えたっぽい！おまけするっぽい！」

「やったね！すごいよ！まだ取れる！」

「オマケハイラナイ。」

「たった一回で…。」

北方棲姫がカブトガニを1匹すくう。

「ノン！ノンッ！」

立て続けに2匹すくった。そこで…。

「破レチャツタノ…。」

「3匹！3匹っぽい！」

「さっさと袋につめよう！」

艦娘二人は返却されないように、すぐに一つの袋に入れる。

「汚イワネ…。」

「ソレハナイ。集積地棲姫モ、ソナ歪ンダコトハシナイ。」

「誰ガ歪ンデルツテ？…マアイイ。確カニ、最低ダ。」

「ウワー…。ソレハナイワ…。」

港湾棲姫たちから激しいブーイング。

「わかったよ…。別々の袋に入れば問題ないね…。」

「ソウイウ問題ジャ…。」

艦娘たちは別々の袋にそれを入れる。

「デモ、1匹ダケデ…。」

「さ、ほっぽちちゃんがすくったっぽい。欲しいかどうかはほっぽちやんが決めるっぽい。」

「アツ、汚イ。」

悪い顔をする艦娘に、レ級がジーツと汚い物を見るような目で見て

いた。

「…。」

「…。」

北方棲姫は袋の中で泳いでいる、カブトガニを見る。

「…2匹、アゲルノ！」

「え？」

北方棲姫は艦娘に、それぞれ渡す。

「ど、どうして…。」

「応援シテクレタカラ、トレタノ！ホツポ1人ダケノカジヤナイノ！」
北方棲姫は満面の…汚れの一切ない光り輝く笑顔で言う。

「え…あ、うん。…ありがとう…。」

「…ありがとうっばい…。」

その悪意のない綺麗な笑顔を見て断ることも出来ずに、死んだ目で受け取る艦娘だった。残り、116匹。

「カブトガニ…。」

北方棲姫は袋の中で、元気に泳いでいるカブトガニを見る。

「うわー…。寿命、25年は生きるみたいですよ…。」

「エエ…。」

後ろでは、調べた提督と困惑した顔の港湾棲姫がいた。そこに…。

「射的！射的が君を呼んでいるー！」

「あの出店の呼びかけすごいなあ…。」

「射的ナノ？」

「ホツポ、マタ…。」

北方棲姫が釣られる。

「いらっしやい！射的だよ！」

「姉さん、少し声を抑えて…。」

艦娘二人で切り盛りしているみたいだ。

「射的？」

「あそこにある景品を、この銃で撃ち落とせば景品を貰える仕組みだよー！」

「オー。」

「一回百円！…でも、初めてみたいだから、一回無料！やってく？」

「ヤツテミタイノ！」

「はい！銃と弾！」

艦娘に渡されるおもちゃの銃とコルク栓。港湾棲姫は、北方棲姫が銃で指を挟まないかしつかりと見ていた。

「ノ！」

パンツ

流石は子供で北方棲姫とは言え深海棲艦。真っ直ぐ柔らかかそうなぬいぐるみ目掛けて飛んで行く。しかし…。

カンツ

「「カンツ!?!」」

「あちやく。落ちなかったね〜。」

「ノン…。」

「でも、まだあと4個弾があるよ!」

艦娘が元気づけようと励ます。

「イヤイヤ、ヌイグルミデ ソノ音ハオカシイダロ!」

「おい川内、本当に不正とかしてないんだろ?」

「してないって〜。神通に準備してもらったんだから…。ね?神通。」

「え…あ…。は、はい。」

もう一人の艦娘が北方棲姫たちが来るとは予想外だったとでも言いたそうな顔をしていた。つまるところ、焦った顔だ。

「取レナイノ…。」

もう弾が一個しかない。

「…ホツポ、貸シテミロ。」

「レ級…。」

北方棲姫はレ級に渡す。

「…イイカ?コウイウノハナ…。引イテカラ弾ヲツメテ…。」

ググググ…

「ノ?」

レ級が景品のぬいぐるみを狙う。

「弾道卜風ヲヨム…。」

一切手振れのない照準。

「落チ着イテ、引キ金ヲ引クト…。」

ボンツ!

「「ボンツ!?!」」

ガァン!

「「ガァン!?!」」

ゴトツ!

「『ゴトツ?!』」

「スゴイノ!」

レ級が1発でぬいぐるみ?を落とした。

「な、なに?今の音…。」

流石に艦娘も不審に思ったらしく、落ちたぬいぐるみ?を拾うが。

「重っ!?何これ!？」

艦娘が持ち上げ、異変にすぐに気づいた。

「これ、鉄の塊入ってるじゃん!神通!」

「ご、ごめんなさい。姉さんがお金に困っているのを見かけてつい…。」

「ついじゃないよー!詐欺だよ!これ!今までやった子たちに謝らなくちゃいけないじゃん!それに、今回は駆逐艦の子達も楽しめるようにしようとしたのに!」

艦娘がもう一人の艦娘に言っている。

「ごめんねっ!今度はしっかりしてるから、もう一回ほっぽちゃんがやって!あとで、今までやってた子たちにお金返すから…。」

「ノ?」

艦娘に、さらに一回分渡される。他の景品は全部取り替えたようだ。

パンツ

「ノンツ!」

ポスツ

今度はしっかりしたぬいぐるみの音がしたため、本物だろう。

「ウーン…。倒レナイノ…。」

「マサカ、マタ『インチキ』ヲ…。」

「違うよ!今度は本物!」

また不審がられたため、艦娘が言う。

「ホッポ、レ級ノ言葉ヲ思イ出シテ…。」

「ノ…。」

北方棲姫はレ級と同じように準備して構えた。

「風…。」

北方棲姫は目を閉じた。そして…。

「ノンー！」

ボンツ！

スパァン！

ポトリ

「ヤッターノ！」

景品が落ちた。

「じゃ、これはほっぴちゃんの景品ね！」

艦娘に景品のぬいぐるみをもらう北方棲姫。

「喜ンデルナ。」

「ソウネ。」

「…デモ、アンナノ何ガ良インダロウナ…。」

「…ソウネ…。」

北方棲姫がとつたのはホヤのぬいぐるみだった。顔もない、本当のホヤのぬいぐるみ。ちよつと細かく作られている。レ級と港湾棲姫は北方棲姫の好きなものとは何かと考えるのだった。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

式拾式話 才祭りナノ！ 後編

「ワタアメ！ワタアメ！」

「ホ、ホッポ！落ち着イテ！」

そでをグイグイ引つ張る北方棲姫に、港湾棲姫が注意する。ここは鎮守府の人たちと深海棲艦だけのお祭りの真つ最中だ。

「ホッポ、オ小遣イアゲルカラ…。」

「オ小遣イナノ？」

港湾棲姫が北方棲姫に千五百円渡す。

「オー！」

「大事二使ツテ。」

「分カツタノ！」

北方棲姫はお金を、持ってきた一匹の艦載機の口らしきところに入る。艦載機はめちやくちや嫌がつていたが…。そこに…。

「あつ、ほっぽちゃん来てたのです？」

「電ナノ。」

「一緒に回るかい？」

「回…ル？」

「一緒に見て行かない？つて意味よ。」

「行キタイノ！」

「司令官、一人前のレディーにお金ちょうだい？」

「先々週にあげたじゃん…。使っちゃったの…？まあ、あと五百円ね…。」

小さな艦娘たちが群がる。北方棲姫の友達的な関係だ。

「オネーチャン、行ツテクルノ！」

「…ウン…。」

北方棲姫が笑顔で手を振って、港湾棲姫が手を振りかえす。その時の顔は少し、もの寂しそうだった。友達が出来たのは嬉しいことだ。しかし、少しずつ姉離れしてしまうのだろうと思うと…。

ポンッ

「港湾、良クヤツタナ。」

「ウン。良クヤツタ。」

レ級と駆逐棲姫が港湾棲姫の肩をたたいて言う。

「ソウ思ウ…?」

「フフ…ホツポチャンノ、コレカラノコトヲ考エルトネエ…。」

「イツカハ、離レナケレバナラナイ時代ガ来ルワ。ソレハ、必ズシモ良イコトダケハ言エナイ…デモ、ソノ時ニ正シイ道ヲ歩メルノナラ、良クヤツタト思ウワ。」

いつの間にか、後ろにいる防空棲姫と戦艦棲姫が言った。

「ソウネ…。…トコロデ、二人トモオ祭りヲ スゴク楽シンデイルミタイダケド…。」

港湾棲姫が二人を見た。お面を頭の横に、フランクフルトと焼き鳥、果てまでは焼きとうもろこしまで持っていた。

「アソコ、休憩場ミタイ。ソコデ一杯ヤリマシヨウ?」

「ソウダナ。久々ニ酒ガ飲ミタイ…。」

「フフ…レ級飲ムンダア…。ヘーエ…。飲ムンダア…。」

「アツ、ホツポニ言ワナイト…。」

「ナラ、行ツテクル。マダオ酒飲メナイシ…。」

「エツ!? 駆逐棲姫何歳ダ!?!」

「18。」

駆逐棲姫はお酒を飲めないため、港湾棲姫たちと離れる。港湾棲姫たちは艦娘と、いつの間にかいた提督に混ざってお酒を飲んでいた。

「イタ。」

駆逐棲姫が北方棲姫を見つける。五人で、仲良く話していた。

「ホツポ。」

「駆逐オネーチャン!」

「二駆逐おねーさん。」

「チヨ…。ヤメテヨ…。」

「顔赤イノ!」

「可愛いのです!」

駆逐棲姫は満更でも無さそうに顔を隠した。しばらくして、北方棲姫に事情を説明した。

「…ト、言ウワケ。」

「才酒…。駆逐オネーチャンハ、飲マナイノ？」

「未成年ダカラ。」

「ナラ、一緒ニ行クノ！」

「…ダケド、港湾棲姫ニ何ト言ワレルカ…。」

「別ニ良イノ！」

「ダガ、友達ハ…。」

「駆逐棲姫さんなら…と言うより、港湾棲姫さんの所の人なら、大歓迎よ。」

「ハラシヨ。」

「そうよ。いっぱい頼っていいのよ！」

「歓迎するのです。」

そして、北方棲姫たちと混ざる駆逐棲姫。そして、様々などころを回った。お面屋やスーパールボールすくい、焼きとうもろこしや焼き鳥を食べて、お好み焼きも買った。そろそろ花火の時間なので、りんご飴を買って港湾棲姫たちの所に戻る。その道中…。

「あつ…。」

「アツ…。」

ある艦娘と出会う。姿は瓜二つだが、向こうは艦娘で足もある。

「…こんばんは。」

「…コンバンハ。」

二人は見つめ合ったのち、艦娘は柔らかな笑顔で言い、駆逐棲姫は少しそつぽを向きながら言う。

「…お久しぶりです。」

「…元氣ソウデ何ヨリダ。」

「はい。おかげさまで。」

「…ココハ好キカ…？」

「はい。とても素敵な場所です。…駆逐棲姫さん、あの時は本当にありがとうございました…。あなたがいなかったら、私はこうして生ま

れることすら…。」

「ソノ話ハイイ。元気ナラ、ソレデイインダ。」

話していると…。」

「春雨ー！いっちばん高い所に行くから、早くおいでー！」

「あつ、はい。でも…。あれ？」

いつの間にか、駆逐棲姫はいなかった。

「…ありがとうございます。」

その艦娘はペコリと、駆逐棲姫のいた場所に頭を下げて、呼んでい
る艦娘の所に行った。

「ドコニ行ツテタノ？」

「…少シ、昔カラ付キ合イノアル奴ト話シテイタ。」

「付キ合イナノ？」

「ウン。皆、新タナ道ヲ歩ム。…月ガ綺麗ダナ。」

「綺麗ナノ！」

駆逐棲姫が空を見上げて眩き、北方棲姫と小さな艦娘たちが空を見
上げて、綺麗だと言う。そのうちに港湾棲姫たちの場所にたどり着い
た。

「今回、なんであんな鬼畜仕様のイベントなんすか…。あの集積地
棲姫が本当に邪魔ですよ…。地中海のボスに辿り着くことさえ出
来ませんよ…。」

「ウルセー！集積地棲姫ノ何ガ悪イ！ソモソモ、ソナマスヲ通ルカ
ラ悪インダ！」

「エーン！イツモイツモ嫌ワレテルヨー！」

飲みすぎて、愚痴を吐く提督と今日は怒り上戸の集積地棲姫と泣き
上戸のレ級がいた。

「酒臭イノ…。」

「ホッポ…。オネーチャン、イツモ頑張ッテイル…。褒メテ…。」

「港湾棲姫マデ…。」

北方棲姫に抱きついて、褒めて欲しいとねだる港湾棲姫。支部長と

しての威厳などここにはない。

「久シブリノオ酒ダカラ、飲ミ過ギタノネ。」

「フフ：嗜ム程度ニ抑エナキヤ。」

戦艦棲姫と防空棲姫は嗜む程度のお酒を飲んでおり、ベロンベロンには酔っ払っていない。ある艦娘はぐだーつとなっていたり、篝火に集まって乾杯していたが：

「花火ナノ！」

「花火？ヤルンダア：ヘーエ：ヤルンダア。」

「ソノ三人ハ：無理ソウネ。」

戦艦棲姫は集積地棲姫、レ級、港湾棲姫を見る。

「ナニオウ！行ケルワ！山モ登ツテヤルワ！」

「花火見タイヨー：。」

「ホツポガ行クナラドコマデモ：。」

三人は来るつもりだ。

「提督：。」

「あつ、俺はちようど酔いが覚めたんで行きます。」

「早イ：。」

深海棲艦たちと提督と艦娘が高い丘に登る。側から見れば、これほど奇妙な光景はないであろう。

「「ハッ!?!」」

「酔イ覚メタ？」

冷たい風に当たったことにより、三人の酔いが一気に冷める。

「ウー：。頭痛イ：。」

「飲ミスギタ：。」

「思イ出セナイ：。ココハ：？？」

港湾棲姫がキョロキョロと辺りを見回す。

「花火ナノ！」

「花火？」

「明石の話だと、でかいのをやるようですよ？：市や近所の人にどれほど挨拶して、許可を取ったか：。五島全部に見えるようなので、住民たちも見るそうです。」

そこに…。

「提督ー！来ました！」

「あれ？明石？花火は？」

「全自動です！徹夜で作りました！安全性99.9%です！」

「目の下のクマはそれが原因か…。」

艦娘が近くに来て、同様に草の上に座る。すると…。

バァーンパァーン！

「花火ナノ！タマヤナノ！」

「ソウネ。」

「来年モ、マタ祭りヤリタイナ。」

「キツト出来ル。マタ来年。」

「：マア：嫌デハナカッタカ…。」

「ソウネ。来年ハ、五島ノ人皆ンナデヤリタイワネ。」

「フフ：ソウネエ。」

「来年こそ、もっとレディーらしくなってお祭りに参加しているわ。」

「ハラシヨー。」

「明るいわね！」

「綺麗なのです。」

「来年かく。来年も、こんな関係でまた見たいですね。」

「そうですね。」

高い丘の上。屋台などを一時休業にして艦娘たち全員が集まっている。そこには提督も、深海棲艦もいる。大きな花火が暗い空に弾けて明るく照らす。赤や青、緑や黄色…さまざま、分け隔てない色を黒い夜空を彩る。それを一般の人々、艦娘、深海棲艦、提督…。違いなどなく、平等に笑顔をもたらせた。この美しい花火は、きっと誰も忘れることはないだろう。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

式拾参話 秋ノ戦…始メテミルカ？

「大キクナルノ。大キクナルノ。」

北方棲姫が呟く。祭りの時にもらったカブトガニに餌をやっていた。水槽の中で元気に泳いでいる。

「ハイ…。イエ、飼イタカツタカラトデハナク…。ハイ…。コ、コノ先
装備トシテ活用デキルヨウニ育てルヨウナ…。ハイ…。イエ、ホツ…
北方棲姫ニドウシテモト言ワレタカラジャアリマセン…。ハイ…。
ハイ…。報告書ハ送ルツモリデス…。ハイ…。アクマデモ、装備ニサ
セヨウト言ウ判断デシテ…。ハイ…。ハイ…。ソレデハ…。失礼シ
マス…。」

電話を切った途端にため息を吐いているのが港湾棲姫だ。

「別ニ、カブトガニ一匹クライ良イト思ウノニ…。」

そんな愚痴をこぼした。そして、窓の外を見る。山が少し黄色く
なった気がする。

「…ソウネ。紅葉狩リ…シヨウカシラ。」

「紅葉狩リナノ？」

「ウン。山ノ紅葉ヲ見ルノヨ。トツテモ綺麗ダシ、キノコ狩リモ出来
ル。」

「行キタイノ！」

「ウン。分カツタ。レ級タチモ誘ウワネ。」

「ウン！」

「…ソレト、多分紅葉ヲ見タコトナイ、『礼文島支部』ニモ招待状ヲ送
ルワ。」

「遊ベルノ！」

「ウン。」

港湾棲姫はスラスラと手紙を書き、日にちを記載して近くのポスト
に入れた。そして、レ級たちを誘いに話すのだった。

ここは礼文島。港湾棲姫の従姉妹の港湾水鬼がいる島だ。所属す
るのは主に3名。軽巡棲姫と北方棲姫、支部長の港湾水鬼である。

「郵便でーす。」

「イツモゴ苦労。」

港湾水鬼が郵便受けの中を覗く。

「…港湾棲姫…。」

港湾水鬼は宛名を見た途端にその場で内容を見る。

『礼文島支部ノ皆様へ』

○月○日、コチラデッモミジ狩リ〃ヲシマス。モシヨロシケレバ、
一緒ニ行キマセンカ？

『港湾棲姫』

「モミジ？狩リ？」

港湾水鬼が首を傾げる。

「狩リ…。」

そこに…。

「狩リ？狩ルノカ？」

「北方棲妹。」

北方棲妹がやってきた。

「モミジ狩リッテ知ッテイルカ？」

「…？分カラナイ…。」

「ソウカ…。デモ、何カヲ狩ルンダロウ。猟銃ガ必要カ？」

「ウーン…。」

そんなこんな悩む二人。そして、とんでもない方向へ行ってしまう。

「…待テ。」

「？」

「ソモソモ、狩リダロウ？ナンデコンナ遠イ所ニ手紙ヲ送ッタンダ？」

「…友軍？」

「アリ得ル。ソシテ、ココニ友軍ヲ頼ンダト言ウコトハ、陸上型ノ相手

…。シカモ、姫級三人ガ友軍デ必要ナホド強イラシイ…。」

「敵ハ強敵…。」

「…怪我ヲシテホシクナイ…。…万全ノ準備ガ必要ダナ…。」
「ウン。」

そして軽巡棲姫も呼んで、強敵と戦うとだけ伝えた。

ここは鎮守府。礼文島にある鎮守府であり、そこには元帥兄弟がいる。寝静まった夜中だ。

「……………」

足音を立てず、物音を立てずに鎮守府の中を歩き回る三人がいる。そして、陸軍元帥と書かれた部屋の前に立ち、ゆっくりとドアノブを回して開けると…。

「誰だ。」

兄者は小銃を構えて立っていた。

「撃ツナ。」

「港湾水鬼？…こんな時間にどうした？」

正体が分かった途端…敵の港湾水鬼がいるのがわかった途端に銃を下ろすのだから、仲や関係は良好である。

「夜遅クニスミマセン。」

「デモ、頼レルノガオ前シカイナイ。」

軽巡棲姫と北方棲妹が言う。

「ふむ…。恐らく、艦娘たちを起こさずに何かをしてほしいと言うことか。」

「ソウ…。」

「なるほど…。ならば、その用件はここで済みそうか？」

「…分カラン。ダガ、鍛エテ欲シイ。」

「鍛える…。何故だ？」

「強敵ト戦ウ。港湾棲姫ガ友軍トシテ、要請シテキタ。凶悪生物ヲ狩ルラシイ。全員、生キテ無事ニ狩レルヨウ、鍛エテ欲シインダ。」

「…なるほど。」

兄者は考える。

「……………」

そしてふと、港湾水鬼を見る。しっかりと、ブレない真紅の瞳が

あった。

「…いいだろう。その仲間を想う気持ちに胸が打たれた。グラウンドへ行こう。」

「…アリガトウ。」

「…うむ。」

そして、四人はグラウンドへ…。

「で、敵はなんだ？」

「ワカラナイ。ダガ、相当強い敵ダ。友軍ヲ呼ブホドカラナ。」

「ふむ…。深海棲艦ですら、強いと言わせる謎の敵…。相当だな。いいだろう。陸軍の元帥として、陸上の戦い方を教える。」

「頼ム。」

そして、港湾水鬼たちは早朝3時～5時までの限定した時間に、艦娘たちには内緒で鍛えるのだった。

『脇を締めろー！そして、しっかり狙えー！』

『アア！』

たまには訓練がキツくて

『腕立て500回を連続でやるぞー！』

『ク…。』

やめたくなるが

『陸戦の基本はカモフラージュだ。ゲリラ戦法を教える。対象に気づかれないよう、または気付くように新たな訓練メニューを加える。』

『ワカッタ。』

港湾棲姫たちを守るため、自身を守るために

『近接攻撃が出来なければ、野生動物とまともに戦うことすらできんぞー！』

『ワカッテル！』

期限までになんとか間に合わせた。

「今日で最後か…。皆、よく頑張った。もう教えられることは何も無い。あとは、守ろうとする決意でなんとかなるだろう。」

「ウン。…行ッテクル。」

「うむ。…怪我するなよ。」

「？」

「敵であるお前たちが怪我をしたら、もつと凶悪な深海棲艦が来るかもしれないからな。まあ、せいぜい生きて帰ることだ。」

「ウルサイナ。死ヌワケナイダロ。」

「姉貴ハ強イ。死ナナイ。」

そう言つて、港湾水鬼たちはフェリーに間に合うように走つて行つた。

「……。」

「兄者、毎朝の運動は終わったか？」

「うむ。当分は帰つてこまい。」

「そうか。」

「うむ。それと、弟者よ。フェリーの船は予約しておいたから行くぞ。」

「そうか。…兄者よ、今なんと？」

「支度をしろ。フェリーに間に合わん。」

「あ、兄者？まさか行く気では……。」

「敵は未知の者。この先、障害となる前に我々が対処するのだ。それが、元帥としての役目であろう。深海棲艦より強い敵……。気になるものだ。」

「…分かった。たしかに、脅威になる前に早めに摘み取るのが吉か……。艦娘には伝えておく。支度をするから時間をくれ。」

「5分。」

「十分だ。」

そして、元帥兄弟はこっそり密航するのであった。

当日

「紅葉狩リツ♪紅葉狩リツ♪オ弁当♪♪」

北方棲姫がはしゃいでいる。従姉妹も来て、皆で紅葉狩りしながらのピクニックが楽しみなのだろう。

「嬉シソウダナ。」

「ソウネ。…デモ、レ級ガ今日『バイト』ナンテ…。」

「ソレニ、戦艦棲姫ト防空棲姫ハ葡萄狩リヤ、梨狩リトカヲシテイル。」
「地元ノ人達ノオカゲ…。皆ンナ良イ人…。」

港湾棲姫がしみじみ言う。町内会などに積極的に行き、地元の活動も積極的にやり、尚且つ見知らぬ人も助けるのだから、港湾棲姫たち五島支部の知名度も、人気も高い。

「えっ？港湾ちゃんたち、梨狩りやぶどう狩りとかしたことないの？」

「本当か？なら、栗拾いやきのこ狩りもしたことないのか…？」

「ナシガリ？ブドーガリ？」

「マジかい！早く言ってくれよ！俺あ港湾ちゃん達やったことないなんて思っても見なかったぞ。今度、うちの農園でいい梨が出来たんだ。ちよつくら梨狩りしてみつかい？」

『イイノ…？デモ、アマリオ金ガ…。』

『何言ってるんだい！港湾ちゃんならいつでもタダさ！前だって、その梨の袋かけ手伝ってもらったんだ！1個や2個、5個なんて言わず、好きなだけ持ってたってくれ！どうせ収穫時期過ぎて余ったりキズモノになるもんがあるんだ！』

『ア、アリガトウゴザイマス。家計ニモ助カリマス。今度、支部ノ誰カガ行キタイカモ知レナイノデ、聞イテキマス。』

『んだ。そうだべ。なんなら、うちの葡萄もやってみつかか？甘くてうんまいぞく。その葡萄の袋かけも手伝ってもらったかんなく。』

『本当…？』

『そうだべ。でも、収穫時期過ぎてつから、腐っちゃう前にとって欲しいべ。うくん…。梨も明日までかなあ？』

『明日…。デモ、明日ハ紅葉狩リ…。』

『あつ、なんなら、支部の誰かが来ても良いぜ。好きなだけとってつてくれ。』

『おんなじだべ。』

『アリガトウゴザイマス…。』

『紅葉狩りかく。あつ、なんならわしんちの山行くかい？キノコ狩り

と栗拾い出来るぞ。』

『本当ニ、アリガトウゴザイマス…。』

『わしが腰やつちまった時に手伝ってくれたおかげだよ。』

そんなこんな、港湾棲姫の日頃の活動により信頼を得て、地元民からの好意で無料でさせてもらえることになったのだ。

「感謝シナクチャ…。」

「良い人タチダラケダナ。」

そんなことを思い出し、港湾棲姫と駆逐棲姫がしみじみ言う。そこに…。

ガラララララ

「港湾棲姫。来タゾ。」

「アツ、ハイイ。」

「来タノ！」

二人が急いで、港湾水鬼のいる玄関へ行く。

「ド、ドウシタノ!? ソノ怪我! 大丈夫!？」

「怪我シテルノ! 大変ナノ！」

二人が、急いで救急箱を持ってくる。

「ドウシテ…。」

「怪我ヲシナイヨウニナ。」

「ココ、富士山ジャナイ…。」

港湾棲姫が包帯でくるくる巻く。

「終ワツタラ、スグニ行コウ。」

「エ? 行ケルノ?」

「行ク。行クタメニ鍛エタ。」

「ココ、ソナニ危険ナ山ジャナイケド…。」

港湾棲姫は駆逐棲姫、北方棲姫と支度をして、港湾水鬼と共に山へ向かうのだった。

「…歩キ辛イ…。」

港湾棲姫が漏らす。現在、何故だか分からないが港湾水鬼たち『礼文島支部』のメンバーが港湾棲姫たちを巻き込んで警戒陣で進んでい

る。そんな様子を見る二人がいた。

ガサガサ：

「ふむ……。なんとかバレてはいないな……。」

「兄者よ……。何故隠れる必要があるんだ……？わざわざ落ち葉を纏ってまで……。」

「バレたら、敵が警戒するかもしれない……。」

「……兄者よ。もしかしてと思ったが、いいか？」

「なんだ？」

「……港湾水鬼にほの字なのk……。」

ガツン！

「そんなわけなからう！」

「痛つてえ……！そんな本気で殴らんでもよからうに……！」

「あくまでも、奴らは敵だ……！それ以上でも、以下でもない。」
「にしては、随分と肩入れしているがな……。」

草むらで二人が話す。一方。

「トコロデ、ドンナ奴ヲ狩ルンダ？」

「エ？ナンノ話？ドンナ奴？」

「モミジツテ奴……。」

「モミジ狩リノコト……？」

港湾棲姫は港湾水鬼が何か勘違いしていることに気がついた。

「……紅葉狩り……。港湾水鬼……紅葉狩りを勘違いしていたのか……？」

「……兄者よ……。教えたことは全部無駄だったな……。」

「聞かない我も悪いが……。紅葉狩りと言ってくれば……。」

「……帰ろう兄者……。」

「うむ……。」

元帥兄弟は草むらの中で聞いていた。港湾棲姫はやれやれとして、説明しなかった自分も悪いと思って、説明しようとする。

「モミジ狩リツテ言ウノハ、狩リジヤナクテ……。」

「狩リジヤナイ……？」

ガサガサ：

「敵！敵！姉貴！」

「!」

北方棲妹が揺れる草むらに反応してしまった。

「秋ノイクサ…ハジメテミルカ…?」

港湾水鬼がいつの間にか砲を起動させていた。

ドガアアアア!

「転進!」

「避けるのだ。」

ズガアアアア!

間一髪避けた元帥兄弟。まあ、当たったら痛いじゃ済まないだろう。

「避ケタ…!?!」

「落チ葉ニ身ヲ包ンデ…。」

元帥たちとは知らずに、攻撃をする港湾水鬼。

「軽巡棲姫手伝エ…!」

「紅葉狩リダツタノ…?」

軽巡棲姫は紅葉狩りだと今知った。

「…クツ…。逃ゲラレタ…!」

港湾水鬼は悔しそうな顔をした。

「港湾水鬼…。」

「…?」

軽巡棲姫が話しかけて、手伝ってくれなかったことに不服なのか、不機嫌そうな顔だ。

「紅葉狩リツテ言ウノハ…。」

「ツマリ、『ピクニック』ナノカ?」

「エエ。」

港湾水鬼と北方棲妹が理解する。

「ソウカ…。…ン?待テ。ナラサツキノハ…。」

「…普通ノ動物ノ動キジャンカツタワネ…。」

それを聞いて、サツと港湾水鬼の顔色が悪くなる。

「…アツ、ソウ思ツテミレバ、港湾水鬼ツテ『ホラー』苦手ダツタンジャ

…。」

「…港湾棲姫…ドウシヨ…。来ルヨナ…。仕返シニ来ルヨナ…！」

「来ルカモ…。」

「…ドウシヨ…。」

港湾水鬼が本気で困った顔をする。相変わらず顔は怖い。

「あの顔で、ホラーが怖いとは…。これがギャップと言うものか…。」

「兄者よ、もう帰ろう…。」

「…そうだな…。」

陸軍元帥は懐中時計を出して見る。

「…兄者、本当に大丈夫か？分かっていいるとは思うが、よりによって元帥と深海棲艦は…。」

「何度も言うておろう。我は港湾水鬼と結ぶ気はない。…が、心配なだけだ。」

「兄者よ…。本当に大丈夫か…？一応、あきつ丸を部下に持っているのに…。」

「何度も言うてない。良きライバルなだけだ。」

「だと良いが…。」

「それより、そろそろ飛行機の時間に間に合わん。急いで帰るぞ。」

「先程気になっていたのは航空機の時間であつたか…。」

二人の元帥は木をつたつたり、飛びながら飛行場へ目指した。

一方、果物狩りの方は…

「美味シイワ。」

「ウッフフフ。美味ネ〜。」

「…ウマイ…。」

戦艦棲姫、防空棲姫、集積地棲姫…三人は梨をとっている。木を傷つけないように、教えられた通りに丁寧にとっている。そして、食べてもいる。そんなのどかな時間が過ぎる。しかし、しばらくしたら少し出入り口が騒がしくなった。

『……………』

『……………』

「ナンカ声ガ聞コエル…。」

三人は出入り口近くの梨の木に隠れる。

「アレ、多分提督ヨネ…?」

「アツハハ。門前払イサレテルワネ〜。」

「艦娘ト一緒ニ果物狩リカ?」

どうやらいるのは提督御一行のようだ。

「えっ!?果物狩りやってないんですか!?!」

「ああ。あんたらにや申し訳ないが、港湾ちゃんたちがやっていな。」

「でも、前々から…。」

「港湾ちゃんたちはやったことがないってよ。それに、毎年袋かけ手伝つてくれてるしな。」

「そうだったんですか…。」

「さらには、決定的な違いがある。」

「決定的な違い…?」

「ああ。去年も一昨年も…。あんたらがしでかしたことを忘れたわけじゃあるまい。うちの網に大穴あけたり、枝を折ったり。」

「づっ…。その節は、誠に申し訳ございませんでした…。卯月にはしっかりとっておきました…。」

「木を傷つけるなっちゅうのに、そっちの小さな子たちが遊んでわざと傷つけるし。赤いのと青いのがたまに梨を盗むし。あんたはしっかりと見張ってないし。ほっぽちゃんを見てみる。あの子は言われたことをしっかりと守って、一つ一つ丁寧に袋かけてくれたんだ。あんたら鎮守府の者より、港湾ちゃんたちのところの方が信頼できるつてもんだ。」

「それ言われちゃ立つ瀬ないです…。」

「…すまん、ちと意地が悪かったな。そっちは多い人数だから、一人で見張るのも大変だしな。だが、もうちと教育をしっかりとってくれ。」

「すみません…。」

そんなこんな、農園のおじさんと提督が話していた。戦艦棲姫はそのやりとりを見て…。正確には、楽しみにしていたのに出来ない

知った艦娘たちの顔を見て…。

クイクイ

姿を現して手招きをした。

「ん？なんだい？戦艦ちゃん。」

戦艦棲姫は農園のおじさんと話す。そして、農園の人が提督の所へ戻った。

「戦艦ちゃんに言われちゃしゃあない。戦艦ちゃんに感謝してくれ。」

農園のおじさんが出入り口を開ける。

「提督、戦艦ちゃんは全責任は自分が持つって言ったんだ。その想いを踏み躪るなよ。」

農園の人は提督の後ろ肩を叩いて、ニンマリとしながら家に戻って行った。艦娘たちは嬉しそうに中に入る。

「戦艦棲姫さん…。本当にありがとうございます…。」

「イイワヨ。別ニ。滅ルモノデモナイワ。」

「いいか！絶対に迷惑をかけちゃいかんぞ！戦艦棲姫さんの名誉でもあるんだ！特に卯月！何か問題をしでかしたら、お前の部屋はないと思うんだな！」

「わ、わかったびよん…。うーちゃんは何もしないびよん…。だから、そんな睨まないでほしいびよん…。」

提督が完全に目を光らせて、艦娘たちが大人しくなる。

「ウッフッフ。優シイトコロアルジャナイ。」

「楽シミニシテイタノニ、チョット可哀想ダツタシ。」

「マア、港湾棲姫デモ多分ソウヤルダロウナ。」

深海棲艦三人が話す。

「赤城ー、ほどほどになー。枝を折るなよー！お前たちは力が強いんだからなー！」

提督は艦娘一人一人を監視して、忙しくしている。

「あつ、そういえば戦艦棲姫さんたちの分…。」

「大丈夫。支部ノ皆ンナガ満足スルクライアルワ。」

戦艦棲姫たちは梨でいっぱい大きなカゴを見せる。

「甘クテ美味シイ。」

「そうかー。そりや良かったよー。これも、港灣ちゃんたちが袋かけしてくれたおかげさ〜。」

集積地棲姫は感想を農園のおじさんに話していた。

「今日ハアリガトウゴザイマシタ。」

「あれ？戦艦ちゃんたちもう行っちゃうの？」

農園のおじさんと話す戦艦棲姫たち。

「ウン。葡萄モアルカラ…。」

「もつと持ってついでいいのに…。」

「ウン。欲張りハ得シナイ。港灣棲姫ガ言ツテタ。」

「かあ〜。鎮守府の子も、戦艦ちゃんたちを見習ってほしいよ。」

農園のおじさんが艦娘たちを見る。艦娘たちはそんなことを言われていると知らずに、笑顔で梨狩りをしていた。

「本日ハ、貴重ナ体験ヲアリガトウゴザイマシタ。来年モ、必ず袋力ケヲ手伝イマス。」

「そう言ってくれると助かるよ…。最近はちと歳でな…。もしかしたら、数年後まで続けられんかもしれんしの。うちのバカ息子は東京さ行くってうち飛び出しちまってから一度も帰ってこんし。」

「…歳…。」

「深海棲艦や艦娘にや縁のない言葉さ。衰弱つつつて、歳を重ねれば重ねるほど、弱くなるってことさ。人間は脆い。思っているよりも簡単に死んじまうんだよ。」

農園のおじさんが自嘲のような…軽い笑顔をした。

「何年も後の話さ。まあ俺が死んだら、うちのバカ息子が戻ってくんかもしんねえ。その時は、戦艦ちゃんたちも仲良くしてやってくれ。もし来なければ、うちの農園は港灣ちゃん達にやるつもりさ。俺の祖父の代から続いている梨畑だ。余った土地として、市に梨畑切り倒されるくらいなら、港灣ちゃんたちにやるさ。そんな時は、どうか梨畑を切り倒さんでくれな。バカ息子にもそう言っとくれ。」

「…分カツタ。」

農園のおじさんが真面目な眼差しで見ている、戦艦棲姫は覚悟をした、しつかりとした目で、そらさずに頷いた。そして、しつかりとお

辞儀をした後、戦艦棲姫たちは葡萄園を目指した。

「…いいのですか？」

「…何がだ？」

行つた後、農園のおじさんの所に農園のおばさんが来る。

「うちの梨畑をやるつつつて。最初は深海棲艦だからつつつて、忌み嫌っていたべ。」

「最初はな。でも話してみたり、こっちから心を開けば悪い奴じやないってわかつたかな。切り倒されるよかマシだべ。」

「元『海軍大元帥』のあんたがよう変わったの。昔は、「うちの梨畑を取られるくらいなら燃すべ」つつつてたんに。」

「それを言うなって。昔の話さ。今は素性を隠してるんだから。『農園のおじさん』でいいんだ。」

「わかつてますよ。」

農園のおじさん夫婦は、遠くで手を振っている戦艦棲姫たちに手を振りかえしていた。

式拾肆話 親友ダカラナ

「キノコ♪キノコ♪」

「キノコツコツコーノコ♪」

「元気ナノ♪」

現在、紅葉狩りついでにキノコ狩りと栗拾いをしている駆逐棲姫と
港湾棲姫と北方棲姫と…。

「姉貴、コレ食べレルノカ？」

「白…ヤメテオケ。」

「コレハ…ドクツルタケ。猛毒。」

『礼文島支部』の北方棲妹、港湾水鬼、軽巡棲姫がいる。

「栗モ良インダヨナ？」

「ウン。デモ、落ちテイル奴ダケ…。」

「分カッタ。」

港湾水鬼は落ちているイガグリを（艀装付きの）手に取り、向いて
みる。

「虫…。」

『バグズキングダム』ネ。」

「ヤ、ヤメマシヨウネー。」

クりに穴が空いており、それを捨てる港湾水鬼。

「姉貴！コレ！」

「ドレ…。」

「オネーチャン！コレナノ！」

「コレネ？」

北方棲妹に頼まれて港湾水鬼が。北方棲姫に頼まれて港湾棲姫が
それぞれイガから栗を取る。

「アツ、オツキイ。虫食イ跡ナシ。」

「虫食イ跡ハナイガ…小サイ。」

二人は開けてみて一喜一憂。

「デモ、取レルダケ取ツテイイツテ言ツテタ。デモ…。」

「籠ニ入ル分ダケ。ダロ？」

「ウン。」

二人でとっているうちに、背負い籠に入りきらなくなってくる。

「大量大量。」

「栗ゴ飯…渋皮煮…栗キントン…栗羊羹…。」

二人は大量に取った栗を見て、調理を考える。その間…。

「コレ！」

「食ベレル。」

「コレナノ！」

「ダメ。」

「コレハドウダ？」

「ウン…。分カラナイカラ、ダメ。」

軽巡棲姫に審査してもらいながら、キノコを採る北方棲姫と妹、駆逐棲姫だ。彼女たちの背負いカゴにはキノコを入れるらしい。

「ノノノ？」

北方棲姫は周りのキノコを取り尽くし、斜面のキノコを見つける。

「ン…！」

北方棲姫は無理して取ろうとしていたが…。

「ホッポ!?何シテルノ!？」

「！」

危険な斜面にいる北方棲姫を港湾棲姫たちが見つけた。

「アツ、オネーチャ…。」

ズル…

「ノ…？」

「ホッポ!!」

「アツ、港湾！待テ！」

北方棲姫が滑り、港湾棲姫が迷いなく坂を滑り降りて、手をとる。港湾水鬼は港湾棲姫たちを助けようと、近くの木に捕まってもう片方の港湾棲姫の手を掴んだが…。

バキッ！

「!?!」

流石に、木も大人二人分と子供一人分では折れるというもの。

「グヌヌヌ…！」

しかし、港湾水鬼がなんとか艀装である爪を地面に突き刺し、耐えることが出来た。

「姉貴！」

「北方棲姫！港湾棲姫！港湾水鬼！」

「アツ！大変！」

急いで、助けようとする北方棲妹たちだが…。

ズルツ…！

「！？」

滑った。しかし、それで終わらなかった。

ドシヤシヤシヤ…！

「グオオオオ…！」

「ア、姉貴…。」

「アラ、ゴメンナサイネ。」

「ヤバイナ…。」

港湾水鬼の上に全員が乗っかる。

「…スマン…。無理…。」

「！？」

ザアアアア…！

港湾水鬼の艀装の爪を突き刺していたが、土が崩れて全員滑り落ちてしまった。

「…ココハ…。」

目覚める港湾棲姫。起き上がり、枯葉が港湾棲姫の服からパラパラ落ちる。

「ホッポ！皆ンナ！」

「！…？…！」

北方棲姫たちが周りにいることを確認して、起こす港湾棲姫。

「随分深イトコロニ来チャツタミタイダケド…。」

港湾棲姫が周りを見てつぶやく。周りに道はなく、森の中だ。そこ

に…。

「フゴフゴ…」

「！」

イノシシがやってきた。2〜3mある山の主だ。港湾棲姫を見た
途端…。

「フー…！」

敵意をむき出しにした。

「……。」

港湾棲姫は無言で立ち上がり…。

「失セロ…!!!」

「!？」

港湾棲姫の…深海棲姫の、五島支部長を務める港湾棲姫の殺意ある
威嚇をした。流石に、山の主といえども猪は猪。一瞬で意気消沈して
しまう。そこに…。

「フーイノシシサンナフー！」

「アツ、ホツポ！」

北方棲姫がそのイノシシのところへ行く。

フー…！

猪は脅かすだけに威嚇をする。危害を加えたら確実に港湾棲姫に
ステーキにされるとわかったからだ。

「ノンノンノン。」

「フー…！…！…！？」

「ノンノンノンノン。」

「フゴフゴ。フゴ。」

「ノンノン。ノンノン。」

「フゴ？フゴゴ。」

「ノンノ。ノ。ノンノンノン。」

「フゴ…。フゴ、フゴゴンフゴ。」

「ノン。ノン。」

「…？…」

港湾棲姫たちは北方棲姫と、猪の会話を聞いて疑問しか抱かない。

危ナイカラ、近ヅクノハダメナノ。ホツポトノ約束ナノ。そんな会話を終えたあと、戻ってきた。

「帰り道知ツテルノ。」

「二エ…？」

「アノ猪サン、秋ナノ二人間ガ森ヲ切り倒スセイデ、食べ物ガナクテ困ツテイルノ。可哀想ナノ。」

「ソ、ソウナノ…？」

猪を改めて見ると、少し痩せていた。

「ウン。食べ物ヲアゲタイノ。ソースレバ、帰り道ワカルノ。」

「デモ、コノ坂ヲ登レバイイカラ…。」

港湾棲姫が、斜面を見る。充分登れそうだ。

「ソウ…ナノ…。」

シユン

「！」

北方棲姫がしゅんとして、港湾棲姫を見た。

「食べ物…可哀想ナノ…。ホツポモ、才腹空クノ…。才腹空クノハ辛イノ…。助ケテアゲタイノ…。」

北方棲姫が呟きながら言う。

「…ホツポハ優シインダナ。」

「ソウネ。」

「良イ子ネ。」

「スゴイナ。」

「姉貴、スゴイ。」

港湾水鬼に撫でられて、優しいと賛同する深海棲姫たち。そして…。

「ホラ、沢山トツタカラヤルヨ。」

「コツチモアル。」

「アゲルノ！」

「ヤル！」

「アゲルワ。」

「ン。」

港湾水鬼たちが、取った栗やキノコを分けてあげる。

「フゴ…。」

イノシシはそれをありがたそうに見た後…。

「フゴフゴ。」

「…ブヒ？ブヒブヒ…。」

「ブヒ。」

「「!?」」

後ろからウリ坊（イノシシの子供）たちがやってきたのだ。ウリ坊たちは美味しそうに栗やキノコを食べる。すると…。

「アゲルノ！」

「！」

その親イノシシに、栗とキノコをミトンの手に乗せて言う。

「フゴ…。」

それを美味しそうにありがたそうに、北方棲姫の手を傷つけないように食べた。そして…。

「フゴフゴ。」

「乗セテクレルノ？」

イノシシが座り、港湾棲姫たちに乗るように促した。猪に乗る港湾棲姫たち。

「シュッパツシンコーナノ！」

「フゴ。」

北方棲姫の掛け声と共に、立ち上がりゆっくり歩きながら進む猪。その後ろをウリ坊たちがトテトテついてくる。

「可愛イ…。」

「エエ…。」

「可愛イノ。」

北方棲姫たちは後ろのウリ坊を見ていた。そのうち、イノシシが止まって、座り出した。着いた合図なのだろう。北方棲姫たちが降りる。

「フゴフゴ。」

「ノンノノン。」

イノシシと何か会話をした後、北方棲姫は手を振ってさよならをした。

「コノ先真ツ直グ行クト出口ナノ。」

「マア、流石ニアレニ乗ツテ街ハ大騒ギヨネ…。」

深海棲艦が巨大イノシシに乗って街を徘徊など、次の日のニュースのトピックで大注目であろう。

「マダ森ネ〜。」

歩き始めて5分後、軽巡棲姫がつぶやく。すると…。

スンスン…

「『コーヒー』ノ香り…。」

「アラホント。」

駆逐棲姫が気付いて、軽巡棲姫も気づいた。

「コツチカラスルワネ。」

軽巡棲姫が歩き、港湾棲姫たちもついて行く。すると…。

「コンナトコロニ、『カフェ』？」

「『コーヒー』？」

軽巡棲姫たちがたどり着いたのは、森の中でポツンとある一軒家。しかも、カフェと書かれている。

「…『ネット』ニナイ…。秘境ノオ店…？」

「コンナノガアルツテ、近所デモ聞イタコトナイ…。」

「ツマリ、知ラレザル店ツテワケカ。」

港湾水鬼は店に入るドアを見て、準備中じやないか確認した。

「入ツテミルカ…？」

「ウーン…。デモ、少シ歩イテ疲レタシ…。少シ休ミマシヨウ。」

港湾棲姫たちがその店に入る。北方棲姫と北方棲妹が歩き疲れたような顔をしていたからだ。

「イラっしやいませ。何名様のご来店ですか？」

「！」

そこに現れたのは、白色のショートヘアの髪をして、目は明るく澄んだアメシストの色をした、外人っぽい見た目をしている執事姿の青年だ。

「六人。」

「かしこまりました。ご案内します。：外国カラ来たので、少し日本語が分かりづらイかもしれないかもしれませんが…。」

「イ、イエ別ニ…。」

(外国カラナンテ言ツテモ、コツチハ深海カラダカラ…。)

港湾棲姫が心の中で思う。そして、テーブル席に座った。客は港湾棲姫たち以外いない。すると…。

「おや？お客さんかい？レオク。」

「あつ、はい。店長。」

店長がカウンターに出てきた。

「ここは秘境のコーヒー店。ようこそ、あなた方は第8回目のお客様だ。」

「ド、ドウモ。」

「あつ、そうそう。ここはインターネット掲載禁止してるから。もししたら、色々権利の侵害で大変だから、しちやだめですよ。」

「ワカッタワ。」

港湾棲姫たちがメニューを見る。どれもお手頃価格で、主婦には嬉しい金額だ。

「…店長、時間ガかかりそうなので、少し休憩してきます。」

「あつ、どうぞどうぞ。」

その青年は店の休憩室へ向かっていった。

(ヤツベエー…！ドウシヨウ…！港湾タチガ来テル…！何デココニ…！今日ハ紅葉狩リツテ言ツテタノニ…！ナンデ…！?)

わかっていたかもしれないが、その青年の正体はレ級である。レ級が肌色のおしろいを塗りたくり、執事姿になって、人間に化けていたのだ。

(ト、トニカク…。港湾タチニ気ヅカレナイヨウニシナイト…。男装シテマデ『バイト』シテルツテバレタラ、絶対ニ擲揄ワレル…。ソレニ、色々面倒ダ…。)

レ級は心拍数が上昇している。

「ドウスルカ…。」

レ級が休憩室をうろちよろしている…。

「レオク、注文だから入ってくれない?」

「ア、ハイ。分かりました。」

店長に言われて、すぐに出てくるレ級。

「ご注文ハお決まりでしょうか?」

『『コーヒー』ヲ三ツト、紅茶ヲ一ツ、ソシテ子供用ノジューストカハアル?』

「子供用ノミルクはありますが…。」

「ナラ、ソレヲ二ツ。」

「かしこまりました。ご注文ヲ確認します。『コーヒー』ヲ三つ、紅茶を二ツ、子供用ミルクを二ツ。以上でよろしいデでしょうか?」

「ハイ。」

「かしこまりました。どうぞゆっくりしてくださいね。お姉様方とお嬢様方。」

レ級は軽く笑みを浮かべた後、厨房へ行き、店長に注文を伝える。

(港湾棲姫…気ツイテイナイ…?気ツイテイナイナライイガ…。)

レ級は厨房で、コーヒーを用意している店長を見ながら思った。

梨畑

「……。」

艦娘がそれを見て、立ち尽くしている。

「卯月…お前…。」

提督の怒り心頭した顔。

「う、うーちゃんじゃないぴよん!ホントぴよん!勝手に倒れたんだぴよん!!」

「梨の木を倒すとはな…。まさか、ここまでいたずらの度を過ぎるとは…。」

「無実ぴよん!!」

「薪と滑車と縄を用意しろ。ついでに火もだ。」

提督が指示して、艦娘たちが従う。そしてテキパキと土を露出させ

たところに薪を置いて滑車台を作る。

「さて、卯月…。戦艦棲姫さんの名誉を傷つけた罰…。山ほど説教があるから楽しみにしてろよ…。」

「びよーんん!!!」

「俺は紅茶作るから、レオクはミルクを入れて運んであげて。」

「分かった。」

「もう少し、火加減を強くした方が良いかな…?」

「燃えろ燃えろ♪今日の夜はうさぎ肉の炙り焼きかな♪」

「びよーんん! うーちゃんは無実びよーんん! 違うびよーんん!
! やつてないびよーんん!」

土を露出させたところで薪を燃やし、艦娘を縄で縛り、滑車にかけて炙ろうとしていた。

「やっていないと言っているが…赤城はどうおもう?」

「…え? あ…はい…そうですね…はい…。」

「怪しいびよん! 絶対に何か知ってるびよん!!! うーちゃん疑っているびよん!!」

艦娘たちがやんやんやする。

「ふむ…。そう言われると、たしかに道具もない卯月が梨の木を倒すのはおかしいか…。でも、艦娘の怪力を考えると…。」

「思い出してほしいびよん! うーちゃんは、いたずらはするけどこんなことはしないびよん!!」

「…それもそうだね。となれば、真犯人は誰か…だな。」

艦娘は降ろされて、危機一髪だった顔をした。提督は考える。

「そ、それよりも、早くこれらを片付けないと…。また農園の人に言われますよ。さあ、片付けましょう。あつ、それと、私はもう少し他の場所で梨をとり…」

「…赤城、ちよつと待て。」

「……。」

艦娘は提督に引き止められる。

「ど、どうせ元々木が腐っていたとか…。」

「腐った木に、こんな青く葉っぱがしげるかな？ 梨を作れるかな？」

「…た、たまたまですよ。たまたま…。」

「そうか…。たまたまか。」

「そ、そうですよ。」

「…：…ほう。」

「素早イさばき…。俺じゃなくちや見逃していたな…。」

「何のこと…：？というより、今紅茶やっているから他の注文頼むよ。」

「わかつた。コーヒータナ。」

「頼むよ。」

「見逃してください！ 悪気はなかったんです！ こんなことになるなんて思わなかったんです！」

「燃えろ〜燃えろ〜♪」

現在艦娘を炙ろうとしている提督。

「か、加賀さん！一緒にいたことを提督に説明してください！」

「さすが赤城さん。私たちにできないことを簡単にやってのけますね。そこにシビレ、憧れます。」

「加賀さん!？」

艦娘が助けを求めるが、勘違いしているようだ。そこに…。

「煙でてっと思ったら…：あんたら何しとんだ？」

農園のおじさんがやってきた。そして、状況を見た。

「これ！ 女を火炙りにするやつがあるか！ 今すぐおろせ！」

「でも、大切な梨の木が…。」

「そんなんいいからおろせ！」

艦娘が降ろされ、バケツで火を消した。

「はあ…。で？ あんたら何したんだ？」

「いえ、赤城が梨をもぎ取ろうとしたら、力が強すぎて木が倒れちゃったらしくて…。」

「ち、ちがいます！…：いえ、違わないかもしれませんが…。でも！ すぐ

には倒れなかったので、私じゃない可能性も…。」

「赤城、いさぎよく散れ！」

「散れってなんですか!? 散れって！」

提督と艦娘が言い合っている最中、おじさんがその梨の木を調べ
る。

「あー、蟻が群がっとする…。木の表面が腐ったのが問題だな。勝手に
倒れたんだ。」

「え？ そうなんですか？」

「ああ。」

「…そう…ですか…。」

そこに…。

ガバツ

「ほら！ 提督！ 私のせいじゃなかったんです！」

艦娘が提督の腕に抱きつく。

「はっはっは。戦艦ちゃんの名誉のために叱っとったんだろう？ 今回
は、しつかり出来たんだなあ提督さんよ。来年も、うちに来ても良い
ぞ。」

「…ありがとうございます…。」

「もつと元気だせい！ 間違えて叱っとった子も、あんたにくつついて
るんだから。こんなにええことないぞ？」

「…はい…。」

農園のおじさんが笑顔の艦娘と目が死んでいる提督を見る。艦娘
は提督の腕にひつついて離れない。提督は分かっていた。

（これ、逃さないように腕組んでいるだけなんだよなあ…。だって…
力入れても振り解けないもの…。）

艦娘は提督の腕に組んでいるのはラブラブだからなどではない。
鎮守府へ帰っても逃さないように組んでいるだけだった…。

「お待たせ致しました。コーヒーを3つ、紅茶ラーツ、ミルクを二ツ。
注文に間違いはございませんか？」

「ア、ハイ。大丈夫です。」

「では、ゴゆつくり。」

レ級が頭を下げて、他のテーブルを磨いたりする。すると…。

「…レ級二似テルノ。」

「エ？」

北方棲姫が言い、港湾棲姫が見る。レ級は知らないふりをするが、内心めちやくちや焦っていた。

「…マサカ。レ級ハアンナニ丁寧ジャナイ。」

「…ソウ言ワレテミルト、ソウナノ。」

「ソモソモ、レ級ハ『ガサツ』ダカラナ。アンナ接客デキナイ。」

「が、がさツ…!？」

港湾棲姫たちが話し、レ級が少し手を止めた。しかし、仕事に集中するため再開する。

「コラ、駆逐棲姫。本当ノコト言ワナイ。」

「ほ、本当…!？」

「レ級カ。レ級ノ接客トカ、砲ヲ構エテ『モウ一回言ツテミロ』トカ言イソウダナ。」

「……。」

「ソウ思ツテミレバ…前レ級ガ集積地棲姫ノ部屋ヲ荒ラシタミタイナンド。ヤツパリ、ソウイウ所ガアルカラ乱暴者ニ見エルンダヨナ。」

「……。」

港湾棲姫たちが言っていた。

「…店長…気分が悪イ…。休憩シテ来る…!」

「え?でもさつき…。」

店長の言葉を待たずに、レ級は休憩室の中に入り、ドアを閉じてそのドアに寄りかかってうずくまっていた。

「…港湾棲姫達…イツモソウ思ツテタノカヨ…。…確カニソウイウトコロハアルケド…。乱暴者…。」

そんなことを呟いた。けど…。

『…港湾水鬼、北方棲妹、軽巡棲姫、駆逐棲姫。ヨク聞イテ?』

港湾棲姫の声が聞こえる。

『デモ、レ級ハソソナ『イメージ』カモ知レナイケド、現実ハソソナ乱

暴者ナンカジャ、決シテナイ。』

『ソウナノ！レ級ハイツモ優シイノ！集積地棲姫ノ部屋ヲ荒ラシ
チャツタノハ、ホツポモ同ジナノ！』

『ホツポノ言ウ通り。レ級ハイツモ優シイ。言葉ハ少シ荒イケド、酷
イコトハ絶対ニシナイト断言デキル。』

『ソウナノカ？』

『ウン。コノ前、『ストライキ』シニ行ツタ時、ホツポノ面倒ヲ見テク
レタノハレ級ヨ？』

『ソウナノ！』

『ソレニ、散歩ダツテ行ツテクレルシ、ホツポノ為ニ、海ニ行ク許可モ
取りニ来タ。3時間ホド説明シテモ、投ゲ出サズニソレニ耐エタシ。
ソモソモ、本当ニ、ホツポト同ジクライ大切デ、信頼シテイテ、昔カ
ラノ大切ナ仲間ニシカ、ホツポヲ預ケナイシ。』

『ナラ、ワタシガ許可ヲ求メテモ？』

『絶対ニ海ニハ行カセナカッタ。』

港湾棲姫がレ級のことを言う。

「…港湾棲姫…。」

レ級は心の中が温まるのを感じた。

『レ級ハ大切ナ仲間…ウウン。親友ヨ。』

『…親友カ。イイナ。』

『姉貴ヲ信頼シテ預ケラレル親友。』

『ホツポモ、レ級ハ親友ナノ！』

「…親友…ソウナノ、コツチモズツト前カラ分カツテイタゾ。」

レ級は休憩室から立ち上がり、ドアを開けて出てきた。

「あつ、休憩できた？」

店長が聞く。

「はい。とつてモ気分が良くなりました。」

レ級は笑顔で答えた。

「さあ、梨狩りもやりましたし！帰りましょう！提督！」

一方、農園だ。そう艦娘は言っているが実際、終わるまでずっと提

督の腕を組んでいた。提督の目は死んだままだ。

「…ま、待て！せめてお礼を言うんだ。」

提督が呼びかけて、艦娘たちが集合した。

「「ありがとうございます！」」

全員、丁寧に頭を下げてお辞儀する。

「おう、気をつけて帰れ。」

農園のおじさんは笑顔で答えた。そして、農園を後にする提督たち。

「さあ…火炙りの時間だ。」

提督は清々しい顔で、甘んじて受け入れた。

「ウーン。美味シカッタ。」

「ソウダナ。」

「モウタ方…。」

港湾棲姫たちが話す。外を見れば、少しオレンジ色に染まっている。

「ソロソロ帰ラナイト、レ級ガ心配スル…。」

「ソウダナ。」

港湾棲姫たちが立ち上がり、会計を済ませようとする。

「レオク、お願い。」

「はい。」

レ級が行き、レジを打つ。

「会計、1500円でス。」

「1500円。」

港湾棲姫が現金を出した。

「アツ、ソウダ。何カ持ち帰りノ『メニュー』トカアリマスカ？」

「エ？持ち帰り…？」

「実ハ、家ニ親友ガイテ…。今日ハ『アルバイト』デ色々出来ナクテ、セメテ何カ買ツテ行キタクテ…。」

「…きつと、喜びますよ。その親友ハ。」

「ソウダト嬉シイケド…。アツ、ナラコノ『エクレア』ヲ…12ツ。」

「かしこまりました。」

レ級は口元を緩ませながら、箱の中に保冷剤と一緒に入れる。港湾棲姫はお金を払い、店を出て行った。

「またのお越しヲお待ちしております。」

レ級はドアが閉まる瞬間まで、頭を下げていた。

「：親友：カ。分カツテイルガ、イザ言ワレルト嬉シイモノダナ：。」

「レオク、そろそろ店を閉めるから支度して？」

「ワカツタ。：明日モ、客ガ来ルトイイナ。」

「最初は密かな隠れスポット的になろうかと思っただけ……。隠れすぎて、誰も来ないね……。今度、街と森の間に店を建てようと思うけど、その時もバイトやってくれるかい？」

「勿論。働カセテモラツテイルカラナ。」

「来月で変わるから、張り紙もしないとねえ。」

レ級と店長は店を閉めながらそんな話をしていた。

五島支部

「タダイマ〜。」

「レ級ナノ！」

「オカエリ。レ級。」

レ級が帰り、北方棲姫と港湾棲姫が出迎えてくれた。

「アア。：タダイマ。」

「何デソナナ恥ズカシソウナ笑顔ヲシテイルノヨ。」

「ソ、ソウカ？」

「ソウヨ。：マア、ソナナコトヨリ、レ級ニオ土産ガアルカラ。」

「：ソウカ。」

「問題ナノ！何ノオ土産ナノカ当テルノ！」

「ウーン、栗ト『キノコ』ト梨ト葡萄カ？」

「ブブー！」

「ナンダロウナ。」

レ級は分かっている。だが、辻褄を合わせるためにわざと分からないフリ。

『エクレア』ナノ！」

『エクレア』カ〜。」

レ級が居間に出ると…。

「帰ッテキタカ。」

「姉貴ノ親友…。」

「オカエリナサイ。フフ。」

礼文島支部のメンバーもいた。

「フフ…ヘーエ、帰ッタンダア。」

「オカエリナサイ。」

「…オカエリ…。」

「オカエリ。」

防空棲姫、戦艦棲姫、集積地棲姫、駆逐棲姫など、五島支部メンバーも勢揃いしていた。

『エクレア』ヲ皆デ頂コウツテワケ。」

「ソウカ。ナラ、『コーヒー』ガ合ウカラ、淹レルゾ。」

「ウン。レ級ハ休ンデ。バイト帰りデシヨウ？」

「イイヨ。ソンナ疲レナイシ。…ソレニ、親友ダカラナ。」

「…フフ。」

港湾棲姫とレ級が話して、レ級がコーヒーを淹れる。

「サア、手ヲ合ワセテ…。」

「…イタダキマス！」

皆、それぞれエクレアを持ち、レ級の淹れたコーヒーと一緒に食べる。とても美味しいようで、皆笑顔で喜んで食べた。

「…。」

レ級は夜、屋根の上へ上がって月を眺めていた。満月だ。

「レ級、危ナイ。」

「ヨク分カツタナ。」

ふと気づけば、港湾棲姫が隣にいる。

「ホッポハ？」

「寝タワヨ。」

「ソウカ。…港湾水鬼たちハ…。」
「明日帰ルカラ、モウ寝テイル。」

二人で月や星空を眺めている。冬の入り始めで、少し肌寒い気がする。

「…港湾棲姫。気ツイテタンダロ？」

「…ウン。」

「アソコデ『バイト』シテタコト。」

「一眼見テ、少シ気ツイテ、淹レテクレタ『コーヒー』デ確信シタ。」

「…ソウカ。」

「…皆ニ言ウツモリハナイワヨ。」

「分カツテイルサ。」

「…デモ、親友ツテコトハ…。」

「嘘ジャナイコトクライ分カル。」

「ソウヨネ。」

「…コツチモ、港湾棲姫ヲ…。」

「分カツテイルワヨ。ズット…ズット昔カラノ仲ジャナイ。」

「…ソウダナ。」

二人が空を見ながら話す。

「…港湾棲姫。」

「？」

「…港湾棲姫ガ親友デ本当ニ良カツタ。」

「…照レルジャナイ。」

「本当ノコトダ。」

「コツチダツテ同ジヨ。レ級ガ親友デ、本当ニ嬉シイ。」

「…照レルナ…。」

「同ジ気持チ。」

「ハハハ。ソウダナ。」

「フフフ。」

笑い合う二人。

「…今日モ一日色々アツタナ。」

「ソウネ。」

「…モウ少シ、コノ夜ヲ眺メテイタイナ。」

「…ソウネ。」

港湾棲姫とレ級は、この美しい満月の星空を見ていた。港湾棲姫たちが話していることは、五島支部や礼文島支部の大人たちは気づいていたが、入り込めなかった。二人の見える場所の裏で、軽く酒を飲んでいた。それほど、港湾棲姫とレ級は他人に入り込めないほどの深い仲なのだろう。

綺麗な星空を見ながら…美しい満月を見ながら、二人は夜が明けるまで楽しそうに話していた。しかし、きつと、二人の輝く友情に比べたら、綺麗な夜空も美しい満月も負けてしまうのだろう。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

式拾伍話 ハロウィンナノ

.....

ヨーロッパ

ゴゴゴゴゴ...

昔のヨーロッパの真夜中、街を彷徨う魔女やお化けたち。

「きゃー。」

「グオオオオ...！」

人を襲おうと追いかける化け物。人は逃げて、家の中に閉じこもる。

「このままじゃ、やられてしまう...！」

そう思った人間は、そこらにある布たちを手に取り、縫ったりして...

ガチャリ...

「グオオオ...オ？」

「.....」

化け物と同じ格好をした。すると、襲われなかった。そして...

「...『オバケ』ノ仮装ヲスルヨウニナツタツテコトダ。」

「オー。」

現在ここ『五島支部』で、レ級が紙芝居をしていた。北方棲姫はもとより、ほぼ全員が見ている。テレビも使えない五島支部では、逆に集まらないのが不思議というものだ。

「ナンデ『オバケ』ガイタノ？」

「『ヨーロッパ』デハ、ソノ日ガ一年ノ終ワリノ感覚ダツタラシクテ、魂ガ彷徨ウト考エラレタラシイ。」

「へーエ。フフフ...」

「他二モ、収穫祭ガ原点ダツタラシイゾ。」

「ソウナノ？」

「...マア、今更ソンナ話ヲシテモ、日ニチガ過ギテイルガナ...」

「ホントナノ！」

北方棲姫がカレンダーを確認して、何日も過ぎていていることに気がつく。

「…ドウシテ今ソシタノヨ…。」

「店長ガ今更クレタ。使イ道ガナイカラ、取り敢エズヤツテミタ。」

「ホッポガガツカリシテルワ…。」

「ノン…。」

北方棲姫はガツカリしている。

「…マア、遅クハナイガナ。」

「ホントナノ!？」

「心ガ『ハロウイン』ナラ、イツダツテ『ハロウイン』ダ！」

「自信満々ダケド、説得力ナイカラ！」

レ級が清々しいほど自信満々で言い、港湾棲姫がツツコム。

「…マア、ミンナ良イ人ダカラ、大丈夫ヨ。キット。」

「ヤッタノ！」

港湾棲姫が町内会の人たちの顔を思い出して、優しい人たちなのを思い出した。

「デモ、仮装ヲ作ルナラ気ヲツケテ…。」

「ウツフフフ。手伝ウワヨ。」

「作ルカラナ。…マア、既ニ仮装ノヨウナ形ダガ…。」

防空棲姫と戦艦棲姫も手伝うようだ。

「…。」

一方、階段の近くで顔をちよこつとしか出していない駆逐棲姫。

「…ドウシタ？ 駆逐棲姫。」

「ナ、ナンデモナイ。アツチ行ツテ…。」

「？ 怪シイゾ。」

「才願イダカラ…。」

「…ワカッタ。」

レ級は声をかけたが、駆逐棲姫には余計らしい。

(…コツチハモウ仮装衣装着テイルカラ…。…ナンカ、一人ダケ本気で張り切ツテイルミタイデ… 恥ズカシイ…。)

駆逐棲姫は暇だから作ったハロウイン仮装を、丁度良いからと着て

きたのだ。あわよくば、この姿を見せて北方棲姫にあげようと思ったのだ。

「オイ、階段ノ近クダト邪魔ダゾ。」
「！」

集積地棲姫が現れた。きつとお腹が空いて降りてきたのだろう。

「アノ輪ノ中ニ入ラナイノカ？ソクナ本気デ張り切ツテイルヨウナ格好ヲS…」

「チエストーリー!!!」

「チエスト!?ギャーッ！」

ドガーン!

集積地棲姫は思わぬ馬鹿力を発揮した駆逐棲姫に吹っ飛ばされた。集積地棲姫は廊下で気絶している。

「?集積地棲姫、降りテキタノ？」

港湾棲姫が、集積地棲姫の声を聞いて、駆逐棲姫に聞く。

「イ、イヤ!来テイナイ！」

「ソウ?今声ガ聞コエタ気ガスルケド…」

「気ノセイ！」

駆逐棲姫が必死に言う。そこに…。

「アラ、集積地棲姫。コンナトコロデ寝テイタラ風邪引クワヨ。」
「！」

ふと、後ろから戦艦棲姫の声が聞こえた。布を縫う道具を部屋から持ってくるつもりだったのだろう。まだ見られていないようだが、集積地棲姫を起こそうとしている。

「集積地棲姫イルジヤナイ。…アレ?駆逐棲姫？」

駆逐棲姫が消えていた。

「ハア…ハア…」

なんとか見られないように、隙について階段を駆け上がったのだ。
「ハ、早く着替エナイト…」

駆逐棲姫が自分の部屋に入ろうとしたが…。

「アツ、ココニイタ。」

「駆逐オネーチャン。」

「イルナ。」

「ウツフフフ。ソノ格好…。」

「イヤー!」

駆逐棲姫が部屋に入ろうとしたが、入る前に港湾棲姫たちに見つかった。

……………

「ソレニシテモ…。駆逐棲姫ガ1番本気ダツタナ。」

「…!」

レ級がこたつの中に入りながら言い、駆逐棲姫が顔を真っ赤にして俯く。

「ホ、本気ジャ…ナイ…!」

「ソナ格好ヲシテ?」

「ゴ、誤解…。」

「ウツフフフ。ココハ一階ヨ。」

結局、見つかつて一階に連れ戻され、晒し者…ごほん、北方棲姫たちが作っている仮装の見本となった。

「デモ、似合ッテルワネ。ソノ格好。」

「…モウ言ワナイデ…。」

駆逐棲姫の格好はキョンシーだった。

「出来タノ!」

北方棲姫が声を上げる。

『「オバケ」ナノ。ナノメシヤ。』

「…………。」

港湾棲姫は布を被った北方棲姫の姿を見て、何かにときめく。そして、カメラを持ってきた。

「イカン! 港湾棲姫! 犯罪ノ域ニ達シテイル!」

「一枚ダケ…! 一枚ダケ…!」

レ級に抑えられるが、港湾棲姫はシャッターを押そうとしている。実際は犯罪ではないが…。

「ソナ息ヲ荒クシテ、無我夢中デヤルノガ問題ダ!」

港湾棲姫の目が犯罪者そのものに見えてしまうからであろう…。

ここで止めなければもつとエスカレートすると思ってしまうほどだ。

「アア〜！ホッポ〜！」

「……。」

北方棲姫はお化けの布を被ったまま何も言わない。

……………

「撮リタカッタ…。」

「ホッポ〜。コツチ向イテクレ〜。」

「ナノ。」

結局、レ級が撮ることになったようだ。港湾棲姫がガツカリする。しかし、写真を見せた途端に元気になるのだから、それで良かったのだろう。

「駆逐棲姫モダ。」

「べ、別…。」

「イイカラ。」

「……。」

駆逐棲姫も撮る。そして仮装した、北方棲姫と駆逐棲姫のツーショットもだ。

「ホラ、ホッポ。港湾棲姫二何テ言ウンダ？」

「エツト…。トリックオアトリートナノ！」

北方棲姫が港湾棲姫に元気よく言う。

「トリック〜！」

「ハイ、オ菓子ダ。」

「ヤッタノ〜！」

もうこれ以上、友人として…親友として港湾棲姫の恥をさらさないようにレ級が港湾棲姫を無視してお菓子をだす。港湾棲姫はレ級を見ていたが…。

「港湾棲姫…。可愛イノハ分カルガ、限度ガアルダロウ…。チョット落チ着ケ。深呼吸シロ。」

「……。…チョット取り乱シテイタワ。」

「全然チョットジャンカッタケドナ。」

港湾棲姫とレ級がコタツで話す。北方棲姫と駆逐棲姫は仮装した

まま何か遊んでいる。

「サテト、ホッポ、駆逐棲姫。連絡シタシ、ソロソロ行キマシヨウ。アマリ遅クテモ、町内会ノ皆サンニ迷惑ダカラ…。」

「分カツタノ！」

「イ、行クノカ…!?!」

ゾロゾロと、皆んなで仮想をして行こうとしたが…。

「ウーン…ウオツ!?百鬼夜行カ!?!」

「失礼ネ。」

集積地棲姫が目を覚まし、第一声がこれだ。

「集積地棲姫ノモアルカラ。」

港湾棲姫が仮想服を渡す。

「エー…。メンドイ…。ソモソモ、『ハロウイン』ヤルホド子供デモ無ケレバ、メンドクサイシ。」

「才菓子トカ貰エルケド…。」

『才菓子』ツテ…。」

集積地棲姫と港湾棲姫が話していると…。

「エツ…。集積地オネーチャン…嫌ナノ…?嫌イナノ…?『ハロウイン』ヤルホッポモ嫌イ…ナノ…?」

「ヤルゾー!『ハロウイン』ヤルゾー!」

北方棲姫の目が泣きそうに潤んだ途端に集積地棲姫が叫ぶ。その場にいた北方棲姫以外は、ちよろいと思っただそうだ。

「コンナニイッパイ貰ツチャツタ…。」

港湾棲姫たちの下げているエコバッグは既に、はちきれそうな菓子袋となっていた。集積地棲姫とて、微かに笑みがこぼれる重さ。

「皆ンナ、イイ人ダナ!」

「…ソウネ。」

レ級が満面の笑みをして、港湾棲姫も微笑む。

「アイツ以外ハ…。」

「我が愛おしの女神様…!もつと罵倒を…!」

「ノワー!来ルナー!」

レ級に悲鳴を上げさせることができるのは酒屋の息子くらいだろうと、港湾棲姫が思う。

「いや〜。戦艦ちゃん元気だったか？」

「梨狩リヲサセテクレタ農家ノ…。エエ。アノ時ハ世話ニナツタワ。トテモ楽シカッタ。」

「それならこっちも本望だべや。来年も、袋がげしてくれると嬉しいのだが。」

「モチロン。手伝ウワ。」

「ウフフフ。私モネエ。」

「おっ、防空ちゃんも来てくれるん？ありがたいのお！」

「モチロン。フフフ。」

農家のおじさんと戦艦棲姫と防空棲姫が話す。戦艦棲姫は元気な笑顔をしていて、防空棲姫は優しそうな微笑みだ。農家のおじさんは年相応に笑っている。

「イツノ間ニカ、皆ンナ酒屋ニイルシ…。」

集積地棲姫は酒を頼んで、嗜む程度に飲んでいた。ハロウインで家を回っているうちに、もう暗いくて危ないからと言う理由でいつの間にか、ゾロゾロと大所帯になったのだ。そしてもうどうせならと、飲み会になっている。

「こんばんは。あなたが噂の港湾棲姫さんのところのほっぽちゃん？」

「コンバンハ！ホツポナノ！」

「あら、元気な挨拶ね。」

北方棲姫がこのメンバーでは若い女性と話している。聞けば、文房具屋のおじさんとお婆さんの娘さんだとか。今は夫と帰省しているとか。

「そして、そっちの可愛らしい子が駆逐棲姫さん？」

「カ、可愛ラシイッテ…。」

「あら、顔を赤くしちやって可愛い〜。」

「……。」

駆逐棲姫は顔を隠す。北方棲姫はそんな駆逐棲姫を見て笑顔にな

る。そして、ふと気付いた。その女性の足元に、隠れるようにいる少女を。北方棲姫と同じくらいの身長だ。

ジー…

「コンバンハ！」

「こ、こんばんは…。」

「ほら、あかり。出てきて皆さんに挨拶。」

その女性の娘さんみたいだ。そのお母さんは優しそうな顔をして、促すように娘に言う。

「ホツポナノ！オ名前言エルノ？」

「わ、私…あかり…って言います…。よろしく…お願いします…。」

その少女は初めて北方棲姫を見たらしく、少し怖がっているように見える。というより、この場にいる全員を怖がっているようだ。

「ヨロシクナノ！」

「あ…。」

北方棲姫がミトンの手を出した。少女はその手を握る。すると、北方棲姫がニツコリと笑顔になる。その笑顔を見て、その少女も強ばった顔が少し緩んだ。

「アカリチャンナノ？」

「うん。私あかり。ほっぽちゃん？」

「ウン！ホツポナノ！」

北方棲姫が笑顔で答える。その少女も笑顔になる。

「おじちゃんたちばかりでちよつと怖かったけど、話せる相手がいて良かった！」

「イ、以外ト話スノ。」

「え…変…？」

「ソナナコトナイノ。逆ニ、話シヤスクテ、イイト思ウノ！ホツポハ好キナノ！」

「いつも人に変って言われてて…。でも、好きって言ってくれる人初めて！ありがとう！」

その少女はさらに笑顔になる。北方棲姫の偽りのない言葉で。

「髪白い…。目も赤い…。」

「ノ…。」

「白くてカッコいい！」

「ノ？」

北方棲姫は違うと言われると思ったが、逆に食いついてきて少し驚いた。

「プリ〇ユアみたい！」

「ノノ？」

五島支部ではテレビは見れないため、そう言うのが分からない。

「とにかく、カッコいい！目も赤いし、ツノもあつて！」

「カッコ…イイノ…？」

「うん！」

それを聞いて、北方棲姫は嬉しくなる。子供ならではの無垢な心があるからだろう。

「ねえ！友達になろう！」

「友達…ナノ？」

「うん！」

「友達…。ナルノ！」

北方棲姫はその提案を喜んで受け入れる。港湾棲姫とその少女の母親は微笑んでいた。

「ところで、なんでお化けの格好？」

「ハロウィンナノ！」

「ハロウィン？もう終わってるよー？」

「心ガハロウィンナラ、イツダツテハロウィンナノ！」

「ほっぽちゃん面白ーい。あかりもやるー。」

少女が北方棲姫と一緒にの布の中に入る。

「見エナイノ！」

「あははは！見えなーい！」

「ホッポ、危ナイ。」

「あかりも、やめなさい。」

保護者二人が止めようとしたが…。

「ワプツ。」

「ぷはー。」

二人がおばけの布の目のところから顔を出す。お互いを見て笑い合う。その光景を見て和んだ町内会の人たちがやられる。それを酒のつまみにして飲んだり、遊んだり騒いだり…。そして、楽しい時は流れ…。

「疲レター…。」

こたつでだらしなくしているのはレ級。北方棲姫は港湾棲姫と風呂へ入っている。

「当分ハホッポノ、オヤツニ苦勞シナイナ。」

入り切らず、はみ出ているお菓子棚を見る。北方棲姫がそれを見て、目を輝かせていたのは言うまでもない。

「…モウ冬カ…。」

レ級は風呂から上がってくる港湾棲姫たちのことを思って、こたつの電源をつける。北方棲姫が火傷をしないような、火元に当たっても火傷をしないコタツだ。

「…ホレ。」

レ級は尻尾に、むいたミカンのひとふさをあげる。

「冬…。…ホッポノ好キナ季節…。…ソウイヤ昔…。…イヤ、モウ戦ツテナインダ。思イ出スコトデモナイカ。」

レ級が独り言を呟いて、ブラウン管TVを眺めていると…。

「出タノー！」

「ホッポ、パジヤマヲ着タ方ガイイゾ。」

「ワカツタノー！」

「ホッポ！マダ身体ヲ拭キ終ワツテナイカラ…。」

「港湾棲姫モマダ拭イテネージャネーカ！」

拭いていない北方棲姫が出てきて、拭いていない港湾棲姫が追う。もちろん、床はお察しの通り。

「ツタク。」

そこを、レ級が拭いてあげる。

「レ級！」

「オー、今度コソ出タナ。」

しつかりと、寝る準備をして来た北方棲姫。

「レ級ー！」

ぎゅー

「オオ、ナンダナンダ。パジャマガ汚レルゾ。」

北方棲姫がレ級をぎゅつと抱きしめる。

「今日、レ級ト寝タイミタイナノ。」

「ソウナノカ？」

出てきた港湾棲姫。

「ドウシテマタ…。」

「久シブリニ寝タイノ！」

「ソ、ソウナノカ？」

レ級は港湾棲姫を見る。港湾棲姫は少し妬ましそうな顔をしていたが、やれやれとする。

「マア、イイカ。」

「ヤッタノ！」

レ級は北方棲姫の布団の横に、押し入れから布団を出して敷く。港湾棲姫は反対側の隣だ。そして、寝る時間までの間、北方棲姫と遊んであげる。港湾棲姫はやれやれと、怪我をしないように言っていた。いよいよ寝る時間となり、豆電球にして布団に横になる。

「レ級。」

「ドウシタ？」

「レ級。」

「ン？」

「…レ級…。」

「ドウシタんだ？」

北方棲姫がこちらを見ているのに気づき、レ級も向いてあげる。北方棲姫は笑顔だ。すると、港湾棲姫にバレないようにコソコソと話す。

「今日、オ友達ガ出来タノ。」

「へー。良イジャン。」

「ホッポヲ見テモ、怖ガラナイノ。」

「ソウナノカ。…デモ、『スーパ』トカデ、子供ト話シテナカッタカ？」

「…デモ、オ友達ニナレナカッタノ…。ホッポ、ナントナク考エテルコトガ分カルノ…。チョット怖ガツテイタノ…。ホッポト友達ニナレナソウナノ…。」

「ソウナノカ…。」

レ級は終わらそうとしたが、北方棲姫が真剣な目をしていることに気づく。

「…ホッポ…。別ニ、ホッポガ我慢スルコトナンテナインダ。友達ニナリタケレバ、ナロウトスレバイイサ。…最初ハ誰ダツテ、チョット違ウノヲ見レバ、怖い。ホッポダツテ、『ピエロ』トカ、般若トカ怖いダロ？」

「…怖いノ…。」

「デモ、モシソレラガナ。」

「ウン…。」

「明ルイ声デ、コンニチハツテ挨拶シテキテ、笑ツテイルヨウナ笑顔ダツタラドウダ？」

「…チョット怖クナクナッタノ…。」

「サラニハ、本当ノコトヲ話シテ、ソイツニモ母親ヤ父親ガイテ、本当ハ友達100人作りタガツテイタルツテ、言ツタラドウダ？」

「ウン…。」

「モシ、ホッポガ断リ切レズニ、友達ニナツテ、イイ奴ツテ分カッタラ、キットホッポハ友達ダト思ウハズダ。」

「…ソウナノ？」

「ウン。…マア、初メテ会ツタ時ノ、オレト港湾モ、最初ハソンナ感じダ。オ互イノコトヲ知ツテ、今デハ信頼デキル仲ニナツタ。」

レ級は、こっそり聞いている港湾棲姫を見た。港湾棲姫は反応せず、寝たふりをする。

「ダカラナ、ホッポ。」

「？」

「本当ニ叶エタイ夢ガアルナラ…友達ガ欲シイナラ…。遠慮シナイ
デ、友達ニナロウト、グイグイ行ツチャエ。例エ嫌ワレテモ、世ノ中
ニハ数エキレナイホド、友達ノ候補ハイルンダカラ。ホツポニトツテ
ノ、オレミタイニ。」

レ級が明るい笑顔で言う。

「レ級ハ友達ジャナイノ。」

「エ…。」

「レ級ハ、オネーチャント同ジクライ大好きナ家族ナノ…！」

北方棲姫も笑顔で言う。

「…ソウカ。アリガトウ。」

レ級は北方棲姫の頭を、寝るまで優しく撫でてあげる。しばらくし
たら、可愛らしい笑顔で安らかな寝息を立てた。

「…コツチモ、ホツポノコト大好きダゾ。」

レ級はそう呟いた。港湾棲姫はそのことを聞いて、微笑んだ。そし
て、3人川の字となって眠る。ハロウインは終わっていたが、結果的
には十分に満喫して、北方棲姫の嬉しいこともあつた充実した一日と
なった。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

式拾陸話 新シイ子

「新入社員…。」

「ノン？」

港湾棲姫が、カタログのようなものを見てため息をつく。

「何シテンダ？」

レ級は港湾棲姫の隣に座って覗いた。

「新入社員ヲ見テイルノ。」

「新入社員？コノ支部ニ？」

「本部カラ、『イロハ級』ノ構成員ガ少ナイツテ。」

「マア、イネエモンナ。」

「レ級ガイルノ。」

「レ級以外ヨ。」

北方棲姫も、いつの間にか港湾棲姫の膝に乗って一緒に見ている。

「ソウイヤ、異動モコノ季節ダヨナ。」

「ソウネ。」

「ソウナノ？」

「…何ニモ準備シテネエケド、異動スルカラナ？今日。」

「…エ？」

港湾棲姫と北方棲姫が豆鉄砲を食らった顔をする。

「ド、ドコニ!？」

「『アドリア海支社』。」

「ドコナノ？」

「スツゴイ遠イトコロ。」

「毎晩帰ツテコレルノ！」

「イヤ、来レナイゾ。」

北方棲姫の言葉にレ級がすぐに答える。

「支社…。大出世ジャナイ。オメデトウ。…寂シクナルケド…。」

「『エイプリルフル』ダ。」

「『エイプリルフル』？」

「冗談ツテ意味ダ。」

「レ級嘘ツキナノ！」

「イヤ、『エイプリルフール』ダカラ…。」

港湾棲姫は分かっていたようで、わざと騙されたふりをしていたようだが、北方棲姫は本気だと思っていたらしい。

「ソレヨリ、新入社員ドウスルンダヨ。」

「ウーン…。：言ウナラバ全員同ジ顔デ、同ジ武装ダカラナントモ…。」

「…サツキ『カタログ』見タケド、新入社員ノ写真3×5ノ15枚全テ同ジ写真デ気持チガ悪カツタゾ。『一言コメント』ハ、ソレゾレ違ウケドナ。」

「『ゲシユタルト崩壊』ヨネ…。」

「ソンナニ悩ンデナイデ、適當ニ決メロヨ。」

「ソレガ出来タラ、トックニ買イ物ニ行ツテル…。」

「ナンデ出来ナインダ？」

「採用シタ社員ノ、採用理由ヲ書イテ提出シナクチャイケナクテ…。」
「ナンダソレ…：地獄カ…？顔モ性能モ全部同ジノ奴ヲドレカ選ンデ、理由モ何モナイダロ…。」

「『一言コメント』デ、判断スルシカナイ…。」

カタログを見るが、全て同ジ顔。イ級やロ級も同ジ顔なのだ。

「トイウヨリ、アイツラ派遣社員デモアルンダナ…。」

「ソレニ、今日新シイ子ガ来ルカラ、キチントシテオイテ。」

「新シイ子？」

いつの間にか、駆逐棲姫もいる。集積地棲姫は台所のテーブルで何か食べている。

「最近、コノ組織ニ入ツタ新人サン。」

「最近？集積地棲姫ト、レ級ガイル、コノイベントカ？」

「ウーン、ドウダロウ…。新シイ子ガ来ルシカ…。」

「ドンナ経歴ダ？」

「タシカ…：産マレタノハ今年、東シナ海生マレ。ソノ後、色々アツテココニ来ルツテ聞イタワ。」

「へく…。：悪イ奴ダツタラドウシヨウ…。」

「怖い人ハ嫌ナノ…。」

そんなことを話していると…。

ピンポーン

「オ客サン？ハイイ。」

ガチャリと玄関を開ける。

「コ、コンニチハ。」

「アラ、コンニチハ。…ドチラ様？」

「コノ度ハ、新シク配属サレル、深海玉棲姫…。」

「アラ、アナタガ…。ドウゾ、上ガツテ。」

港湾棲姫が家の中を案内する。深海玉棲姫も緊張した様子だ。

ジー…。

「アウ…。」

それもそうだろう。北方棲姫やレ級、戦艦棲姫や防空棲姫、集積地棲姫らがじーつと見ていて目を離さないのだ。

「アノ…。」

「…気ニシナイデ。皆、初メテデ緊張シテルノ。」

「ハイ…。」

港湾棲姫が笑顔で言うが、何も無いわけがない。この雰囲気は深海玉棲姫も戸惑っている。しかし、実際は深海玉棲姫しか緊張していない。なぜなら…。

「ホッポ、見口…。尻尾ガニツダ。」

「ソウナノ…。ニツナノ…。シカモ、片方トイレットペーパーガツイ

テルノ…。」

「オトイレ トカ、ドウヤツテシテイルノカシラ…。」

「新シイ子ハ、衣装ガ華ヤカネ。ウツフフフフ。」

「新タナル萌エヲ感ジル…。」

「新入り…2人前…？」

北方棲姫たちは、尻尾が二つでどうやって、トイレを済ませているのか気になっているだけだ。ただそれだけである。特に悪意はない。

「ジャ、コレカラ仕事内容ヲ説明スルワネ。」

「ハイ…。。ヨロシクオ願イシマス！」

深海玉棲姫がペコリとお辞儀をする。

「エーット…。マズ、トイレットパーパーハ、コノ棚。才菓子棚ハアソコ。火ハガス焔炉ダカラ、火事ニナラナイヨウニ。」

「…ン？」

深海玉棲姫は、聞いていた内容と全く違うことに戸惑う。

「ゴ近所付キ合イハ、大切ニ。アナタノ部屋ハ、2階ダカラ。アトデ案内スル。コノ部屋ハトイレ、リビング、キッチン、才風呂…。クライカシラフ？」

「ア、アノ…！」

「？」

「艦娘ト…戦ウトカ…。」

「エツ!?何デア？」

「何デッテ…。深海棲艦ダシ…。」

「…イヤ、深海棲艦ニモ私情ヤ、生活ガアルシ…。イチイチ鎮守府ノ戯言ニ付キ合エナイ。」

「ア、アレ…？」

深海玉棲姫の言葉を聞いて、キョトンとしている。

「給料モ、僅カシカ発生シナイノニ、年中付キ合ッテイタラ、労基ニ引ツカカルシ、体力ノ無駄。アルバイトトカシテ、生活費ヲ稼グシカナイ。」

「エエ…。」

「デモ、ココニ住ムコトニナツタラ、安心シテ暮ラスハズ。コノ家ハ、家賃ガ安イカラ。」

「…？」

深海玉棲姫がポカンとする。聞いていた話と全く違う。本部の面接はそれはそれはひどいものだった。

「当社ノ志望動機ヲ、才聞カセクダサイ。」

「ソレハ…。」

集団面接のようで、隣が一人一人言っていく。

(緊張スル…)

しかし、最近のイベントで出場を果たしているため、どうやら期待も高まっていると確信している。

「アナタノ特技ハ何デスカ？」

「ハ、ハイ！艦娘ヲ沢山大破サセタコトデス！」

「アツソウ。」

「アツソウ!？」

「ドウカシタ？」

「ア、イエ…。」

「ナラ、次ハ…。アザラシニツイテドウ思ウ？」

「ア、アザラシ!?!…エ、エーツト…。」

深海玉棲姫は考える。

(コレハ…予期セヌ事態ニ陥ツタ時ノ対応ヲ求メラレテイル…!?…フ
フ…流石、深海棲艦ヲ雇ウ組織…格ガ違ウ…!)

※勘違い

(ソウ考エルト、予想外ノ質問ヤ返シニ納得ガイク…。)

※思い違い

(ナンダカ、面接官ガ格上ニ見エテ来タ…!)

※気のせい

(ナラバ…堂々ト返ス!)

「可愛イト思イマス。」

「ヤツパリ…ドコラ辺？」

「尻尾ノ所ガ特ニ。」

「分カルワア…。ジャ、次。コレハドウ思ウ？」

面接艦がイラストを出す。ある艦娘と掛け合わせたようなアザラシ。思わずバアーンと字幕が見えた気がした。深海玉棲姫も、どう反応すればいいのか硬直。他の受験者すら、思わず言葉を失った。しかし5秒後…。

「ゴ、コレハ…コレハ…。シ、尻尾ガ錨トナツテイテ、可愛イト思イマス!」

深海玉棲姫、ヤケクソになった。

「ナラ、コノ魚ハドウ思ウ？」

((イ、イルカダー!))

他の受験者が全く関係のないイラストを出した面接艦に心の中でツツコミを入れた。

「食ベタラ珍味デシヨウ!」

((エエエエエ!))

深海玉棲姫の目はグルグルと回り、自分自身何を言っているのか分からない。

「フザケルノハコレクライニシテ…。本題ヲ言ウワ。ココデ働クノハ一筋縄ジヤイカナイ。キット、現実トノ差デ一喜一憂スルワ。デモ、ソノ覚悟デ入ルナラ大丈夫。採用サレテ、来ルノヲ心カラ待ツ。」
「ハイ!」

深海玉棲姫がその言葉を思い出して、港湾棲姫らを見た。

『現実トノ差(想像よりゆるい)…。』

深海玉棲姫は冷静になり、思い返せば、あの面接で既におかしかったことを思い出した。

(実ハ大シタコトナインジヤ…?)

深海玉棲姫はそんなことを思い、ハア…とため息がでる。港湾棲姫は何のことなのかさっぱりで首をかしげる。

「…気ニ入ラナカツタ?」

「イエ…。大丈夫…。」

深海玉棲姫は相手に失礼だと思って、無理にでも笑顔を作る。しかし、それが見抜けないんじや支部長は務まらない。

「ドウシタノ?」

けれど、深く聞こうとせず、優しく促すように聞いた。強く聞いても、初対面では話しづらいと言うもの。

「ヤツパリ、戦ウト思ッテイタ?」

まるで見透かされたように言われて、思わずドキンとしてしまう。そんな彼女を見て、ふと笑みをこぼす。けれども、新人をそんな無責任に戦場へ連れ歩いてはいけない。いくら相手や自分達が加減をしていたとしても、気を抜いてはいけない場所なのは変わらない。

まあ、それは新たな艦娘を入隊させた向こうも同じだが…。

「デモ、新人サンハ、マズハ仲間ニ認メラレルトコロカラ始マル。」

港湾棲姫は深海玉棲姫を、先輩であるレ級たちの場へ案内する。すると、レ級たちは待っていましたと言わんばかりに顔をほぐした。レ級達だって、新人にいい格好を見せたいし、仲良くしたい。それにはまず紹介からだった。

「私ハ港湾棲姫。ココノ支部長。…本部カラ聞イテイルデシヨウ？」

「マア…大体ハ。」

港湾棲姫はニコリと笑顔になる。可愛かったが、生憎、深海玉棲姫は本部の記憶を思い出そうと見ていなかった。

(何デダロウ…。アマリ記憶ニナイ…。)

深海玉棲姫は深く記憶の中を探しても、『港湾棲姫が支部長』としか記憶がない。それもそのはず。いくら本部がエリート集団だとしても、全員が全員、いつも勤勉なわけではない。中には気の抜けた者もいる。もちろん、緊張してしまって聞いていなかったと指摘されても、素直に否定はできないだろう。つまるところ、運が悪かった。だ。

『レ級』ヨロシクナ。」

「ヨロシクオ願イシマス。」

深海玉棲姫はその手を握る。もちろん、全く抵抗がなかったわけではない。イロハ級に姫や鬼が下につくなど、いささか躊躇いがある。まあ、年功序列のため仕方はないが。

「コンニチハ！ホッポナノ！」

「コンニチハ。」

元気な声を発して挨拶したのは目の前の北方棲姫。自然と和んでしまうのは、全てが可愛いからであろうか？他三名、防空棲姫、戦艦棲姫、集積地棲姫はあくまでも事務的な挨拶を終えた。

「ジャア、一通リヤツタカラ、次ハ鎮守府…。」

「チ、鎮守府!？」

港湾棲姫は「ドウカシタ？」と首を傾げるが、深海玉棲姫は、何故いきなり敵の本拠地に殴り込みをするのかと驚愕した。しかし、これはチャンスと受け取った。

(ココデ、先輩方二格好イイ所ヲ見セテ、戦イトハドウ言ウモノカ思イ出サセル！)

と、別に忘れたわけでもない港湾棲姫達を見た。そして、意気込んで装備を引つ張り出していると…。

「何ヤツテンダ？」

レ級はなぜそんな面倒そうなことをしているのか？とでも言いたそうな顔だ。

「何ツテ…。」

戦イニ行クンデシヨ？と言おうとしたがやめた。よく見るとレ級らはなんの装備もしていない。それどころか、紙袋に煎餅などを入れていた。

「行クゾ。ソナ重イ物背負ツテタラ、歩キツライダロ。」

「エ…。」

レ級はそう言つて、深海玉棲姫の装備を剥ぎ取るかのように脱がせて、有無を言わせずに手を引いて行った。

「コンニチハ。」

北方棲姫が鎮守府の目の前で言う。人里離れてはいないが、近すぎると言うものでもない。と言うものの、五島支部が人間の家と隣接しているからだ。

『あ、ほっぼちゃん。いらっしやい。』

インターホンから声がしたのは男の人の声。ガチャリと扉が開いて現れたのは真っ白い服に真っ白な提督帽。その男は間違いなく提督だ。その後ろには慣れているであろう艦娘と、新米である半分睨んでいる艦娘だ。深海玉棲姫も、睨んでいる艦娘を睨み返す。

「あはは…。」

提督は苦笑いを浮かべるが知ったこっちゃやない。

「丁度、こちらから挨拶をしに行こうかと…。」

提督はバツの悪そうに言うが、深海玉棲姫は驚きだ。まさか、友好関係を先に結んでいたとは！しかし、一言によってポカンとする。

「別ニ友人デモナンデモナイワ。」

港湾棲姫は見透かしたように言う。連れのないなあと、提督はどこ吹く風だ。

「そつちの子は新しい子?…こんにちは、これからよろしくね。」

提督は言うが、深海玉棲姫は目を合わせることもしない。提督の真後ろの艦娘が「嫌われたね。」などと、意地悪く笑みを浮かべて言う。

「ソレジャ。」

「えっ!?!」

港湾棲姫がすぐさま帰還しようとするが、提督が驚いた表情をした。

「それだけ!?!」

「ソレダケ。」

「他には?」

「ナイ。」

「それだけのために!?!」

「ソウ。」

港湾棲姫は淡々と答える。気がつけばすっかりペースにのまれていた。

「だったら、それだけのためにわざわざいらしたので、お礼をさせてください。」

「イヤ…。」

「紅茶が冷めます。ほっぼちゃん、ジュースあるよ? グレープジュース。炭酸入り。」

「ノ!?!」

しかし、提督も負けていない。港湾棲姫を引き込む方法は大体考えである。無駄にしようという言い方をした後、極め付けは北方棲姫を引き入れる。なんとも、子供をダシに使ってるのだろうか。結局、ずるずるとひきづり込まれたが。

「デ、ナンデ招イタノ?」

新人教育デ忙シイデシヨウ?と聞いたそうな顔をする港湾棲姫。

「実は思ってたんですよ…。」

提督が深刻な表情をする。

「もしかして、自分、新しい子に嫌わられているのでは?と。」
「今気がツイタノ?」

ナンダ。と、深海玉棲姫が呆れるが、よくよく考えると、まあ確かに深刻であろう。艦娘を指揮する者として好感度は大切だ。しかし、港湾棲姫たちは深海玉棲姫より辛辣な言葉を浴びせる。

「ソモソモ、影ガ薄イノヨ。」

「特徴ガネーナ。」

「アリキタリナノ。」

「白服黒髪、ドコニデモイル提督。」

「『オーラ』モナイ。フフフ。」

「時代遅レダ。」

一部を書いたが、本当はもつと沢山の罵声を浴びせている。

「いや、ひどい。それはひどい。」

提督は信じられないような、驚愕したような顔をして、手を横に振るだけだ。

「こっちは真剣に悩んでいるのに…。」

「ダカラ、真剣ニ答エタノヨ。」

「俺ってそんなにひどい!?!」

港湾棲姫の言葉を本気に受け取って、提督が嘆く。だが、本当に仲が悪ければそんなことは言うまい。

「冗談はさておいて…。」

「冗談ジャナクテ、真面目ニ…。」

「もう俺のHPは0です…。うちの新人の艦娘に気合いを入れてくれませんか?特に新しい子に…。」

提督が頼む。

「エ?嫌。」

しかし、即答した。

「新シイ子ヲ易々ト戦場ニ連レテ行ケナイ。」

港湾棲姫はガバツと、深海玉棲姫を抱き寄せる。ほのかに香る、港湾棲姫の優しい香り。僅かに甘い香りは安らぎを…おととつと。…

けれども…。

「ヤツテミタイ…。」

「エ!？」

港湾棲姫が驚いた。

「ダメ。連レテ行ケナイ。」

「デモ…。」

「ダメッ!」

港湾棲姫が頑なに断る。深海玉棲姫はシユンとしてしまった。

「オイ、港湾、チョットイイカ?」

レ級が立ち上がり、港湾棲姫を連れてドアを開けて出る。

「港湾、アノ言イ方ハナイダロウ?」

レ級はやれやれと、優しく言う。

「今日、ウキウキ気分デココニ来テ、ソナ強ク言ツタラ可哀想ダロ。気分ガ沈ム。」

と、レ級が言う。

「ケレド…。戦場ハ生半可ナ者ヲ想イモヨラナイ所デ沈メル。ソウ簡単ニ行カセラレナイ。例エ演習デモ…。」

「アノ頃トハ、時代モ立場モ違ウダロ?ソレニ、本部カラ本当ニ何モ聞カサレテイナイナラ、驚キノ連続ダ。自分ノ感覚モ取り戻シタインダロ。…ソレニ、ホツポモ戦ツテイル。背丈ダケデモ、面子ガアルンダロ。」

「ソナ面子…。」

「経験シナケリヤワカラナイコトモアル。…違ウカ?」

レ級は港湾棲姫に確かめるように聞いた。

「ソレハ…ソウダケド…。」

「新シイ後輩ヲ守ツテヤリタイ気持ちハ分カルガ…。想イヲ潰シチャダメダロ。」

「…分カツタ…。」

港湾棲姫は不安半分、罪悪感半分とした顔で、ドアから入る。

「…。」

深海玉棲姫は港湾棲姫を見る。

「ドウスンダ。」

と、レ級は港湾棲姫の横を肘でつつく。

「…分カツタ…。」

港湾棲姫はぶつきらぼうに言った。その後、後輩の喜ぶ顔を見て、少し良かったと思えた。…演習の結果は散々としていたとしても…。

「…い…」

深海玉棲姫は右も左も見ず。敵の艦娘は見事の一言。数人、動きもあたふたとしていて、照準も合わせずに撃つものだから当たらない。新人たちであろう。しかし、その新人より、ずっと強い者が何人かいる。こちらが撃つても全て避け、逆にもものすごく考えられた魚雷群を前にすれば、歴戦の差は見えると言うもの。

「本気、見せてあげます！」

と、艦娘が魚雷を放つ。どう考えても回避できず、ここで轟沈判定をくらうのか。敵、想像以上に強かったんだな。と思った瞬間…。

「ボケットスルナ。動ケ動ケ。」

「！」

レ級が横を抜けて、魚雷群に突っ込む。一瞬、馬鹿ナノカ？と思っただが、理由がわかった。

バババババ！

ドガアン！

レ級より速く、艦載機が突っ込んで魚雷を消滅させた。港湾棲姫と北方棲姫だ。二人が消滅させると知っていたから突っ込んだのだ。そして、レ級が熟練の軽巡相手に撃沈判定を出した。コンビネーションは一朝一夕でできるようなものじゃない。ずっと昔からの友人同士であることがよくわかる。元より、周りを見るとこちらがどう考えでも優勢だ。艦娘の空母も、悔しい顔をする他ない。完全に制空権を取られている。理由は、こちらの編成が化け物だからだ。港湾棲姫は五島の空を埋め尽くす艦載機を保有しており、北方棲姫も港湾棲姫の半分といったところで、とてつもなく多い。空は雲の代わりとなつて連隊で影を作る。それだけでも優勢は取れる。極め付けは防空棲姫。

彼女がいるだけでも、並の空母連合艦隊は苦戦を強いられる。となれば空は完全に大丈夫であろう。海上の、港湾棲姫たちに向けられる砲弾は戦艦棲姫が盾となり、弾く。さらには高火力で攻撃、或いは仲間盾となる攻守一体の動き。これだけならなんとか対処は立てられる。これだけなら。しかし、そうはさせないのがレ級だ。例え潜水艦を編成に入れても叩き潰す。手数も多く、どんな相手にも攻撃する。それだけでも十二分に脅威だ。そんな彼女たちが単体ならともかく、一個隊に、しかもコンビネーションも合っているのだ。そこらの艦娘など、空気中に舞っている埃同然、175艦娘など屁でもない。味方である深海玉棲姫も、そう思うのだから仕方はない。圧倒的の一言。程なくして夜戦の時間判定となり、判定を出したり出されたりして終わった。

「やっぱり、港湾さんたちは強いなー。」

机に手を置いて、分かっていたような口調の提督。満足している顔だった。

「当たり前。五人姫デ、一隻レ級。構成モ最悪。逆ニ言エバ、勝テル方ガオカシイ。」

「でも、一人の艦娘にやられたことあるよね?」

「…嫌ナコト思イ出サセナイデ…。」

港湾棲姫はすっかりトラウマを抱えた顔になり、提督は苦笑い。

「いや、負けちゃいました!」

「レ級の二撃痛いからな。」

「…あんな艦載機の量をどうやって…。」

熟練の艦娘たちの反応は三者三様の顔で入ってきた。オレンジに近い金色の髪をした艦娘は笑顔で。長身の引き締まった身体をした艦娘はうんうんと頷いている。サイドテールの、あまり表情の変わらない艦娘はぶつぶつとうわ言のように呟いている。その後ろには、先ほどまでナメていた艦娘が、先輩たちの後ろでちょこんと顔を出していた。深海玉棲姫も、熟練艦娘たちが恐ろしかったが、新米艦娘と同じようにしては、深海棲艦の名が廃るといふもの。堂々と…まではい

かないが、隠れはしない。しかし、熟練艦娘も港湾棲姫も、少し震えている深海玉棲姫らがなんとも可愛らしい。

「し、新人。初めてにしては良く頑張っ…。」

「新人さん…さっきは魚雷を放って怖がらせてごめんなさい！」

長身の艦娘より素早く、金髪の艦娘が抱きつく。軽巡故の素早さだろうか…。などと思っていると、先を越されて、少し恥ずかしい思いをしている艦娘が少し顔を赤くしている。サイドテールの艦娘も、少し口角が緩んでいる。なんとなく、暖かくて居心地の良い空間だなと思っただけ。少なくとも、抱きついて微笑んでいる艦娘を見れば、倒そうと思っていた自分はどこに行ったのやら…。そんな自分の新人の子と艦娘がわちやわちやしてるのに少し嫉妬したのか、港湾棲姫が隠れている艦娘を呼んで優しくアドバイスをして、いいところを褒めれば、簡単に壁は消える。新米艦娘は思わず「お姉様！」と言うが、北方棲姫がそれを許さない。はて、どうしたものかと笑いあう。長身の艦娘が「部下を取るな！」と言っても、「コツチノ方ガイイモンネー。」と、新米艦娘を抱き抱えれば、港湾棲姫へと寄るものだ。それを見て、ますます嫉妬する長身艦娘も深海玉棲姫に話しかけられれば思わずニヘラ顔。同じ戦艦として恥ずかしいと、苦笑いする戦艦棲姫。結局、何のために連れてこられたんだと、演習に出させてもらえなかった集積地棲姫が叫んでもどこ吹く風。もう聞いてもいまい。聞いて茶化して笑っているのは防空棲姫。サイドテールの艦娘は北方棲姫が楽しそうに話し、身体いっぱい表現するのを見たり聞いたりして表情がほぐれる。そんな平和なひと時を楽しそうに見る提督。

「…あれ？だから、俺に好感度があがらないんじや…？」

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

式拾漆話 クリスマスナノ

クリスマス当日

「今宵ハ『クリスマスマス』…。ドコモ幸セニシテイル、長閑ナ日常…。ケレド…。ナンドデモ…。クリカエス…。カワラナイ…。カギリ…。」

「タクサンノ…想イ…ナクナル…。コノ…五島デ…ソウ…。」

「ワタクシガ…オアイテ…イタシマス。カカツテ…キナサアイツ…！」

闇夜の中、月を背景に蠢く深海棲艦がいた。

「ウーン…。ウーン…。」

「ノ？」

数日前、ここは『深海棲艦 五島支部』。ふと、北方棲姫が庭でアリと遊んで帰ってきたところ、港湾棲姫が何やらこたつで考え事をしていた。こたつの上には赤いボールペンで数字が書かれている書類や、広告などがあつた。

「オネーチャン！」

「グフツ。」

北方棲姫はそんな港湾棲姫にアタックして、抱きつく。

「アラ、オ帰りホツポ…。」

「ドウシタノ？」

「…ウウン。ナンデモナイ。サ、晩御飯ノ支度ヲシナクチャネ…。」

「ノ？」

「ソんなコトガアツタノ…。」

「ウーン…。」

レ級は北方棲姫の相談を受けて、難しい顔をした。

（多分…イヤ、絶対二家計簿…。ホツポニナンテ説明スレバ…。ソモソモ、最初カラ ココハソコマデ金ガナイ訳ジャナイ…。ドコニソナ支出ヲシテイルノカ…。TVモマダ『ブラウン』菅ダシ…。食費モ各々稼イデイルシ…。テカ、最近本部カラ『ストライキ』ニ成功シ

タツテ、言ツテタジヤネーカ。電気代モソコマデカカラネーシ…。
レ級が考え込む。

「ウ〜ン。分カラナイカラ、明日バイトダカラ、店長ニ聞イテミル。ソ
レマデ待テルカ?ドウセ独身ダロウシ。」

「分カツタノ!」

「ヨシ!良イ子ダ!」

レ級が北方棲姫の頭を撫でる。港湾棲姫に見られたら…。

翌日

「タダイマ〜。」

レ級帰宅。

「才帰りナノ!」

北方棲姫が真つ先に出迎えてくれた。

「ドウダツタノ!?!」

「ア…エーツト…。」

レ級が思い出す。

『まず独身ってなんで決めつけたの…。それと、赤字?』

『はい…。実ハ…。』

『…なるほどね〜。それは多分、クリスマスだからじゃない?』

『クリスマス…?』

『つまり、良い子にしているとサンタクロースからプレゼントを貰
うってやつ。…知らないの?』

『ア、い、いや。海外出身なものデ…。』

『外国にもあつたような気がするんだけどなあ…。まいいや。多分、
そのほっぼちゃんのプレゼントのために、家計簿を見直しながら少し
ずつ削っているんじゃない?』

『なるほど…。サンタクロース?』

『プレゼントを配るおじさんのこと。トナカイに乗って、子供たちに
プレゼントを配るんだよ。』

『…不審者…。』

『その言い方はひどいかな。ま、とにかく子供はそんな気前のいい人

がいていると思っっているから、そのことは内緒だよ。がっかりしちゃうからね。』

『分かつた。』

そして、今の状況に至る。

「…エーット…。アレダ…。赤イ数字ハ…。」

レ級が港湾棲姫を見る。港湾棲姫は少し怖い顔をしていた。

「…ソウ！見間違イダ！」

「見間違イナノ？」

「ホッポモ疲レテルンダナ！キツトソウダ！」

「ノノノ？」

レ級はなんとか誤魔化し、港湾棲姫のところに行く。北方棲姫は戦艦棲姫と遊びに行った。

「デ、ナンデソソナ悩ンデルンダ？」

「ソレガ…。」

港湾棲姫が気まずそうな顔をした。

「ホッポニ何ヲアゲルツモリナンド？」

「コノ『深海カタログ』デ、ホッポガ欲シソウナモノヲ探シテイテ…。」

駆逐棲姫ノハ選ンダ。…デモ、ホッポノ好キナ物ガ分カラナイカラ、

トリアエズ『リスト』ヲ作ツテテ…。」

「家計簿ジヤナカツタノカ。マア、『深海カタログ』ヲ見セテクレ。」

「赤イ丸ガ『リスト』。」

「多イナ…。」

レ級がペラペラとページをめくる。ちなみに、深海カタログとは深海棲艦が使うカタログであり、毎月支部に配布している。シーズンによって、それぞれ割引きがある。通販カタログみたいなものであるが、売られている物は全て深海棲艦しか購入しないもの。もしくは出来ないものだ。例えば、装備など。しかし、装備や武器だけではない。水着やおもちゃ、日用品雑貨なども売られている。いわゆる、全てこれ一冊で注文すれば24時間には必ず届く、本と言う名のデパートのようなものだ。ちなみに、注文してから24時間を過ぎると代金が割引される。

「へエ。今ハコンナニ品揃エガ豊富ナノカ…。」

「ウン。昔ハ、数『ページ』シカナカツタケド、今ハコンナニ分厚イ。」
「武器ハ、ホツポハ嫌ガルナ。ヤツパリ、玩具ジャナイカ？ソレカ、ヤツパリ服トカ？」

「ウ。ン。ヤツパリ、汚レハ自然ニ消エルトシテモ、『ワンピース』一着ガネ…。デモソウナルト、ホツポノ好キナ柄トカ、感ツカレルカモ知レナイシ…。一応聞イタケド、曖昧ナ答エデ…。」

「ドンナ？」

『ホツポノ好キナ服ノ柄ナノ？…ホツポノ服ナラ、何デモイイノ。安イヤツテイイノ。』

北方棲姫が、少し困ったような我慢したような笑顔で答える。港湾棲姫はそれを見て聞いた時、何故か涙が出そうになったようだ。

「ナンカ、氣ヲ遣ワセチャツタヨウデ…。」

「本当ニ良イ子ダヨナ…。ホツポハ…。ウ。ン、確カニ、少シ感ツカレソウダナ…。…コウナツタラ、助ツ人ヲ呼ブカ。チョット移動スルカラ、ホツポニ言ツテクルナ。」

「エ？チヨ、レ級。」

レ級はすぐに戦艦棲姫たちのところに行き、港湾棲姫と出かけてくることを伝える。

「サ、行クゾ。」

「行クツテ…。ドコニ…。」

「マサカノ鎮守府…。」

「意見ハ沢山アツタホウガ良イダロ。」

レ級と港湾棲姫の鎮守府施設巡りが始まった。

「え？ほっぽちゃんにプレゼントですか？いいですね。というより、今年はほっぽちゃんたちにもプレゼントをあげようと、こっちでも用意してるんですけどね。どうですか？今年は、うちでやると言うのは。」

「オ、イイナ。皆ンナデ『パーティー』カ。港湾棲姫ハドウダ？」

「ウ。ン…。ソノ方ガ楽シイカシラ…。」

「曉たちも、ほっぽちゃんに会いたがつていますし…。」

「…ワカツタワ。タダ、集積地棲姫が何ト言ウカ…。」

「ア、確カニ。デモアイツハ、ナンダカンダデ一緒ニ来テクレル奴ダ。イイヤツダヨ。」

「…マア、ソウネ。口デハ嫌ガツテイテモ、結局ハネ。家族ミタイナモノダシ。」

「…戦ツテイタ時モ、オレヲ庇ツテ大破シタ時モアツタナ…。アイツハイイ奴ナンダヨ。本当ニ。」

「ソウネ。」

港灣棲姫とレ級が懐かしむように、口元を緩ませて話す。そんな二人を見て、提督は介入出来ないのがすぐに分かった。

「アツ、コツチノ話バカリ…。」

「あ、いえ。…お二方は、本当に仲間を信頼しているのが分かりましたし。」

「…恥ズカシイナ…。ソレヨリ、ドウスンダ?」

「ソウネ。ナラ、才言葉ニ甘エテ。」

「分かりました。なら、用意しておきますね。それと、ほっぽちゃんへのプレゼントは一応、ボードゲームにしておきました。港灣棲姫さんたちと遊べる、ゆるい感じのやつです。」

「ナルホド。『プレゼント』ガ被ツタラ、ガツカリスルカラナ。」

そう言つて、他の者にあたる。

「ほっぽちゃんにプレゼントをしたら何か? うーん…。やっぱり、服とかでしようか?」

「もちろん、休暇でち。」

「ゲーム。」

「おにぎりです。」

「子供だ。」

「愛デース!」

段々、聞いていくうちにおかしくなつてきている。

「…ホッポガ喜ビソウナ案ガ少ナイナ…。」

「服クライシカ…。」

一人が悩む。

「ホツポガ欲シイモノ…。：弟…。？」

「ヤメトケ。ホツポガ欲シイモノ…。：ナインジヤナイカ？」

「ドウシテ？」

「TVハ見レナイシ、『インターネット』モ集積地棲姫クライシカヤツ
テイナイ。：ドンナ物が売ツテイルノカ、分カラナインジヤナイカ
？」

「：ソウネ…。：支部ノ給付金モ上ガツタシ、TVヲ購入シヨウカシ
ラ…。経費_ニ落ちルトイイケド…。」

「落ちルダロ。人間ノ暮ラシ等ヲ調ベルノモ、マタ仕事ミタイナモノ
ダシ。」

「ソウ…。トコロデ、ホツポハ…。」

「仕方ナイカラ、『深海カタログ』見セルシカナイ。値段ノ所ハ伏セテ
ソシテ、欲シイモノヲ聞クシカナイ。」

「デモ、ソレツテ買ウコトニ気付クンジャ…。」

「ソノタメノ『サンタクロース』ダロウ。ホツポハ元々良イ子ダカラ、
問題ハ『プレゼント』ノミダ。ソノ『サンタクロース』ニ頼ム形デ、ホツ
ポニ選バセレバイイ。」

「分カツタワ。」

「ニタダイマ。」

「オ帰りナノ！」

北方棲姫が玄関にすぐに来て出迎えてくれる。可愛すぎたのか、港
灣棲姫たちが和む。

「ドコニ行ツテタノ？」

「鎮守府。『パーティー』ヲヤルミタイ。招待サレタ。」

「『パーティー』ナノ！」

北方棲姫が嬉しそうに目を輝かせる。またも和みが…。

「トコロデ、ホツポハ知ツテルカ？」

「ノン？」

「『クリスマス』ヲ。」

「クリ…？ノン？」

『サンタクロース』ツテ言ウ、オジイサンガ夜中、寝テイル良イ子ニ『プレゼント』ヲ配ル日ヨ。」

「…不審者ナノ…？敵ナノ…。」

「敵ジャナイゾ。ホツポニ、ホツポガ一番欲シイモノヲ『プレゼント』スルンダ。」

「…怪シイノ…。気前ガ良スギルノ…。怪シイ人カラ、物ヲ貰ツチャダメナノ…。」

「…多分ホツポハ、将来立派ニナルダロウナ…。」

レ級がお手上げの顔をする。

「ツマリ一年間、ホツポガ頑張ツテ良イ子ダツタカラ、『サンタクロース』ガ『プレゼント』ヲクレル日ヨ。」

「良イ子ナノ？」

「モチロン。ホツポハ良イ子ヨ。絶対ニ『プレゼント』ヲクレルワヨ。」

「…危ナイノ…？」

「ウウン。危ナクナイ。赤イ服ト帽子ヲ着テイテ、白イ髭ヲ生ヤシタ、『トナカイ』ニ『ソリ』ヲ引イテモラツテイル、オジイサン。世界中ノ子供タチニ『プレゼント』ヲ配ツテイルノ。」

「…ソウナノ？」

「ウン。」

港湾棲姫が北方棲姫を説得した。

「ホツポノ欲シイモノ…。」

「ウン。」

「…ホツポハ、皆ンナ健康テイテホシイノ！」

「グハッ！」

港湾棲姫とレ級が尊すぎて吐血した。

「血ヲ吹イタノ！救急箱ナノ！」

「イ、イヤ…ホツポ…。大丈夫ダ…。尊スギテ血ヲ出シタダケダ…。」

「ソウ…。久々ニスゴイ『ダメージ』…。」

「大丈夫ナノ…？」

「大丈夫…。」

港湾棲姫とレ級は取り敢えず北方棲姫に深海カタログを見せる。もちろん、値段のところは隠している。

「ホッポハ、ドレガ欲シイ?」

「欲シイ物ヲ一ツ選ンデ。後テオネーチャンガ、『サンタクロース』ニ伝エルカラ。」

港湾棲姫とレ級が北方棲姫に言う。

「沢山アルノ…!見タコトナイ物バカリナノ…!」

目を輝かせながら言い、ほっこりと港湾棲姫とレ級が眺める。

「ウーン。」

そのカタログを何時間も見ている北方棲姫。港湾棲姫たちは一通りほっこりしたら、やるべき家事などを済ませている。

「ン?決マツタ?」

夕食の支度をしていたら北方棲姫が、港湾棲姫の無地の赤色エプロンの裾をチョンチョンと引っ張る。

「オネーチャンハ、ドレガ欲シイノ?」

「…ン、オネーチャンハ、ホッポガ喜ブモノカナ。」

「ノノノ…。」

北方棲姫が困った顔をする。

「キットホッポハ、イツモ家事ヲシテイル、港湾棲姫ニ御礼ヲシタインジヤナイカシラ?」

隣で、赤いチェック柄のエプロンを着て手伝っている戦艦棲姫が言う。

「ウッフッフ。デモソレナラ、ホッポガ自分ノオ小遣イデ 何カアゲタ方ガ喜ブト思ウワヨ。」

テーブルの椅子に座って暇そうにしている防空棲姫も言う。

「ソウナノ?」

「ウン。コレハ、ホッポガ欲シイ物ヲ選ンダ方ガ嬉シイ。」

「ソウナノ。」

北方棲姫がまた考え始める。

「…頑張ツテイル、『サンタクロース』ヲ、モテナスノ?」

「…多分、ホッポガ世界ノ『トップ』ダト毎日ガ平和ダロウナ。」

自分の部屋から下に降りてきたレ級が言う。そして、そんな必要はなく、純粹に北方棲姫の欲しいものを選ばせる。

「……。」

北方棲姫は思い出す。

『一人前のレディーとして、服にも身だしなみにも気をつけなくちゃダメよ！』

『一枚だと、いざと言う時に困る。時には、ハラショーな決断が必要。』

『そうね！柄とかに困ったら頼っていいのよ！』

『電は、雷ちゃんとかに選んでもらっているのです。』

『ノン。分かつたノ。』

友達である艦娘たちの言葉を思い出した。

「洋服が欲シイノ。」

しかし、洋服のページだけでも数ページある。柄や生地などだ。

「ウーン……。」

「オツ、服ニシタノカ。」

レ級が気がついて見る。

「迷ウノ……。」

「へー。コンナニ柄ヤ種類、生地ガアルノカ。」

「レ級ノ ソレノ素材ハナンナノ？」

「：ナンダロウナ。コレハ……。サラサラシテイルケド、湿ツポクテ……。」

滑ラカデ、触リ心地ガ良クテ……。ヨク分カラン。」

「ウーン……。」

レ級がフードを手を取って、感想を述べる。すると、港湾棲姫が来た。

「ホツポノ素材ハ、コットン。化学繊維ハ、ホツポノ肌ニ合ワナイ。」

「へー。」

「コノ前、化学繊維ノタオルデ身体ヲコスツタラ嫌ガツテタ。」

港湾棲姫がお風呂から上がった時に拭いてあげて、その時に嫌がったのだろう。

「チクチクスルノ。」

「ソレハ嫌ダナ。ナラ、アトハ柄ダナ。」

「水玉ガイイノ。」

「ソツカ。水玉カ。」

レ級と港湾棲姫が微笑む。決まったからだ。

「ナラ、ソレヲオ願イシヨウナ。」

「届クノ？」

『『クリスマス』ノ夜ニナ。真夜中ダカラ、ホツポハ寝ルト思ウケド。』
「起キテ、ドンナ オジサンナノカ見ルノ。」

北方棲姫はレ級に言つて意気込んでいる。港湾棲姫はそれに青いマルをつけた。そこに…。

ガラララララ

「タダイマ…。」

「オ帰りナサイ。駆逐棲姫。初バイトドウダツタ？」

「ウン…。意外ト簡単。人間ニ合ワサレテイルカラ、簡単ニ仕事ヲ
コナセル。」

「良カツタ。」

駆逐棲姫がコタツの中に入る。

「オカエリナノ！」

「タダイマ。」

「駆逐オネーチャンハ、何ヲ選ンダノ？」

「…洋服。」

駆逐棲姫はまだおねーちゃんと言われていることが恥ずかしいらしく、少し顔を赤くする。

「ホツポトオ揃イナノ！」

「ウ、ウン…。ソウダナ…。」

太陽のように眩しい笑顔。そんな北方棲姫の顔をみるだけで、疲れや嫌なことがふつとぶ。駆逐棲姫は少し笑顔になった。

「ハイ。丁度出来タワ。」

「待ツテタワ。ウフフフ。」

戦艦棲姫がお鍋を鍋敷と一緒にコタツの上に置く。防空棲姫や戦艦棲姫がコタツに座る。レ級は集積地棲姫を呼びに行き、連れてくる。その間に港湾棲姫と駆逐棲姫、北方棲姫は人数分のお茶碗や箸、

タレを取りに行く。そして、コタツに座り全員が揃った。

「「イタダキマス！」」

クリスマスは近い。

クリスマス当日 鎮守府の施設外

ワイワイガヤガヤ

「沢山イルノ！皆んな楽シソウナノ！」

「エエ。今回ハ外デ。」

港湾棲姫たちが鎮守府の少し高台にいる。鎮守府の施設の庭を一般公開しているのだ。クリスマスパーティーのために。そこには、さまざまな人がいる。町内会のおじさんやおばさん、隣の山田さん夫婦に畑のおじさんや商店街の人たち、バイト先の店長や同僚、艦娘に提督、深海棲艦。屋台もあり、ケーキもありお祭り騒ぎだ。北方棲姫や港湾棲姫、五島支部の深海棲艦はこんな平和な景色が大好きだ。

「仮装モバッチシネ。」

「ナノ！」

港湾棲姫たち五島支部の深海棲艦たちはサンタコスをしている。集積地棲姫は面倒そうな顔だが、どこか満更でもなさそうな顔。

「ウッフッフ。七面鳥ネ。フッフッフ。」

「七面鳥ですって!?!冗談じゃないわ！」

「まあまあ、瑞鶴…。」

「たくさん飲み、たくさん騒ぐぞ！」

「嗜ム程度ニシテオキマシヨウ？」

「そうだな。戦艦棲姫。連合艦隊旗艦であつた私が酔つて、他の者の世話になつてはいかんからな。」

「今日はお酒解禁日。ヒヤッハー。」

「勝負ダ艦娘！今日モ勝ツ！」

「いいね。今回はあたしや負けないよ〜？」

「レ級、飲ミ過ギナイデ。」

「隼鷹もね。」

「山田サン、コノ前ノ節デハ、ドウモオ世話ニナリマシタ。」

「あら港湾ちゃん。いいえ、いつもお世話になってますし。」

「そつちは今どんな感じ…?」

「今レベル上ゲダ…。ア、ソツチニ行ツタ。頼ム。」

「うん…。」

「初雪…。こんな時くらいゲームやめな。」

「集積地棲姫モ。」

「アカリチャン!イタノ!」

「アレガ、ホツポノ新シイ友達…。」

「あー!ほつぽちゃん!…友達?」

「そうよ!第六駆逐隊、暁!あれがほつぽちゃんの新しい友達ね!一人前のレディーとして、友好関係は大切よね!」

「響だよ。その活躍から不死鳥の通り名もあるよ。…ハラシヨ。」

「雷よ!ただ強いだけじゃ、ダメだと思うの。」

「電なのです。よろしくなのです。」

「…駆逐棲姫…。」

「私、あかりつて言います。よろしくお願いします。」

「二よろしくね(ハラシヨ)(ヨロシク)。」

それぞれ、みんな思い思いに騒ぐ。ケーキを頬張ったり、お酒を飲んだり談笑したり、友好関係を広めたり…。五島を巻き込んで大騒ぎだ。この状態は紛れもない平和。皆、楽しそうな笑みを浮かべていて、食事をしたりしていた。

真夜中

静かな時間が過ぎる。どの家も真つ暗で、寝ているのだろう。子供も駆逐艦も北方棲姫も駆逐棲姫も寝静まった中…。

「ア、来タ。」

「郵便カ?」

「クリスマスサービス。」

港湾棲姫とレ級がベランダで待っている。すると…。

「鈴ノ音…。」

真つ赤な服を着た者がトナカイのソリに乗ってやってきた。

「今宵ハ、『深海カタログ』デゴ注文シテクダサリ、誠ニアリガトウゴザイマス。」

「才疲レ様。」

…サンタクローズでは無く、その格好をした空母棲姫や飛行場姫、水母水姫だ。冒頭の3人だ。

『今宵ハ『クリスマス』…。ドコモ幸セニシテイル、長閑ナ日常…。ケレド…。(コノ季節ハ) ナンドデモ…クリカエス…。カワラナイ…カギリ…(平和デアル…カギリ…)。』

『タクサンノ…(普段ノ) 想イ…ナクナル…(ワクワクニ…ナル)。コノ…五島デ…ソウ…。』

『ワタクシガ…(プレゼントヲ…置ク) オアイテ…イタシマス。(夜遅クマデ起キヨウトスル…子供たち…) カカツテ…キナサアイツ…!』
なんともまあ、平和だ。ちなみに、トナカイの代わりに艦載機をたくさん繋げて飛んでいるのだ。重労働である。そして、北方棲姫たちの枕元にプレゼントをあげるサービスまでしてくれるのだ。

「本部ノ仕事モ大変デショウ? コーヒー飲ム? 上ガリマス?」

「…ココガ最後…。オ茶ガ良イワ。」

「デモ、帰リマセント…。」

「姉ニハ私カラ言ツテオクワア。」

サンタコスをした3人は五島支部に上がる。

「港湾棲姫、知り合イナノカ?」

「レ級ハ初メテダツケ…?」

レ級が聞く。

「空母棲姫サンタチハ、本部ノ人ヨ。」

「ホ、本部…。エリート…。」

深海棲艦の本部とは限られた人員しか所属をすることは許されない場所だ。だから、エリートなどとも言われている。

「オ茶。」

「アリガトウ。」

港湾棲姫がお茶を差し出して、空母棲姫たちが飲む。

「飛行場姫ハ、先輩ノ妹…。」

「へー。ソウナノカ。先輩ナンテイタンダナ。」

「中間棲姫ガ、姉ガ世話ニナツタワ。」

「イエイエ、オ世話ニナツタノハコツチ。色々ト、アリガトウゴザイマシタツテ言ツテクレルカシラ？」

「伝エテオクワ。」

「アト、今度暇ナラ沢山話シマシヨウツテ。」

「ウーン、姉ハ忙シイカラ、出来ナイカモシレナイケド、伝エテオクワ。」

「アリガトウ。…マア、本部デモ偉イ地位ダモノネ…。仕事トカ大変…。」

港湾棲姫と飛行場姫が話す。

「へー。毎年ヤツテンノカ。コノ配達。」

「エエ。普通ノ配送業者デハ、荷物ノ関係モアリマシテ。ダカラ、ドウセナラ、コウイウServiceモアツテモ良インジヤナイカト。」

「デモ、結構重労働デ…。全テノ、子供ガイル支部ニハ届ケナクチャイケナイカラ。」

「大変ダナ…。」

レ級と水母水姫、空母棲姫が話す。

「ハア…。」

空母棲姫がため息をつく。

「モウ、定年退職マデアト少シナノヨネ…。」

「…アト何年…？」

「ソレハ、秘密。」

「デモ、会エルノガ後少シシカナイ…。」

港湾棲姫が悲しそうな顔をする。

「モウ、ソウナニ歳ナンデスカ？」

「ソウヨ…。最近腰マデ痛メ初メテ…。…深海棲艦トシテ生キルノヲ辞メタラ、コレカラドウヤツテ生キレバイイノカ…。退職金ヤ年金ハ出テモ、人間関係ガ不安ヨ…。…マア、一応主人ハイルカラ孤独デハナイケド…。」

「エ!?ゴ主人イルンデスカ!？」

「初耳！人間？」

「ソリヤ…。人間ダケド…。」

「人間ナノカ。」

「ヨクソソナ物好き…ジャナイ、ソソナ人イルンデスネ。」

「実ハ、娘モ三人…。」

「エー!?何デ言ワナイノ？ズツト働イテキタノニ…。出産祝イモアゲテナイワ…。」

「長期休暇ツテ…アレ産休ダツタンデスカ!？」

「マア…。デ、デモ心配カケタクナカツタシ、祝イ金ナンテ…。」

「チャント報告シテクダサイ!…出産ヤ結婚モ言ワナイデ…。」

「べ、別ニ何年モ前ノコトダシ…。上司ニハ報告シテイタシ…。」

「ナラ、今度食事シニ行キマシヨウ。ソノ時、近況トカ話シテクダサイネ。」

「ワ、分カツタワ…。」

「…コツチモ、寂シイノデ退職シテ暇デシタラ、来テクダサイ。ホッポモ喜ブト思イマスシ。」

「エエ。」

空母棲姫が少し恥ずかしそうに、連絡を交換する。

「…退職シタラ、コンナコトモデキナイノヨネ…。プレゼントモ置ケナイシ…。毎年、子供タチヲ見ルコト出来ナイシ…。」

「悔イノナイヨウニ、コレカラモ、プレゼントヲ配リマシヨウ。」

「…エエ。」

「ソレト、ソロソロ行カナイト朝ニナツチャウワ。」

そして、休ませている艦載機たちを元氣付けて、帰るためにソリを動かす。

「港湾棲姫サン、レ級サン、毎年アリガトウゴザイマス。来年モ、キツト来マスカラ。」

「アト少シダケド、マタ会イマシヨウ。」

「姉ニシツカリ伝エテオクワ。」

「ウン。マタ来年。」

「気ヲツケテナ！」

そして、空母棲姫たちは暁の空へと消えていった。その景色が美しく、日が登るまで、港湾棲姫とレ級がベランダにいた。ちようど朝日が街を照らし、幻想的な風景を作り出す。この日、北方棲姫と駆逐棲姫がプレゼントを見つけて開けて、早速着て喜んだのだった。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

零・ 壹話 登場人物紹介1

この世界について

深海棲艦も艦娘も基本的には、LINEを交換するほど仲良し。海戦の時はスポーツマンシップに乗っ取り正々堂々戦っている。撃沈判定が出るが、それはあくまでも深海棲艦基準。どちらも轟沈撃沈判定はあるが実際は沈んでいない。本人たち曰く、本当の体力の1000分の1を削ったら轟沈撃沈判定らしい。沈めてしまったと思う艦娘は深海棲艦に保護されて、別の鎮守府のドロップ艦として送られる。

「港湾棲姫」

こうわんせいぎ

好きなものは、歌、タワーパンケーキなど。

嫌いなものは、人格に難のある者、栄養価の低い食べ物など。

『深海棲艦 五島支部』の支部長。主人公？

北方棲姫（後述）の姉という設定でありシスコン寄り。姉と従姉妹がいる。レ級（後述）とは旧知の仲で互いに信頼しあっていて、まさに親友と呼べる存在。支部長として義務や仕事を全うしているが、どうしても北方棲姫によりがち。近所関係や町内関係は良好で、商店街の人々から挨拶してくれるほど。人間のことはいい人もいれば悪い人もいると思ひ、まず疑うより信用して話しかけるタイプ。性格は優しく、嫌なことを頼まれても知り合いで嫌な相手じゃなければ仕方なくとも付き合っただげる性格。

「北方棲姫」

ほっぽうせいぎ

好きなものは、家族、クッキーなど。

嫌いなものは、蜘蛛、野菜など。

『深海棲艦 五島支部』所属。主人公？

港湾棲姫の妹設定。北の方に妹がいる。港湾棲姫とレ級は家族以上の想いがあるらしく、他の者とは違う呼び方をしている。支部のメ

ンバーを家族と同じ認識をしており、とても大切にしている。動物と簡単な会話が出来らしい。町内会にたまについて行くため、沢山の大人たちと知り合い。人間自体に特別な感情も持ってなく、好んで戦いをしたいような性格ではない。人間の子供とは、自ら進んで仲良くなれるタイプ。姉の事を尊敬しており、いつか港湾棲姫のようになりたいと思っている。ご近所たちから見ればマスコットの存在。

「レ級」

れきゆう

好きなものは、コーヒー、賑やかなところなど。

嫌いなものは、無駄遣い、とても食べられない食べ物など。

『深海棲艦 五島支部』所属。主要キャラ？

港湾棲姫とは旧知の仲。比較的常識人であり、ツツコミ役が多い。また、イタズラ心も少しあり、悲惨な結果に終わることも…。港湾棲姫の頼みなら大体は受け入れて、北方棲姫のことをしっかりと責任を持って面倒を見れるため、港湾棲姫がとても信頼している。お酒は比較的飲む方で、鎮守府にお邪魔したり商店街の酒屋で買物したりする。好きなツマミはスルメイカ。北方棲姫の前だと酔わない程度に飲むか、大抵飲まない。人間に関しては良くも悪くもなく、どちらかと言うと平和的。争いは進んでやるタイプではないが、戦闘となると手加減しないタイプ。港湾棲姫がいない時、北方棲姫によく頼られる。背中のリュックは北方棲姫曰く、底なしらしい。

「戦艦棲姫」

せんかんせいき

好きなものは、さつまいも、珍しい主砲や大きいものなど。

嫌いなものは、冷たすぎる者、ゴキブリ、唐辛子など。

『深海棲艦 五島支部』所属。

比較的多く登場する。港湾棲姫の相談相手としてが多く、結構常識人。自分がやるよりも、見守って挑戦させる方。もちろん、ピンチの時は駆けつけてくれる。力が強く、本人曰く開けられないビンの蓋はないだとか。アルバイトをしており、少しでも家の足しになるようにと、自分でお小遣いを決めて、あとは家のお金にしてあげている。さ

つまいもが好きで、石焼き芋の屋台が通りかかろうものなら、ついつい購入してしまうほど。そのせいで、毎週金曜の夜に家の前を通るようになっているとは本人は知らない。

「集積地棲姫」

しゅうせきちせいき

好きなものは、カロリーメイト、ハンバーガー、ゲームなど。

嫌いなものは、食べるのに手のかかる食べ物全般、心の狭い人。

『深海棲艦 五島支部』所属。

比較的多く登場する。五島支部1の面倒臭がり屋で、自分のことを引きこもりの代名詞とまで言っている。大抵のトラブルの元だつたりする。北方棲姫は多く部屋から連れ出そうと試行錯誤しているのは分かっているが、拒否することはあまりない。面倒くさがっているも、人前じゃ嫌々言っても、結局は付き合つてあげるような、港湾棲姫から「結局はいい奴」と言われている。イベントのたびに燃やされることに最初は嫌がっていたが、今ではもう無機質無気力になっている。

「防空棲姫」

ぼうくうせいき

好きなものは、ロールケーキ、楽しい場所など。

嫌いなものは、つまらない一生、陰険な者。

『深海棲艦 五島支部』所属。

比較的多く登場する。いつも笑っており、楽しいことが本当に好き。本当に驚いた時は笑みを一切せず、本気で心配したりする。北方棲姫や港湾棲姫、五島支部が本当に大好きであり、どんなことがあつても大抵は家族優先。人間にはあまり興味がない。デザートや甘いもの全般好きで、つい浮かれて衝動買いする時もある。意外と虫も平気で、戦艦棲姫や北方棲姫に頼まれて駆除したりしている。艦娘とは、関係が結構良好で1番LINEを持っている。意外と常識人。

「駆逐棲姫」

くちくせいき

好きなものは、甘栗、ファッションなど。

嫌いなものは、梅雨、納豆など。

『深海棲艦 五島支部』所属。

比較的多く登場する。元々、『深海棲艦 怒和島出張所』所属だったが、こちらに編入した。北方棲姫と姉妹的關係で、艦娘と友達だったりする。足がないことが最近の悩み。北方棲姫にオネーチャンと言われて恥ずかしかったり。比較的常識人。アルバイトは最近初めたらしく、職場に付いていくのが精一杯だそう。梅雨の時期に病みかけたが、北方棲姫のおかげで元に戻った。それ以来、北方棲姫をいちばん大切にしている。港湾棲姫を、気が緩みすぎた時についてオネーチャンと言ってしまうクセがある。怒和島出張所でどんな生活だったのかはまだ秘密。

「提督と艦娘たち」

ていとくとかんむすたち

一応敵。

好きなもの、嫌いなものはそれぞれの趣味嗜好。

艦娘たちからの提督への評価は上の中と言ったところ。しかし、基本は艦娘たちもイベントを楽しむ楽観的思想をもっている。提督は常人ゆえの苦勞をしており、港湾棲姫たちに同情されたりする。港湾棲姫たちとの仲はまあまあ。

提督には後輩も姉も、従兄弟も先輩も教官もいるらしいが…。

式拾捌話 艦娘ノ悩み

こちら、『深海棲艦 五島支部』。今日も平和？な日々を過ごしている。

「アリスンゲットナノ！」

「可哀想ダカラ、放シテアゲテネー。」

北方棲姫のミトンの手袋にア리가乗ったらしい。北方棲姫はアリを空に掲げていた。縁側に座って、日向ぼっこしている港湾棲姫は、アリは飼えないから放すように北方棲姫に言い、北方棲姫は素直に従う。

「アリスン元気デマタ会ウノ！」

北方棲姫はアリを逃がした。

「遊ンデ来タノ。」

「手洗イウガイヲシツカリネ。」

「分カツタノ！」

北方棲姫は手を洗い、うがいをキッチンとして、しまわれたコタツの、テーブルの近くに座った。そして、おやつを食べ始める。

「オヤツ美味シイノ！今日ハ何？」

「スコーンヨ。ジャムトクリーム、両方アルワ。」

「ジャムトクリーム一緒ニ付ケチャウノ。」

「ソレモ良イワネ。」

北方棲姫と港湾棲姫はおやつタイムを楽しむ。

「タダイマ〜。今日ハ暑イナ…。」

レ級が帰宅。バイトが終わって帰ってきたのだろう。疲れた顔をしていた。

「オッ、美味ソウダナ。」

「早く手洗イシナイトダメヨ。」

「分カツテルツテ。」

レ級は靴を脱ぎ、洗面所に向かう。

「ウツフフフ。スコーン？」

「美味シソウネ。」

「腹減ツタ…。」

「イイ匂イ…。」

すると、2階から防空棲姫、戦艦棲姫、集積地棲姫、駆逐棲姫が降りてきた。匂いに釣られたようだ。

「皆ガ揃ツテカラネ。」

「待テナイゾー。」

「デモ、我慢スルノ。」

「分カツタワ。」

「フフツ…。」

「仕方無イカ…。」

「スコーン?。」

7人はおやつのスコーンを待ちながら、雑談したり、ゲームをしたりして時間を潰した。北方棲姫のほほにジャムがついていて、港湾棲姫が取ってあげる。「アリガトナノー」と言われて、微笑む港湾棲姫。こんな、ゆるい日常を過ごすのが五島支部である。しかし、そう平穏な日々は続かないのが、世の常である。

「ついにこの日が来たか…。」

場所は変わって鎮守府。その執務室にて大騒ぎしている提督。

「奴が…奴が来る…。」

「落ち着いてください。何があつたんですか?。」

「奴が…奴が来るんだ。もうすぐここに!!。」

「だから、誰なんですか!?!。」

「それは…。」

コンコンコン。

ドアをノックする音が聞こえる。

「奴は俺の同僚…。あの角ばったフォルム…艦娘並みの怪力…。そして、何よりも表情がないアイツだ。」

ガチャリとドアが開かれる。

「我が同士。元気か?。」

「T督だ!。」

T督…それは、人間の顔の部分がTの字である者だ。

「T督、久しぶり。」

「久しぶり我が同志。鎮守府にロリは育てているか？」

「いや…。」

「そうか…。」

残念そうな声を出すT督。彼はロリコンであった。しかも、人間のみならず艦娘の方も守備範囲に入っているという、なかなか業の深い男なのだ。

「T督？さん、どうされたんですか？」

「ふむ。秘書艦は高雄か。なるほど。いや、なに。久しく戦友に会いに来たのだ。」

「そうだったのか。」

「あの…提督、ちよつと…。」

「なんだい？あ、ちよつと席を外すよ。」

すると、提督は艦娘ちよつと連れて行かれる。

「あの人…人？は一体…。」

「ああ、あれはね…。俺の海軍士官学校の同僚。アイツはほぼほぼ不死身。T督だからね。頭取れても平気だし…。」

「ええっ！そんな…。深海棲艦と変わらないのでは…？」

「深海棲艦って頭取れても生きれるの…？いや、アイツは人間だよ。多分。…多分ね。」

「でも、T…ですすよね？」

「うん。」

「…。」

「まあ、いいじゃないか。アレでも、戦っていた時代は超絶優秀で、日本から離れた孤島の離島で指揮をして、僅かな艦娘のたった一艦隊で深海棲艦の連合艦隊を殲滅させたという伝説があるんだよ。」

「へー。凄いですね…。」

「あと、アレはロリコンだけど、紳士でもあるから安心して。」

「は、はい…。」

「さてと、仕事に戻るぞ。お待ちせ。」

「ああ。」

こうして、平和(?)な時間は過ぎていく。

「あ、そうだ。高雄、ちよつとT督と大事な作戦会議をする。二人だけの密会だ。席を外してほしい。」

「ふむ…もうこの時期が来たか…。」

「は、はい。」

「あ、それとちよつと港湾棲姫さんのところに、これも持ってって!どうせ、うちの艦娘がお邪魔してるから!」

「あ、はい。」

艦娘が外に締め出される。手渡された紙袋には、豆大福が入っていた。

「これは、手土産ですね。」

「おう。頼んだ。」

「了解しました。では、行ってまいります。」

バタンと扉を閉じる。

「会議…ですか。」

「そんなことがありました。」

「マズ、ナンデココニ相談シニ来タノ? 艦娘ノ悩ミ相談室ジャナイケド…。」

艦娘は港湾棲姫たちのところに相談しに来ていた。

「いいじゃないですか。これも交流です。それに、暇…ですよね。」

「…マア…。」

「ソレニシテモ、才菓子美味シソウネ。私達モイイノ?」

「はい。皆さんで食べてください。」

「アリガトウ。」

「いえいえ。」

「モチナノ!」

北方棲姫が大福を指差す。

「大福です。少し、お餅とは違いますよ。」

「ジー…ナノ。」

「どうぞ。召し上がってください。」

「頂キマス！…オイシーノ！」

北方棲姫は豆大福を口に含む。不思議と、モチのように伸びていた。

「コレは何？」

「それは小豆餡です。」

「アンコナノ？」

「はい。甘いものですよ。」

「アンコ！甘イノ！」

「興味津々ダナ。」

「ウフフツ。」

防空棲姫と戦艦棲姫は、そんな北方棲姫を見て和む。

「ソレデ、話ハ戻スケド…。」

「そうなんです…。本当に戦争をしているわけでもないのに、会議なんて…。それに、提督が言うには、すごい提督のT督？って人と…。」

「T督…姉ガ、軽ク知ツテタヨウナ…。アツチノ場所ダカラ。シー…。確カ…結構変態？デ、ロリ？ガ好キミタイ。…ハッ！コツチニ連レテコナイデ…。」

「心配しなくても、ほっぽちゃんなら大丈夫だと思っわ。」

抱き寄せている港湾棲姫に、艦娘が微妙な顔をして言った。

「港湾棲姫さんたちに迷惑をかけなければいいんですけど…。」

「巻キ込マレルノハ嫌ネ。」

「そうですね…。あ、そろそろお昼ご飯の時間なので…。ごちそうさまでした。また、お邪魔します。」

「マタ来ルノ!？」

艦娘が帰り、色々片付ける港湾棲姫たち。

「会議…何ヲ企ンデイルノカシラ。」

「ノ？」

洗い物をしながらつぶやき、北方棲姫が首を傾げる。

「才昼ハ、深海棲艦風冷ヤシ中華。」

「ヤッタノ！」

「皆呼ンデ来テ？」

「分カツタノ！」

北方棲姫は階段の下で、レ級たちを呼んで、お昼ごはんを知らせた。

「才腹ペコペコナノ！」

「行コウ。」

「ウン。」

レ級たちは椅子に座る。

「二イタダキマース。」

「こんにちは。」

「ハエーヨ!？」

もうすでにいる艦娘。レ級がツツコミを入れる。

「あ、別に気にしないでください。待ってますので。」

「ア、ウン…。」

ズルズルと、麺をすする音が響く。

「…………。」

「…………。」

「…………。」

「…………。…ウン、無理。要件ハ？」

耐え切れず聞くことにしたようだ。

「あ、はい。先程の話で…。」

レ級たちにも説明する。

(カクカクシカジカで…。)

(カクカクシカジカジヤ分カンネーヨ。)

「ホーン。ツマリ、謎ノ会議ツテコトカ。」

「はい…。港湾棲姫さんたちに迷惑をかけないか心配で…。そう言え

ば、最近秋雲さんが忙しそうでして…。」

「イヤ、絶対ソレノ関係ダロ。チョット早イケド。」

「え？」

「初耳ミタイナ顔スルナヨ…。明ラカニソレダロ…。」

「な、なら！提督机の上のリユックサクも、夏の一週間の休暇も、カ

タログ?やチケットや地図も…!?

「イヤ、ソレ以外アリ得ネーダロ!」

艦娘があり得ないと言うような顔をする。本当に、この鎮守府で秘書艦が仕事してるのか本気で心配する。

「マア、ソコマデ深く考エルダケ損ツテコトヨ。」

「ウフフツ。気楽ニスレバイイノヨ。」

「冷ヤシ中華ガヌルクナツタ…。マア、心配スルナ。」

戦艦棲姫や防空棲姫や集積地棲姫が言う。

「は、はい…。」

「…ハア…。ココマデ付キ合ツチャツタラ、モウ放ツテ置ケナイジヤナイ…。何かアレバ、マタ来ナサイ。」

「ホッポモカニナルノ!」

「微力ダケド…。」

「港湾棲姫さん…ほっぽちゃん…駆逐棲姫さん…。ありがとうございます…ますー!」

「それじゃ、例の来る日にまた会おう。」

「ああ。我が同志。」

夜になり、会議室から提督とT督が出ていく。

「提督…。」

「うわっ!?ずっと待ってたの…!?!」

提督がドアを開けて、提督室に戻ろうとしたら、艦娘が待っていた。

「ど、どうしたんだい?」

「この高雄、どうしてT督を招き入れたのか分かりました。」

「うん?どうしたの?あ、まさか…!T督に惚れちゃった!?!」

「違います。あの人はロリコンです。」

「あ、やっぱり?でも、紳士だから大丈夫だよ?」

「いえ、ロリコンです。」

「…。分かっちゃったの…?」

「はい。」

「…説明してなかったのは悪かったよ。高雄だけには知られたくなく

て…。」

「結構悩みましたし、考えました。」

「ごめんね…。」

「いえ…。」

「じゃあ、ちよつと早いけど…。」

「え？」

艦娘の手に、プレゼントが渡される。

「え？え？」

「いや、そろそろ高雄の進水日だし…。サプライズプレゼントって思っただけけど…。」

「え？」

「開けてみて。」

「えー…？」

艦娘は思っていたのと違う展開になり、心の中では慌てているが、平常を装って包装紙を開ける。

「これは…欲しがっていた…。」

「まあ…ちよつと早いけど…おめでどう。」

それは、前から欲しがっていた、艦娘用の小さなポーチだった。

「あ、ありがとうございます…。」

「流石高雄。見抜くなんてね。」

「…は、ははは…。」

「ん？」

「い、いえ！別に…。」

「ドウナツタカシラ。」

「サアナ。マア、失礼ナコトジャネーシ、大丈夫ダロ。」

「ソウ…。」

すると、港湾棲姫の携帯に通知が来た。それを読む。

「…大丈夫ダツタミタイ。」

港湾棲姫は優しい顔で、良かったと言う顔で微笑んだ。

『港湾棲姫さん、ありがとうございます！ちよつと、考えていたことと

は違い、私の進水日のプレゼントの内容だったようです。』

その他、色々と書いてあった。

「フフ。」

「オネーチャン、ドウシタノ？」

「イイ事アツタ顔シテル。」

港湾棲姫が、嬉しそうな顔をしていて、北方棲姫と駆逐棲姫に言われる。

「イイ事アツタ。」

「アラ？何かシラ。」

「ウツフフ。何かシラ？」

「ソロソロ終ワルカラ、手短ニ。」

「メタイゾ！集積地棲姫！…ソレデ、何ガアツタンダ？」

「フツツ。ソレハ…。」

港湾棲姫は北方棲姫たちに、出来事をすべて話した。艦娘の悩み相談、結果、過程、このあとのこと。北方棲姫と駆逐棲姫は目を輝かせて聞いて、レ級はさっきの奴かと苦笑い。戦艦棲姫は、嬉しそうに話す港湾棲姫を見て微笑んで、防空棲姫は良かったと笑っていて、集積地棲姫はくだらないと口にしていたが、自然と柔らかな笑みが出来ていた。その話をしながら、お菓子を食べて、緩やかな午後が過ぎる。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

夏コミにて

「アレ？提督ジャン。ナンデ？」

「いや、集積地棲姫さんこそなぜ…。」

「まさか…!!」

「同志!!」

ガシツ!!

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

式拾玖話 大島出張所ナノ？ 前編

ここは『深海棲艦 五島支部』。今日もゆるい日常が続く。
「フウ…。」

梅雨のある日。皆、家…ごほん、支部で各々座ったり寝転んだりして過ごしていた。

「梅雨…去年ハ『カビ』ニ手ヲ焼イタワネ…。」

「ダナ。…今年ハ…。」

「シツカリ、点検シテルワ。」

「ソウカ。」

居間で、港湾棲姫とレ級が話す。北方棲姫は、港湾棲姫の膝で寝ちやつている。

「フフ…可愛イ…。」

「…ダナ。」

港湾棲姫が北方棲姫の頬を撫でながら言い、レ級が同感する。すると…。

「キヤーーーー！」

駆逐棲姫の悲鳴が聞こえる。

「…コンナ事、前モアツタナ…。」

レ級はそう思いながら、港湾棲姫と目を合わせる。

「タ、大変!!」

「ドウシタ？ マタ『カビ』カ？」

「ホッポガ起キチャウ…。」

駆逐棲姫がすぐさま来て、港湾棲姫たちに言われる。

「ソレヨリ…艦装ヲ外ニ出シタママダツタノハ誰…？」

駆逐棲姫が、縁側から裏庭を指差す。北方棲姫が港湾棲姫の膝で寝ているため、レ級が行くと…。

「…エ…。」

レ級も信じられないような顔をした。港湾棲姫は北方棲姫を座布団で寝かせて、レ級の後に出てくると…。

「……。」

困った顔をしている。

「…艤装…全部錆ビテル…。」

駆逐棲姫が、雨の降る中錆びた艤装に行き、自分の艤装を引っ張り出した。

「ウソダロ…。」

レ級も、自分の艤装を見て絶句する。

「ドウスンダヨ…。テカ、誰ダヨ…出シタママダツタノハ…。」

レ級は、呆れた顔をしながら言う。

「分カラナイ…。」

港湾棲姫も困っていた。

「コノ子達ノ艤装ヲ見タラ、多分怒ルデシヨウネ…。」

「マア、ソウダナ…。」

「戦艦棲姫ヤ防空棲姫ノ物モ…。幸イ、ホツポモ使ウ、艦載機ハ無事ダツタケド…。誰ガコンナ事…。」

「ウン…。」

3人が話しながら悩んでいると、北方棲姫が起きる。

「ノ…?」

「ア。ホツポ、オハヨウ。」

「オ早ウ。」

「…オハヨ。」

「起キタノ…。」

北方棲姫はまだ眠そうな目を擦る。

「…ドウシタノ?」

「アソコニ、誰カガ艤装ヲ出シタママ放ツテイタミタイデ…。」

「ノ!」

北方棲姫は、錆だらけの艤装を見る。これ以上雨に濡らさないように、新聞紙の上に全ての艤装を置いた。

「誰ナノカシラ…? 本当ニ…許セナイ…。」

「全クダ。」

「誰ナンダ…。」

3人が悩ませていると…。

「…ソイーエバ…。集積地オネーチャンガ、倉庫ニ邪魔ダカラツテ、出シタママニシテタノ…。」

「「倉庫?」」

それを聞いて、レ級と港湾棲姫と駆逐棲姫が傘をさして、倉庫の引き戸を開けた。そこには…。

「…『フィギュア』…。」

「『ゲーム』…。」

「同人誌…。」

レ級と港湾棲姫と駆逐棲姫が、啞然としながら呟く。そこに…。

「♪シンア?何ヤツテンダ?」

口笛を吹きながらやってきた集積地棲姫。そして、隣から3人を見た。そして、何を見ているのか分かった。

「集積地棲姫…!」

「アナタ…ドウ責任取ルノカシラ…?」

レ級と港湾棲姫が、怒りながら聞く。駆逐棲姫は、北方棲姫を避難させようと一緒に入っている。集積地棲姫は、絶賛汗をかきまくり、どう切り抜けようか必死に考えていた。

「エ、イヤ、コレハ…ソノ…アレダ…。部屋ニ置ク場所ガナイ訳ジャナクテ、ソノ…。ホ、ホラ…一応、一時避難的ナ…?」

「「集積地棲姫…!」」

レ級と港湾棲姫は、聞いていなかった。

「ゴメンツ!」

「逃スカ!」

「発進!」

逃げ出そうとした集積地棲姫だったが、すぐさまレ級に抑えられ、港湾棲姫の艦載機で軽く燃やされた。そして、説教が1時間ほど始まった。

「コンナニ錆ビテ…。」

「ウッフッフ…後デ説教カシラ?」

「勘弁シテクレ…。戦艦棲姫、防空棲姫…。モウ、コツテリ叱ラレタ

…。」

「自業自得ダ。」

戦艦棲姫と防空棲姫にも言われて、ゲンナリしている集積地棲姫。目の前には錆びた艦装があった。

「…ハア…。コンナニ酷クチャ、海域ニモ行ケナイ…。シヨウガナイカラ、『大島出張所』ニ行カナイト…。」

港湾棲姫がそんな事を呟く。

「『大島出張所』ナノ?」

「ホッポハ、マダ行ツタ事無カツタカシラ?」

「『大島出張所』カ。マア、アソコニ頼ムノガ一番ダナ。アソコハ、深海棲艦ノ使ウ艦装ヤ、依頼トカラ作ツテル場所ダカラナ。本部ニ近い所ダ。」

レ級が言う。

「ソウナノ?」

「ソウヨ。デモ、長旅ニナルカラ、ホッポハ才留守番方良イト思ウ。『ノ!?!』」

「確カニナ。チョット遠イシ、一般人ノ目ニ触レルカモシレナイ。ソウナレバ、海軍ニ通報ガ行ク。海軍ハ放ツテオクワケニモイカナイカラ、攻撃ヲ仕掛ケテクル。ソウナレバ、本格的ニ戦争ニナル。」

「…ノン…。」

北方棲姫がものすごくガツカリしている。

「……。」

「港湾棲姫。」

今にも、抱きしめようとする港湾棲姫をレ級が止めている。

「トニカク、今回ハ遠イカラ才留守番ダ。集積地棲姫、才前家ニイルノ好キダロ。面倒見ルノ頼ンダゾ。」

「…大丈夫カシラ…?スゴク心配…。」

「イザトナレバ、隣ノ五島沖海底姫ニモ言ツトク。」

「ソウネ…。」

「明日、出発スル。ナルベク早く戻ル。才土産持ツテ帰ルカラ。」
「ノー…。」

北方棲姫は、不満そうな顔をしている。

「…ホッポ、才前ハ良イ子ダ。シツカリト聞キ分ケ出来ル子ダ。集積地棲姫ノ言ウ事ヲシツカリ聞クンダゾ。」

「…ワカッタノ…。」

レ級の説得に、渋々納得する北方棲姫。

「……。」

港湾棲姫は、その様子を見ていた。

翌朝早く

「港湾棲姫、忘レ物ナイカ？」

「…エエ…。レ級モ、艤装全部持ツタ？」

「アア。」

レ級のリュックは不思議と明らかに物理法則を無視してなんでも入る。とんでもない量の錆びた艤装も、全て入る。しかし、少し膨らんでるように見える。

「戦艦棲姫達ハ、時間ヲ開ケテ行クカラナ。…遅レルト、迷惑ガカカル…。ジャ、行クゾ。」

「…エエ…。」

「…仕方ナイダロ。コツチモ、結構危険ナンダ。ホッポヲ卷キ込ム訳ニハイカナイ。…マア、ナンカ荷物ガ重イケド…。」

レ級と港湾棲姫が歩き出す。そして、海岸に着いた。

「…ソウイヤ、ホッポニ行ツテラツシャイ言ツテナイケド、平気ナノカ？」

「エ？…ウン…。」

「……。」

レ級は港湾棲姫の様子が少し変だと思いつつも、北方棲姫がいなくて調子が悪いだけだと決めつけた。そして、2人は海に出る。

「…本当ニ、言ワナクテモ良カッタノカ？」

「エエ。」

「フーン。」

「……。」

「……。」

そして、無言で海上を進んでいく。

「ハア……。」

真つ先に口を開いたのは、レ級だった。

「…集積地棲姫ニ伝エタノカ？」

「エ……？」

「隠シ通セルト思ツテイルノカ？」

「…ドウシテ…？」

「アラカサマダロ。ソレニ、例エドレダケ完璧ニ隠スコトガ出来ルトシテモ、見破レル。親友ダロ。…アノ時カラナ。荒レテイタ時、声ヲ掛ケテ助ケテクレタアノ時カラナ。」

「……。」

「何年一緒ニ居タト思ツテンダ。」

「…ソウヨネ…。アナタニ、隠シ事ハ出来ナイワヨネ。」

「当たり前ダ。…デ、集積地棲姫達ニハ ホツポガイナイ事言ツテキタノカ？」

「エエ。」

「全ク。」

レ級は分かっている。自分のリュックの中に、北方棲姫がいるのを。

「…帰りハ、遠回りデ、一般人ニ見ツカラナイヨウニ帰ルカラナ。」

「…ソウネ。」

レ級が言い、港湾棲姫が納得する。そのうちに、『大島出張所』が見えてくる。

「ヒト回り小サイナ。ホラ、見エテキタゾ。」

「ノー！」

「着イタワネ。」

もう、ここまで来れば後は艦娘や深海棲艦がいるので、誤魔化しが効く程度の距離にきた。北方棲姫が、レ級のリュックから顔を出して、目をキラキラさせる。港湾棲姫が、近海で艦娘がいなかどうか探す。

「ごきげんよう、五島支部の方ですか？」

「ウン。」

「お話は聞いてます！……こっち側ですよ。」

大島周辺で演習をしていた艦娘が声をかける。

『深海棲艦 大島出張所』ノ…。

「はい。ここだと、目立つちゃいますのでこちらです。綾波、少し抜けます。」

艦娘が本州側から見て裏手の方へ案内する。

「最近本州の方でちよつと反海軍の動きがありますので、こちらからお願いしますね。」

「分かつた。アリガトウ。」

「アリガトウ。」

「アリガトナノ！」

「あ。」

その艦娘がリュックから頭だけ出ている北方棲姫に気づく。

「とつても可愛いですね！流石、五島支部の人気No. 1です。」

「ノ？」

「でも、大島出張所でも同じ子がいるので、是非会ってみてくださいね！」

「ソウナノ？」

「はい。」

艦娘は軽く北方棲姫の頭を撫でる。レ級は裏手から来るように戦艦棲姫たちに連絡して、港湾棲姫は周りの警戒をしている。

「さて、私は戻りまーす。頑張つて下さい。」

「分かつた。」

「アリガト。」

そして、3人は艦娘の案内のもと、無事に着いた。その出張所は、赤レンガ倉庫のように見え、ツタが蔓延っており相当古いものと推測される。五島支部よりは建物が大きく、まるで要塞のような雰囲気がある。森の木々の間から漏れる光が建物を照らし、人がいるとは思えない、神秘的な空間を作り出している。

本部からこんな情報を聞いている。大島出張所は、所長は優秀であり、深海棲艦にとって唯一無二の存在で、どんな状況においても頼りになる人物だと言う。そして、深海棲艦達にとっては、ある意味一番安心できる場所でもあるという。それは、かつて、人類と戦争をしていた頃の最後の砦であり、最終防衛ラインであるとか。その出張所に所属する深海棲艦も、出張所を守るために強者揃いだとか。そして、この大島出張所にいる技師は他の追随を許さない程高いらしい。この物語始まって以来の、他の深海棲艦の出張所に踏み込んだ。北方棲姫は初めてでありドキドキしている。港湾棲姫は少し心配そうな顔で、手土産を握りしめている。レ級はその大きな門の前で、出張所建物を見上げていた。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。

参拾話 大島出張所ナノ？ 後編

ここは、『深海棲艦 五島支部』…ではなく、『深海棲艦 大島出張所』である。

「コンニチハ。」

港湾棲姫が先陣を切って入り、レ級たちも後に続く。

「キタノネエ…。久シブリ。」

出迎えたのは、たまたま近くにいた潜水棲姫だった。

「話ハ聞イテルワア。コツチヨ。」

潜水棲姫が奥へと案内して、レ級達も続く。入口や玄関は、外のレングの建物通りの壊れているが、潜水棲姫が、隠れてある通路に行くと、古くはないが、新しくもない一本の通路を歩く。そして、突き当たりにある扉を開ける。すると、そこは…。

ウイーンガコンガコン！

ガガガガガガ！

ガシヨンガシヨン！

カーンカーンカーン！

そこは、とても広い場所だった。おそらく、海岸に表向きを作り、その中を進むと地面や山の中に巨大な施設を作ったのだろう。

「オー！オ洋服ナノ！オ菓子ナノ！」

もちろん、ここには深海棲艦用の服もあれば菓子や食べ物もあり…。

「コレハ…！最新ノ装備…！ソシテ、2024年全イベント海域…。ランキング報酬や、新シイ艦娘ノ情報モ載ツテルナ。」

深海棲艦の装備や性能や、艦娘の情報もあれば…。

「最新刊ノ『深海カタログ』…。イヤ、来月…？」

カタログや、主に深海棲艦をターゲットにした雑誌などが来月のものまであった。

「巨大ナ工場ダナ…。」

「沢山色々な物ガアルノ！」

「レーンニハ、危険ダカラ近ヅカナイヨウニ。」

クレーンももちろん存在しており、中で海上浮遊出来るかどうかの装備のテストなども行うことが出来るように巨大なプールまである。射撃テストの的や、訓練用設備もある。

「ココハ、アノ時カラ変ワツテイナイナ。」

「ソウネ。」

レ級と港湾棲姫は懐かしそうに見渡す。

「サテト、所長ニ挨拶シナクチャ…。 船渠棲姫く！」

「目ノ前！」

「アラ…。」

港湾棲姫の目の前…。 北方棲姫と同じくらいの背丈の深海棲艦がいた。

「マア…トオイトコロマデ…。 ヨク…キタ…ネエ…ツ！絶対…ワザト
デショ…？」

「ゴメンナサイ…。 本当ニ気が付カナクテ…。」

「ソノ方ガ余計ニ傷ツク！」

目の前にいる少女。髪型は、青白いメッシュの入った黒髪をツーサイドアップにまとめた、深海棲艦の艦載機に似た帽子らしきものを被っている。袖無しのセーラーワンピースを着ているが、片手にはハンマー、もう片方の手にはスパナを握っているあたり、なんらかの作業中だったのだろう。顔も服も髪も若干煤で汚れていた。

「デ？電話デ聞イタケド、急イデ修理ガ必要ナンデショ？」

「エエ。 艦装ガ全部錆チャツテ、油モ注サナクチャダツタシ…。」

「本当ハ、予約シテカラジャナイト、受け付ケテハナイケド…。」

「スミマセン…。」

「デモ、急ナラ仕方ナイワ。 見セテ。」

「ウン。」

そして、レ級は背負っていたリュックから北方棲姫を出させた後、物理法則を完全に無視して取り出していく。北方棲姫は目を輝かせて周りを見渡している。

「コノ子ハ、私ノ妹ノ北方棲姫。」

「コンニチハナノ！」

北方棲姫が、後ろを向いている船渠棲姫に挨拶する。

「エ？誰…ホッポ!？」

「センキヨナノ!」

船渠棲姫と、北方棲姫が顔を合わせた途端に、二人とも目を輝かせる。

「？知り合イ？」

レ級が聞く。

「ホッポト、センキヨハ昔色々アツタノ!」

「エ？エ？エ？」

港湾棲姫は全くわからず、大混乱している。

「…港湾棲姫？」

レ級が名前を呼ぶ。

「知らナイ…。」

「エ？」

「イツドコデ知り合ツタノ…？詳シク…説明シテ…私ハ今冷静サヲ欠コウトシテイルワ…。」

「既ニ冷静サヲ欠イテイルゾ…。」

レ級に言われる。

「ントー、話ハ結構前、人間ト戦争ヲシテイタ時ネ。港湾棲姫、貴女モ何度カココニ来タデシヨ？レ級ト一緒デ。」

「全然覚エテナインダケレド…。」

「アノ時ヨ。」

何年モ前

「アー忙シイ忙シイ。艦娘メ…毎回大破サセテ…。」

トンカチを振り下ろし、スパナでネジを回して深海棲艦の艤装を瞬時に直す。ここを攻撃されたら後がない、最終防衛ラインの場所。

「船渠棲姫、マタオ願イ。」

「来タカ。マタ酷イナ…。ドコヲ落トシテキタンダ？」

若かりし頃の港湾棲姫と船渠棲姫が他愛のない話をする。

「才前モ支部長ナンダカラ、出撃ヲ控エロ。」

「ソウハイカナイワ。戦イコソガ、使命ミタイナモノヨ。」
「ソウカ。」

「…トコロデ、アノ子…。アノ目ツキガ鋭クテ、深海棲艦デサエモ獲物トシカ見テイナイヨウナアノ子…。マtailルノ?」

「ア…レ級?アノ子ハ毎回艦娘ヲ大破サセルカラ。マア、ソノ度ニ艦装ヲ壊スカラ。」

「…アノ子、見込ミガアルワネ。」

「…ヤメトキナサイ。関ワルトろくナコトガナイ。」

「フーン…。」

そして、港湾棲姫はレ急のすぐそばまで行った。

「貴女、『五島支部』ニ所属シナイ?」

「ア?ナンダイキナリ。」

「貴女ニハ、是非トモウチニ所属シテモライタイノヨ。」

「ナンデオ前ノ言ウコトキカナキヤナンネンダヨ!」

「ソウ…。」

「オレヨリ弱イ奴ノ下ニハツカネエーヨ!」

「ナラ、勝負シマシヨウ。」

「アア!」

「私ガ勝ツタラ、五島支部ニ所属。貴女ガ勝ツタラ、五島支部長。文句ナイワヨネ。」

「アア!上等ダ!」

港湾棲姫とレ級は奥の演習場へ行く。

「全ク、血ノ氣ガ多イ、血氣盛ンナ奴ラダナ…。ン?」

扉からちよこんと顔を出している北方棲姫を見つめる。

「…ドウシタノ?」

「ノ…。」

「…飴、食ベル?」

「…。」

北方棲姫は近づいてこない。そこで待つように言われたのだろう。

「姉ノ言イツケヲ守ツテルノカ。偉イナ。」
「ノ。」

船渠棲姫が北方棲姫に近づく。

「名前ハ？」

「…ホツポ…。」

「ホツポ。…私ハ船渠棲姫。」

「センキヨナノ…？」

「マ、ソウネ。ソレデイイワ。」

船渠棲姫が、北方棲姫を見る。そして、北方棲姫の艤装を見た。

「…マダ幼イノニ、艦娘ト戦ツテイルンダ…。」

「…ノ。」

「大変ヨネ。」

「…大変ナノ…ケド、オネーチャント仲良ク暮ラシタイノ…。」

「…ソウナンダ…。」

「デモ、苦シイノ…。」

「ソウダヨネ…。」

北方棲姫が、船渠棲姫に言う。船渠棲姫は、どうすれば良いか考える。いくら強い武装を作ったとしても、相手はそれを超える武装を作るだろう。そうなれば、こちらもさらに強力な物を…と言った、イタチごっこにしかならない。戦争は終わらない。灰色で暗い空は晴れないのかと船渠棲姫は思う。

「…マア、現状維持シカ出来ナインダロウケレド。…デモ…強ク願エバ、キツト叶ウ。オ天道様ハ見テイル。ズツト続ク戦争ナンテ無イカラナ。」

船渠棲姫が北方棲姫に言い聞かせる。すると、北方棲姫が船渠棲姫の手を握った。

「本当ナノ…？イツカ、楽シク暮ラセルノ…？」

「マア、イツカネ。」

「イツカ…。」

北方棲姫は、ミトンの手を見る。いつのまにか、飴があつた。船渠棲姫が握った時に渡していたのだろう。

「…ウン。」

北方棲姫が飴を舐めながら、船渠棲姫の眼を見る。北方棲姫の眼は

澄んでいて、曇りなどなかった。

「…キット、叶ウ。…コレ、アゲル。」

船渠棲姫は、バツジのようなものを北方棲姫に渡す。

「私達、身体ハ小サイケド、立派ニ、ソレゾレノ形デ戦ツテイル。ダカラ、アゲル。ホッポモ、ソノ一員ヨ。」

「ノノノ？」

北方棲姫は、そのバツジを見る。

「後ハ、遙カ西ノ潜水新棲姫ト、南ノ戦艦新棲姫ガ持ツテルワ。今ノトコロハ。…イツカ、平和ニナツタラマタ来テ。歓迎スルカラ。」

「分カツタノ！必ず来ルノ！」

船渠棲姫と、北方棲姫は楽しそうに話した。すると…。

「ジャ、今日カラヨロシク。レ級。」

「……。」

港湾棲姫が勝利を収めたらしい。

「港湾棲姫！妹ヲズツト、外デ待タセルトハ何事ダ！」

「ホッポ！ゴメンナサイ!!」

港湾棲姫が北方棲姫の近くに素早く行き、レ級は渋々と、しかし負けたからにはグダグダせず往生際を良くして、従っている。

「…ジャア、マタイツカ…ネ。」

船渠棲姫は軽く手を振っていた。

「ソナナコトガ…。」

「懐カシイ…。」

船渠棲姫がしみじみと言う。そして、北方棲姫の前に立った。

「願イ、叶ツタワネ。」

「ノ！」

船渠棲姫が笑顔で言い、北方棲姫も元気に返す。

「ホッポモ、無理サセチャツタワヨネ…。」

「ソウダナ…。本当ハ、戦イナンテ好キジャナイノニ…。」

港湾棲姫と、レ級が思い出しながら言う。

「…今ガ、キット…一番幸セネ。」

「…ソウダナ。」

仲良く話す、北方棲姫と船渠棲姫が話している。

「外デ遊ブノ！」

「外？イヤ、デモ外ハ流石ニ…。ソレニ、ヤル事アルシ…。」

船渠棲姫は、直す艤装の山を見る。

「行ツテラツシヤイ。ホツポガ楽シミニシテルワ。」

「ソレニ、突然来タノハコツチダシナ。」

港湾棲姫とレ級が、外に行く支度をしている。

「支部長トシテ、ヤルコトアルンダケド…。」

「ナラ、アトデ手伝ウカラ。」

船渠棲姫は港湾棲姫に言うが、港湾棲姫はゆずらない。そして、グダグダ言わせる前に、北方棲姫と港湾棲姫が船渠棲姫を連れ出す。レ級も、後ろからついて行く。

「アツツ…。」

外に出ると、先ほどとは比べ物にならない暑さ。いつの間にか、時計は12時を回っている。

「…デモ、イイ景色ネ。」

「ダナ。晴レテイテ、空ハ青クテ、入道雲ハ流レテルシナ。」

「海ガ綺麗ナノ！」

三人が夏の太陽を浴びて言う。暑いけど、心地良い風が吹いている。

「アツイ…。」

船渠棲姫は四六時中、支部の中でエアコンをきかせた部屋にいるため、この暑さは地獄であろう。

「肌ガ焼ケル…。」

「…船渠棲姫ツテ、ドコ出身ダツケ？」

「地中海。」

「ナラ、日本ノ夏ヲ実感出来テイイダロ。」

「アツイ…。」

船渠棲姫は、日陰に移動する。

「…ン？アレハ？」

遠くで、何かが飛んでいるのが見えた。

「艦娘ノ艦載機ダナ。」

「演習モ盛ンネ。」

「暑イ中才疲レ様ナノ！」

「ホント。」

四人とも、空を飛ぶ艦載機を見る。

「アレハゼロナノ？」

「イヤ、ゼロジャナイ。多分、爆撃機。」

「ソウイウノハ、船渠棲姫ガ詳シイ。」

「アレハ：銀河。」

そして、艦載機は目標に爆撃する体制に入った。

「銀河ナノ？」

「ソウ。ゼロヨリ大キイ。運用方法ハ、主ニ対地：。」

ドカーン

「ギャアアアア！」

「エ？」

船渠棲姫が言い終わる前に、叫び声が聞こえた。

「ナンデ、毎回毎回燃ヤサレルンダ：!?!」

着いて早々、不機嫌な集積地棲姫。まさかまさかの、銀河の妖精さん自身のミスで、近くにいた集積地棲姫を狙ったのだ。しかも、直撃。

「ご、ごめんなさい！」

「司令官が基地航空隊を運用してるので：。」

「最終的には現地の私たちが判断しますが、提督が命令したので：。」

「ドコノ鎮守府モ、提督ニ罪ヲナスリツケルノハ、ヤメナサイ。」

「ごめんなさい：。」

港湾棲姫は、つくづく鎮守府での艦娘の教育はどうなっているのかと思う。そんな平和の雰囲気をはほとんど過ごしていると：。

「：！」

艦娘の1人が後ろを振り向き、草むらをじっと見る。

「綾波?どうしたの？」

「…何かいるような…。」

「？」

艦娘同士話します。そして、その草むらに接近すると…。

「逃げる！」

「スクープだぜ！」

草むらから、カメラを持った二人組が出てきて、逃げる。

「…アレハ？」

「まずい！見られた！」

「最近、本土の反対派です！私たち海軍を潰そうとする反思想的持ち主です！」

「言イ方ガナンダカ悪役ナノ…。」

「もし撮られていて、本土で情報が流れたら、仕事をしてないことになります！」

「別ニ良イジャナイ。」

「何を言ってるんですか！このような平和な暮らしができなくなるんですよ！もちろん、深海棲艦側の給料も、海軍側のお金で払われているので、生活に影響も…。」

「捕エロ！」

「切り替えが早い！」

そんなやりとりをしている間にも、どんどん距離を離される。

「く…！逃げ足が早いです！」

「このままだと本土に…！」

艦娘側が慌てている中、港湾棲姫とレ級、船渠棲姫はのんびりしている。

「そんな呑気にしている場合じゃ…。」

「？ドウシテ？」

「どうして…。」

「イヤ、行カレタラ大変ダロ。」

「？」

港湾棲姫たちは顔を見合わせる。

「行カレル訳ナイジャナイ。」

「脱出ハ不可能ダロウナ。」

「逃ス訳ナイ。」

3人は、のんびりと座っている。そして…。

「アツ。捕マエタ。」

「え!？」

船渠棲姫が反応して、艦娘がそんなバカなと声を漏らす。

「北西方向。1kmクライノトコロ。」

「ええー…。え!?! 本当です!？」

目を凝らすと、海上に何やら見える。

「助けてくれー!！」

「カメラがあああ!！」

二人組は、海から機械の腕のようなものが伸びて、捕まえている。

「ココハ大島出張所ノ管轄ヨ?！」

「深海棲艦最後ノ砦ダゾ。」

「島ヲ囲ウヨウニシテアルカラ、敵ハ近ツケナイシ、逃ゲラレナイ。」

艦娘側はポカンとしている。そして…。

「本土ニ帰レ。」

ポイツ

二人組は投げ飛ばされた。殺す気で投げていないので、海岸付近の海に着海するだろう。カメラは海の藻屑となった。艦娘側は、ただ驚くしかなかった。

「ちくしょう…。」

「次こそは必ず…!！」

本土に泳いで帰った二人組はぶつくさ言っていると…。

「あっ! いました!！」

「!？」

高身長的女性が来た。

「えーっと、あなたたちは泳いでここまで来ましたよね?！」

「……………」

2人は顔を見合わせた。

「そーなんです！大島の艦娘が俺たちを投げ飛ばして、こんな目に…。」

「大島に観光に行ったら、反対派だからって…。うう…。」

2人とも、懲りずに演技をする。

「そうなんですか!?ひどいですね!」

「そうなんです!ひどいですよ!」

「大変な目に遭いましたね…。」

「はい…分かってくれますかこの気持ち…うう…。」

「分かります。はい。分かります。その話、ゆつくり聞きたいので少し時間よろしいですか?」

「もちろんです!」

「この悲劇を世の中に広めてください!」

2人とも、すぐるように高身長的女性に言う。

「もちろんです!こんな悲劇許せません!憲兵さーん!不法侵入の2人です!!」

「え?」

「え?」

2人は高身長的女性が呼んでいる方を見る。そこには、こちらに走ってくる憲兵の姿があった。

「申し遅れました。私、大和型一番艦大和です。あなた方の悪事は全て聞いています。反対派が不法に大島の軍事施設に侵入し、記録に残したことも、全て把握済みです。」

「え、いや…。」

「え!?!」

2人はあっけらかん。

「平和を乱す不法な輩、絶対に許しません!」

「ち、ちくしよー!」

「逃げろー!」

2人は走って行く。

「絶対に逃しませんから。フフフ。」

砂浜を、鍛えてもいない素人が走るのと、どんなところでも逃げる

相手を捕まえる訓練を受けた玄人が走るのでは、どっちの方が早いかなど子供でも分かる。2人はものの数秒で捕まった。

「完成。直シトイタカラ。」

船渠棲姫が艤装の数々を持ってくる。

「オオー！」

「新品ミタイナノ！ピカピカナノ！」

「流石大島！」

レ級、北方棲姫、戦艦棲姫は完成した艤装に感嘆の声を出す。

「一時ハドウナルカト…。アリガトウ！助カツタワ！」

「今度ハ、チャント予約シテクレヨナ。」

「予約出来タラスルワ。」

「出来タラジヤナクテ、シロ！」

「アツ、ソツカ。」

「プツ：ハハ！」

船渠棲姫の言葉に、港湾棲姫は一緒に笑いながら頷く。場所は違えど、同じ支部長。通じ合えるものがあるのだろう。

「ソレジャア、名残惜シイケド…。」

「ソツカ。帰ルノカ。マタ、遊ビニデモ来テクレ。」

「ソウスルワ。マタ、話シ合イマシヨウ。」

「マタ話ソウ。」

船渠棲姫は港湾棲姫たちに別れを告げる。

「アツ、ソウダ。艦娘、送ツテ行ツテクレナイカ？」

「えー。もうすぐおやつタイム…。」

「コノ前、ウチノ工場カラ菓子類盗ミ食イシタ映像ガ、防犯カメラニ写ツテタガ…。盗ミノ代金ハ総額2万4000…。」

「てへっ。行ってきまーす！」

船渠棲姫に言われて、すぐに送りにきた艦娘。港湾棲姫は、心底鎮守府の統率性について心配した。

「ヤット帰ッテ来タワ〜。」

「ナンダカ、久シブリダナ。」

「懐カシク感ジルノ！」

「9ヶ月ホド、帰ッテナカッタモノ。」

「ヤット自宅ニ引キ込モレル…。」

「駆逐棲姫ト、防空棲姫ハ、才留守番出来テタカシラ…？」

港湾棲姫が玄関ドアを開けると同時に、2人は迎えてくれた。駆逐棲姫はやつと帰ってきたと、嬉しそうな顔で。防空棲姫は、土産話を聞いたそうな顔で。北方棲姫は駆逐棲姫に笑顔でただいまと言ひ、駆逐棲姫はおかえりと、嬉しそうに言う。港湾棲姫は、ひとまず荷物であるお土産を防空棲姫に渡し、夕食を手伝うと台所に戦艦棲姫と共に行く。集積地棲姫は、帰るなり部屋にこもってデイリーをクリアする。

大島出張所では、船渠棲姫が注文を受けた他の艀装などの修理をしていて、時々休憩で潜水棲姫が顔の煤を拭いてあげて、2人とも笑顔になる。新人の深海摺揚陸姫は生産ラインや設備などの点検を念入りにして、報告して水母棲姫に褒められて嬉しそうに喜んでい

る。そんな、普段の日常に戻り始める。争いのない、平和な日常に。『深海棲艦 五島支部』『深海棲艦 大島出張所』は今日も平和です。

カチツ…カチツ…

「うぬぬ…なぜ猫しかいないんだ…！あ、出来た。…でも！約2回分のイベントがああああ！白雲ネヴアダロドニイイイ！こつぱミジンコオオオン…！」

艦娘は 引いた目で 見ていた。

『深海棲艦 五島支部』は今日も平和です。